

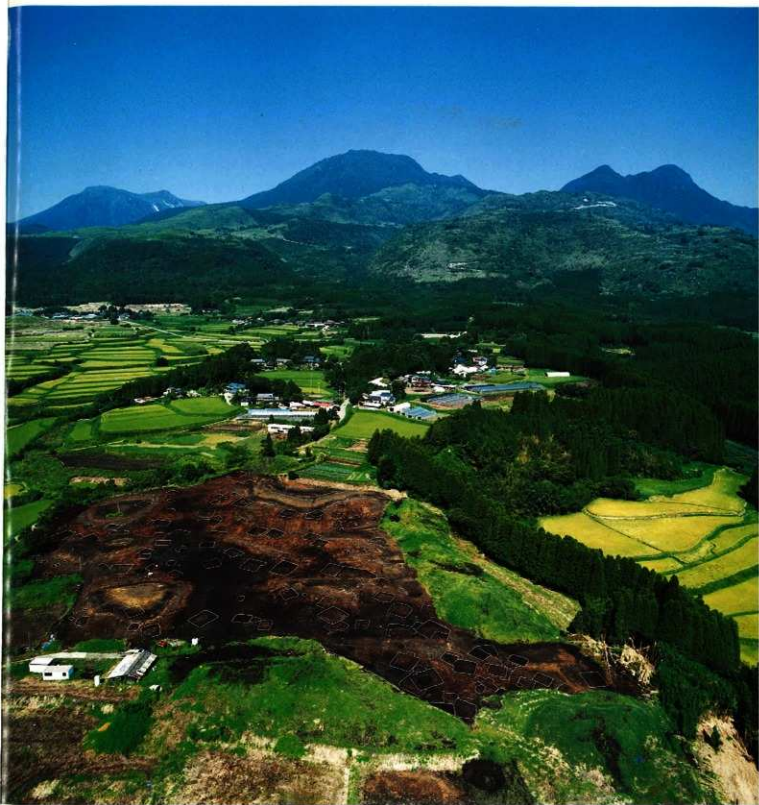
# 小城原遺跡・中原遺跡

県営担い手育成基盤整備事業都野西部  
地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ



2002.3

久住町教育委員会  
大分県教育委員会



小城原遺跡と九重連山

## 序 文

九州本島の最高峰である久住山・大船山の南位置する大分県直入郡久住町は雄大な大自然に広がる高原の町であります山々を源とし派生する多くの小河川は起伏に富んだ地形を形成し、台地上では私共の遠い先祖が生活を営んできました。

時代を経てこの台地上では主に小規模な稲作農耕が行われるようになりましたが、平成6年度から農業の大規模化、活性化を目的として再び目を覚ましはじめました。遺跡の保存が困難な地域では大規模な発掘調査が行われ、多くの成果を得ることができ本町の歴史的な重要性が改めて認識されるようになりました。

本報告書の小城原遺跡では弥生時代中期～古墳時代前期の長期に亘る集落跡や木棺墓、石棺墓からなる墓地在検出され、この地域の中心的な集落の一つが調査されました。また中世にこの地域を所領していた朽網氏に関連すると考えられる館跡も確認されました。中原遺跡では古墳時代前期の方形周溝墓が調査され、隣接する湯の上古墳の被葬者に先行する有力者の存在が確認できました。本書が学術研究の資料として、また、郷土の歴史や文化財保護に対する理解を深める資料として広く活用されることを望む次第であります。

終わりに、初期の試掘の段階から本調査・報告書の刊行に至るまでご指導ご協力をいただいた大分県教育庁文化課の皆様をはじめ関係各機関、発掘調査を手伝っていただいた各地区の皆様にご心よりお礼申し上げます。

平成14年3月20日

久住町教育委員会

教育長 志賀長生

## 例 言

- 1、本書は、平成9年度県営担い手育成基盤整備事業都野西部地区に伴い実施した小城原遺跡と中原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、発掘調査は大分県農政部の委託を受け久住町教育委員会が実施し、大分県教育庁文化課および竹田直入地方振興局の協力を得た。
- 3、遺物整理と報告書の作成は久住町教育委員会の委託を受け、平成12・13年度に県文化課が行った。
- 4、遺跡・遺構の実測と撮影は調査担当者の宮内のほか、坂本・田中・渡辺・衛藤・見玉・樺浦・辻田・小沢・吉田・若杉・佐藤が当たった。
- 5、遺跡の空中写真はスカイサーベイ株式会社に委託した。
- 6、遺物整理作業と実測・製図は県文化課資料室で行った。遺物撮影は主に友岡・栗原が行った。
- 7、本報告書で使用した方位は全て磁北である。
- 8、出土遺物は久住町教育委員会が保管している。
- 9、本書の執筆と編集は宮内が行ったが、第Ⅲ章の中原遺跡出土の人骨については、九州大学大学院比較社会文化研究科の田中良之教授・同助手石川健・同院生舟橋京子氏による。

# 目 次

<b>第Ⅰ章 序章</b>	
1、調査の経緯	1
2、調査組織の構成	2
3、遺跡の立地と環境	2
<b>第Ⅱ章 小城原遺跡調査</b>	
1 遺跡の位置と調査の概要	7
2 弥生～古墳時代の遺構と遺物	8
(1) 竪穴	11
(2) 方形周溝墓と集団墓	150
(3) 土杭	165
3 中世の遺構と遺物	167
<b>第Ⅲ章 中原遺跡</b>	
1. 遺跡の位置と調査の概要	183
2. 古墳時代の遺構と遺物	185
3. 中世の遺構と遺物	190
4. その他の遺構と遺物	197
5. 中原遺跡出土の人骨について	199
<b>第Ⅳ章 総括</b>	
1 小城原遺跡について	203
2 中原遺跡について	209

## 插图 目 次

第1图	久住町東部の遺跡と小城原遺跡、中原遺跡の位置	5, 6	第58图	33号竪穴実測図	57
第2图	小城原遺跡跡周辺地形図	8	第59图	33号竪穴出土器、石器	58
第3图	小城原遺跡遺構配置図	9, 10	第60图	31a号竪穴実測図	58
第4图	1・3号竪穴実測図	11	第61图	34a号竪穴出土器、鉄器	59
第5图	1・3号竪穴出土土器、他	12	第62图	34b号竪穴実測図	59
第6图	2号竪穴実測図	13	第63图	31b号竪穴出土器、他	59
第7图	2号竪穴出土土器、他	14	第64图	35号竪穴実測図	60
第8图	4号竪穴実測図	15	第65图	36a・b号竪穴出土土器、上玉	60
第9图	4号竪穴出土土器1	16	第66图	36a・b号竪穴実測図	61
第10图	4号竪穴出土土器2、他	17	第67图	37号竪穴実測図	62
第11图	5号竪穴実測図	18	第68图	37号竪穴出土土器	62
第12图	5号竪穴出土土器	18	第69图	38号竪穴実測図	63
第13图	6a・b号竪穴実測図	19	第70图	38号竪穴出土土器、石器、他	63
第14图	6a・b号竪穴出土土器、鉄器、石器	20	第71图	39号竪穴実測図	64
第15图	7a・b号竪穴実測図	21	第72图	39号竪穴出土土器	64
第16图	7a・b号竪穴出土土器	22	第73图	39号竪穴出土鉄器	64
第17图	8号竪穴実測図	23	第74图	40a・b号竪穴実測図	65
第18图	8号竪穴出土土器、砥石	23	第75图	40a・b号竪穴出土土器1	66
第19图	9・10号竪穴実測図	24	第76图	40a・b号竪穴出土土器2、石器	67
第20图	9号竪穴出土土器	25	第77图	41号竪穴実測図	68
第21图	10号竪穴出土土器	26	第78图	41号竪穴出土土器、石器、砥石	69
第22图	10号竪穴出土土器、他	26	第79图	42号竪穴実測図	70
第23图	11・12a・b号竪穴実測図	27	第80图	42号竪穴出土土器	71
第24图	11・12a・b号竪穴出土土器、他	28	第81图	43号竪穴実測図	71
第25图	13号竪穴実測図	29	第82图	43号竪穴出土土器	71
第26图	14号竪穴実測図	30	第83图	44号竪穴実測図	72
第27图	14号竪穴出土土器	31	第84图	44号竪穴出土土器	72
第28图	15号竪穴実測図	32	第85图	45号竪穴実測図	73
第29图	15号竪穴出土土器、鉄器、砥石	33	第86图	45号竪穴出土土器、石器	73
第30图	16号竪穴実測図	34	第87图	46号竪穴実測図	74
第31图	17号竪穴実測図	35	第88图	46号竪穴出土土器、他	75
第32图	17号竪穴出土土器、鉄器	36	第89图	47号竪穴実測図	76
第33图	18号竪穴実測図	37	第90图	47号竪穴出土土器、鉄器	77
第34图	18号竪穴出土土器1	38	第91图	48号竪穴実測図	78
第35图	18号竪穴出土土器2	39	第92图	48号竪穴出土土器1	79
第36图	19号竪穴実測図	40	第93图	48号竪穴出土土器2	80
第37图	19号竪穴出土土器、石器	41	第94图	48号竪穴出土土器3、石器、鉄器	81, 82
第38图	20号竪穴実測図	42	第95图	49a・b号竪穴実測図	84
第39图	20号竪穴出土土器、鉄器	43	第96图	49a・b号竪穴出土土器、石器	85
第40图	21号竪穴実測図	43	第97图	50号竪穴実測図	86
第41图	21号竪穴出土土器、石器	43	第98图	51号竪穴実測図	87
第42图	22号竪穴実測図	44	第99图	51号竪穴出土土器	88
第43图	22号竪穴出土土器	45	第100图	52号竪穴実測図	89
第44图	24号竪穴実測図	46	第101图	52号竪穴出土土器	89
第45图	24号竪穴出土土器、砥石	47	第102图	53号竪穴実測図	90
第46图	25号竪穴実測図	48	第103图	53号竪穴出土土器、砥石	90
第47图	25号竪穴出土土器	49	第104图	54号竪穴実測図	91
第48图	26号竪穴実測図	49	第105图	54号竪穴出土土器、石器	92
第49图	26号竪穴出土土器、鉄器	50	第106图	55号竪穴実測図	93
第50图	27号竪穴実測図	51	第107图	55号竪穴出土土器	94
第51图	27号竪穴出土土器、石版丁	51	第108图	56号竪穴実測図	95
第52图	28号竪穴実測図	52	第109图	56号竪穴出土土器	95
第53图	28号竪穴出土土器、他	52	第110图	57号竪穴実測図	96
第54图	29・30号竪穴実測図	53	第111图	57号竪穴出土土器	97
第55图	29・30号竪穴出土土器、石器	54	第112图	58号竪穴実測図	98
第56图	31・32a・b号竪穴実測図	55	第113图	58号竪穴出土土器	98
第57图	31・32a・b号竪穴出土土器	56	第114图	59号竪穴実測図	99

第115回	60号竪穴実測図	100	第178回	90 a · b号竪穴出土器	146
第116回	60号竪穴出土器、石器	100	第179回	91号竪穴実測図	147
第117回	61号竪穴実測図	101	第180回	91号竪穴出土器	148
第118回	61号竪穴出土土器	101	第181回	92号竪穴実測図	149
第119回	62号竪穴実測図	102	第182回	93号竪穴実測図	149
第120回	62号竪穴出土土器、石器	103	第183回	93号竪穴出土土器	149
第121回	63号竪穴実測図	103	第184回	方形周溝墓主体部実測図	150
第122回	64 a · b号竪穴実測図	104	第185回	方形周溝墓と周辺の木棺墓、土槨墓	151
第123回	64 a · b号竪穴出土土器	105	第186回	A · B号竪穴実測図	152
第124回	65号竪穴実測図	106	第187回	C · D号竪穴実測図	153
第125回	65号竪穴出土土器	106	第188回	主体部 · B号墓 · E号墓出土土器	154
第126回	66 a · b号竪穴実測図	107	第189回	E墓実測図	155
第127回	66 a · b号竪穴出土土器	108	第190回	E墓出土鉄剣	156
第128回	67号竪穴実測図	109	第191回	集出墓分布図	157
第129回	67号竪穴出土土器、鉄器	110	第192回	1 a · b号墓、2号墓、2号墓実測図	159
第130回	68号竪穴実測図	111	第193回	4~7号墓実測図	160
第131回	68号竪穴出土土器、石器	112	第194回	3 · 4号墓出土鉄剣	161
第132回	69号竪穴実測図	113	第195回	8~11号墓実測図	162
第133回	69号竪穴出土土器、他	113	第196回	小児壺棺実測図	163
第134回	70号竪穴実測図	114	第197回	1号墓出土小児壺棺	164
第135回	70号竪穴出土土器、石器、鉄器	115	第198回	土坑1 · 2 · 3実測図	165
第136回	71号竪穴実測図	116	第199回	土坑1 · 2 · 3出土土器	166
第137回	71号竪穴出土土器、石器	116	第200回	中世の遺構配置図	167
第138回	72号竪穴実測図	117	第201回	北部地区建物群配置図	168
第139回	72号竪穴出土土器1	118	第202回	北部地区建物1~9実測図	169
第140回	72 a · b号竪穴出土土器2、石器、鉄器	119	第203回	南部地区建物群配置図	172
第141回	73号竪穴実測図	120	第204回	南部地区建物10 · 11実測図	174
第142回	73号竪穴出土土器	120	第205回	南部地区建物12~14実測図	175
第143回	74号竪穴実測図	121	第206回	南部地区建物16~18実測図	176
第144回	74号竪穴出土土器、石器、瓦石	122	第207回	中世竪穴実測図	177
第145回	75号竪穴実測図	122	第208回	埴坐遺構実測図	178
第146回	75号竪穴出土土器、石器	123	第209回	埴坐遺構出土土器	179
第147回	76号竪穴実測図	124	第210回	土器造模土器造模	180
第148回	76号竪穴出土土器、石器	125	第211回	中世土器造模出土土器	180
第149回	78号竪穴実測図	126	第212回	柱穴等出土遺物1	181
第150回	78号竪穴出土土器	126	第213回	柱穴等出土遺物2	182
第151回	79号竪穴実測図	127	第214回	中原遺跡位置図	183
第152回	79号竪穴出土土器	127	第215回	中原遺跡遺構分布図	184
第153回	80号竪穴実測図	128	第216回	中原方形周溝墓	185, 186
第154回	80号竪穴出土土器	128	第217回	方形周溝墓主体部実測図	187
第155回	81号竪穴実測図	129	第218回	方形周溝墓周溝出土土器	188
第156回	81号竪穴出土土器	129	第219回	主体部出土鉄剣	189
第157回	82号竪穴実測図	129	第220回	土槨墓実測図	189
第158回	82号竪穴出土土器	130	第221回	土槨墓出土鉄剣	189
第159回	83号竪穴実測図	130	第222回	竪穴1実測図	190
第160回	83号竪穴出土土器	131	第223回	竪穴2実測図	190
第161回	84号竪穴実測図	132	第224回	竪穴3実測図	191
第162回	84号竪穴出土土器1	133	第225回	竪穴1 · 2 · 3出土陶磁器	191
第163回	84号竪穴出土土器2	134	第226回	1号中世竪穴実測図	192
第164回	84号竪穴出土土器3、他	135	第227回	1号中世墓出土遺物	192
第165回	85号竪穴実測図	136	第228回	1号中世墓出土金珠	193
第166回	85号竪穴出土土器	136	第229回	2号中世墓実測図	194
第167回	85 a · b号竪穴実測図	137	第230回	2号中世墓出土土師質土器	194
第168回	86 a · b号竪穴出土土器1	138	第231回	3号中世竪穴実測図	195
第169回	86 a · b号竪穴出土土器2	139	第232回	3号中世墓出土小皿	195
第170回	86 a · b号竪穴出土土器3	140	第233回	4号中世竪穴実測図	195
第171回	87号竪穴実測図	141	第234回	柱穴等出土遺物	196
第172回	87号竪穴出土土器	141	第235回	竪穴実測図	197
第173回	88号竪穴実測図	142	第236回	縄文土器	198
第174回	88号竪穴出土土器	142	第237回	弥生中期後半~後期中葉の竪穴分布	201
第175回	89号竪穴実測図	143	第238回	弥生中期後半~弥生終末、古墳期の竪穴分布	204
第176回	89号竪穴出土土器、瓦石	144	第239回	古墳前期の竪穴分布	206
第177回	90 a · b号竪穴実測図	145	第240回	各遺跡の竪穴数の変遷	209

# 目 次

トビラ	小城原遺跡と周辺の地形	215	P L 49	北部地区建物、南部地区建物	267
P L 1	小城原遺跡全景	217	P L 50	1・3号竪穴出土土器、2号出土土器、4号出土土器	268
P L 2	方形周溝墓と付属墓、集団墓	219	P L 51	5号出土土器、6a・b号出土土器、7号出土土器	269
P L 3	小城原遺跡全景	221	P L 52	8号出土土器、9号出土土器、10号出土土器、11号出土土器、12a・b号出土土器	270
P L 4	1～3号竪穴、2号竪穴、3号竪穴	222	P L 53	14号出土土器、15号出土土器、17号出土土器	271
P L 5	4・5号竪穴、同完掘、6a・b号・7号竪穴	223	P L 54	18号出土土器、19号出土土器、20号出土土器	272
P L 6	6a・b号・7号完掘、8号完掘、9・10号完掘	224	P L 55	21号出土土器、22号出土土器、24号出土土器、25号出土土器	273
P L 7	11～13号完掘、14号完掘、同柱穴内上器	225	P L 56	26号出土土器、27号出土土器、28号出土土器、29・30号出土土器、31号出土土器、32a・b号出土土器	274
P L 8	15号完掘、16号完掘、17・18号遺物	226	P L 57	33号出土土器、34号出土土器、36号出土土器、37号出土土器、38号出土土器	275
P L 9	17・18号完掘、19号遺物、同炭化材	227	P L 58	40a・b号出土土器、41号出土土器、42号出土土器	276
P L 10	19号遺物(壺)、同完掘、20号遺物	228	P L 59	43号出土土器、44号出土土器、45号出土土器、46号出土土器、47号出土土器	277
P L 11	20号完掘、21号完掘、22号完掘	229	P L 60	48号出土土器	278
P L 12	24号完掘、25号完掘、26号完掘	230	P L 61	49号出土土器、51号出土土器、52号出土土器、53号出土土器、54号出土土器	279
P L 13	27号完掘、28号遺物、29・30号遺物	231	P L 62	55号出土土器、56号出土土器、57号出土土器、58号出土土器、60号出土土器、62号出土土器、64号出土土器	280
P L 14	31～33号遺物、同完掘、33号完掘	232	P L 63	65号出土土器、66号出土土器、67号出土土器、68号出土土器、69号出土土器	281
P L 15	34a号完掘、34b号完掘、35号完掘	233	P L 64	70号出土土器、72号出土土器、74号出土土器、75号出土土器	282
P L 16	36号完掘、38号完掘、39号遺物	234	P L 65	76号出土土器、82号出土土器、84号出土土器	283
P L 17	39号鉄鏃、40号遺物、41号完掘	235	P L 66	86号出土土器、87号出土土器、88号出土土器	284
P L 18	42号完掘、43号遺物、44号完掘	236	P L 67	89号出土土器、90号出土土器、91号出土土器、93号出土土器	285
P L 19	45号完掘、46号遺物、46号出入口	237	P L 68	各竪穴・墓出土土器、鉄器	286
P L 20	46号完掘、47号遺物、同手鎌	238	P L 69	小児樂植、土坑出土土器、土器掘出土土器、榿堂、中庭の遺物	287
P L 21	47号完掘、48号遺物、同	239	P L 70	中原方形周溝墓全景、同、同土井部	288
P L 22	48号完掘、49号遺物、同完掘	240	P L 71	同土井部、同周溝土坑、同周溝内遺物	289
P L 23	50号完掘、51a・b号遺物、同遺物	241	P L 72	同周溝内遺物、同、同付属木棺墓	290
P L 24	51号完掘、52号完掘、53号完掘	242	P L 73	同鉄鏃、同土層、1号中世墓	291
P L 25	55号完掘、56号遺物出土状況、57号遺物	243	P L 74	2号中世墓、3号中世墓、4号中世墓	292
P L 26	57号遺物、同、同完掘	244	P L 75	中世竪穴1、同2、同3	293
P L 27	58号完掘、59号完掘、60号完掘	245	P L 76	中原方形周溝墓、同溝出土土器、主体部出土鉄劍、A号墓出土鉄鏃、1号中世墓出土遺物、2号中世墓出土土器、4号中世墓出土土器	294
P L 28	61号完掘、62号遺物、同完掘	246	P L 77	中世竪穴1～3出土遺物、柱穴等出土遺物、縄文土器	295
P L 29	63号完掘、64号完掘、65号完掘	247			
P L 30	66号完掘、67号遺物、同	248			
P L 31	67号完掘、68号完掘、69号完掘	249			
P L 32	70号完掘、71号完掘、72号遺物	250			
P L 33	73号完掘、74号遺物、75号完掘	251			
P L 34	76号遺物、同完掘、78号完掘	252			
P L 35	80号完掘、81号完掘、82号完掘	253			
P L 36	83号完掘、84号遺物、85号完掘	254			
P L 37	86号遺物、同、同完掘	255			
P L 38	87号完掘、89号完掘、90a・b号完掘	256			
P L 39	92号完掘、93号完掘	257			
P L 40	方形周溝墓全景、同	258			
P L 41	同上体部、付属A・B号墓、B号墓鉄劍	259			
P L 42	同C号墓、同D号墓、同E号墓	260			
P L 43	同鉄劍、1a号墓	261			
P L 44	1b号墓、2号墓、3・4号墓	262			
P L 45	3号墓鉄劍、4号墓鉄劍、5号墓	263			
P L 46	6号墓、7号墓、8号墓	264			
P L 47	9・10号墓、10号墓、11号墓	265			
P L 48	中世遺溝全景	266			



# 第 I 章 序 章

---

# 第I章 序 章

## 1、調査の経緯

直人郡久住町は、大分県の南西内陸部に位置し九州の屋根と称される九重山系の南麓から阿蘇外輪山の北東の一面を占める山と高原の町である。山麓の水系は共に第一級河川である大分川と大野川の二つに大きく別れるが、九重山地は九州を代表する河川である筑後川の源流にもあたる。水田は町の南～東部の各水系に沿って展開しているが、起伏の大きく複雑な地形から不整形な棚田や迫田が卓越していた。このため大分県農政部では、平成6年度から農業基盤の整備と地域の中核農家育成を目的とした県営担い手育成基盤整備事業都野西部地区の事業を策定・実施することとなった。

本事業の区画は約1haの大規模水田の整備を標準に、用排水路や幅7mの基幹道路やその支線道路を敷設するなど、当地域始まって以来の大規模開発であった。また、平成5年度から開始された同事業都野東部地区を含め年間100haを越える開発が数年間継続して実施されることとなった。一方、この事業の実施に先立つ埋蔵文化財の分布・試掘調査の結果、従来の予想を大幅に覆す多数の遺跡の存在が明らかとなり、圃場整備事業と文化財の保存・保護との調整が緊急の課題となった。このため、大分県文化課では関係各機関との調整や本調査にあたり全面的協力と指導を行うと共に、久住町教育委員会においても専門職員を配置しその円滑な対応を目指した。

平成6年度は大字仏原の石田遺跡と市第1遺跡の本調査が実施され、平成7年度には大字右氏の板切第1～IV遺跡、大字仏原の市第II～IV遺跡・尾首遺跡・小原田遺跡・仏原第I～III遺跡の合計12遺跡の本調査が行われた。平成8年度は大字仏原の市第V遺跡・都野原田遺跡・原田第III遺跡・仏原千人塚古墳群・トグウ遺跡の発掘調査が都野東部地区に伴い実施され、都野西部地区では上屋敷遺跡・小路遺跡・板切第V遺跡の調査が行われた。平成9年度には大字右氏の小城原遺跡・中原遺跡、大字仏原の上城遺跡と花立遺跡が本調査された。各遺跡は弥生時代から中世に及び、遺跡の集中度と継続性の高さは県下においても群を抜き出土遺物にも重要性・希少性の高いものが少なくない。また、これらの遺跡で特に注目されるのは弥生～古墳時代の集落跡（板切遺跡群・都野原田遺跡・小城原遺跡等）と古墳時代の墳墓である仏原千人塚古墳群・中原遺跡（方形周溝墓）や、古代の官衙関連遺跡（石田遺跡・上城遺跡等）、中世領主の屋敷跡（上城遺跡・小路遺跡等）である。

小城原遺跡の調査は、平成9年1月から開始したが調査面積約1.5haと広いことや中世と弥生～古墳時代の2時期の遺構が検出されたことから終了したのは同年9月であった。中世の遺構には約25×17mのコ字状に巡る溝とその内外に配置された掘立柱建物10数棟があり、15～16世紀に当地方を支配した朽網氏に関わる遺構である可能性が高い。弥生～古墳時代に属するものとしては、住居跡等の竪穴103基に集団墓13基、石棺を主体とする方形周溝墓1基とこれに付属する木棺墓3基・土槨墓1基、単独存在の木棺墓1基、甕棺墓1基などの遺構が検出された。未調査の部分を確認すると本遺跡は約200基を越える竪穴が存在すると思われ、その存続期間の長さからも地域の拠点集落跡と想定されるが、大規模集落跡である都野原田遺跡や周辺の中小集落跡を含め時代と地域の実態解明に資する重要資料となるものである。

中原遺跡からは古墳時代前期に造営された一辺約20mの方形周溝墓1基、中世の竪穴遺構3基と墓4基等が検出された。方形周溝墓の主体部は石棺1基のみであり、周溝の外にこれと平行する土塋墓1基が確認された。その規模や単独存在であること等から、前方後円墳に次ぐクラスの墓と考えられる。その東に近接し5世紀代の円墳と想定される湯ノ上古墳や仏原千人塚古墳群と併せ、旧直人郡の奥津城を示すのみならず時代の構造を表すモデルケースとしてその持つ意義は大きい。調査面積は約2,500㎡であり、平成9年9月中旬に調査開始し、同年10月末に終了した。

両遺跡調査の無事な終了は地元作業員の皆様をはじめ関係各機関・各位の協力と支援によることを明記し、深く感謝したい。

## 2、調査組織の構成

調査主体 久住町教育委員会

調査地区 久住町大字右氏字小城原・中原

調査期間 平成9年1月16日～平成9年9月12日

調査指導 賀川 光大 (大分県文化財保護審議会会長 故別府大学名誉教授)  
下條 信行 (愛媛大学教授)

調査員 清水 宗昭 (大分県文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長 現参事兼課長補佐)  
坂本 嘉弘 ( 同 副主幹 現主幹)  
宮内 克己 ( 同 主査 現歴史博物館主幹研究員)  
渡辺 佳司 ( 同 嘱託)  
児玉 美香 ( 同 同)  
衛藤 麻衣 ( 同 同)  
櫻浦 幸徳 (久住町教育委員会社会教育課 主任)

調査事務 鷺津 大乘 (久住町教育委員会教育長 平成6～10年度)  
志賀 長生 ( 同 平成11年度～ )  
竹下 善治 ( 同 社会教育課長 平成9～12年度)  
川越 賢一 ( 同 同 平成13年度～ )  
麻生 宗洋 ( 同 社会教育係長 平成8～10年度)  
後藤 光博 ( 同 同 平成11～12年度)

## 3、遺跡の立地と環境

### (1) 自然環境

遺跡の所在する久住町は、九州最高峰(標高約1,780m)の久住山・大船山や黒岳とその南側山麓を占める。九重連山や久住高原一帯はその優れた景観と希少植物の存在から「阿蘇くじゅう国立公園」として保護されている。その東は直人郡直入町と、西は熊本県阿蘇郡小国町と、南は竹田市と、北は玖珠郡九重町と大分郡庄内町と各々接し、古来より九州の内陸交通において要衝地であった。町の人口は約4千人を数え、集落の多くは九重連山の南から東側の標高500～650m余りの山麓に形成されている。

植生は山地・高原・集落周辺の各々により大きく異なる。山地では「大船山のミヤマキリシマ」や「久住山のコケモモ群落」は国指定天然記念物として良く知られているが、黒岳のフナ・オヒョウ・ミズナラ等からなる原生林も貴重であり、九州では数少ないイヌワシの営巣地としても重要である。高原や山麓には数千haもの雄大なススキの群落や草地が広がり、人里とその周辺には農耕地とスギ・ヒノキ・クスギの人口林が展開する。河川にはヤマメ・フナ・アブラハヤ等が生息しており、イタチ・テン・キツネ・タヌキ・ヤマネなどの小動物が住むがイノシシの出現は戦後とされる。

町内は九重火山群や阿蘇山などから噴出した火山灰・火砕流によって厚く覆われている。比較的平坦な所では

下からローム層・アカホヤ層・九尾火山起源の各種火山灰層・阿蘇起源のクロボク層が層位的に堆積する。九重火山起源と判断される火山灰層は縄文時代中期頃から古墳時代の間に起きた7回の大規模な噴火によるものと推定されるが、その明確な分布や噴出年代については不明な点が多い。当地の気候は夏季に涼しく冬季は厳寒な山地型に属し、町の中心部である久住の年間平均気温は12.9°Cで大分市に比べ約3°C低い。その年間降水量は山地と山麓では大きな差を見せ、久住の年間降水量は1993ミリであるのに対し山地の飯田では2476ミリと約500ミリも多く、積雪もこれに比例する。豊富な降水量は山麓に数多くの湧水を生じさせると共に大分川や大野川の源流となる。

このような自然環境のもと、町内では農業・牧畜・林業・観光が基幹産業として営まれ、住民の中心となる農家では稲作を主体に牧畜・雑草・施設野菜・花卉栽培などを組み合わせた複合経営が活発に行われている。

## (2) 歴史的環境

久住町における考古学調査の第一歩は、昭和40年に行われた大字宍氏に所在する湯ノ上古墳の発掘に始まる。古墳は直径約24mの円墳と考えられ、2基の竪石石棺を主体するが1基は既に盗掘を受けていた。調査が実施された2号石棺の内法は全長155cm、最大幅38cmを測り、南側小口近くに粘土枕が設けられ人骨1体が葬られていた。副葬品は刀子1点と鉄片のみで、石棺の構造などから5世紀代の推定されている。また、古墳の立地や周辺の地名から「牧」との関連を指摘していることは注目される。

その後、昭和48年には町営グランド造成に伴い大字久住のクゴウ松遺跡の調査が行われている。同遺跡からは並木式土器など若干の中期土器を除き、縄文時代後期前葉の中津・福田Ⅱ式など瀬戸内系土器と九州在来の阿高系土器と小池原上層式土器、及び阿者の折衷系であり本遺跡の一群を標識とするクゴウ松式土器が出土した。これらは地域間の並行関係や済済縄文土器の地域への受容を示すものとしても重要であり、県下における縄文時代後期前葉の代表的遺跡として知られる。

この他に遺跡の調査例は知られないが、昭和59年刊行の『久住町誌』には旧石器時代から古墳時代の遺跡として合計30箇所が挙げられ、採集された主要遺物の紹介がなされている。また平成6年度以降、園場整備事業に伴い新たに確認・調査された約30の遺跡も含め、本地域の概略を述べる。

旧石器時代では大字白丹の赤上坂遺跡で刮片尖頭器と刮片が、直入町・反田遺跡で細石器が出土しているのみで全体的に少ない状況にある。縄文時代では前記のクゴウ松遺跡のほか大字白丹の寺原遺跡で早期の押型土器が、大字栢木の楠木遺跡で後期の鐘崎式土器が、大字仏原の石田遺跡で後期の西平式土器や晩期終末の刻目突帯文土器などが、都野原遺跡・市第Ⅲ遺跡・七里田遺跡などにおいて刻目突帯文土器が出土しているに過ぎない。隣接する直入町西部では前田Ⅲ遺跡・三反田遺跡・日向塚遺跡・横柱遺跡等において早期から晩期に至る各時期の資料が検出されており、河岸段丘部に小規模な遺跡が点在するようである。

弥生時代になり遺跡は急増する。前期の堅穴は未検出であるが、石田遺跡や都野原田遺跡等において当該期の土器が一定量出土しており小規模な集落が存在したものと考えられる。中期に属する堅穴は都野原田遺跡・トグウ遺跡・小城原遺跡・花立遺跡・上屋敷遺跡などから検出されている。これらは一時期2棟前後をセットとする堅穴が分散して分布するものであるが、大字久住の脇遺跡からは20棟余りの堅穴が確認され、この段階から一時期5～6棟からなる中核的集落跡が出現することが明らかとなった。しかし、これに伴う墓は確認されておらず今後の課題となっている。弥生後期前半から中頃の堅穴は都野原田遺跡・石田遺跡・小城原遺跡・原田第Ⅲ遺跡等で認められ、この中では小城原遺跡が中核的集落と考えられる。

弥生後期後葉から古墳時代前期になると本地域の丘陵部に立地する集落遺跡は更に増加するだけでなく、墓地の出現を含め集落構造に大きな転換が見られる。それは集住化の進展とこれに伴う堅穴・広場・墓地等の施設の計画的配置であり、そこには在地首長権の強化が反映されていると考えられる。この段階においても小規模集落は認められ、板切第Ⅲ～Ⅴ遺跡・市第Ⅴ遺跡・トグウ遺跡・花立遺跡・上城遺跡などがこれに相当する。10棟前後からなる中核的集落には小城原遺跡・原田第Ⅲ遺跡・板切第Ⅱ遺跡が挙げられ、一時期数1棟から構成される

大規模拠点集落としては都野原遺跡が存在する。中核的集落と大規模集落には集団墓が形成されるが、小規模集落には木棺墓が若干存在するものの明確な群をなさない。そして、古墳時代前期前葉から中葉には仏原千人塚古墳群の中に前方後方墳（1号）と前方後円墳（2号）が造営されることとなる。また、中葉には中期の湯ノ上古墳に先立ち一辺約20mの中原方形周溝墓の存在が明らかとなり、これらの遺跡が旧入郡の奥津城をなしていたことが判明した。

古墳時代中期になると丘陵上の集落跡は激減し都野原遺跡で数基が確認されたに留まるが、以後の集落は市第V遺跡に代表されるように、市川周辺の河岸段丘部から山裾に点在しながら分布することはほぼ確実である。中期から後期の墳墓には湯ノ上古墳のほか小竹横穴墓が知られ、周辺では須崎石棺・同横穴墓群、長湯横穴墓群が存在し引き続き郡の中核を占めていたと考えられる。その後、7世紀後半から奈良・平安時代にかけては市川流域に石田遺跡、中殿遺跡、上城遺跡、尾首遺跡、市第I・III・V遺跡が出現し、直入町でも日向塚遺跡が知られる。石田遺跡からは7世紀末から奈良時代始め頃の大形掘立柱建物4棟、2×2間の小形掘立柱建物2棟、聖穴住居跡4基とこれらを区画すると推定される小溝が検出された。これらの遺構は堀穴2基と大形建物2棟及び小形建物1棟がセットをなし連続する2時期に営まれた官衛的施設と考えられる。上城遺跡からは奈良・平安前期の大形建物2棟が検出され、その柱穴の一つからは海老状鍵が出土した。これらの遺構は「評」・「郡衙」の正倉の一部をなす可能性が強く、古代においても当地一帯が郡の中心であったことを窺わせる。また、市第I遺跡からは銅碗（蓋）と黒青土器が、石田遺跡の線刻土器、尾首遺跡の銅碗・片と黒青土器、日向塚遺跡の葺石層など特に注目すべき遺物や、各遺跡出土の製塩土器や牛馬骨（遺）は奈良時代に当地に置かれた「牧」や「駅」とも関係する遺物として看過できない。

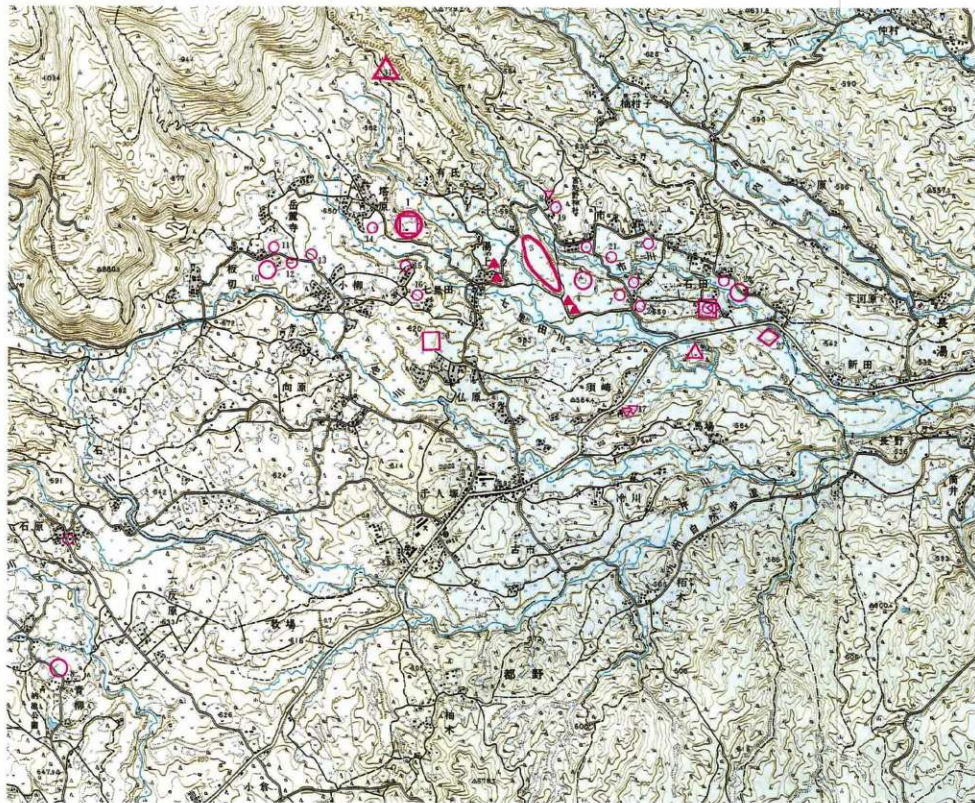
中世において当地域一帯は国衙領の朽網郡となり、その地頭職は朽網奉親の名が「豊後国因田帳」に記されている。この朽網氏が在来の大神氏系と大友初代の養父である中原親能の系譜を引くとされる古庄氏系であるのか、それを明らかにする史料はないようである。この朽網氏の系統は永正年間にも大友氏に反乱を起こした朽網親清で途切れ、その後は大友一族の入田氏が継ぐが島津氏の豊後侵入の時に内応したことにより大友義統により滅ぼされる。この間の主要遺跡には鎌倉～室町時代の地頭クラスの館とも想定される上城遺跡、戦国期における朽網氏の館ではないかとされる小路遺跡、15世紀頃の朽網氏一族の屋敷でありその後は山城と考えられる小城原遺跡、朽網氏の詰城である山野城跡や支城の三船城跡などがある。

註1、「久住町誌」1974 久住町

2. 賀川光夫・島崎孝好「湯ノ上古墳」1969 久住町教育委員会 この報告書で石棺内部から出土したとされる貝製身具は次の文献により泉の遺と訂正されている。島崎孝好「大野川流域に生きる人々」2000島崎孝好先生追憶記念事業会
3. 賀川光夫他「コウゴウ松遺跡」1974 久住町教育委員会
4. 高橋信武他「横枕古遺跡・前田遺跡」1969 直入町教育委員会
5. 渋谷忠章・高橋信武他「三反田遺跡発掘調査概報」1985 直入町教育委員会
6. 高橋信武他「横枕遺跡・日向塚遺跡」1988 直入町教育委員会
7. 宮内克己・高橋信武「市第I遺跡・石田遺跡」1996 久住町教育委員会
8. 宮内克己「都野原遺跡」2001 久住町教育委員会
9. 藤崎幸徳「市第IV遺跡・トグウ遺跡・花立遺跡」2000 久住町教育委員会
10. 後藤一重「小路遺跡・上屋敷遺跡」2009 久住町教育委員会

11. 櫻浦幸徳「青柳遺跡群編遺跡」大分県文化財年報9：2001 大分県教育委員会
12. 高橋信武他「市第II遺跡・III遺跡・仏原第I～III遺跡」1997 久住町教育委員会
13. 高橋信武「尾首遺跡・市第V遺跡」1998 久住町教育委員会
14. 「豊後国風土記」や「日本書紀」には崇行天皇の土御原征討とこれに伴う行宮の設置が記されており、この行宮に「宮処野」の地名が由来するという。また、戦勝の折り天皇は志我神・直入御部神・直入中臣神といった在地神に感謝の祈りを捧げたことあり、当地域の風俗が早いことを窺わせる。
15. この地にある「宮処野神社」の社伝に、弘仁五年（814）直入郡大夫額田原推の説が置かれて嵯峨天皇の内侍となり、天皇前御の地名が由来するという。また、戦勝の折り天皇は志我神・直入御部神・直入中臣神の品を額山陵と称する所に埋め日夜勤仕し、その兄の廣田仁孝三年（853）に社を造営したとある。これを証明する史料はないが、当地に豊後国府や国府と関係する勢力が存在した可能性が強いことは銅碗等の遺物からも知ることができると推定される。
16. 宮内克己「山野城跡」1995 久住町教育委員会

1. 小城原遺跡 (弥~古、中世)
2. 中原遺跡 (古、中世)
3. 都野原田遺跡 (弥~古)
4. 仏原千人塚古墳群 (古)
5. 湯ノ上古墳 (古)
6. 原田第Ⅲ遺跡 (弥~古)
7. トグウ遺跡 (弥~古)
8. 脇遺跡 (弥)
9. 石原遺跡 (弥)
10. 板切第Ⅱ遺跡 (弥~古)
11. 板切第Ⅲ遺跡 (弥)
12. 板切第Ⅳ遺跡 (弥)
13. 板切第Ⅴ遺跡 (弥)
14. 尾板遺跡 (弥)
15. 上七里田遺跡 (弥)
16. 上屋敷遺跡 (弥、中世)
17. 須崎横穴墓群・同石棺 (古)
18. 小竹横穴墓 (古)
19. 市第Ⅰ遺跡 (奈~平)
20. 市第Ⅴ遺跡 (古~奈)
21. 市第Ⅲ遺跡 (弥、中世)
22. 市第Ⅳ遺跡 (弥、奈)
23. 花立遺跡 (弥~古、奈)
24. 尾首遺跡 (奈~平)
25. 中殿A遺跡 (奈)
26. 中殿B遺跡 (奈)
27. 石田遺跡 (奈)
28. 上城遺跡 (弥~古、奈、中世)
29. 三船城跡 (中世)
30. 小路遺跡 (中世)
31. 山野城跡 (中世)



第1図 久住町東部の遺跡と小城原遺跡、中原遺跡の位置

## 第Ⅱ章 小城原遺跡の調査

---

## 第二章 小城原遺跡の調査

### 1 遺跡の位置と調査の概要

小城原遺跡は久住町東部の大字有氏字小城原にあり、西から南東に延びる丘陵上に立地する。南・北方向はやや深い解析谷によって画された丘陵の上面は中ほどにごく浅い谷をもつ緩斜面を形成し、標高は620～630mを誇る。幅約200mの丘陵上部全体に設定された調査区の総面積は約15,000㎡であり、ほぼ全面に弥生時代中期から古墳時代前期の竪穴式103基と方形周溝墓1基及び木棺墓等19基が、調査区の北東部と中央やや南寄りに中世の掘立柱建物群を主とする遺構が分布し、二時期の遺構からなる複合遺跡である。同一丘陵の南東約600mには古墳時代中期の溝ノ上古墳と中原方形周溝墓が、東側約800mの異なる丘陵上には古墳前期の大規模拠点集落跡である都野原田遺跡が存在する。そして、谷を隔てた南側の丘陵には上層敷遺跡や板切遺跡群などの中小の集落遺跡が点在し、丘陵上のそこかしこに弥生中期から古墳前期の集落跡が営まれているが、河川沿いの谷部に存在する集落跡は皆無の状態と言える。竪穴は調査区のほぼ全体に分布し、水田造成等により床面近くまで削平を受けたものや遺構の一部又は大半を消失したものも少なくない。集団墓は調査区南端に二箇所、北東部にはこれと様相を異にし集落内の首長塚とも推定される方形周溝墓1基とこれに付属する木棺墓などが形成されている。

弥生時代中期の竪穴は計18基が確認されたが、調査区の南東部と西側に一定の距離を保ちつつ纏まって分布し広範囲には展開しない。この中には中期前半の円形プランを示すものは確認されず、中期後半に集落として開始される。しかし、本遺跡の西北丘陵部からは弥生前期土器の出土が知られ、周辺においては弥生前期から中期前半の小規模集落が存在するものと思われる。また、竪穴の平面形が判明したものの多くは花弁形やこれに類似する変形的なプランを呈し、同一の平面形を示すものは見られない。

後期前葉に属する竪穴は数基に留まるが、中葉から後葉にかけては一時期に10数基が確認されると共に丘陵上のほぼ全面に分布する。後期中葉から古墳時代初頃の竪穴は全体の約半数を占め、平面プランは長方形を基本とするが四隅の一角に出入口の突出部を付すものや、壁際に竪穴の周囲を巡る土手を支えたと考えられる壁柱が複数設けられるものもある。古墳時代前期前葉までは10基前後の竪穴が存在するが、中葉になると減少し前期後葉以後はここに集落は営まれなかったものと推定される。各竪穴の辺は約2～7mを測り、この時期に一般的に認められる大・中・小の三種があるが都野原田遺跡で確認された一辺8mを超える特大規模の竪穴は検出されなかった。また、竪穴の十層観察の結果、廃絶後の自然堆積を示すものは皆無であり、全ての竪穴は人為的に埋戻されたものと判断され、この各遺構において土器等の遺物を用いた祭祀が行われたと想定される。

木棺墓を主とする墓は調査区南端中央と東側の二か所に別れ営まれるが、東側の3基の木棺墓は竪穴の周辺に形成された小児墓の可能性があり、明らかに集団墓と判断されるのは中央部の9基である。集団墓を区画する遺構は確認されなかったが、主軸を東西方向にとりまとまりをもつ。この内の2基の木棺墓からは鉄剣各1点が出土し、都野原田遺跡の集団墓と性格・構造が類似する。方形周溝墓は石棺を主体とし、溝溝内部やその外側に形成された木棺墓を含めこの集落を率いた首長とその近親者の墓と推定される。

中世の遺構の中で調査区北部の平坦に造成された場所に集中する一群は、約25×17mのコ字状に巡らされた溝の内外に建てられた10棟前後の建物からなる。溝の内側には付属施設と推定される建物しか検出されなかったことや、敷石と思われる玉石などが採取されていることから庭園又は中庭としての機能が考えられる。外側には主要施設と思われる庇付建物や規模の大きい土庫等の建物が計画的に配置され、15世紀頃の典型的な頼主層の館跡と見做される。そして、これより下にある中央部の建物群は戦国期の山城の中心的施設と言えよう。

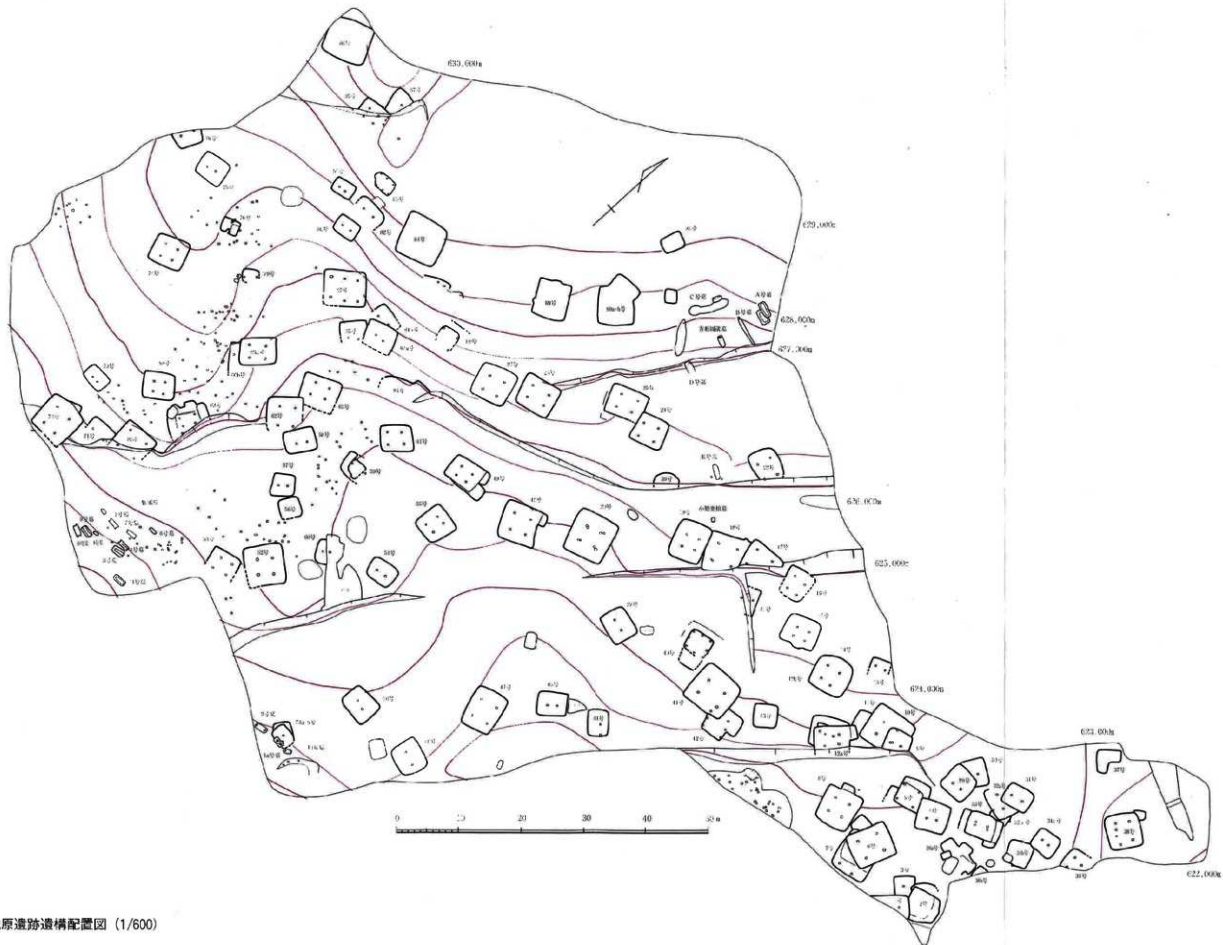




第2図 小城原遺跡周辺地形図 (1/2000)

## 2 弥生～古墳時代の遺構と遺物

この時代の遺構は北側の平坦地を除きほぼ全面に分布し、調査区の東側に延びる丘陵上にも展開することは確実である。西側は丘陵がくびれ約40m外側にある里道は中世に堀切りが形成された位置に当たると考えられ、地形的にもここが集落の限界と見られる。以下、個別の遺構と遺物について記すが23・77号竪穴は欠番とする。

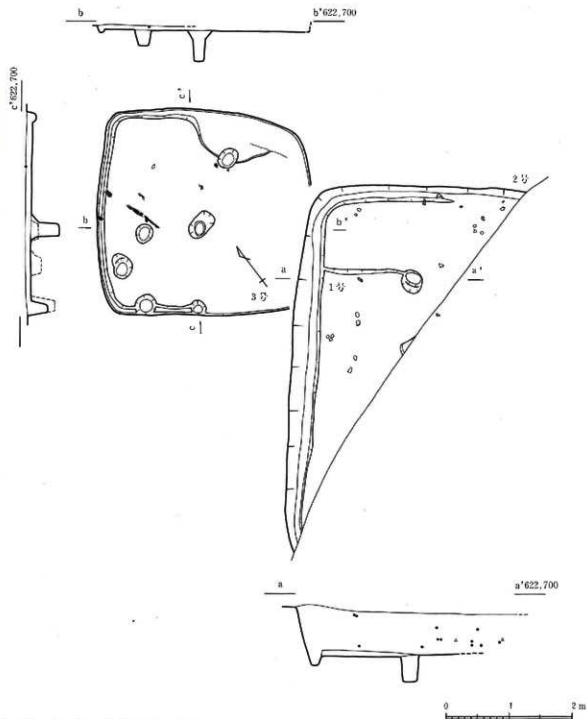


第3圖 小城原遺跡遺構配置圖 (1/600)

# (1) 竪穴

## 1・3号竪穴 (第4図)

調査区の東南端部に重複する竪穴で1号が2・3号を切り営まれている。1号は4本支柱の長方形プランをなすと思われるがその大半は調査区の外に続き、調査されたのは北側コーナー付近のみである。長辺の現長約5m、短辺現長3.4m、検出面から床面までは0.7m前後と深く、壁溝は途中で途切れる。炉跡や土坑等の施設については不明である。内部からは第5図1~11に示した遺物が出土している。1・2は長胴を早すと思われる甕の口縁部片で開きのやや強いもの。3は複合口縁甕の口縁部片で、4は高坏又は鉢の脚部で外面に顔料を塗る。これ

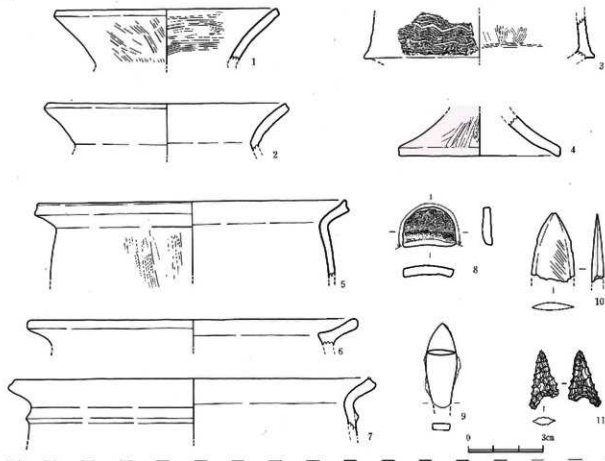


第4図 1・3号竪穴実測図 (1/60)

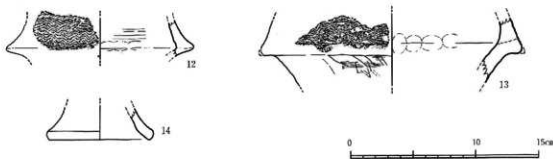
らの胎土は角閃石・灰色粒などを含む在地系である。5～7は2号壺穴からの混入と考えられる弥生中期の甕。  
 8は甕の頭部を利用した土器片加工品。9は缶頭式鉄甕で基部を欠き、現長3.3cm、身幅1.2cm。10は結晶片岩製の磨製石鎌片で、11は鯉島産黒曜石を石材とする打製石鎌。本壺穴は1～4の土器から弥生後期末頃に置かれ、鉄甕や磨製石鎌などもこれに伴うと思われる。

3号壺穴は3.2×3.2mの隅丸方形をなし、東側辺は1号により失われ北東部は2号と重複する。検出面から床面までは約0.1mと削平を大きく受け遺物も少ない。中央西側には炭化材が若干認められるが焼土壺穴ではない。主柱穴は中央南寄りの1本と考えられ、壁落は西半部は明確であるが他ははっきりしない。床面積は9㎡と小さく、炉跡等をもたないことから倉庫等の付属施設と考えられる。第5図12～14に示したものが本遺構に伴うもの。12は小形の複合口縁壺の口縁部片でやや強く内傾し、外面の全面に髹漆波状文を施す。13も複合口縁壺の口縁部片で、14は鉢の脚部か。胎土はいずれも在地系であり、弥生後期後葉に置かれよう。

19



39

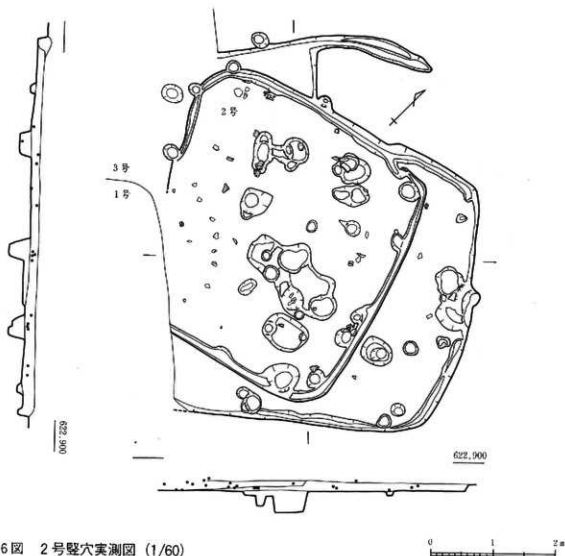


第5図 1・3号壺穴出土土器、他(9～11、2/3、他、1/3)

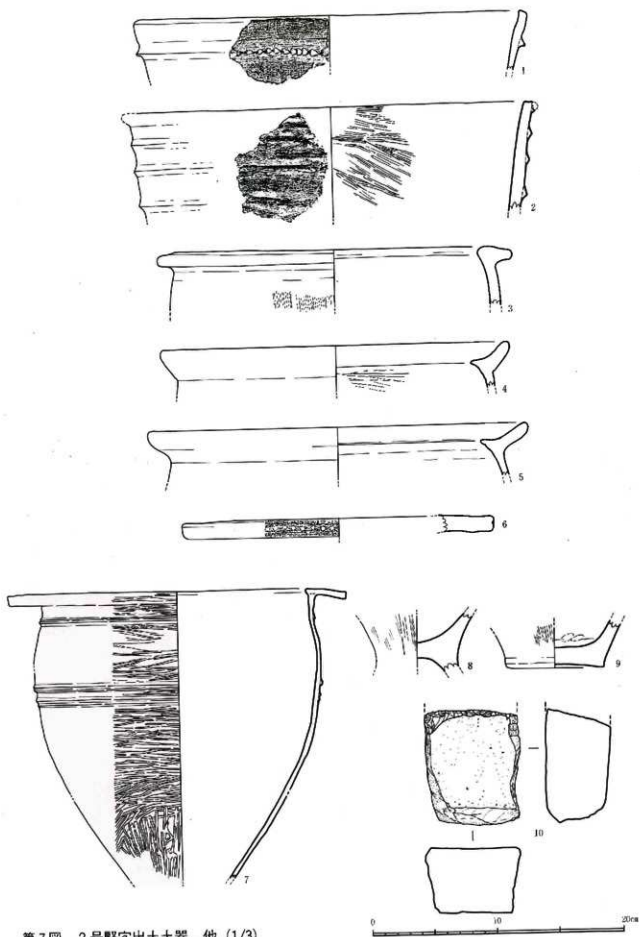
## 2号竪穴 (第6図)

1・3号の東側にあり、これらにより遺構の一部を消失する。二段掘りでほぼ床面に至るまで削平を受けたことによりプランが不明確となる。内側に約4×4mのほぼ方形に巡る溝が設けられるが、東北コーナー付近で枝分かれし東側に約1.5m余り延び終息する。外側の掘方は内側と平行せず一見すると2基の重複と見えるが、明らかに切り合い関係を示す証拠は確認されず、主柱穴も2本(N-30°-W)と推定されることから花卉型に類似した変則プランの竪穴と思われる。しかし、当初は小形方形であった竪穴を途中で拡幅した可能性もあり、そのいずれかは決定し難い。ほぼ中央部に大小の土坑と柱穴が複雑に重なる長軸約1.7mの不定形人型土坑が認められ断定出来ないが、埋跡の可能性をもつ。東側壁の中段に二段掘りの不定形土坑があり、その南側にも壁溝が断続的に設けられる。北側外は壁溝が途中で途切れ遺構の空白部が認められるが、その性格は不明である。また、柱穴の中には本遺構に伴わないと思われるものもあるが、峻別は困難であった。現存床面積31.9㎡。

内側からは第7図に示した遺物が検出されたが、7は北側主柱穴の覆土位から纏まって出土したもので、この他は小片が多く特異な出土状況は示さない。1は斜めに開く下城式甕の口縁部で、同式甕ではその終末期に入り胎上に石英を含む。2は口縁部から胴部にかけて4条の突帯を巡らす粗製甕の口縁部、角閃石や灰色粒を多く含む暗茶褐色を呈する。3は口縁部が逆L字状にやや短く外に突出する甕、外面に縦方向のハケを施し角閃石や石



第6図 2号竪穴実測図 (1/60)



第7図 2号竪穴出土土器、他 (1/3)

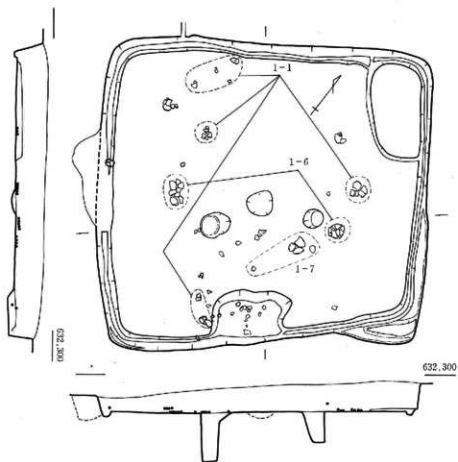
英をやや多く含む。4・5は黒髮式系の堯I線部、胎土に小粒の石英を多く含む。6はT字状I線をなすと思われる堯のI線部で外面に円形の連続刺突文を施す。7は鋤先状I線をなす須玖II式系蓋で頸部に1条、胴部に2条のやや低いM字状突帯を巡らす。胴部下位は縦方向の中位から上は横方向のミガキを丁寧に施し、外面全体に赤色顔料を塗る。口径35.8cmを測り角閃石・長石・赤色粒を含む移入土器である。8は脚部を付す黒髮式土器の底部で、9は僅かにくぼみ平底を呈しいずれも石英が含まれる。10は安山岩を利用した台石で上部を欠く。

これらの土器は弥生中期後半に置かれるもので、本遺構もここに属する。

#### 4号竪穴 (第8図)

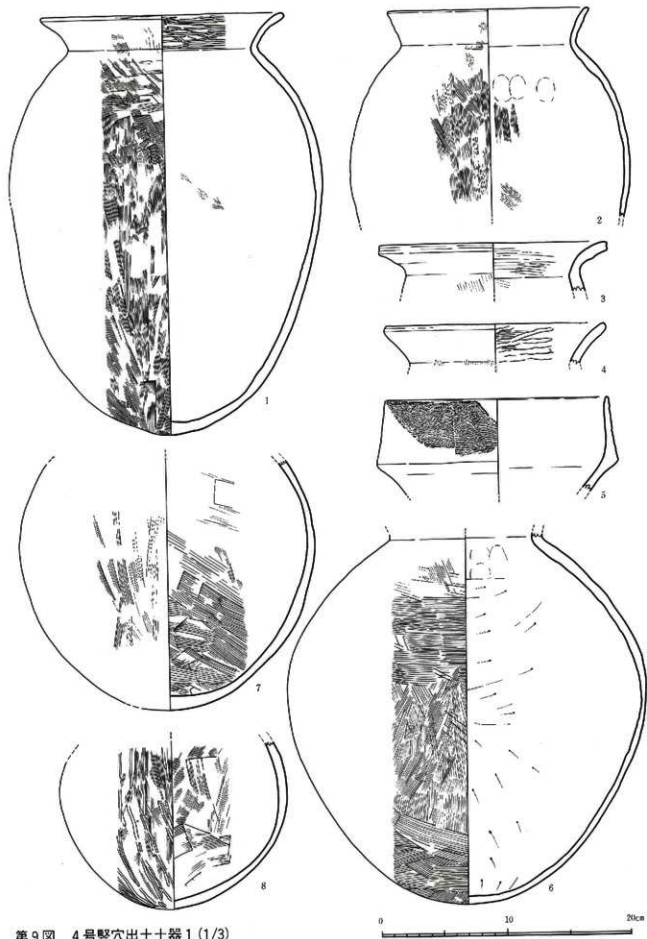
J~3号竪穴の西北約5mにあり、5号竪穴の東部を切り形成される。長辺約5.1m、短辺4.6~5mの台形に近い長方形を呈し、床面までの深さは0.2~0.4m測り、西側壁の中程は掘削を受ける。壁溝は全周し東北コーナー部に1.5×0.8m余りやや低いベッド状遺構が、南側中央に長軸約1.2m、短軸0.7m、深さ約0.1mの浅い楕円状の土坑が壁に接し設けられる。中央部に直径約0.4m、深さ約0.1mの不整形円形をなし断面皿状の炉跡があり、そのやや南側に2本の支柱穴が配される。2本とも支柱の抜取り跡が認められ、主軸方位はN-47°-E。床面積は20.16㎡で中規模の中でも小形に属する。内部からは比較的多くの遺物が検出されている。第9図1の堯は十数片に分割されたものが広範囲に分布し、6のI線部を欠く蓋は大きく二分され両支柱穴の近くから出土した。また、7は東側支柱穴の南側から、第10図4は十坑の上面から検出された。これらの大形土器片はほぼ床面に接する位置からの出土であり、竪穴埋戻しの前に行われた祭祀に使用されその後破壊・分割され内部へ投棄又は配置されたと考えられる。この他、磨製石鏃や砥石と思われる石器も認められた。

第9図1はほぼ完形に復元された堯で、丸底の底部からやや長胴気味で張り出しの少ない胴部に至り、緩く外



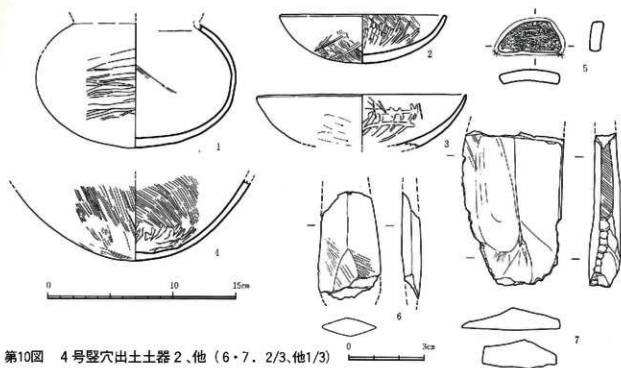
第8図 4号竪穴実測図 (1/60)





第9图 4号竖穴出土土器1 (1/3)





第10図 4号竪穴出土土器2、他(6・7、2/3、他1/3)

反して開く口縁部をもつ。口縁端部は丸く仕上げられ、外面は縦方向のハケで口縁部内面にはミガキを加える。口径19.6cm、器高33.1cm、胴部最大径25.2cmを測り、角閃石・長石・灰色粒・赤色粒などを含む在地系胎土である。2は十坑上位から出土した寛で胴部下半を欠く。口縁部の開きや頸の締まりの弱いもので、内外面ともハケを主調整とし、1と同様の胎土を示す。3・4はやや小形の甕の口縁部片で混入の可能性がある。5は僅かに内傾する口縁部の外面に佛播波状文を施す複合口縁部の口縁部片、金雲母や白色粒を含むもので移入土器か。6は丸底の底部から大きく張り出す胴部に至る複合口縁部で、頸部から口縁部は取り除かれた可能性が高いもの。外面は縦方向のハケのち肩部に横ハケを施し、内面はヘラケズリによる調整で胎土は在地系。7・8は壺又は甕の胴部から底部で、いずれもハケを主とする調整。金雲母が少々含まれるが在地およびその周辺の胎土と考えられる。第10図1は長頸壺の胴部と思われ、やや偏球形をなし胎土に砂粒を殆ど含まない移入土器。2は内外面ともハケのちミガキを加える碗で口径13.3cm、器高3.9cm。3は外面ヘラケズリとナデにより、内面はやや雑なミガキを加える碗で、胎土は在地系か。4は壺の底部と考えられるもので、5は土器片加工品。6は磨製石礫片で先端と基部を欠く。縦身に柄が設けられ断面は菱形をなすが基部周辺は平坦に仕上げられる。緑色片岩製で現長4.2cm、重さ10.1g。7は砥石と考えられる石器で、右側側面を研磨し他は磨切りにより全体の整形を行ったと思われる。

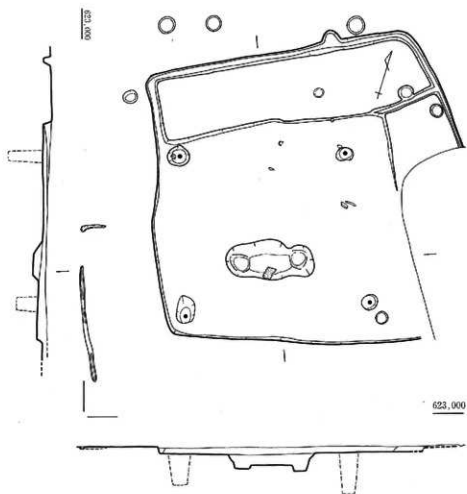
本竪穴は第9図1・2・6等の土器から古墳時代前期中葉に営まれたものと考えられる。

#### 5号竪穴(第11図)

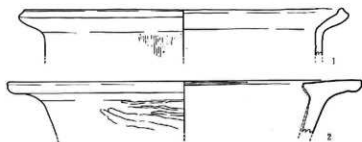
4号の西側に重複しこれに先行する竪穴である。花卉型のプランを呈すると考えられるが、重複と削平のため全形は不明である。二段掘りの内側は3.6×3.4m余りの台形状を呈しその四隅に支柱穴が配され、中心より南側に長軸1.4m、最大幅0.6m程の炉跡が認められる。炉は両端にやや浅い柱穴を伴う。北・東側には溝によって画された幅約1m、高さ約0.1mのベッド状の段が設けられ、西南部にも同様の長方形区画に伴う壇溝の基底部が残ることから花卉型の一つと想定した。出土遺物は少なく、図示可能なものは第12図に示した4点に過ぎない。

第12図1は跳上げ状口縁の甕、胴部外面は縦方向のハケにより他はナデによる調整。2は口縁部がT字状を呈する壺又は高杯の口縁部で、横方向のミガキによる仕上げ。3は高杯の脚部片で坏部との境に三角形突帯を巡ら

し、外面は丹塗り。1はやや上げ底の平底となる甕の底部で、外面はハケによる。これらの上器は弥生中期後半に置かれ、胎土は在地系と思われる。



第11図 5号竪穴実測図 (1/60)



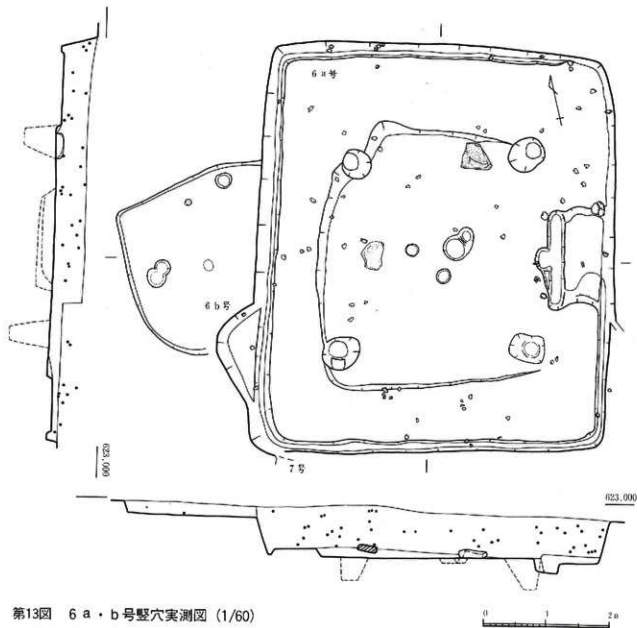
第12図 5号竪穴出土土器 (1/3)

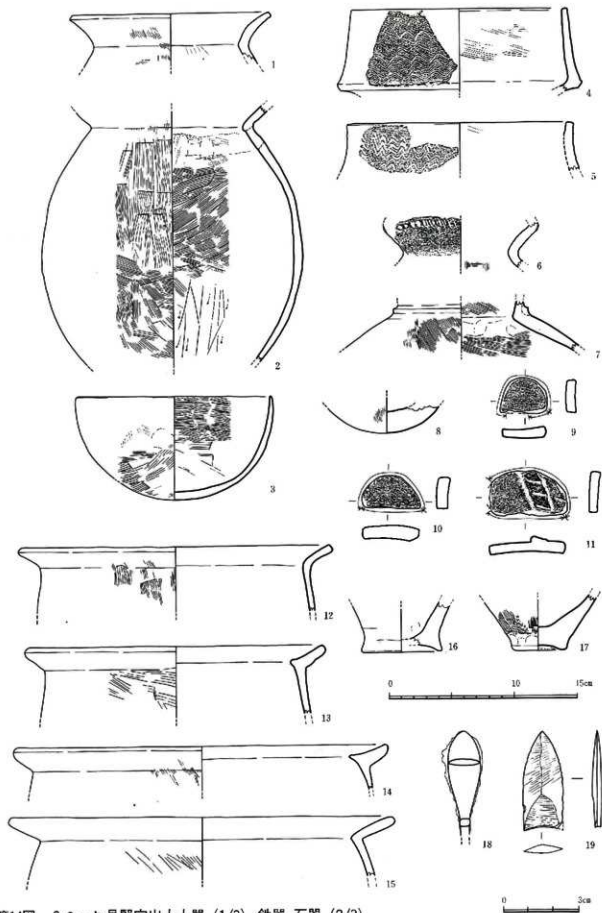


6 a・b号竪穴 (第13図)

4・5号の南約6mにあり7号とも重複し、6b→7→6aの順に形成されたと判断される。6a号は長辺約6.5m、短辺約5.5mの長方形プランをなし、東側を除く三方にベッド状遺構が設けられる。4本柱柱の各柱穴には掘取り跡が認められ、方位はN-14°-E。階層は東北隅付近で途切れ、床面積は31.2㎡である。中心部に直径約0.4mの円形をなす炉跡があるが、その東北部は小形のピットと重なる。東側辺の中央部に壁面と接し長軸約1.5m、短軸1m余りの二段掘りの不定形土坑が設けられるがその形態は通常とやや異なる。内部からは第14図に示した遺物が出土しているが、共伴が確実と考えられるのは2〜5・7・8・18であり、2〜4の土器から古墳時代前期中葉に営まれたものである。

西側にある6b号は2.5×2.5m余りの方形に近いプランを示すが、主柱穴や炉跡・土坑等は不明であり付属施設の可能性が高い。遺物はほぼ皆無であるが、第14図12〜15の甕口縁部片は本遺構に帰属すると考えられる。これらは弥生中期後半に比定され6b号もこの時期の所産と思われる。16・17の底部と19の磨製石鏃は7号竪穴に伴うものと考えられ、10・11の土器片加工品の帰属は6a号か7号か判断は困難である。



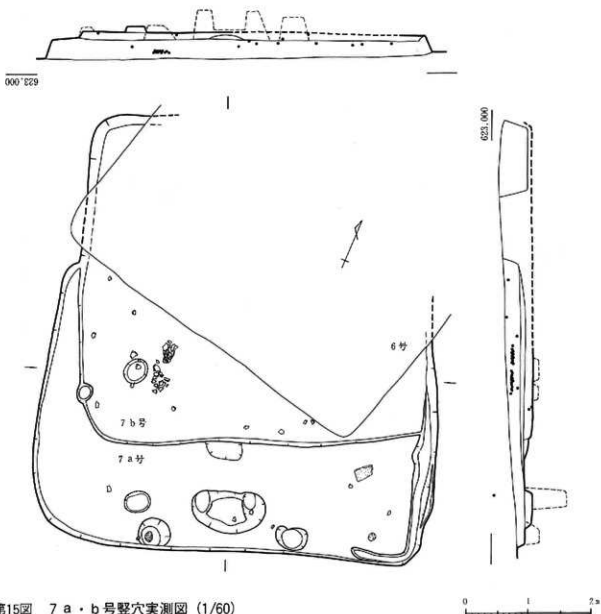


第14圖 6 a・b号竖穴出土土器 (1/3)、鉄器・石器 (2/3)

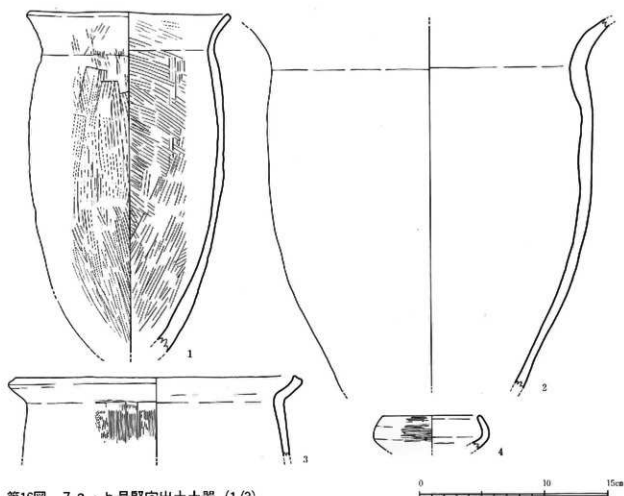
7 a・b号竪穴 (第15図)

6号の南側に重複し、北半部分を6a号に切られたことや現存部の残りが浅いことから平面形や重複の確定はなし難い。しかし、南側から西側に続く一段目(a号)とこの北側の二段目(b号)は異なる竪穴の可能性が高く、a号は6.4×4.5mの長方形に、b号は5.8×5.2mの長方形プランの竪穴に復原することも出来るが各々の支柱穴は確認されていない。a号南側の中ほどに長軸1.2m、短軸0.7m、深さ0.15mの楕円形土坑があり、その両端には柱穴が設けられる。その北側に直径0.6m余りの浅い皿状の掘込みは半截されているが切跡の可能性が高い。また、東南コーナーから東側には壁溝が巡るが、このほかの柱穴については本遺構に伴うものか明らかではない。出土遺物は少なく時期決定にやや躊躇するが第16図3・4から弥生中期後半の所産か。3は跳上げ口縁をなす甕で、胴部外面は縦方向のハケにより胎土に角閃石・石英・長石を含む。4は袋状口縁をなし外面丹塗りの壺口縁部で同様の胎土をなす。

b号に伴う支柱穴・切跡・土坑などの施設については全く不明であるが、第16図1・2に示した土器の共伴は確実と言える。1は縦く外に開く口縁部から長胴の胴部に続く小形の甕で、内外面とも縦のハケを主とし胎土に



第15図 7 a・b号竪穴実測図 (1/60)



第16図 7 a・b号竪穴出土土器 (1/3)

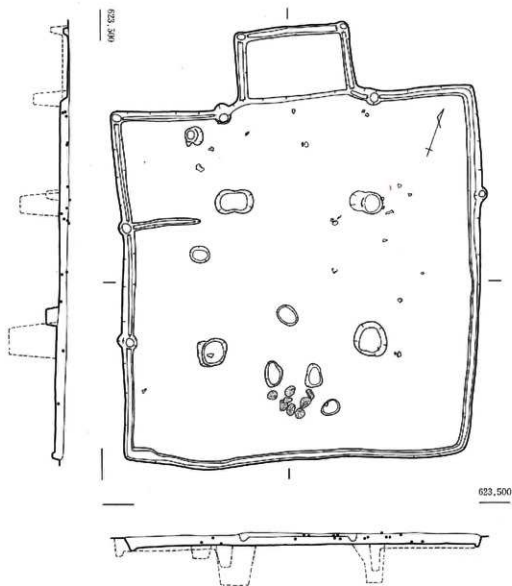
灰色軟等を多く含む在地系。2はナデを主調整とするが胎土は同様の粗製甕で、胴部の張り出しは弱いもの。これらの土器は弥生後期中葉頃に置かれよう。

#### 8号竪穴 (第17図)

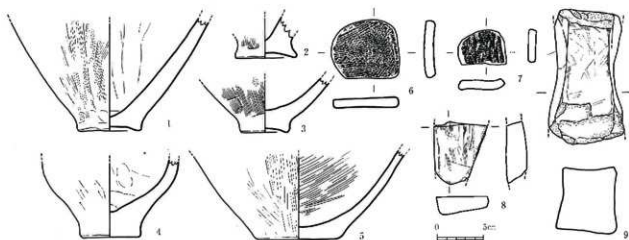
6 a・b号に西側に近接する竪穴で全体に削平を受けているが一辺5.5~5.8mの方形に近いプランを示し、北側に出入口と判断される突出部がある。突出部は1.1×1.9mの長方形をなし内部床面より0.1mほど高く壁溝が廻り、先端部の両側にやや小形の柱穴が設けられる。また、基部の両側にも一対の小形柱穴があり先端部の柱と合わせ出入口の施設を構成したものと考えられる。内部の壁溝は基部の柱穴から始まりほぼ全周するが出入口には設けられない。西側壁溝の中に3本、東側壁溝内部に1本の小形柱穴が認められる。これらの柱穴は補助柱として設けられたものか竪穴の周囲の土手を支える柱のいずれかと思われる。出入口を除く床面積は29.7㎡、4本主柱の各柱穴には抜取り跡が確認され主軸方位はN-16°-W。内部からは土器と土器片加工品を主とする遺物が出したが、得意な出土状況は見られなかった。

第18図1~3はやや窪みをもつ平底の甕底部と考えられ、4・5は平底の甕底部である。2はやや古い様相を示し、胎土に石英が含まれる。1・3・4は在地系の胎土を示し、5にも石英が含まれる。6・7は甕の胴部を利用した土器片加工品。8は頁岩製の手持ち用砥石片、9は4面を利用する砂岩製砥石で平置き使用か。

以上の土器は弥生後期前葉と考えられ、本遺構もここに置かれる。



第17图 8号竖穴实测图 (1/60)

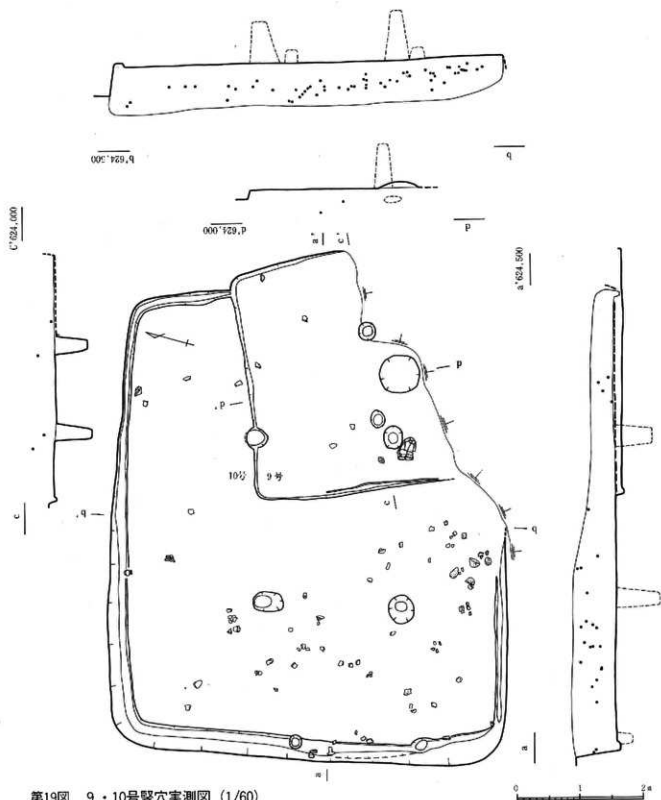


第18图 8号竖穴出土土器 (1/3)、砾石 (1/4)

9・10号竪穴（第19図）

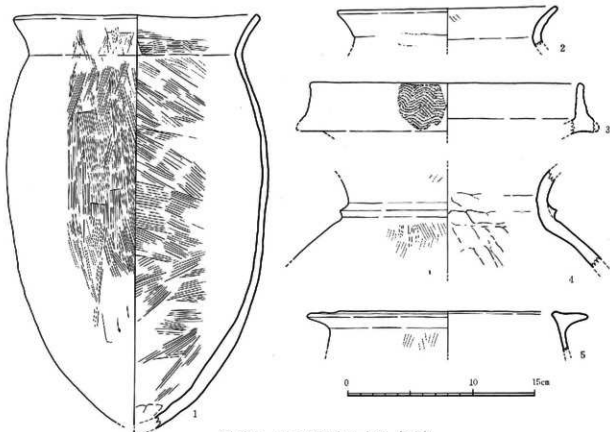
8号の北傾約8mの緩斜面に位置し11号も含め3基が重複するが11→10→9号の順に営まれたものと考えられる。また、水田造成により9号の南半から10号の南東部は消失する。

9号の全形は不明であるが東西長辺3.6m、現存南北短辺3mを測る小形の竪穴で中央部に直径0.6mのやや浅



第19図 9・10号竪穴実測図 (1/60)





第20図 9号竪穴出土土器 (1/3)

いり形伊跡が設けられる。その北側に掘方は小さいが深い2本の主柱穴があり、方位はN-67°-E。西側に壁溝が部分的に付くが他に内部遺構は確認されず、規模も小さいことから住居の付属施設と考えられる。出土遺物も少ないが、第20図1に示したほぼ完形の甕は竪穴の施絶祭祀に伴うものか。

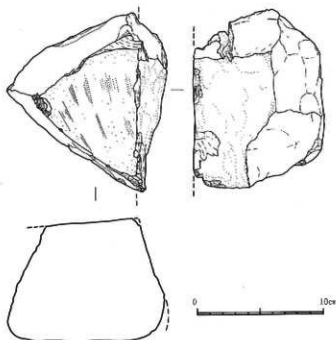
第20図1は底部以外は完全に残る甕で縦く反して開く口縁部からわずかに影らむ長胴の胴部に続き、底部は尖底に近い丸底をなすと思われる。外面は縦方向のハケで内面は斜めと横のハケによる調整。口径19.8cm、推定器高33cmで器面にはスヤコケが付着し、角閃石・長石・灰色粒を含む在地系。2も同様の器形を示すと思われる甕口縁部。3は口縁部がやや短く内傾する複合口縁部の口縁部で外面に輪指波状文を施す。4は複合口縁部の頸～肩部でこの2点は10号からの混入と思われる。5は弥生中期の甕口縁部で、逆L字状をなし胎土に石英を含む。本遺構は1の甕から弥生後期後葉頃の所産と考えられる。

10号は東西に長い長方形プランを呈し、現存長辺7.2m、短辺6.2mを測る大形の竪穴である。壁溝は全周すると考えられ、復原床面積は39.44㎡。西側辺の中央部とその南側壁溝内に2つの小形柱穴が設けられる。その位置と両柱穴の間の壁溝がわずかに外側へ張り出すことなどから、ここに入出りのための梯子が付設されていた可能性が指摘されよう。主柱は4本でこの中の3つの柱穴には抜き取り痕跡が認められる。主軸方位はN-72°-E。竪穴内からは第20～22図に示した遺物が出土しているが、特異な出土状況を示すものや施絶祭祀を窺わせるものは確認されなかった。

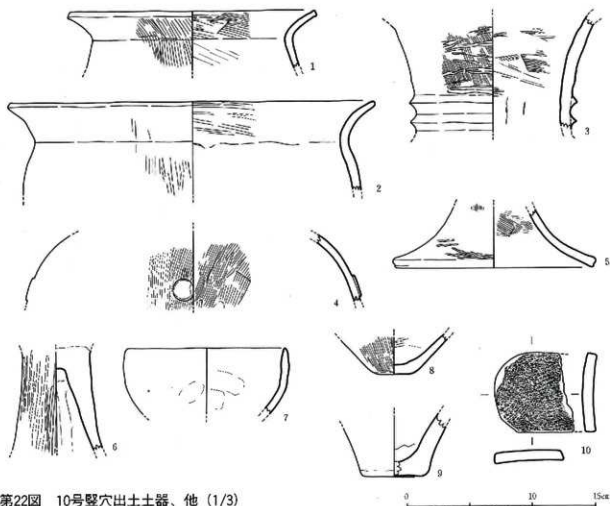
第21図は安山岩を利用した大形の台石片で上面に一定方向の使用痕を残すが石皿とは異なり、重量2kg。第22図1・2は甕の口縁部で外面残す調整はいずれも縦方向のハケにより、1には石英等が2には角閃石・長石・赤色粒・灰色粒が含まれる。3は甕の頸部で断面三角形の突帯を2条巡らすもので胎土は在地系。4はややひの張る甕の胴部片と思われるもので、ハケ調整ののち円形浮文を添付し胎土に石英を含む。5は裾部が反転しながら外に張り出す高杯の脚部、6は高杯の脚部で外面は縦方向のミガキを施し胎土は在地系。7はやや深い楕で器面はナデとオサエによる調整。8・9は甕と甕の底部と思われるものでやや小さい平底をなす。8は在地系胎土

により、9は混入の可能性が強いもので石英を含む。10は壳層部を利用した土器片加工品。

以上、10号竪穴出土土器は小片が多くやや時期幅も認められるが第22図3・4が本遺構に伴うとすれば弥生後期中葉に比定されよう。



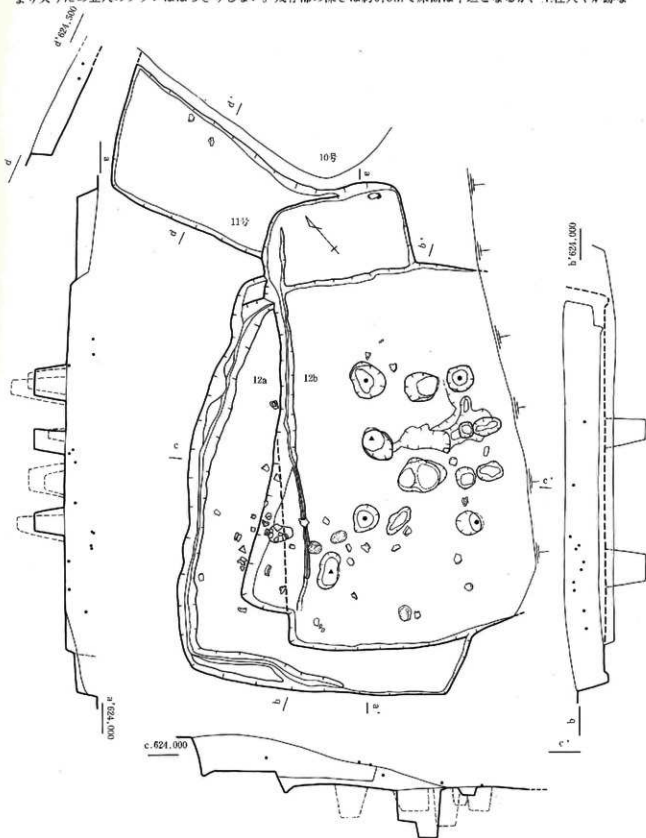
第21図 10号竪穴出土石器 (1/4)



第22図 10号竪穴出土土器、他 (1/3)

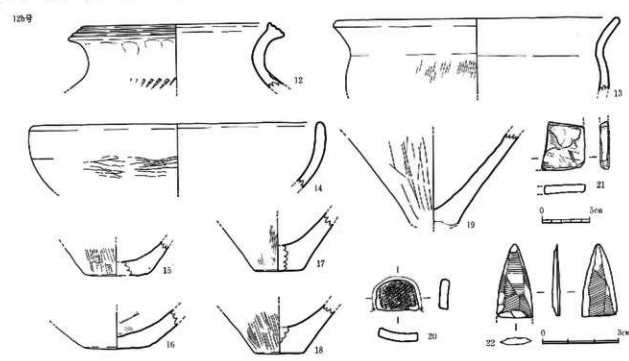
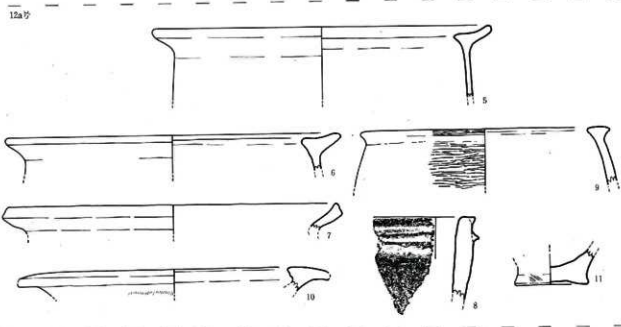
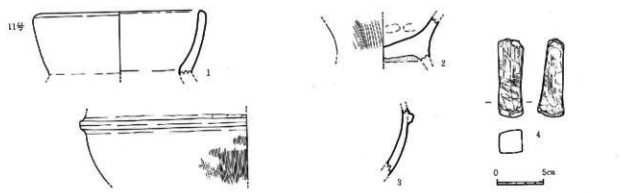
11・12a・b号竪穴（第23図）

10号の西側に隣接し3基が重複し、12b号が11号と12a号を切る。11号はその東側に10号に、南側を12b号により失うため竪穴のプランははっきりしない。残存部の深さは約0.3mで床面は平坦となるが、土柱穴や炉跡な



第23図 11・12a・b号竪穴実測図 (1/60)





第24图 11·12a·b号出土土器、他 (4·21.1/4, 22 2/3, 他1/3)

0 10 15cm

どの施設は検出されなかった。内部からは第24図1～3に示した土器や4の瓦石が出土し、小片のため確実な時期決定は困難であるが2の黒髻式の底部や3の壺から弥生中期から後期前葉の所産と思われる。

12a号はb号によって遺構の大平を失い現存するのは西側長辺と南側短辺と周辺に過ぎないが、約6.2×4.4mの長方形プランをなすと思われる。壁溝は南側短辺の途中で途切れ、床面積は約24m<sup>2</sup>に復原される。主柱穴は長辺に並行する2本と考えられ方位はN-63°-E。炉跡や土坑については不明であるがベッド状遺構が巡る。出土遺物は少ないが、第24図5～11は本遺構に伴うと考えられる。5・6は黒髻式甕の口縁部で石英等を含む。7は跳上げ状口縁をなす壺口縁部片で、8は下城式の甕。9は短頸壺の口縁部で10は高坏又は壺の口縁部片。11はやや窪む平底の底部。これらの土器から本竪穴は弥生中期後半に置かれよう。

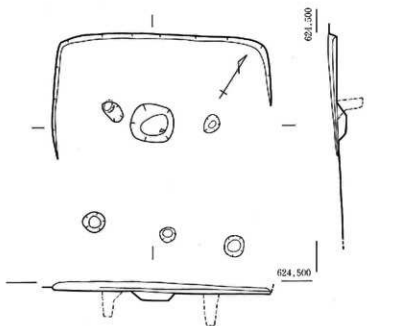
12b号は東側長辺とその周辺を水田化により消失するが東北部に突出部をもつ長方形の住居跡である。出入り口と見られる突出部は基部幅2.4m、長さ約1.4mの小形長方形をなし検出面から床面までは約0.4mで内部床面からは0.1m程高くなる。これを除く長辺は約5.8m、現存短辺3.6mを測るが本来は約4.5m前後と推定され、復原床面積は24m<sup>2</sup>。4本主柱の各柱穴には抜取り痕跡が認められ、主軸方位はN-42°-E。東側2本の主柱穴の中間にある小形円形と楕円形を呈する柱穴は一組一対をなし、炉跡に付属する施設を構成する可能性がある。炉跡は不明瞭であるが4本主柱の中間の浅い掘込みと考えられよう。本遺構に伴う遺物も少なく土器も小片が多い。

第24図12は瀬戸内系凹線土器で、三角形をなす口縁部外面に3本のやや浅い凹線を巡らし肩部ににはハケ工具を用いた刺突文を施す。口径17.6cmを測り、角閃石・長石・石英を含む移入品。13は甕または鉢の口縁部片で胎上は在地系。14は外面にミガキをやや雑に施すやや大形の輪（口径23.8cm）と思われるもので石英を含む。15～19は甕と壺の底部で小形平底を呈し、胎土はいずれも在地系である。20はやや小形の土器片加工品。21は頁岩製紙石片で、22は頁岩製の磨製石鎌で基部を欠く。現長3cm、幅1.5cm、1.4g。これらの土器からすれば、本竪穴の時期は弥生後期中葉に置かれよう。

### 13号竪穴（第25図）

9・10号の北側約5mに位置する小形の竪穴であるが、全体に削平を受け遺構の南半部分の壁は消失する。長辺3.3m、短辺の現長は1.8mであるが約2.5mと推定され、復原床面積は約7.5m<sup>2</sup>。中央に長軸0.7m、深さ0.1mの楕円形炉跡があり、その東西に2本の主柱穴が形成される。柱は抜取り跡があり、主軸方位はN-70°-E。南側の柱穴は本遺構に伴うか否かは不明であり、土坑等は検出されなかった。

出土遺物は非常に少なく、図示可能な土器も認められないが弥生後期末～古墳前期の付属施設の遺構か。

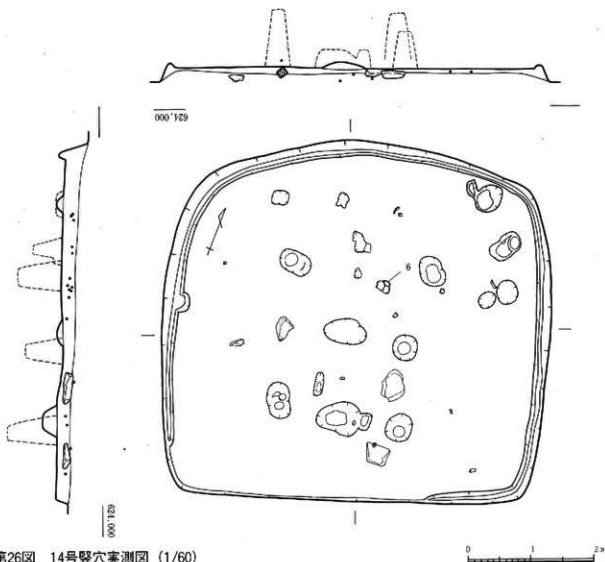


第25図 13号竪穴実測図 (1/60)

#### 14号竪穴 (第26図)

13号の南西約2m、12a号の北側約4mにある竪穴で北側長辺が緩く外に張り出した変則長方形プランを呈する。南側辺(5.6m)はほぼ直線的となるが東西の短辺(約5m)の北半から西コーナーにかけて緩くカーブし、壁溝は南側で途切れる。床面積は30.16㎡の中規模住居跡であり、4本主柱の主軸方位はN-73°-E。各主柱穴には明瞭な抜取り跡が認められる。中央に長軸0.7mの断面皿状をなす炉跡が設けられ、南側主柱穴の中間に不整楕円状を呈し深さ0.2mの上坑が配される。このほか内部にはやや深い柱穴や浅い掘込みがあるが、性格等については明らかにし難い。出土土器は比較的小片が多いが、第27図6の鉢はほぼ半載された状態で炉跡の北東部から出土し、竪穴廃絶祭祀に使用されたものと考えられる。

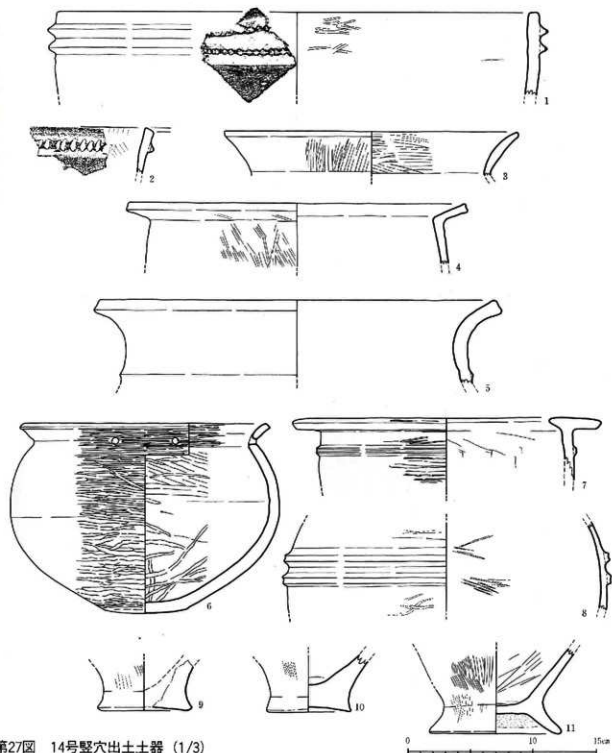
第27図1・2は下城式甕で、1は2条の2は1条の刻目突帯を巡らし胎土に石英は含まない。3は口縁部が屈曲して平勾甕の口縁部片、4は逆L状に屈曲する甕の口縁部。5は緩く反転して開く壺の口縁部で頸部にやや低い突帯を巡らす。6は短く外反する口縁部から球形に張り出す胴部に続き、底部は凸レンズ状の平底となる鉢。頸部に一対の小孔を穿ち、ヘラミガキのち口縁部と外面全体に丹塗り。口径20cmを測り、石英・角閃石・長石を多く含む移入品。7は鋤先状口縁部をなす壺で頸部に1条のM字状突帯を巡らす。外面はミガキのち丹塗りで石英を含まないが移入土器と考えられる。8は壺の胴部に2条のM字状に近い突帯を施し、灰色粒を含む在地系。



第26図 14号竪穴実測図 (1/60)

9・10はやや窪む平底をなす甕の底部で胎上は8と同様である。9はやや短く外に張る脚部を付す黒髪式の甕底部、底部外面には砂型痕跡が残り金雲母を多く含む移入土器。

以上の土器にはやや時期幅が認められるが、6～8から弥生中期後半に置かれよう。



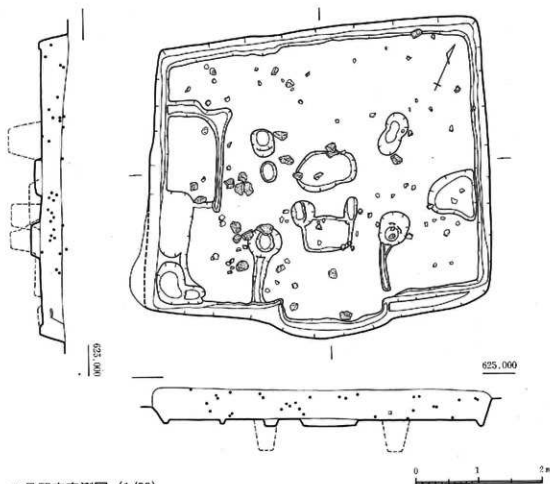
第27図 14号竪穴出土土器 (1/3)

### 15号竪穴 (第28図)

14号の西北2mに形成された長辺5.2~5.4m、短辺4.3mの長方形プランの竪穴である。南側長辺の中程の幅約2.2mが外に張り出し出入口を形成する。その突出は約0.3m余りと短く明瞭ではないが、壁溝は明確でありコ字状に0.25m余り突出する。壁溝はほぼ全周するが南西コーナー部に設けられた土坑とその北側部分で途切れる。この部分は後世の擾乱を受けているため不明瞭となった可能性がある。また、南側2本の主柱穴から南側壁に向かって小溝が設けられ、西側壁に付設されたベッド状区画にも壁溝から派生したし字状の小溝が認められる。中央に長軸約1m、深さ0.1m余りの楕円状跡があり、その南側には小形楕円形柱穴2本と0.8×0.6mの長方形七坑が組合わさった遺構が設けられ、かと同連するものと考えられる。上坑は南西隅部に長軸0.7m余りの楕円状と東側短辺に接する所に台形状のやや浅いものの2箇所設けられているが、その場所は一般的な位置とやや異なると言えよう。

N-64°-Eとなる4本主柱穴の全てに掘取り跡が観察され、床面積は19.6㎡と中規模の中でもやや小さく工房的性格が想定される。出土土器に大形破片は少なく、特殊な状況を示すものは認められなかったが壺大前後の層が比較的多いことは注意される。

第29図1は黒髮式甕の口縁部片、混入品と見られるもので角閃石・長石・石英を含む。2・3は緩く外に開く甕の口縁部であり、2は角閃石・長石・灰色粒・赤色粒などを含み3は長石・灰色粒と少量の金雲母を含む。4は短く内傾する口縁部の外面に4条の櫛歯状文を施す複合口縁壺の口縁部。5も複合口縁壺の口縁部であるが口縁部の反転が強く、肩曲部に刻目を施すもの。4・5の胎土は在地系。6は壺又は甕の底部で、小形の平底か

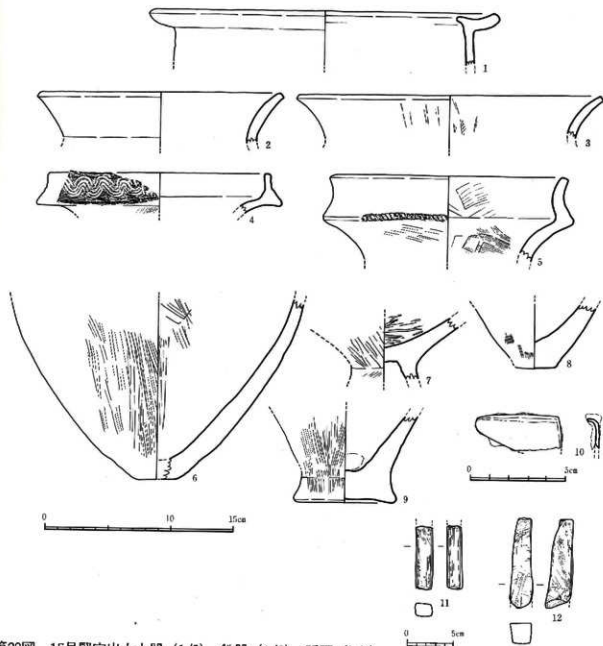


第28図 15号竪穴実測図 (1/60)



ら長胴の胴部に続く器形を示し胎土は在地系。7は高坏の坏底部で内外面はヘラミガキを主とする調整で胎土は6と同様である。8は小形平底を呈する甕の底部で在地系胎土による。9は弥生中期後半の甕底部で、石英を多く含む移入品。10は直角三角形に近い平面形を呈すると思われる鉄片、一部欠損するが長辺には折り曲げが認められる。全長4.7cm、現存幅2cm、厚さ0.25cmを測る。11・12は4面利用の頁岩製砥石片、手持ち用と思われるもの。

本壜穴も時期決定にやや躊躇するが、4～8から弥生後期中葉に置かれよう。



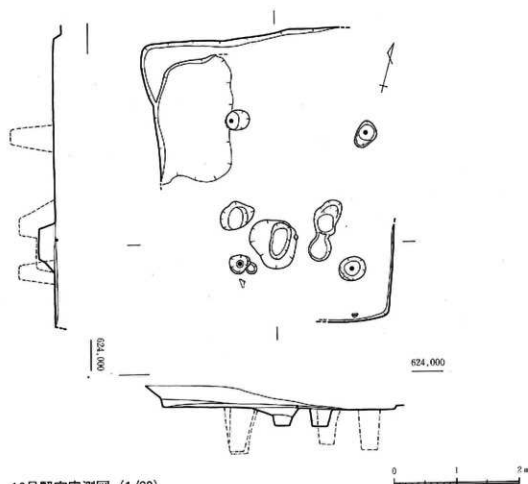
第29図 15号壜穴出土土器 (1/3)、鉄器 (1/2)、砥石 (1/4)

### 16号竪穴 (第30図)

15号の北西約2mに位置する長方形の竪穴であるが水田造成による削平を大きく受け、現存するのは竪穴周辺部から南東部と北西コーナー付近である。削平はほぼ床面まで及び、西北隅付近は攪乱により床面も残らない。残存コーナー部の位置から復原長辺4.6m、同短辺約4mで推定床面積17㎡と小形に属する。主柱は4本で柱は抜取られたと考えられ、主軸方位はN-80°-E。中央南側に内側が長軸約0.6mの楕円形をなす竪跡があり、その北側の左右にやや深い一對の柱穴が認められる。壁溝や土坑の存在は確認されなかった。

本遺構に伴う遺物は非常に少なく、図化可能な土器片は認められなかったため時期の決定は困難であるが、弥生後期の所産と思われる。

12年

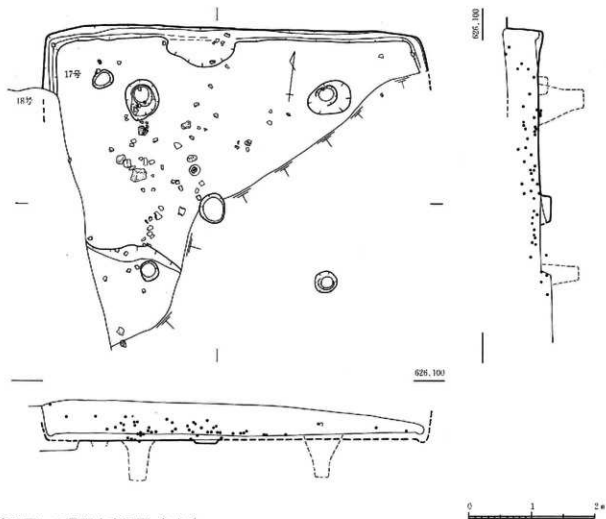


第30図 16号竪穴実測図 (1/60)

### 17号竪穴 (第31図)

16号の西側約2mにあり西側を18号と重複する。両竪穴とも水田化による土取りと攪乱のため、検出時点では前後関係が明確ではなかったが本遺構が後出すると考えられる。北東部から南西にかけては床面の下位まで消失し、西側辺は18号を切り込むが本竪穴の床面が高く形成されていたものの掘過ぎにより壁面や壁溝は失われた。また、主柱穴の位置から東西に長い長方形プランを呈すると思われ、長辺約6m、推定短辺約5m、復原床面積26㎡。中央に長軸0.45mのやや浅い楕円状の痕跡が認められ、壁溝は全周すると思われる。北側長辺の壁と接する掘込みは上坑ではなく、4本主柱の削平を受けていない北側の2つの柱穴には採取跡が明瞭に観察された。主軸方位はN-88°-Eでありほぼ真東西の住居跡となる。出土遺物は比較的豊富であるが埋土の中～下位に多く、第32図5の甕は西北部主柱穴の周辺に集中し、6はI線部を下に置いた状態で、鉄斧は東北部主柱穴の上位から出土した。これらは埋戻しの途中で行われた竪穴廃絶祭祀に伴うものと見做されよう。また、10の瀬戸内系土器は両地城間の並行関係を知るうえで手掛かりになる資料と言える。

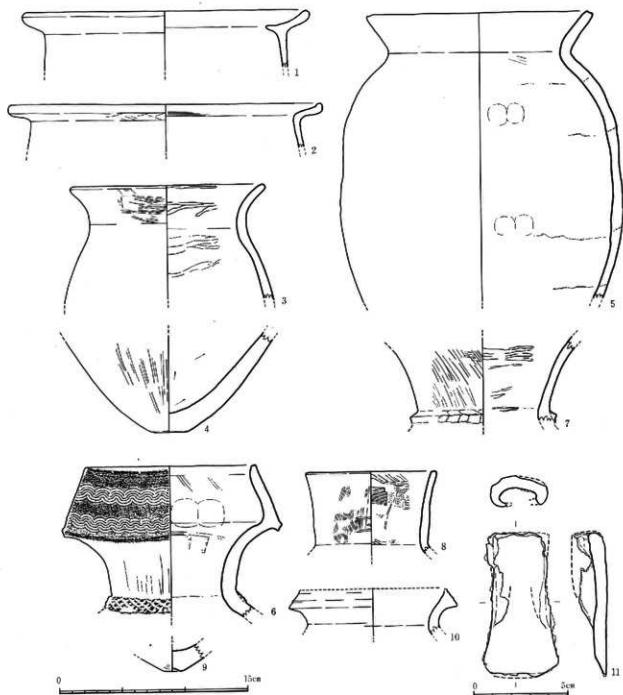
第32図1・2は混入と判断される弥生中期土器。3は緩く反転して開く口縁部から締まりの弱い頸部に続き、胴部は口径より張り出す長胴の甕で胎土は在地系。4は同様の甕の底部と考えられ、丸底に近い小形の平底を呈する。5は胎土に角閃石・長石・灰色粒を多く含む粗製甕で口縁部は直線的に開き、やや肩の張る胴部に至る。口径18cmを測り、内外面はナダを主とするが部分的にハケを残す。6は口縁部から頸部と胴部との境から取り外したと考えられる複合口縁甕、内傾してやや長く延びる口縁部に二段の櫛歯状波文を丁寧に施す。石英・結晶片岩等を含むことから大分平野からの移入品か。7は在地系の複合口縁甕の頸部。8は直口甕の口縁部片で、9は



第31図 17号竪穴実測図 (1/60)

僅かに窪む甕の底部。10は瀬戸内系円線文土器の11線部で、退化した2条の凹線を施す。外面はナデにより内面には在来とは異なるハケが僅かに残り、口径15.4cmを測り角閃石・白色粒・石英等を含む移入土器。11は袋状鉄斧であり、袋部の折り曲げ部分と刃部先端を欠損する。全長7.8cm・刃部幅4.5cm、身部の厚さ0.7cm、重さ30gを測る。袋部から身部にかけて僅かながら段が設けられる。

出土土器にはやや幅が認められるが、3～10から本遺構は弥生後期後葉に比定されよう。

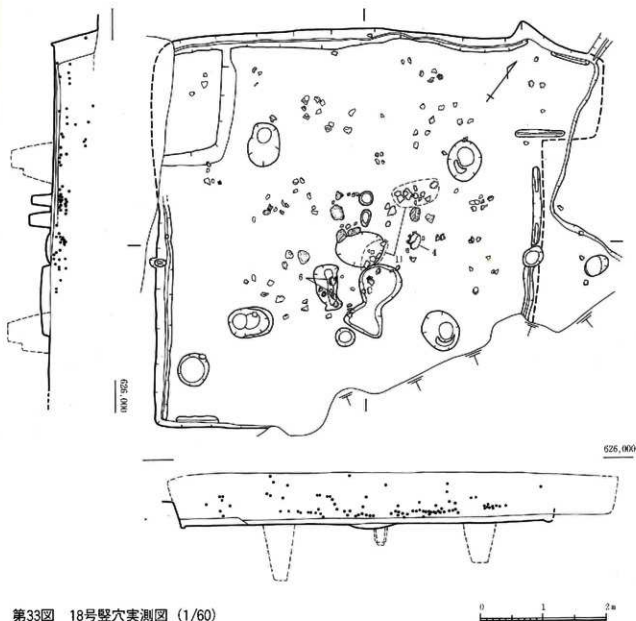


第32図 17号竪穴出土土器 (1/3)、鉄器 (1/2)

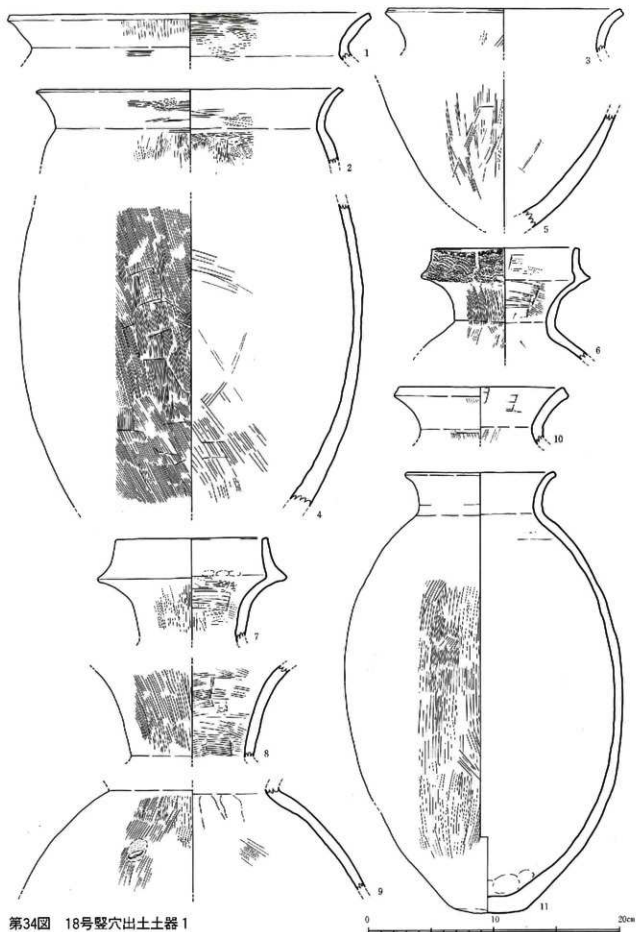
18号竪穴 (第33図)

17号と重複しその西北部分を19号に切られることや南東部を土取りにより消失するため、全体プランがやや不明確となる。残りの良い南西コーナーや各辺の壁溝から竪穴は一边6.2mの方形をなし、北東部に出入口と見られる突出部が設けられる。突出部は17号により失われるが約1.2×1.4m余りの長方形に近いものと推定され、竪穴内部と段差はないようである。北西部に約1×1.6m前後のベッド状遺構があり、これを含めた床面積は約33㎡に復原される。主柱は4本であり各柱穴には抜取り痕跡が明瞭に認められ、主軸方位はN-60°-E。中央やや南寄りに長軸約0.8m、深さ0.1mの断面皿状を呈する炉跡があり、その南側には2基の浅い不定形土坑が伴う。壁溝はほぼ全周すると思われるが、土坑の有無については明らかではない。また、南西隅付近には柱穴が認められるが本遺構には付属しない可能性が高い。

内部からはやや多くの遺物が出土しているが土器の大半は埋土の中～下層から検出され、ほぼ完形に復原された第34図11の壺は炉跡とその北東部の二か所に集中する。土器は小片化し床面からやや浮いた状態であることから、埋戻しの初期に行われた廃絶祭祀に使用されたものと考えられよう。



第33図 18号竪穴実測図 (1/60)

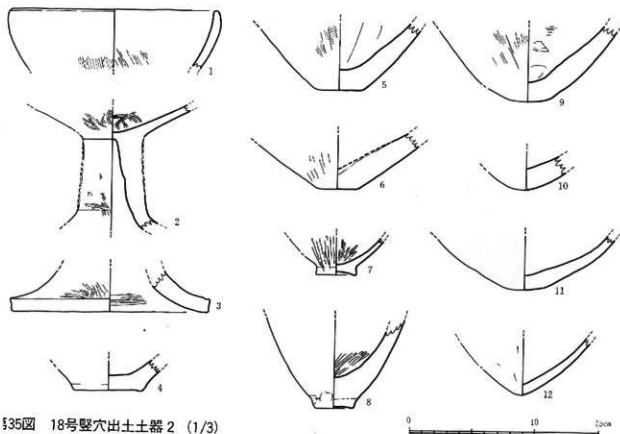


第34图 18号竖穴出土土器1

第34図1～3は口縁部の開きがやや弱い寛の口縁部片で胎土はいずれも在地系。4・5は同様の口縁部をもつと思われる甕の胴部で長刷をなし、4には金雲母が多く含まれる。6は反転して立ちヒがる口縁部の上半はほぼ直立し、櫛溝波状文をやや雑に施す小形の複合口縁壺。口径11.8cmを測り、金雲母・角閃石・灰色粒を若干含む。7も器形的に類似する複合口縁壺で器面調整も近いが、胎土に角閃石・赤色粒・灰色粒を含むもの。8は複合口縁壺の頸部片で、9は複合口縁壺の胴部で勾玉状浮文を貼付した痕跡が認められる。10は短頸壺の口縁部と思われるもので、11は完形に近い短頸壺。やや不安定な平底の底部から卵球形に張り出す胴部に至り、頸部で反転し緩く外に開く口縁部に続く器形を示す。口径12cm、器高34.8cm、胴部最大径22.2cmを測り、胴部外面は縦方向のハケを主とし他はナデにより、胎土に角閃石・長石・灰色粒等を含む在地系。

第35図1は器高のやや深い碗、2は高杯の底部から脚柱部。3は高杯又は鉢の脚部片で外面にミガキを加える。4～12は甕及び甬の底部である。4～6は比較的安定した平底をなし、7・8は外底部が僅かに窪む平底を呈する。9～11は丸底を、12は尖底に近い底部をなす。11の外面には赤色顔料を塗り、8には金雲母が少量含まれる。この他はいずれも在地系胎土を示し器面調整にも大差は認められない。

第34図6・7・11の土器から、本堅穴の時期は弥生後期中葉頃に置かれよう。



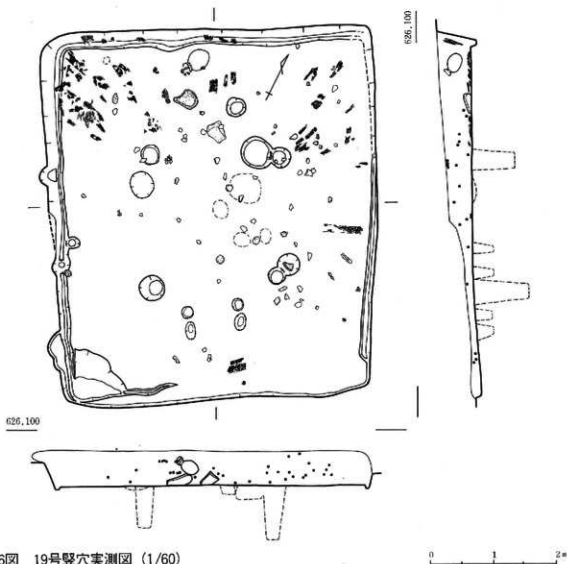
第35図 18号堅穴出土土器 2 (1/3)

### 19号竪穴 (第36図)

18号の西北部を僅かに切って営まれた住居跡で長辺5.8m、短辺5.1mの長方形プランをなすが南半部分は削平をやや深く受ける。壁溝は南側辺を除く三辺に設けられ、床面積26.4㎡の中規模竪穴である。4本主柱の主軸方位はN-64°-E。東側2本除く主柱穴には抜き取りに伴うと思われる浅い掘込みがある。炉の掘込みは確認されなかったが、中央部東側の床面に4箇所の焼上面が認められた。この焼上面の形成は炉に伴うものではなく、竪穴廃絶祭祀によるものと思われる。南側両主柱穴と南壁との間に小形円形と楕円状をなす2本一對の柱穴が主軸と並行して設けられ、何らかの内部施設を構成すると考えられるが構造・性格は明らかに難しい。内部からは第37図4の完形の壺のほか、垂木やかヤ状の炭化物が検出された。これらは建物の主要構造材等を撤去した後に、残余の部材を焼却し埋戻しと廃絶祭祀が行われたことを示すと考えられるものである。

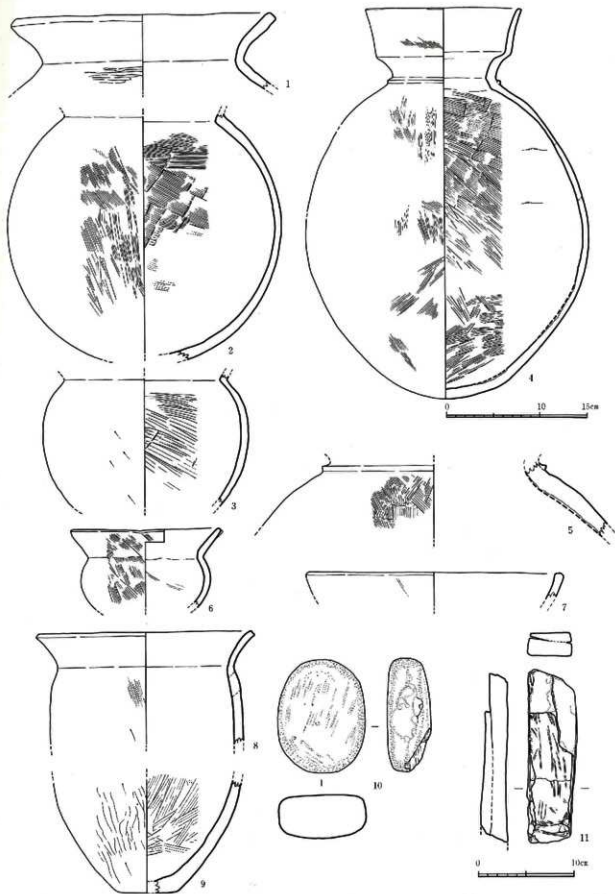
第37図1は雙口縁部で2・3は球形に張る発射部で胎土はいずれも在地系。4はやや外に開く口縁部から短く屈曲して締まる頸部に至り、ほぼ球形をなす胴部と丸底の底部をもつ二重口縁壺。ハケとナデを主調整とし、口径16.8cm、器高41.3cmを測り、胎土に角閃石・長石・石英・灰色粒・赤色粒をふくむ。5は蓋の肩部、6は小形の鉢で口縁部的一端を外に押し出す。7は碗の口縁部片で、8・9は18号からの混入と判断される弥生後期土器。10は安山岩製の磨石兼砥石、11は4面利用の頁岩製砥石で2つに別れ出土したものが接合した。

本遺構は4などから、古墳時代前期中葉に比定される。



第36図 19号竪穴実測図 (1/60)



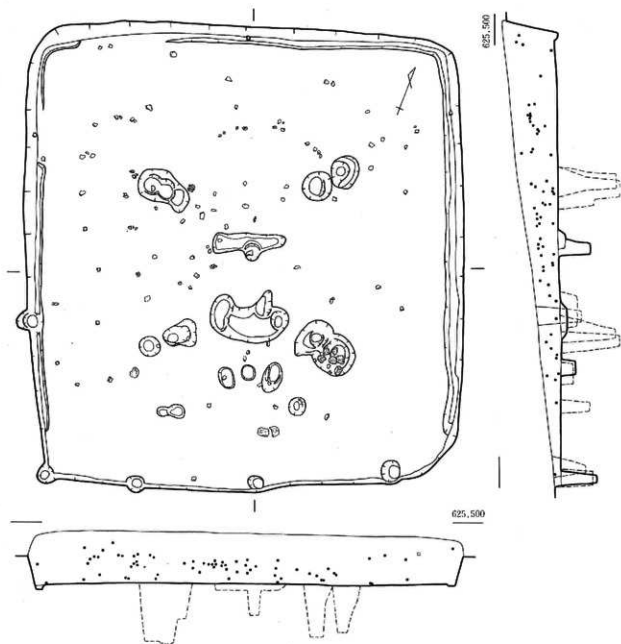


第37图 19号竖穴出土土器、石器 (5·10·11.1/4、他1/3)

20号竪穴 (第38図)

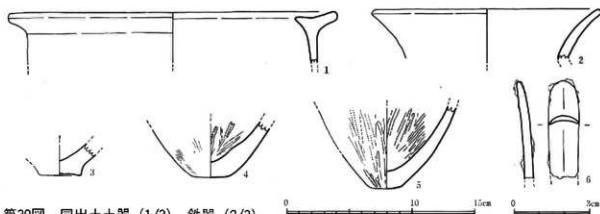
19号の西側約9m 斜面に位置し、一辺6.6~7mの隅丸方形プランを呈する。北半部分は残りは良いが南側は傾平のため検出面より床面までは0.1m前後と浅くなる。崖溝は南側辺には廻らず北側の一部でも途切れ、床面積は38.44㎡の中規模住居跡である。4本主柱であるが礎替えのため8つの柱穴が検出され、主軸方位はほぼ変わらずN-68°-E。中央やや南側に柱穴3本と楕円状の浅い掘込みが重なる遺構があり、葬跡と判断される。この北側に長軸約1.2mの長楕円状の土坑とやや深い柱穴が認められ、柱穴については各主柱穴の対角線上に位置することから補助柱の可能性が指摘されよう。また、南側辺に4本と西側辺に1本の小形の柱穴が形成されるが、これについては壁の補強及び竪穴の外を廻る土手の支柱と考えられる。出土遺物の点数は多いものの上器の殆どは細片であり、廃絶祭祀を窺わせる遺物は第39図6の鉄器に止まる。

第39図1は弥生中期の黒変式甕の口縁部片で混入と見られるもの。2は口縁部の周りがやや強い甕で胎土に金



第38図 20号竪穴実測図 (1/60)





第39図 同出土土器 (1/3)、鉄器 (2/3)

雲母・角閃石・灰色粒を含む。3は小形の平底をなし、4・5は丸底に近い平底を呈する甕の底部。4は内面に5は内外面にミガキを加え、いずれも胎土は在地系と思われる。6は鉈の先端部で、裏すきは明瞭で身は板状をなすと思われる。現長3.8cm、幅1.1cmで全体に小形と言えよう。

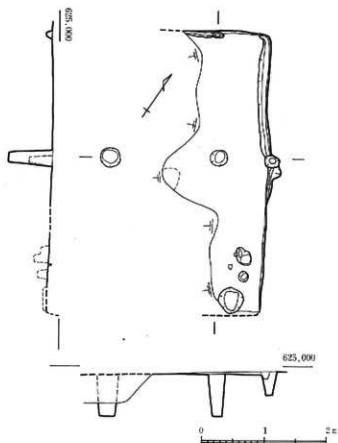
本堅穴は、2～5の土器から弥生後期中葉に置かれよう。

#### 21号堅穴 (第40図)

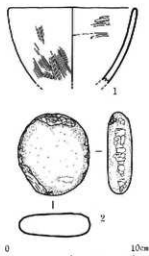
17号の南側約3mにありその東には15・16号が分布する。水田造成のため遺構の大半は失われ、東側残存部も床面付近まで削平を受ける。東側辺の現存長4.4m、北側辺現長1.4mで長方形プランをなすと思われるが全体規模は不明である。中央部に埴跡と推定される浅い掘込みが認められ、その北側の東西に2本の支柱穴があり主軸

方位はN-58°-E。

出土遺物も非常に少ないが、第41図1はやや器高の深い輪で胎土は在地系。2は磨石と燧石茎用品で安山岩製。1の鉢から弥生終末から古墳前期前半の所産か。



第40図 21号堅穴実測図 (1/60)



第41図 同出土土器、石器 (1/3)

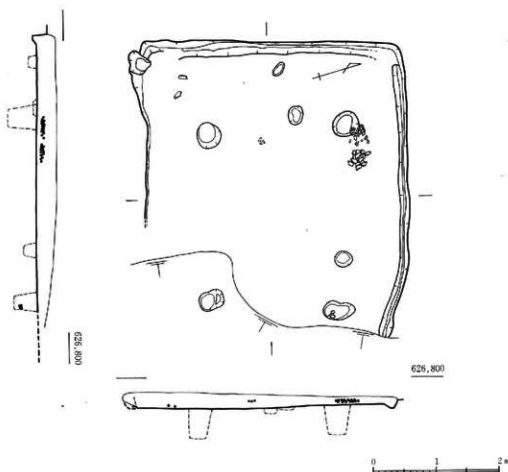
## 22号竪穴（第42図）

17・18号の北側約10mの1m余り高い緩斜面にあるが水田化に伴う土取りと削平を受け、東側辺とその周辺は消失する。比較的遺存状態の良い西半部分では検出面から床面まで0.2m前後を測り、北側と西側には壁溝が設けられる。復原床面積は約20㎡で炉跡は検出されず、土坑の有無についても不明である。4本主柱であり各柱穴には柱が抜き取られた痕跡が残る。主軸方位はN-75°-Wで周辺の竪穴と異なる。内部からは主柱穴以外の小形柱穴4本が検出されているが、これらについては後世の可能性が高い。

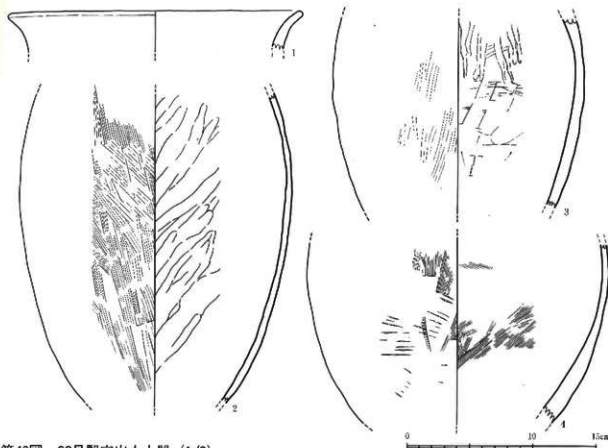
出土遺物は少ないが、北西部主柱穴の東側に第43図に示した甕3個体の破片が集中して出土した。また、北東部主柱穴の内部からも若干の土器片が検出されている。図示した甕は、廃絶祭祀に使用され底部や口縁部を打欠かれた後に内部へ投棄され、その後本格的に竪穴は埋戻されたものと考えられる。

第43図1は緩く反転して外に開く甕口縁部、口径23.6cmを測り胎土に角閃石・長石・灰色粒などを含む在地系。2は長胴をなす甕の胴部片で外面は縦・斜め方向のハケ、内面はナデののち斜め方向のヘラミガキを加える。胴部最大径21.8cmを測り、胎土は1と同様であるが金雲母を少量含む。3は2よりやや小形の甕の胴部片であり、外面は縦方向のハケにより内面はハケののちヘラミガキをやや雑に加えるが、底部付近には浅いケズリが認められる。胎土は2とほぼ同じであり、胴部最大径は20cm。4は胴部下半の破片で外面はタタキののちハケを加え、内面はハケとナデによる調整。胎土は1に類似する。これらの胴部の内外面にはススやコゲが付着し、煮炊きを使用したことを示す。

本竪穴は出土土器から弥生後期後葉から終末の所産と考えられる。



第42図 22号竪穴実測図 (1/60)



第43図 22号竪穴出土土器 (1/3)

#### 24号竪穴 (第44図)

22号の西側約15m、20号の北側約14mに位置する。25号と重複しその東南部を切り営まれた竪穴である。東・西側辺4.2m、北側辺4.6m、南側辺5.2mの台形に近いプランを呈し、検出面から床面までは0.1~0.3mと南半部分は削平のため浅くなる。北辺の中間は僅かに内側に湾曲し、壁溝もこれと並行することからここが出入口となる可能性もある。壁溝は南側を除く三方に設けられるが、東西両側の途中で切れる。また、東北コーナー部分は壁溝が直接連結せず、東側壁溝は手前で竪穴内側に屈曲し終息する。

床面積は22㎡の中規模の竪穴で、中央部に直径0.5mの円形をなす浅い炉跡があり、その南側は長軸0.9mの炉の付属施設と思われる楕円状土坑と重なる。南側壁に接し長軸1.9m、短軸0.8m、深さ0.15m余りの長楕円状の土坑が設けられ、その内部には一対の小形柱穴が浅く掘られる。東北部主柱穴の東側の壁に接する所にも長軸約0.5mの半円状土坑が形成される。4本主柱の柱穴は抜取りにより平面形がやや大きくなると共に変形する。主軸方位はN-63°-E。

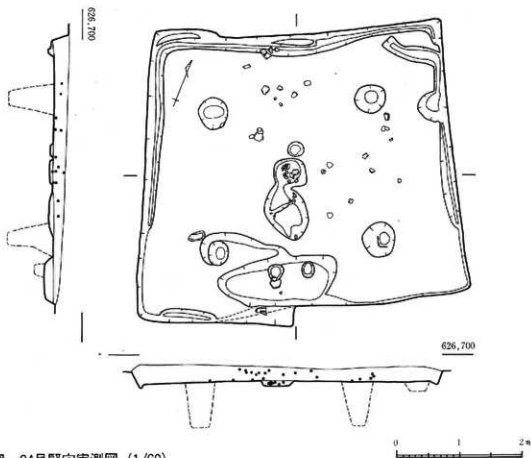
内部からは土器を中心とする遺物が出土している。第45図1の底部を欠損する甕は小片に砕かれ跡内部から集中して検出され、6の壺大形片は北辺中央の壁沿いから、8の甕胴部辺は南側土坑の上から各々出土した。これらの土器は竪穴の焼絶祭祀に使用され、1は縁部や胴部及び底部などを意識的に打欠かれ竪穴の埋戻しに伴い内部に投棄されたと考えられよう。

第45図1は口径18cm、推定器高38.2cm、胴部最大径24cmの甕で底部を欠損する。口縁部は外反しながらやや大きく開き、締まった頸部から張りだしのやや強い長胴の胴部に続く。底部は丸底をなすと思われ、外面は縦方向のハケにより内面はハケとナデによる調整。内外面にスヤコケが付着し、角四石・灰色粒を含む在地系土器である。2も同様の器形をなすと思われる甕1は縁部で、やや肩の張りが強いもの。ハケを主調整とするが外面には

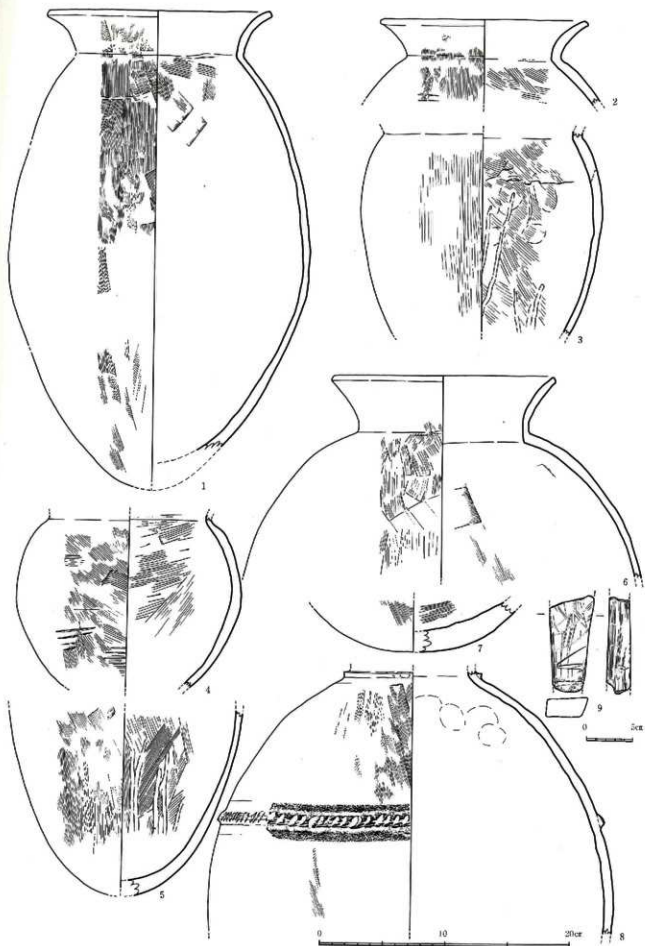
タタキが残り、角閃石・長石・白色粒・灰色粒を含む在地系。3は長胴をなす甕の胴部で張り出しは弱く、内面にハケののち粗いミガキを加える在地系土器。4は小形の甕の胴部と考えられるもので胴部の張り出しが強く、外面はタタキののち縦・斜め方向のハケ、内面はヘラケズリののちハケを施す。胎土に砂粒をあまり含まないが、角閃石・長石の他に茶色粒が認められる移入土器。5は長胴を呈する甕の胴部下半部、外面は縦方向のハケで内面はハケののちミガキを粗く加え、胎土に石英を多く含む移入品。

6は緩く外反して延びる口縁部から頸部で屈曲し大きく張り出す胴部に続く長頸壺、器面調整は細かいハケとナアによる。口径18cmを測り、胎土は在地系である。7は6の底部と考えられるものでやや厚い丸底を呈する。8は複合口縁壺の胴部で、卵球形に張り出すもの。頸部との境に断面三角形のややシャープな突帯を、胴部の上位寄りに台形の刻目突帯を丁寧巡らす。外面は縦方向のハケにより、内面の調整は器面剥落のためはっきりしない。胴部最大径32.4cmを測り、角閃石・長石・灰色粒などを含む在地系。9は主面の片方と両側面を使用する頁岩製砥石片で、主面にはやや深い研ぎ跡が残る。

これらの土器には若干の幅が認められるが、弥生終末から古墳初頭に比定され本堅穴もここに属する。



第44図 24号堅穴実測図 (1/60)



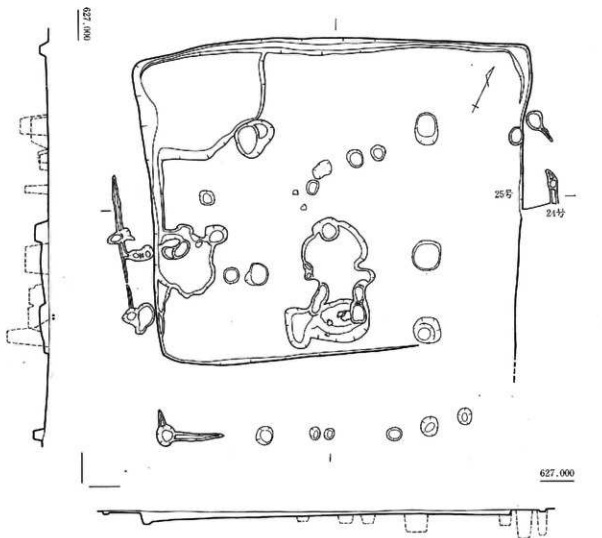
第45圖 24号豎穴出土土器 (1/3)、礫石 (1/4)

### 25竪穴（第46図）

24号の西北部に重複し南東部を一部切れ、コーナー付近を失う。北側を除く三辺の外側に長方形の突出部が設けられた二段掘りの花弁型に近い平面形を呈すると思われるが、全体に削平を受け突出部は増溝の一部や柱穴列が辛うじて残るのみであり全体プランの確定は困難である。東西両側の突出部は幅約0.4~0.6mとやや狭く、東側は東北コーナーより約1mの所から始まり約1.5mで24号により消失する。西側は西北コーナーより約2mの部分から溝が始まり西南コーナーの前で途切れるが、そのほぼ延長線上に南側の突出部の角の柱穴と溝が位置し、西側から南側は一体化しL字状の突出部を形成していたと見られる。南側の幅は約1.3mと広く、溝が検出されなかった部分には小形の柱穴が列状に並ぶ。突出部を含めた推定床面積は約36㎡で、中央南側にある土坑3基と柱穴が重なる遺構は跡と付属施設と思われる。この他の掘込みは上坑ではないものと考えられ、主柱は4本で主軸方位はN-60°-E。

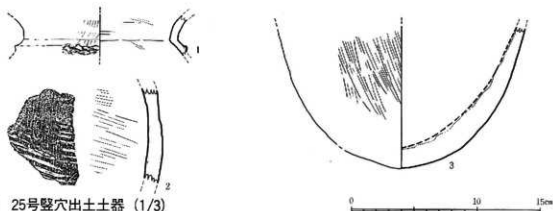
出土遺物は非常に少なく、検出状況に注目されるものは無かった。第47図1は甕の頸部と考えられやや下位に積み上げによる突帯を巡らす。2は外面タタキののちハケを施す甕の胴部片。3は丸底をなす甕または甕の底部で、外面は縦方向のハケによる調整。

本遺構の時期決定を行うには資料が乏しいが、3の底部から弥生後期後葉頃に置かれよう。



第46図 25号竪穴実測図 (1/60)

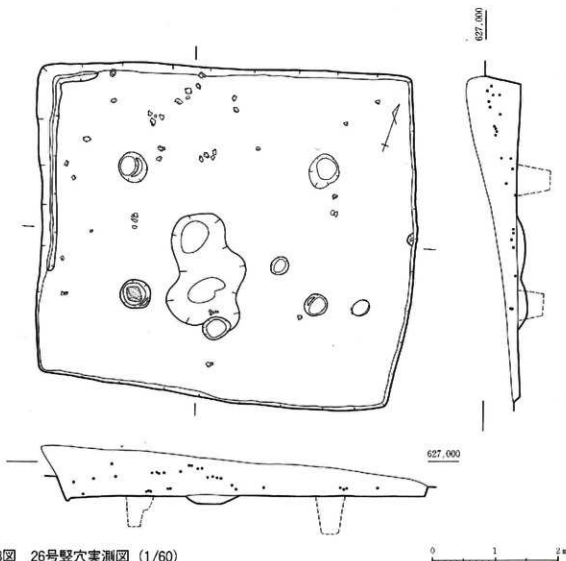




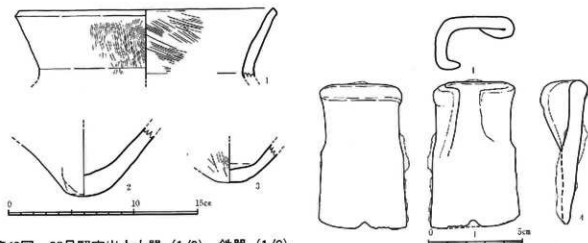
第47図 25号竪穴出土土器 (1/3)

26号竪穴 (第48図)

25号の西約7mに位置する長方形プランの竪穴である。長辺5.7m、短辺5.0~5.2m、検出面から床面までは約0.7~0.1mで北辺周辺は良く残るが南側は次第に大きく削平を受ける。壕溝は北西コーナー部分から西側辺の中程のみ認められ、床面積は28㎡を測る。4本の支柱穴には抜き取り跡が見られ、その後南西部支柱穴には礫を埋込む。主軸方位はN-71°-E。中央やや南西寄りに2基が重なる不定形の浅い土坑があり、中央部は伊路で南



第48図 26号竪穴実測図 (1/60)



第49図 26号竪穴出土土器 (1/3)、鉄器 (1/2)

側はその付属施設と考えられる。出土遺物は少量であるが、本遺跡2点目の鉄斧が認められた。

第49図1は直線的に斜めに開く罫口縁部片、内外面ハケを主とし胎土は在地系。2は尖底に近い丸底を呈する罫の底部片で、3は平底気味の丸底でいずれの胎土も1と同様である。4は袋状鉄斧で刃部先端を一部欠損する。袋部は片側が身と密着するが、密閉しないもので端部が肥厚する。身と袋の境に低い段が設けられ、片方の側辺にも段をもつ。全長7.6cm、刃部幅4.8cm、重さ100gを測る。

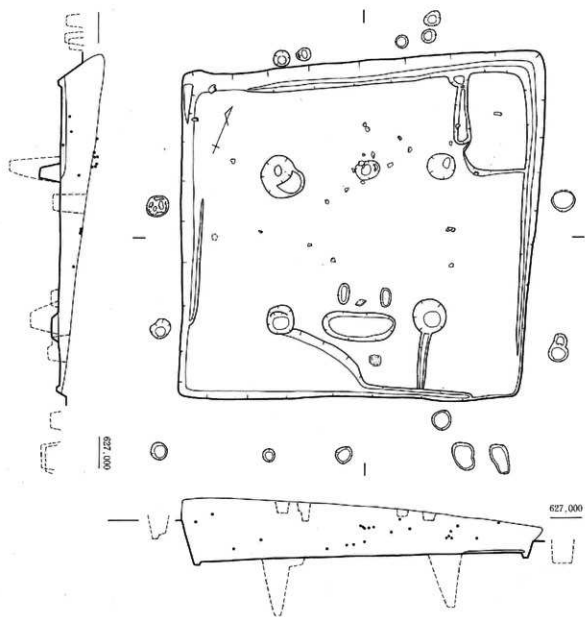
本竪穴に伴う出土土器は少ないが、弥生後期後葉の所産か。

#### 27号竪穴 (第50図)

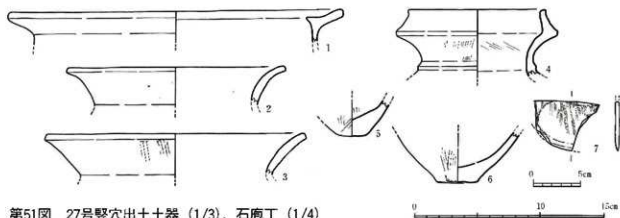
26号の西側に隣接するが重複せずほぼ並行して営まれる。長辺5.4~5.8m、短辺5.0~5.4mの方形に近いプランをなし、南側は削平のため残りは浅いが北西隅付近は検出面から床面まで約1mと深い竪穴である。壁溝は北及び東側面に設けられるがこの他は部分的に浅く残るのみで、床面積は24.48㎡。東北コーナー部分に幅約1m、長さ1.6m、高さ約0.1m余りのベッド状遺構が形成され、その西側は北側壁溝から続く小溝により区画される。主柱穴は4本でいずれも主柱の抜取りにより変形し、主軸方位はN-66°-Eと26号と近い。竪跡については確認されなかったが、南側両主柱穴の中間に長軸1.2m、短軸0.45m、深さ約0.1mの楕円形土坑がある。この北側の小型楕円形をなす2つの柱穴は土坑とセットとなるものと考えられる。また、北側の両主柱間の中程にも柱穴が認められるがこれは補助柱穴の可能性もある。南東部主柱穴からは南側壁に向かって小溝が掘られ、部分的に認められる南側壁溝と直交する。出土遺物は全体的に少なく、土器は大半は小片であり特殊な出土状況は確認されなかった。

第51図1は黒雲式罫の口縁部片で混入と考えられるもの。2・3は長胴をなすと思われる罫の11線部で、緩く外反しながら開く。いずれも胎土に角閃石・長石・灰色粒を含む在地系土器。4は口縁部が短く内傾する小形の複合口縁部で、胴部との境に三角形突起帯を巡らす。口径11cmを測り、胎土は在地系。5・6は罫の底部片であり、両者とも小形平底を呈し在地系胎土による。7は外湾刃をなす石庖丁片、現長5.3cm、幅6.7cm、厚さ0.55cmを測り、粘板岩を素材とする。

これらの土器から本竪穴は弥生後期中葉に置かれよう。



第50图 27号竖穴实测图 (1/60)



第51图 27号竖穴出土土器 (1/3)、石庖丁 (1/4)

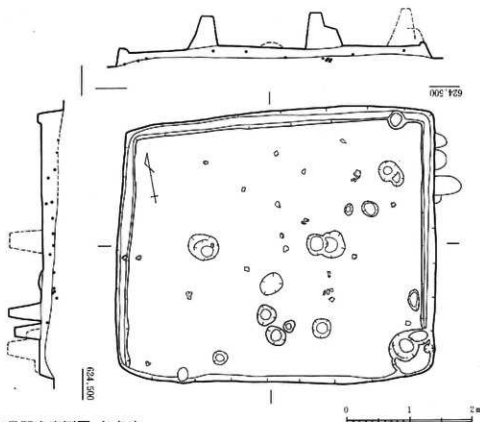


28号竪穴 (第52図)

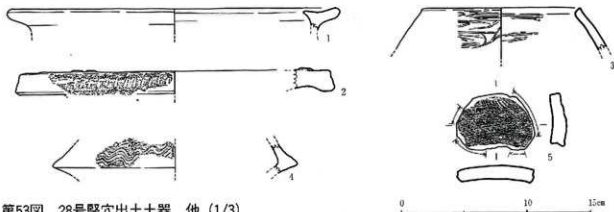
調査区の中央南寄り、19号竪穴の南側約12mに位置する東西に長い長方形プランの竪穴である。長辺5m、短辺約4.1m、検出面から床面までは約0.1~0.3mと削平と後世の攪乱を部分的に受ける。壁溝は南側を除きコ字状に廻らされ、床面積は18.4㎡で中規模の中でも小型に近い。中央部南側に長軸約0.4mの小形楕円形をなす浅い奇跡があり、南東コーナー部分に二段掘りの土坑が設けられる。主柱穴は2本で主軸方位はN-82°-W、いずれも主柱は抜取られる。土器などに特殊な出土状況を示すものは確認されず、小片がほとんどである。

第53図1は黒髪式甕の、2はL字状口縁を呈すると思われる壺の口縁部片でいずれも混入と考えられるもの。3は無頭壺の口縁部で内外面マガキを施す。4は内傾しながら立ち上がる複合口縁壺の口縁部片、外面に櫛指波状文を施し胎土は在地系。5は上器片加工品。

時期判断にやや躊躇するが、弥生後期後葉から終末の所産か。



第52図 28号竪穴実測図 (1/60)



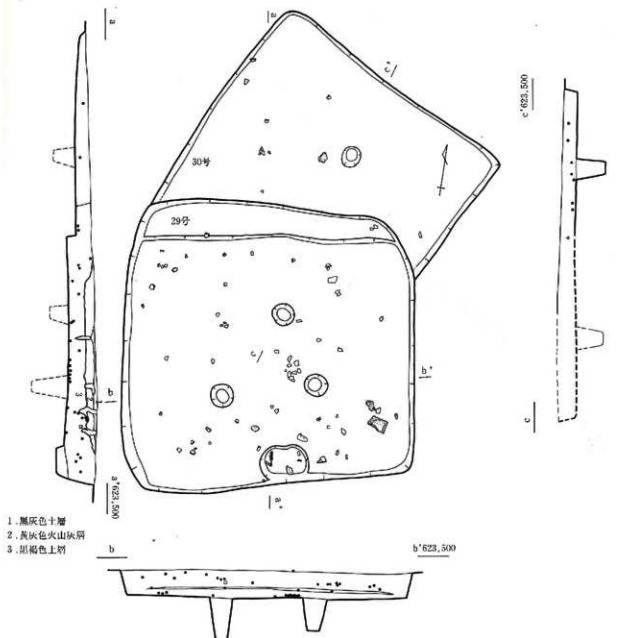
第53図 28号竪穴出土土器、他 (1/3)

29・30号竪穴（第54図）

調査区東南部、9号竪穴の東約10mにあり2基重複するが29号が30号の南半部分を切って形成されている。

29号は一辺約4.2~4.4mの隅丸方形に近いプランを呈し、北側に幅約0.4~0.6m、高さ0.15mのベッド状遺構が付される。壁溝は無く、床面積は18.48㎡。床面の中心よりやや南に2本の主柱穴が設けられ、主軸方位はN-77°-E。竪の掘込みは確認されず、南壁中央に接し長軸0.8m、短軸0.5mの楕円形上坑が認められる。竪穴覆土は3層に大別され、1層は暗灰色土層、2層は黄灰色火山灰層、3層は黒褐色土層であり、ほとんどの遺物は3層の埋土に含まれる。出土土器は小破片が多く出土状態に変化は観察されなかった。

第55図1~4は竪の口縁部片で4を除き開きのやや強いもの。1・4には金雲母が少量含まれる。5は外反して開く口縁部からはほぼ直立する頸部に至り、肩の張る胴部に続く長頸壺。外面は縦方向のハケ、内面は横のハケを主調整とし胎土に角閃石・長石・灰色粒などを含む在地系。6は緩く反転しながら開く口縁部から低平な底部に至る高杯の坏部、内外面ともハケののち粗いミガキを加える。口径19.9cmを測り石英を含む移入品。7は丸底を呈する碗、外面はハケのちケズリを施し内面にはミガキを加える。8は直口壺の口縁部と思われるもので、



1. 黒灰色土層
2. 黄灰色火山灰層
3. 黒褐色土層

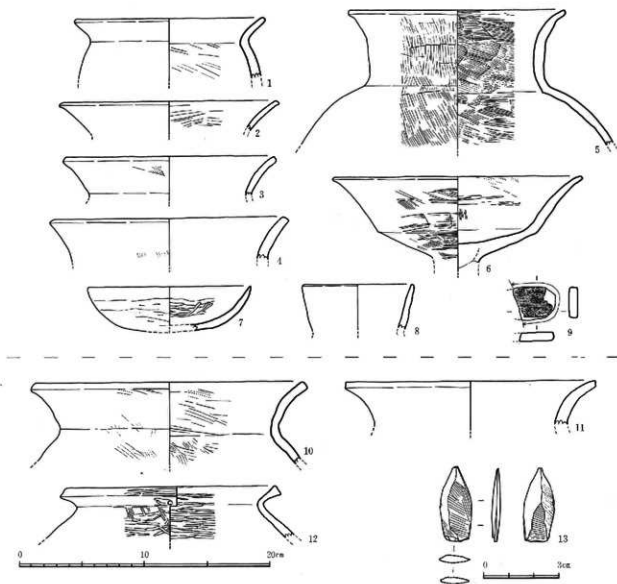
第54図 29・30号竪穴実測図 (1/60)

0 1 2m

9は土器片加工品。本遺構は、5～7の土器から古墳時代前期中葉に置かれよう。

30号は南北に長い長方形プランの竪穴と考えられるが、中央より南側を29号により消失する。短辺4.2m、長辺は現長3.8mであるが約5.5mと推定され、復原床面積は22㎡。中心軸より東寄りに2本の支柱穴が設けられ、主軸方位はN-15°-E。壁溝は設置されず知跡・土坑などの施設については不明である。出土遺物は少量であり、図示可能なものは第55図10～13の4点に留まる。

第55図10は細く反転しながら外に開く甕の口縁部、開きはやや弱く胴部も長胴に近いものと思われる。内外面ともハケを主とし、角閃石・長石・灰色粒を含む地系。11も同様の胎土・器形をなすと思われる甕口縁部。12は口縁部が屈曲して細く開く鉢で、内外面ともミガキによる仕上げ。13は緑色片岩を用いた磨製石鏝、全長3.9cm、幅1.3cm、重さ1.7g。本竪穴は、弥生後期後半の所産と考えられよう。

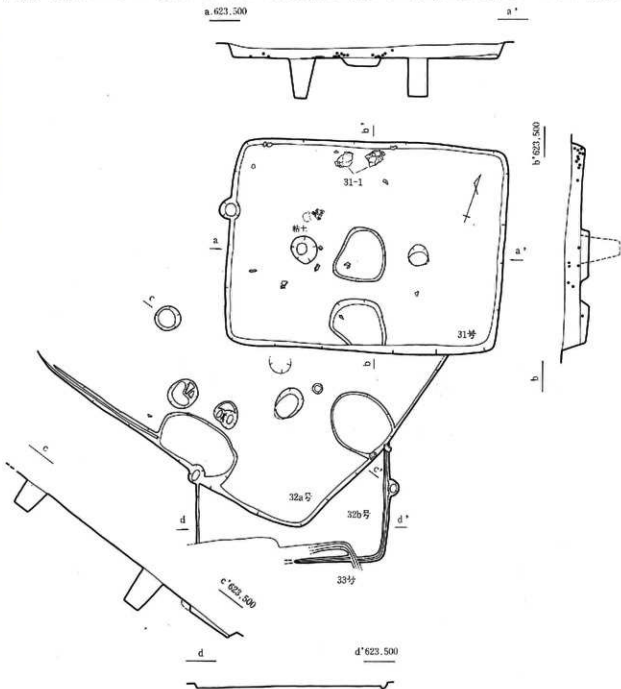


第55図 29・30号竪穴出土土器 (1/3)、石器 (2/3)

31、32 a・b号竪穴（第56図）

29・30号の東側に隣接し、33号を含め4基の竪穴が重複する。32b→32a→31号の順に形成されたかと判断されるが、全体に削平を受けており平面形や内部構造等が不明瞭となる部分がある。

31号は長辺4.4m、短辺3.2mの長方形を呈し、検出面から床面までは約0.2m前後で比較的残りは良い。壁溝は無く、床面積は13.02㎡の小形の竪穴である。2本支柱で主軸方位はN-75°-E。中央部に位置する長軸0.8m、深さ約0.1mの不整楕円状の上坑は炉跡に伴うものではないと考えられ、南側壁中央にも約0.7×0.9mの土坑が設けられる。出土遺物は少ないが、第57図1の堯は北側の壁際から二分割された状況で検出され、竪穴廃絶祭祀に使用・投棄されたものと考えられる。さらに、西側支柱穴の北部からは白色粘土塊が検出されており、本竪穴

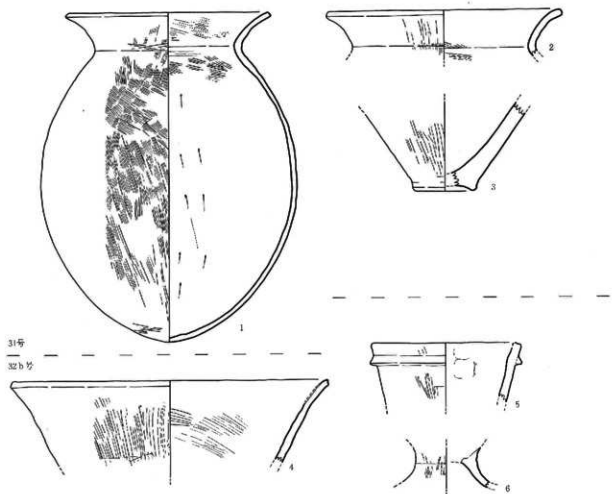


第56図 31・32 a・b号竪穴実測図（1/60）

が作業小皿の性格であることを窺わせる。第57図1は1線部が反転しながらやや強く外に開き、卵球形の胴部と底部にいたる甕。外面は縦方向のハケ、内面はヘラケズリののち上半部にナデとハケを加える。胎土は在地系で、口径16.4cm、器高26.1cm、胴部最大径20.5cm。2も同様の器形をなすと思われる甕の1線部片で金雲母を少量含む。3は32a号から混入したと考えられる弥生後期の甕底部。本竅穴は、1の甕から古墳時代前期前葉に比定される。

32a号は全体に削平を受けていることや中央部から北側を31号により消失するため全体規模は明確ではないが、現存長辺5.0m、短辺3.6mを測り主柱穴の位置などから約5×4mの長方形プランと想定される。2本主柱の主軸方位はN-77°-W。南側辺中程の壁面に接し長軸1.4m、短軸0.7m、深さ0.1mの楕円形土坑があり、その北側には2本一対と思われる柱穴が伴う。東側辺にも1×0.9mの浅い楕円形土坑が認められることやが跡が検出されなかったこと等から付属施設である可能性が強い。遺物は少なく図示できたものは3点に留まる。第57図4はやや大きく開く長頸壺の1線部片と考えられ、外面は縦方向のハケにより内面は斜めのハケによる調整。5弥生中期の直口壺の1線部片で混入と思われる。6は鉢の脚部片か。本遺構は4・5の土器から、弥生後期中葉頃に築かれるものか。

32b号は32a号や33号によって切られ、全体プラン復原の手掛かりも失うが長辺3m、短辺2.5m余りの小形の竅穴か。東側から南側にかけて巡る壕溝は途中で消失し、主柱穴・炉跡・土坑などの施設の有無も不明である。これに伴う土器もほぼ皆無であるが、弥生中期後半に属すると判断される33号からこれ以前の中期中頃に想定されよう。



第57図 31・32a・b号竅穴出土土器 (1/3)

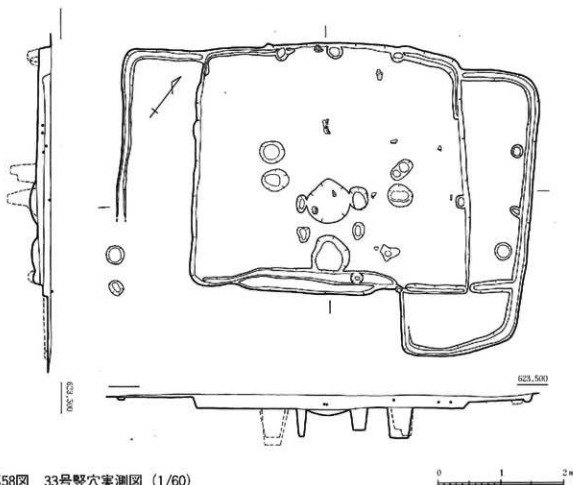


33号竪穴（第58回）

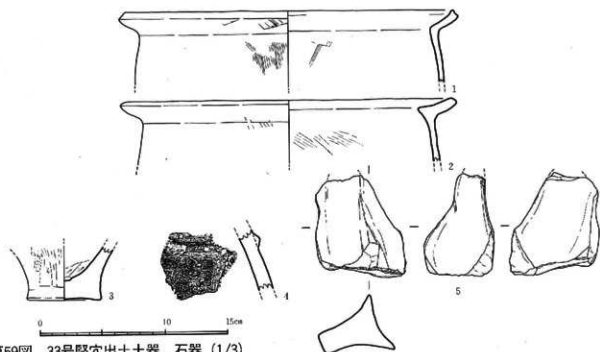
32b号を切り営まれた変剛花弁型住居跡であるが削平のため南西部を一部失う。内側は4.3×3.8m余で深さ約0.2mの長方形をなし、その東西両側に一段高いベッド状の張出しが設けられる。東側は溝によって画された幅約0.8～1.2mのJ字状の突出部が、西側には幅約1.2mの突出部が内側辺と並行して設けられるが溝は途中で削平により消失する。このため、東側と同じくJ字状を呈するものが長方形となるかは不明である。壁溝は張り出し部分と内部北側両隅と南側に設けられ、推定床面積は25㎡の中規模の住居跡である。中央やや南に両側に2本一対の柱穴を伴う直径約0.7mの不整形の炉跡があり、その南側に直径0.6m・深さ0.1m余りの上坑が壁溝と接し設けられる。主柱は炉跡の東西にある2本一対の4本と思われ、主軸方位はN-60°-E。北側中程の壁面に接する3つの小形の柱穴と南西部や東側の柱穴は補助柱を形成するものか。本遺構に伴う遺物は少なく出土状況に変化は観察されなかった。

第59図1は跳ね上げ状I緑をなす寛で外面のハケはI緑部を下に置き縦方向に施したものと考えられる。口径27cmを測り、角閃石・赤色粒を含む。2は黒髪式の寛口縁部片で角閃石・灰色粒を含み、内外面ともハケのちナデによる調整。3は平底を呈する壺の底部であり、2と同様の胎土を示し底径は5.6cm。4は粗製製の削部片であるが小片のため器形や確実に共存するものであるかは不明である。5は砂岩製の砥石、3主面と1側面を使用し小形であることから手持ち用と思われる。長さ8.1cm、最大幅7.0cm、重量50gを測る。

本竪穴は1～3の土器から弥生中期後半の所産と考えられる。



第58図 33号竪穴実測図 (1/60)



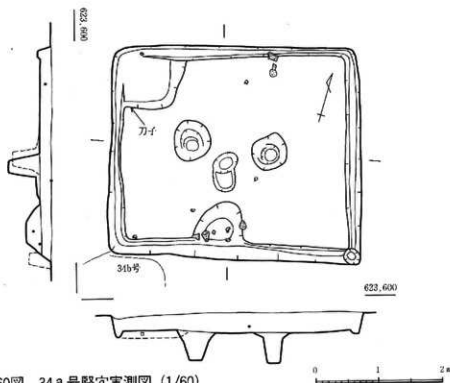
第59図 33号竪穴出土土器、石器 (1/3)

34a号竪穴 (第60図)

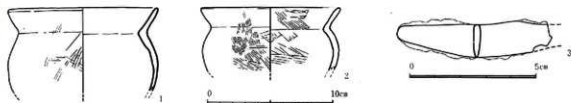
31・32号の東約5mに位置する小形長方形の竪穴である。全体に削平を受け検出面から床面までは0.1~0.2mと浅い。長辺3.9~4.0m、短辺3.2~3.4mを測り、壁溝は北西隅を除き全周し床面積は10.8㎡。2本支柱の中間にもやや深い小形の柱穴が設けられるが、その性格・機能は明らかにし難い。主軸方位はN-84°-Eとはほぼ東西を向く。南側壁の中央に半円状のやや深い土坑が、北西隅に一辺約0.9mの方形の土坑が各々設けられる。その規模などから工

房等の性格が考えられよう。第61図1・2は球形の胴部に直線的に開く口縁部を付す小形の鉢で胎土は在土系。3は刀子の刃部で坐部を欠き、現存長6.1cm、刃部の最大幅1.3cm。

本遺構は出土土器から古墳時代前期中葉に置かれる。



第60図 34a号竪穴実測図 (1/60)



第61図 34a号竪穴出土土器(1/3)、鉄器(2/3)

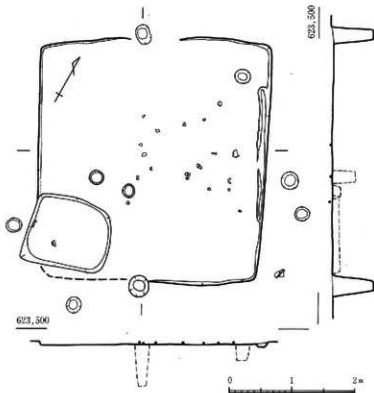
34b号竪穴(第62図)

34a号の南側にあり北東隅を若干重複するが本竪穴が先行するものと考えられる。ほぼ床面まで削平を受けると同時に南西部を後世の上坑に切られるが、長辺3.8m・短辺3.6m余りの長方形プランをなす。壁溝が東側辺に部分的に認められるが、加跡や土坑は検出されなかった。主柱穴は南北両辺の中程にある2本と考えられ、主軸方位はN-30°-W。推定床面積は13.3㎡と小形で遺物も少なく、倉庫等の付属施設と思われる。

第63図1は緩く反転して聞く口縁部から卵球形の胴部に続くと思われる寛で、内外面とも横・斜め方向のハケを施す。口径19.2cmを

測り、胎土に角閃石・長石を含む。2は胴縁の全面を研磨により仕上げる土器片加工品。

時期決定の根拠にやや乏しいが壺の器壁が薄いことから古墳時代前期前葉の所産と思われる。



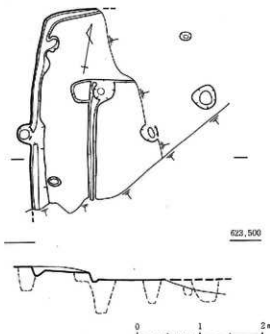
第62図 34b号竪穴実測図(1/60)



第63図 34b号竪穴出土土器、他(1/3)

### 35号竪穴 (第64図)

34 a 号の東側1.5mにあるが削平と擾乱を大きく受け、北西部が部分的に残存するに過ぎない。現存する主柱穴の位置から4本主柱の長方形プランと想定されるが全体規模は不明である。二段掘りで北側から西側にかけ一段高いベッド状遺構が設けられ、壁溝も付設される。二段目の西側にも主柱穴から延びる小溝が認められる。本遺構に伴う遺物は皆無であり、その時期は弥生後期から古墳時代前期のいつかは特定できない。



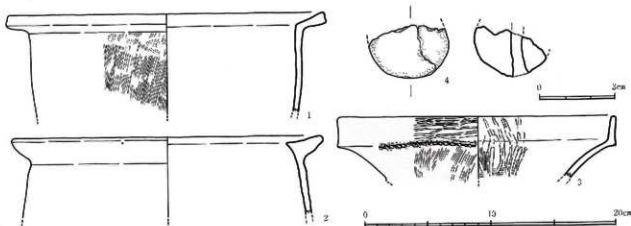
第64図 35号竪穴実測図 (1/60)

### 36 a・b号竪穴 (第65図)

36 a 号は33号の南側約1.5mに位置する花弁型住居跡で削平により南半部分を完全に失うため全形は不明である。二段掘りの竪穴で中央に約2.6×2 m余りの隅丸長方形を呈し深さ約0.2mの二段目が形成されるが、北西部は後世の土坑(約1.5×1.1m)により切られる。一段目は北半部分しか残らないが小溝によって両された突出部が北側中央と北東部に設けられ、北側の幅約1.8m・長さ1.2m、北東部は幅約2.0m、長さ0.8m。また、一段目と二段目の中間に東西方向の小溝が部分的に認められ、主柱は確定はできないもの図示した4本と想定される。この場合の主軸方位はN-80°-E。炉跡や土坑などの施設や床面積については明らかではない。

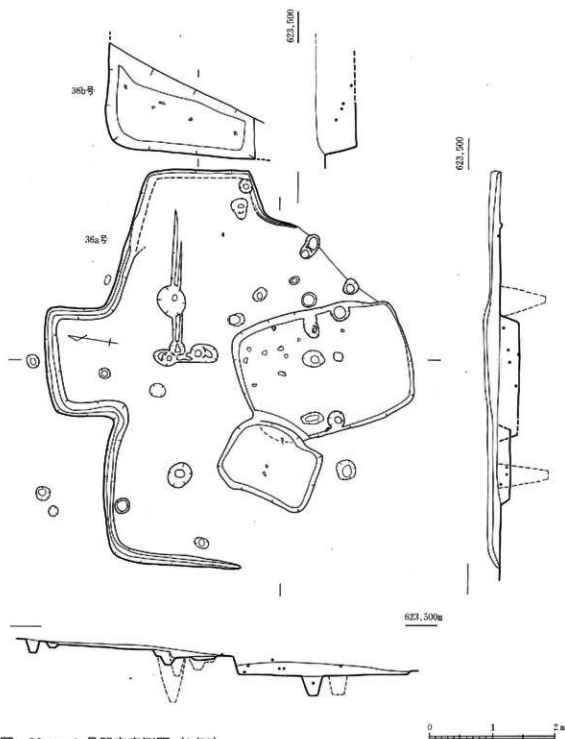
出土遺物は少なく、第65図1・2・4は二段目から出土。1は跳上げ状門縁に近い地系胎土を示す甕で胴部は縦方向のハケによる調整。2は黒髪式甕で胎土に石英・金雲母を含む。4は有孔土製玉で焼成前に穿孔する。

1・2から本遺構は弥生中期後半と考えられる。



第65図 36 a・b号竪穴出土土器 (1/3)、土玉 (2/3)

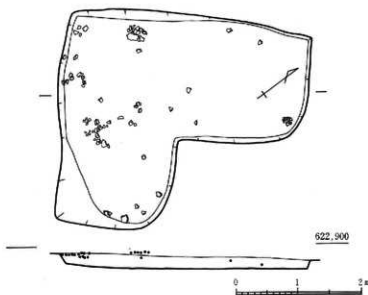
東に接する36b号は、調査区内で検出された部分はその北西コーナー付近に留まるため全形・規模・内部施設等については不明。検出した南北辺長2.4m、東西辺1.5m、検出面から床面までは約0.5mと深いが内部からの遺物は少数であった。第65図示した3は外面月塗りの高坏で、ほぼ直立する11縁部から反転しながら坏底部に続く。内外面ともハケののちミガキを加え、屈曲部には刻目を施し、角閃石・長石を含む。出土土器が小片のため時期判定にやや苦慮するが、弥生後期中葉から後半の所産か。



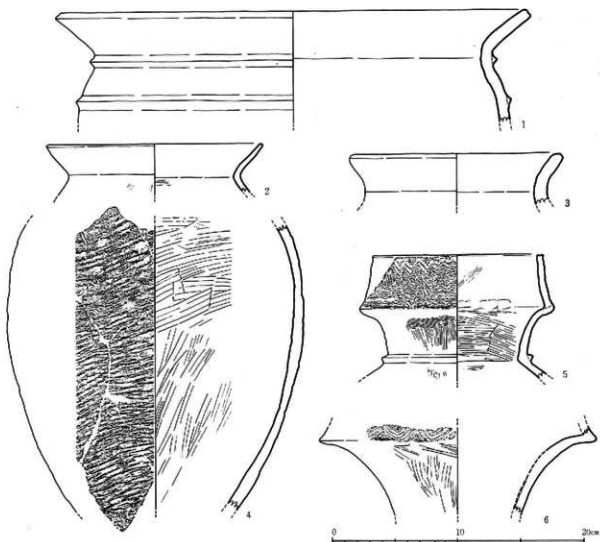
第66図 36a・b号竪穴実測図 (1/60)

37号竪穴 (第67図)

34 a 号の北側約12mにある。平面形がL字状をなすことや、主柱穴・炉跡・土坑・壁溝などの欠落や壁面が竪穴とは異なり一定しないことから土坑もしくは自然地形の落ち込みである可能性も強い。第68図に示した土器の中で大形片は上面からの出土である。1は粗製甕の口縁から胴部片で2条の突帯を巡らす。2は外来系甕で3は在地系甕の口縁部片、4は外面にタタキを施す在地系甕の胴部。5は口縁部がやや内傾する複合口縁甕、6は複合口縁甕の頸部片でいずれも胎土は在地系か。これらの土器は弥生終末から古墳時代前期前葉に置かれ、やや時期幅が認められる。



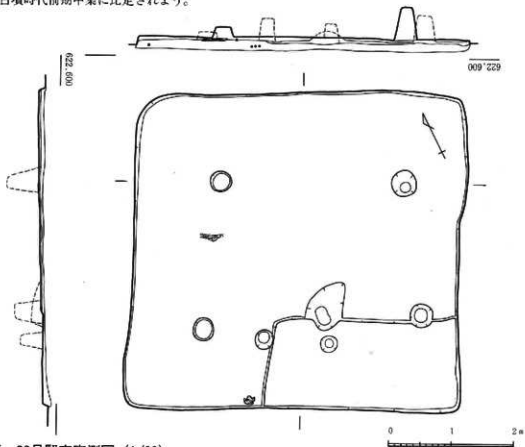
第67図 37号竪穴実測図 (1/60)



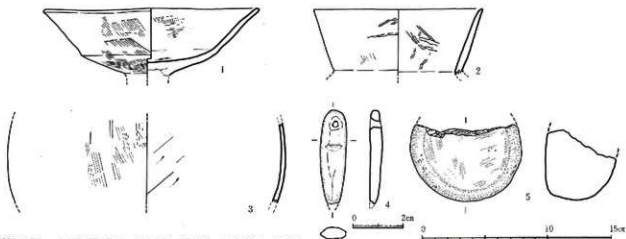
第68図 37号竪穴出土土器 (1/3)

38号竪穴 (第69図)

37号の東側、調査区の最も東端に位置する。長辺5.3m、短辺5.0mの隅丸長方形を呈し、検出面から床面までは約0.05~0.2mと削平を大きく受ける。壁溝は設けられず、床面積は25.48㎡、南東部に約1.4×3.1mの低いベッド状遺構があり、4本支柱の主軸方位はN-64°-W。初跡や土坑は確認されず一般の住居跡と様相をやや異にする。出土遺物も少数であるが、第70図1の高坏坏部は南側中程の壁際から検出され磨鏡祭祀に伴うものか。1はやや底平な高坏坏部で器面はハケを主とする調整で在地系胎土による。2はやや小形の短頸壺の口縁部で、石英・結晶片岩が含まれる移入品。3は内面ヘラケズリによる甕の胴部。4は緑色片岩かと思われる石材を加工した有孔垂飾品で現存長3.7cm、幅1.0cmを測り縄文時代の混入品か。5は安山岩製の磨石。本竪穴は1~3の土器から占墳時代前期中葉に比定されよう。



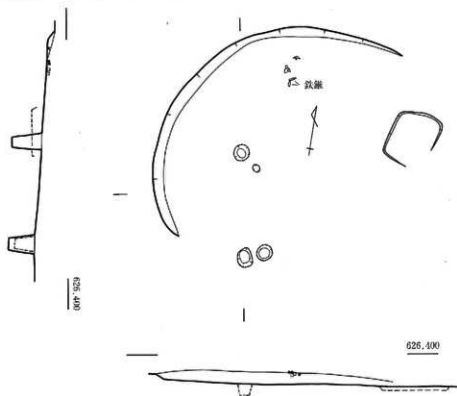
第69図 38号竪穴実測図 (1/60)



第70図 38号竪穴出土土器 (1/3)、石器他 (2/3)

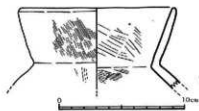
39号竪穴 (第71図)

19号と24号の中程に位置する遺構であるが削平のため全体プランは明確ではない。検出された部分は北側から西側にかけて緩い弧状を呈する。U形プランの竪穴に見えるが、支柱は南北方向の2本で掘方と並行しないことから円形ではなく変則形である可能性が高い。主軸方位はN-23°-W。北東部に0.7×0.9m余りの長方形の浅い土坑が認められるが、この他に施設は検出されず一般的な住居跡と異なると考えられる。出土土器は少なく第72図は無頸壺の口縁部片で、弥生後期後半から古墳時代前期前半の所産か。注目すべき遺物に鉄鏃2点がある。

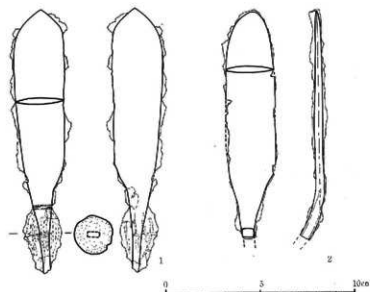


第71図 39号竪穴実測図 (1/60)

第73図1は柳葉形鉄鏃で茎に矢柄と桜皮巻きが残る。全長14cmで身と茎部の境は片側のみ明瞭となる。鏃身長8.5cm、身の最大幅は先端にあり2.7cm、厚さ0.3cm。2も柳葉形鉄鏃で先端が丸く身の最大幅は中程にあり、鏃身長9.3cm、身幅2.2cm、厚さ0.3cm。



第72図 39号竪穴出土土器 (1/3)



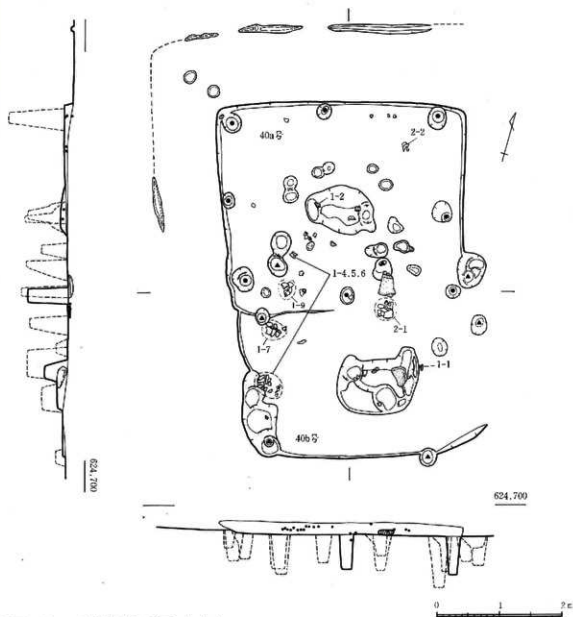
第73図 39号竪穴出土鉄器 (1/2)



40 a・b号竪穴 (第74図)

調査区南東部、17・18号竪穴の南側約12mにあり2基が重複する。削平のため検出時点では先後関係が不明であり1基の遺構と想定していたが、調査結果や出土土器からa号が先行するものと考えられる。

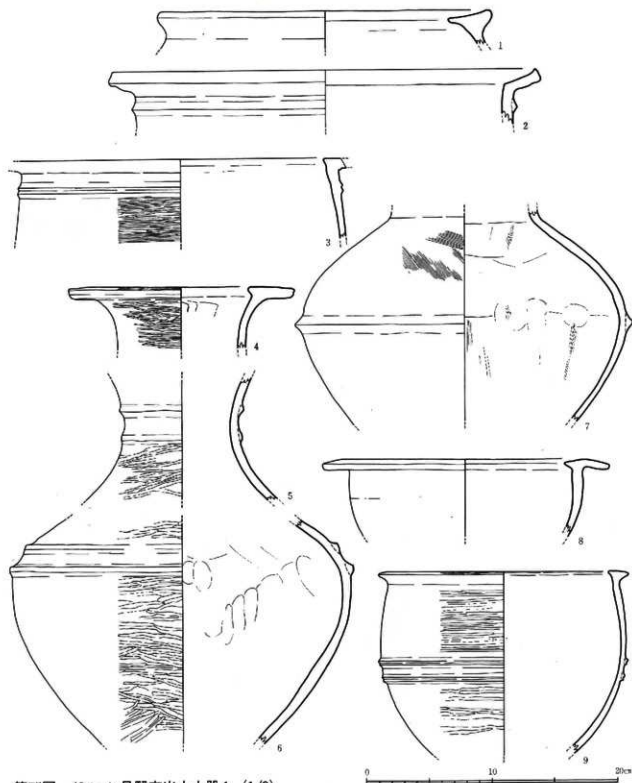
40 a号は内部が一段低い二段掘りの竪穴で、内側は長辺約4.0m、短辺約3.4mの長方形を呈するがb号と重なる南側は途中で消失する。一段目は北・西側面に伴う壁溝が部分的に残るのみであり、これが連続するものか途切れるものかは明らかでない。その幅は約1.1~1.2mを測り、四方に巡っていた場合の復原床面積は約32㎡。支柱は内部の四隅とその中間に設けられた8本と考えられ、東西方向を主軸とすればN-73°-Eとなる。四隅の柱穴はやや深く、柱の抜取り痕跡を残すものもある。中心部に長軸1.1m、短軸約0.8m、深さ約0.1mの不整楕円状を呈する竪穴があり、その東西両端には一対の深い柱穴が伴う。竪穴の周辺には小形の浅い柱穴が複数検出されているが、これらの構造や性格については不明である。出土土器の中でb号と重複する竪穴の南側から検出されたものの属属は断定し難いが、大形片を始めその多くはb号に伴う可能性が高い。従って、a号に伴うと考えられる土器はが跡出土の第75図2・8、第76図2の3点である。第75図2は屈折して開口縁部の端部が跳上げ状



第74図 40 a・b号竪穴実測図 (1/60)

をなす甕で、胴部との境に三角形突帯を巡らし胎土に石英を含む。8は高坏のI線部で鋤先状の口縁から丸みをもつ坏部に続き、若干の角閃石・長石を含むが移入品と思われる。第76図2はやや厚い平底を呈する甕の底部で灰色粒を多く含む在地系。

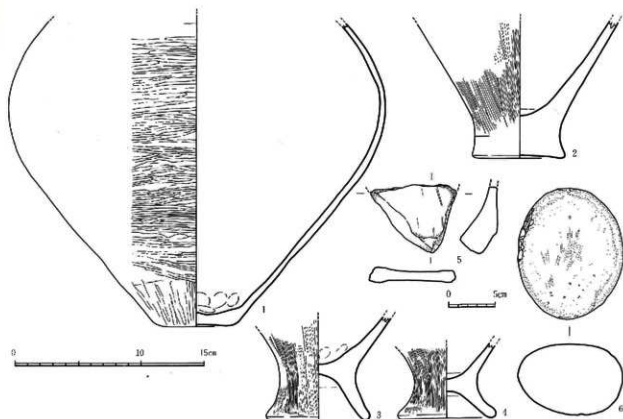
40b号も二段掘りと思われるが一段目は完全に失うと同時に二段目の床面付近まで削平を受ける。内側は長辺約4.0m、短辺約3.6mの長方形に復原され、中央南側に不整楕円状で二段掘りの跡があり、その東西と南に柱



第75図 40a・b号竪穴出土土器1 (1/3)

穴が形成されるが南側の柱穴は本来のものか明らかではない。主柱穴は8本と考えられるが、確認された柱穴は7つに止まり南側中央部は柱穴を伴わないものか、或いはここが出入口の可能性もある。方位はN-81°-Eでa号より東に振る。出土石器で明らかに伴うものは第75図1、3・6、7、第76図1の5個体であるが、第75図9や第76図3・4も本型穴に帰属すると考えられる。第75図1は1縁部の立ち上がりやや短い黒髪式甕の口縁部片、3はし字状口縁の甕で口縁部下位にM字突帯を巡らせ口縁部と外面は丹塗りで金雲母を含む。4~5は同一個体と考えられる甕で、頸部と胴部上位に2条の三角形突帯を巡らせ外面は横のミガキによる調整。淡黄褐色を呈し角閃石・長石・茶色粒を含む移入品。7も甕の胴部片で最大径の所に三角形突帯を施し、内外面ともハケのちナデによる。角閃石・長石などの砂粒を多く含む。9はT字状口縁をなす甕で胴部の中位に2条のM字突帯を施し、砂粒の少ない移入品。第76図1は甕の底部から胴部片、やや浅い平底の底部から大きく張り出す胴部にいたる。外面は横方向のミガキによるが底部周辺は縦方向のミガキを施す。砂粒は少ないが石英粒を含む移入土器。3・4は黒髪式甕の底部でいずれも脚部の張り出しがやや弱い。これらは厚い平底の外側を削り貫いて脚部を整形した可能性がある。3は石英・茶色粒をやや多く、4は金雲母や石英が含まれる。5は砂岩製砥石片で両主面は研ぎ減る。6は安山岩製の磨石兼敲石。

これらの土器から40a号は弥生中期前半に、b号は中期後半に置かれるものと考えられる。しかし、中期後半における同一型式内の所産である可能性も完全に否定するものではない。

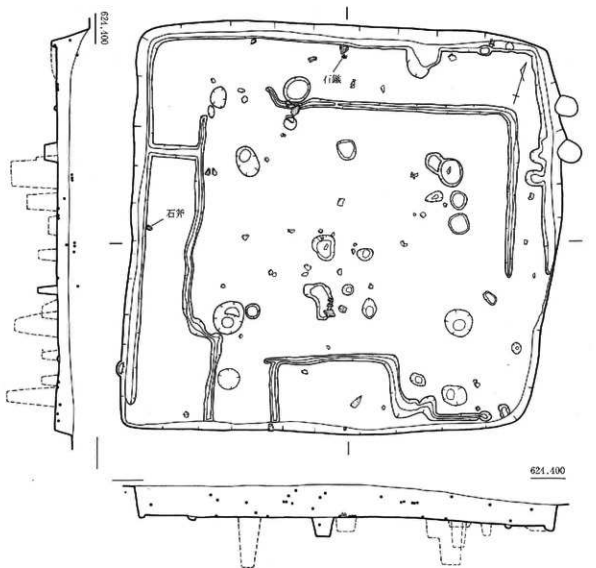


第76図 40a・b号竪穴出土土器2、石器 (5.1/4,他1/3)

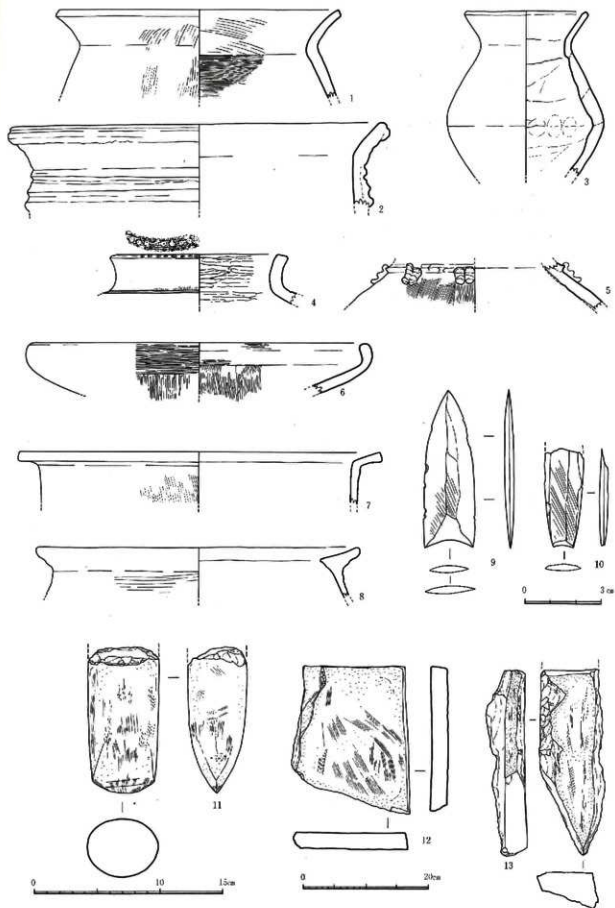
#### 41号竖穴 (第77図)

40 a・b号の南東部に隣接する住居跡で42号の東北部を切って営まれる。長辺約6.5m、短辺6.0~6.3mの長方形をなし検出面から床面までは深い部分で0.5mであるが東側は削平により浅くなる。壁溝は西・北側から東側の途中で途切れ、床面積は37.8㎡中規模の中でもやや大きい。床面の四方に小溝による区画が認められるが幅や形状が一定せず途中で終息する部分もある。4本の各主柱穴には抜き取跡が認められ、方位はN-73°-E。ほぼ中央に長軸約0.4m余りの隅丸三角形の加跡あり、その南側にも不定形の浅い掘込みが形成される。

第78図1はやや緩く反転して開く口縁部が17径より張り出す胴部に続く在地系甕、2は中期末から後期前葉と思われる粗製甕。3は小形粗製の甕と考えられ、外面は丁寧なナデによる調整。4は口縁部が僅かに開く無須蓋で17唇部に竹管による円形刺突文を施す。5は2個一対の管玉状浮文を付す蓋の胴部。6は口縁部が短く内傾する高坏で丁寧なミガキによる仕上げ。7・8は42号から混入したと考えられる弥生中期の甕。9は柳葉形状の磨製石鏃で結晶片岩を用い長さ6.2cm、最大幅2.0cm。10はより細長い柳葉形の磨製石鏃で先を欠き、現長3.9cm、幅1.5cm。11は太形蛤刃石斧で基部を欠損する。長さ11.4cm、幅5.7cm、重さ465g。12・13は平置きの砥石でいずれも砂岩を利用。本竖穴は1・6などから弥生後期後葉から終末に置かれよう。



第77図 41号竖穴実測図 (1/60)



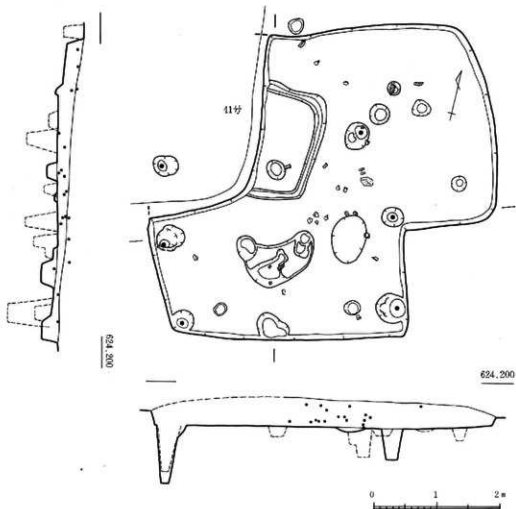
第78图 41号竖穴出土土器 (1/3)、石器 (9·10.2/3,12·13.1/6)

42号壜穴 (第79図)

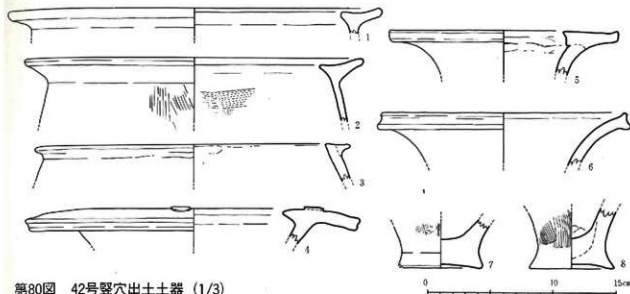
41号の南東部に重複し北西部をこれによって失われるため全体プランは明確にし難いが、東北部に張り出しをもつ変則長方形 (L字形) を呈するものと考えられる。張り出し部分は幅約3.2m、長さ約1.6mとやや広く、これを含めた推定床面積は約22㎡。主柱は6本と考えられ主軸方位はN-71°-E。主柱穴は1つを除き壁際に設けられ、全体にやや深く掘込まれると共に柱の抜取り跡を示すものも認められる。炉跡はやや南側に位置する隅丸三角状の二段掘の掘込みで東西両端に柱穴が伴う。この北側にコ字状に廻る溝の性格等については不明である。南側辺の中程にやや小形の不定形土坑が認められ、この他の施設については確認されなかった。本遺構に伴う遺物も少なく、出土状況に変化は観察されなかった。

第80図1・2は黒髪式甕の口縁部片でいずれもやや多くの金雲母や石英・長石を含む。3は逆L字状に近い口縁部をなす甕で胎土は灰色粒等を含む在地系。4は鋤先状口縁を呈する壺の口縁部で、上面に凹形浮文を添付するもの。角閃石・長石・石英・茶色粒などを多く含む移入品。5も鋤先状をなすが上面は平坦となり内側への突出も少ない壺の口縁部で胎土は4と同様である。6は広口壺の口縁と考えられるもので4・5と胎土は変わらない。7・8は甕の底部であり平底の外底部がやや窪み、前4点と同様の胎土からなる。

これらの上器は弥生中期後半に置かれ、本壜穴もこの時期の所産と考えられる。



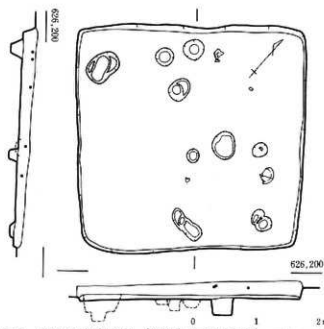
第79図 42号壜穴実測図 (1/60)



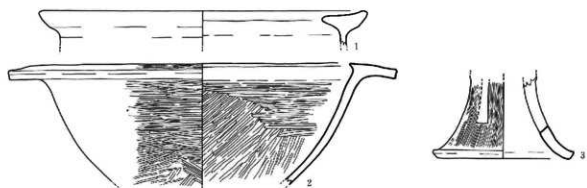
第80図 42号竪穴出土土器 (1/3)

43号竪穴 (第81図)

42号の東側約2mに位置し、全体に削平を受けるが、辺約3.5mの方形プランをなす。壁溝は認められず床面積は11.56㎡の小形竪穴であり、住居の付属施設の遺構か。主柱穴は南北両辺中程の2本(N-40°-E)と考えられるが浅いため断定はできない。内部からは第82図1~3の移入土器が出土し、中期後半でも中頃に近い時期に置かれるものか。



第81図 43号竪穴実測図 (1/60)



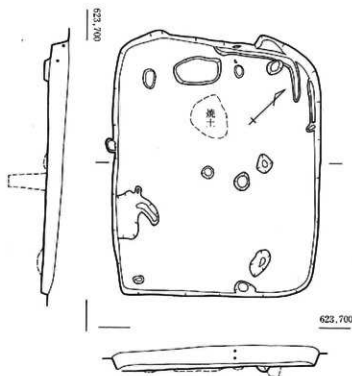
第82図 43号竪穴出土土器 (1/3)

#### 44号竪穴 (第83図)

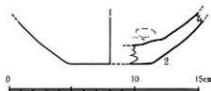
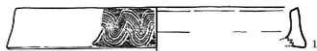
41・42号の南西約15mにあり、長辺約4m、短辺約3.2mの長方形に近いプランを示す。主柱穴と判断される柱穴は1つしか検出されなかったこと等から付属施設と思われる。東北コーナー周辺に壁溝が部分的に認められ、床面積は12.09㎡の小形。中央北側床面に焼土が認められるが掘込みは無く、この北西に長軸約0.8m、短軸約0.45mの楕円状の浅い土坑がある。この他に内部施設と考えられる遺構は確認されず、出土遺物も非常に少なく図示可能なものは第84図に示した2点に過ぎない。

第84図1は口縁部がやや短く内傾し、外面に丁寧な櫛揃波状文を施す複合口縁壺の口縁部。角閃石・長石・灰色粒などを含むことから在地系か。2は壺の底部片と思われ、安定した平底を呈するもので1同様の胎土による。

本竪穴は時期判定の資料に乏しいが弥生後期中葉に比定されよう。



第83図 44号竪穴実測図 (1/60)



第84図 44号竪穴出土土器 (1/3)

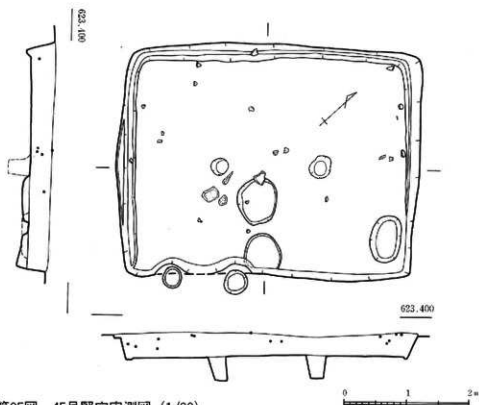
#### 45号竪穴 (第85図)

44号の西側約1mに位置する。長辺4.6m、短辺3.6mの長方形をなし、検出面から床面までは約0.2~0.4m。南側を除く三方に壁溝が巡り、床面積は14.62㎡の小形の竪穴である。ほぼ中軸線上にある2本主柱の主軸方位はN-41°-E、主柱穴間の南側に直径約0.7m、深さ0.15mの皿状に窪む炉跡が形成される。南側中程の壁面と接する位置に半円状(径約0.6m)の上坑が、東南部コーナーに長軸約0.7mの楕円状土坑が各々認められる。内部施設は以上であり、その規模や土坑の配置から工房的性格が想定されよう。内部出土の遺物はやや少なく、出土状態にも変化は観察されなかった。

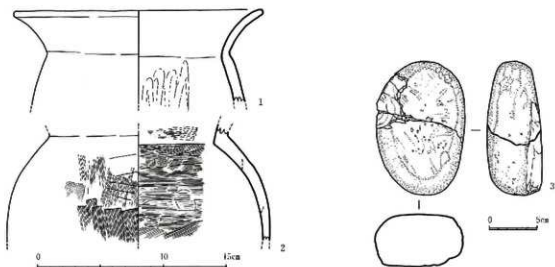


第86図1は縦く外反して開く口縁部から長胴の胴部に続くと思われる甕で。内面にナデのち粗いミガキを加える。角閃石・長石・灰色粒を含む在地系。2は外面の調整がタタキのち縦方向のハケによる短頸壺の胴部片、内面は横・斜め方向の丁寧なハケによる。胎土は1とほぼ同様である。3は安山岩の円礫を利用した敲石兼磨石で、側面の上下を敲石に内主面を磨石とする。長さ13.8cm、幅9.2cm、重さ914g。

本壺穴は出土土器から弥生後期後葉から終末に置かれよう。



第85図 45号壺穴実測図 (1/60)

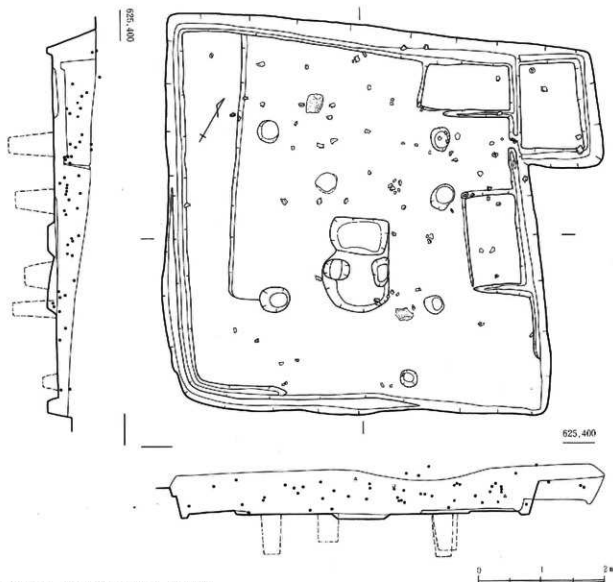


第86図 45号壺穴出土土器 (1/3)、石器 (1/4)

46号竪穴 (第87図)

調査区の中央部、20号竪穴の西側約4mに位置する。一辺約6mの方形に近いプランを呈し、東北部に幅約2m、長さ約1.2m余りの東側に突き出した長方形の出入口が設けられる。出入口の床面は内部床面より約0.15m高く、三方に壁溝が巡らされるが柱穴は検出されなかった。内部には壁溝が巡るが南東コーナーから南側の大半には設けられず、床面積28.08㎡の中規模住居跡である。4本主柱であるが中央やや北側に一対の柱穴が認められ、途中で拡張した可能性がある。4本主柱の主軸方位はN-62°-E。北東隅部と東辺の中段に幅約0.8m、長さ約1.5mのベッド状遺構があるが床面からは高い部分で5cmほどの低いものである。ベッド状遺構は西辺にも平行して形成されるが南西側主柱穴付近で終息する。中央部から南側に長軸1.5m、最大幅約1mの二段掘りの坑があり、その北側が歩跡に南側は灰のかき出し部に想定される。かき出し部には一対の柱穴が掘込まれ、これらがセツトとなり炉を構成したものと考えられる。この他に内部施設は検出されなかった。

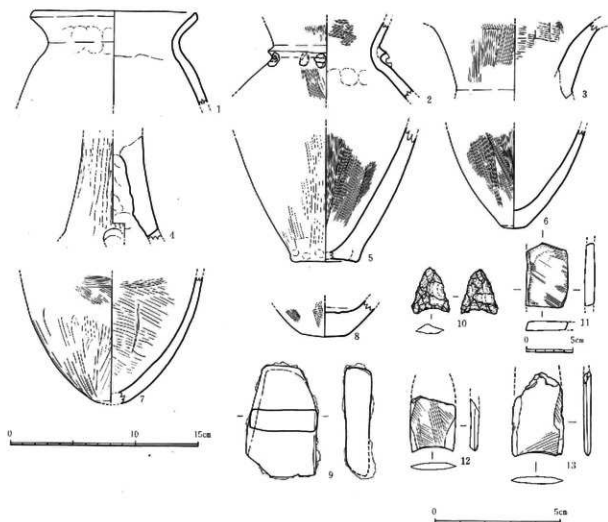
出土遺物は内部の中～上位に多く土器に大形破片は認められず小片がほとんどである。また、出土状態に焼絶祭祀を窺わせるものは観察されなかったが、石鏃3点や鉄片1点は埋戻しの途中における祭祀に用いられた可能性がある。



第87図 46号竪穴実測図 (1/60)

第88図1は内外面ナデ調整の在地系甕の口縁から胴部で、11縁部は緩く反転して開く。胎土に角閃石・灰色粒などの砂粒を多く含む。2は甕の頸部から胴部に境に三角形突帯を巡らし、その下部に接し2個一對の勾玉状浮文を四方に付す。3も甕の頸部であり2と同様の胎土をなす在地系。4は在地系高坏の胴部で外面ケズリのものミガキを縦に施す。5は甕の底部片、やや薄い平底の底部から長胴の胴部に続くと思われる。内外面とも縦方向のハケ調整によるが底部周辺には指頭痕跡を多く残し、胎土に石英を多く含む移入土器。6は小形で丸底気味の平底をなす甕底部、角閃石・長石・灰色粒などを含む在地系。7は甕又は甕の底部であり丸底に近い形態をなすと思われるもの。8も丸底に近い平底をなす甕の底部で胎土は在地系である。9は板状鉄片と考えられるもので長さ4.7cm、最大幅2.8cm、重量20g。10はサヌカイト製の石鎌でやや雑な周辺刺雑により三角形に仕上げる。長さ1.8cm、基部幅1.5cm、重さ0.8g。11は両主面を使用する頁岩製砥石片。12・13は柳葉形状を呈すると思われる磨製石鎌、いずれも凹基をなし結晶片岩を利用する。

以上の上器にはやや時期幅が認められるが、本壜穴は弥生後期後葉に比定されよう。

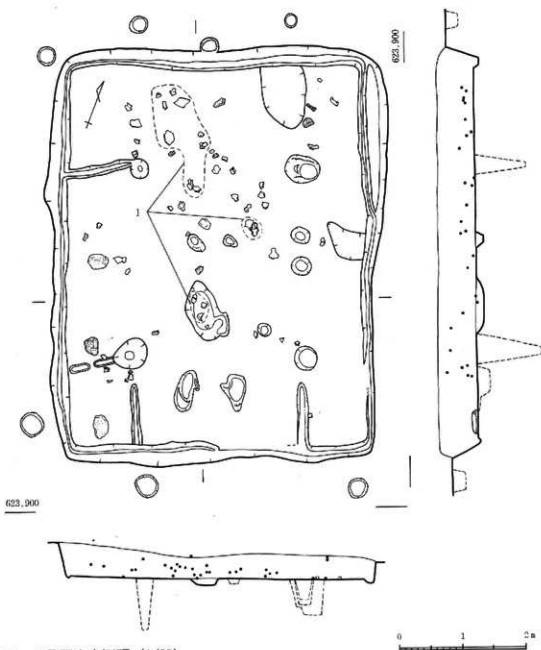


第88図 46号壜穴出土土器 (1/3)、石鎌・鉄器 (2/3)、砥石 (1/4)

#### 47号竪穴 (第89図)

45号竪穴の西約5mにある長方形プランの住居跡である。長辺約6.4m、短辺約5.1mを測り、検出面から床面までは0.5m前後と遺存状態は比較的良好である。壁溝は部分的に途切れるがほぼ全周し、床面積は27.26㎡。東北部主柱穴以外の3つの主柱穴に向って壁溝からはほぼ直角に延びる小溝が走るが、南側の2条は柱穴と接続しない。主軸方位はN-70°-E。中央南側に長軸0.9m余りの不定形の浅い掘込みは炉跡と考えられ、これと南辺の中間に一对の不整形円状の柱穴は炉に伴うものと思われる。また、東側2つ主柱穴の間にも一对の柱穴が認められる。明らかな土坑は検出されず、北東部や東側中央部の掘込みは非常に浅く土坑とは異なる。内部からは比較的多くの遺物が出土し、第90図1甕は炉跡から北側の広範囲に小片となって分布していたものが接合した。さらに、8・9の手鎌は東北部の床面直上から検出され、竪穴埋戻し前の廃絶祭祀に使用されたものと考えられる。

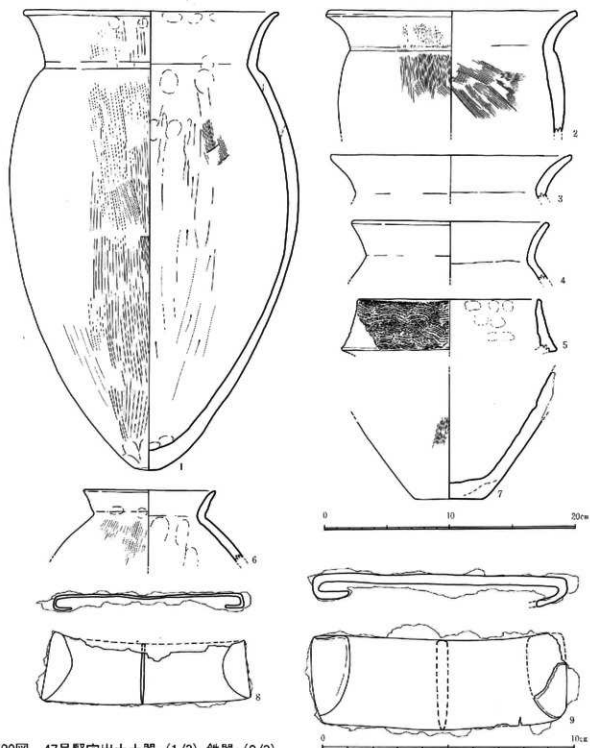
第90図1は口径20.4cm、器高36.1cmを測る甕で緩く外に開く口縁部からやや張り出した長胴の胴部にいたり、底部はレンズ状の丸底をなす。外面は縦のハケ、内面はケズリののちハケとミガキを粗く加える在地系。2~4



第89図 47号竪穴実測図 (1/60)

は同様の器形を呈すると思われる甕の口縁部片であり、胎土はいずれも在地系である。5は複合口縁帯の口縁で外面に櫛描波状文をやや雑に施す。6は無頸甕の口縁から胴部と思われ、石英を含む移入土器。7は弥生中期の甕底部で混入と考えられるもの。8は両端部を折り曲げる手鎌で、刃部はわずかにカーブする。刃部最大長8.4cm、幅2.3cm、厚さ1~2mmとやや薄い。9はこれより大きい手鎌で背部に最大幅がある。長さ10.2cm、刃部幅3.7cm、厚さ約4mm。

本堅穴は1の甕から弥生後期末の所産と考えられる。



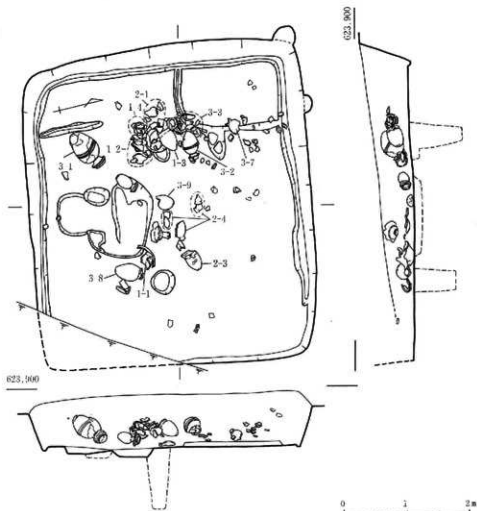
第90図 47号堅穴出土土器 (1/3)、鉄器 (2/3)

#### 48号竪穴 (第91図)

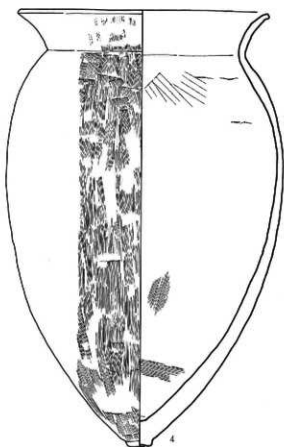
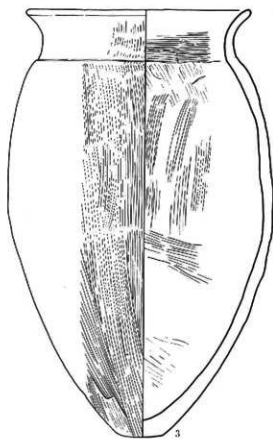
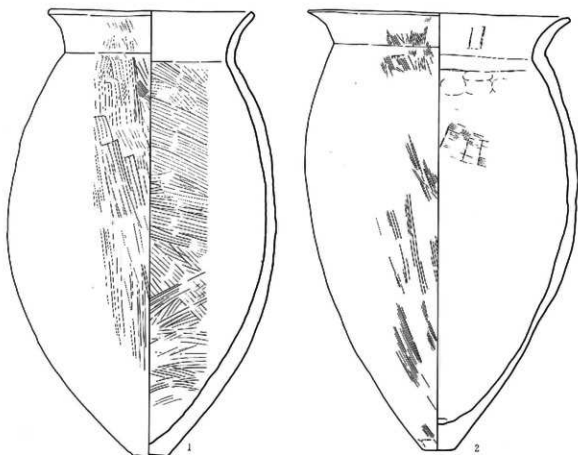
47号の南西約8mに位置する小形の竪穴で南東隅付近は調査区の外に続く。長辺約5m、短辺約4.5mの長方形を呈し、検出面から床面までは0.4~0.8mと残りは良い。溝は南辺を除き巡り、復原床面積は18.4㎡とやや小さい。北西コーナーに約1.1×1.6mの長方形に近いベッド状遺構が設けられ、その南側は小溝により区画される。主柱は2本で柱の抜取り痕跡を残し、主軸方位はN-80°-W。主柱穴間の南側に長軸1.2m、短軸0.6m、深さ0.15m余りの加跡があり、その南に接し2つのやや浅い柱穴と楕円状の掘込みが伴う。南西部分にも浅い小溝があるが、他に遺構は設けられず規模・構造は付属施設により近いと言える。

内部からはほぼ完形の甕8・甕6個体を始め高坏2個体、鉄鏝1、鉄片1、磨製石鏝1など多量の遺物が一括投棄された状況で検出された。中央部から出上する土器は床面又はそのやや上位にあるが、實際に近づくに従って床面から離れ第91図1の甕に示されるように斜めに検出された。これらの土器や内部遺構の状況から竪穴の廃絶過程は次の如く復原されよう。主柱の抜取り→竪穴周囲の土手の埋戻し(これにより壁際埋没)→土器等を用いた祭祀→土器の内部投棄(部分破壊を含む)→完全埋戻し。廃絶祭祀としては最も大規模であり、完形の甕には煮炊きの跡が顕著に残り飲食儀礼が伴うことを示す。部分欠損の土器の部位は底部と口縁部に多く、これは墓の副葬・供献土器とも共通する現象と言える。また、鉄鏝と石鏝は埋上の上位からの出上であり、完全埋戻しの終了に近い時期に矢を射込む行為があったことも想定可能である。

第92図1は炉跡の南東部から大きく二分された状態で出上した甕、口縁部は緩く外反して開きやや膨らむ胴部から小さい平底の底部に至る。口径16.4cm、器高25.1cmを測り、外面は縦方向のハケで内面は斜のハケにより胎

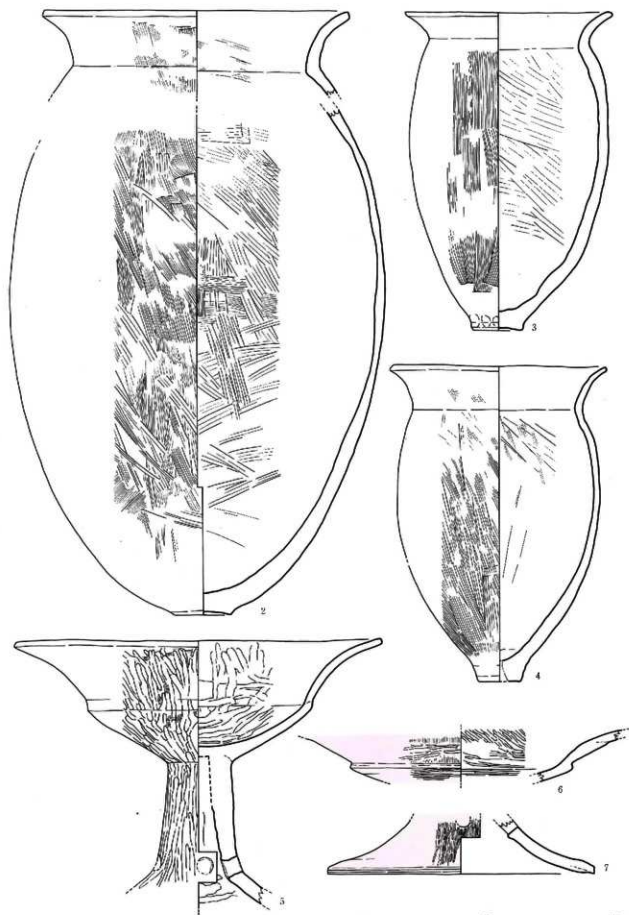


第91図 48号竪穴実測図 (1/60)



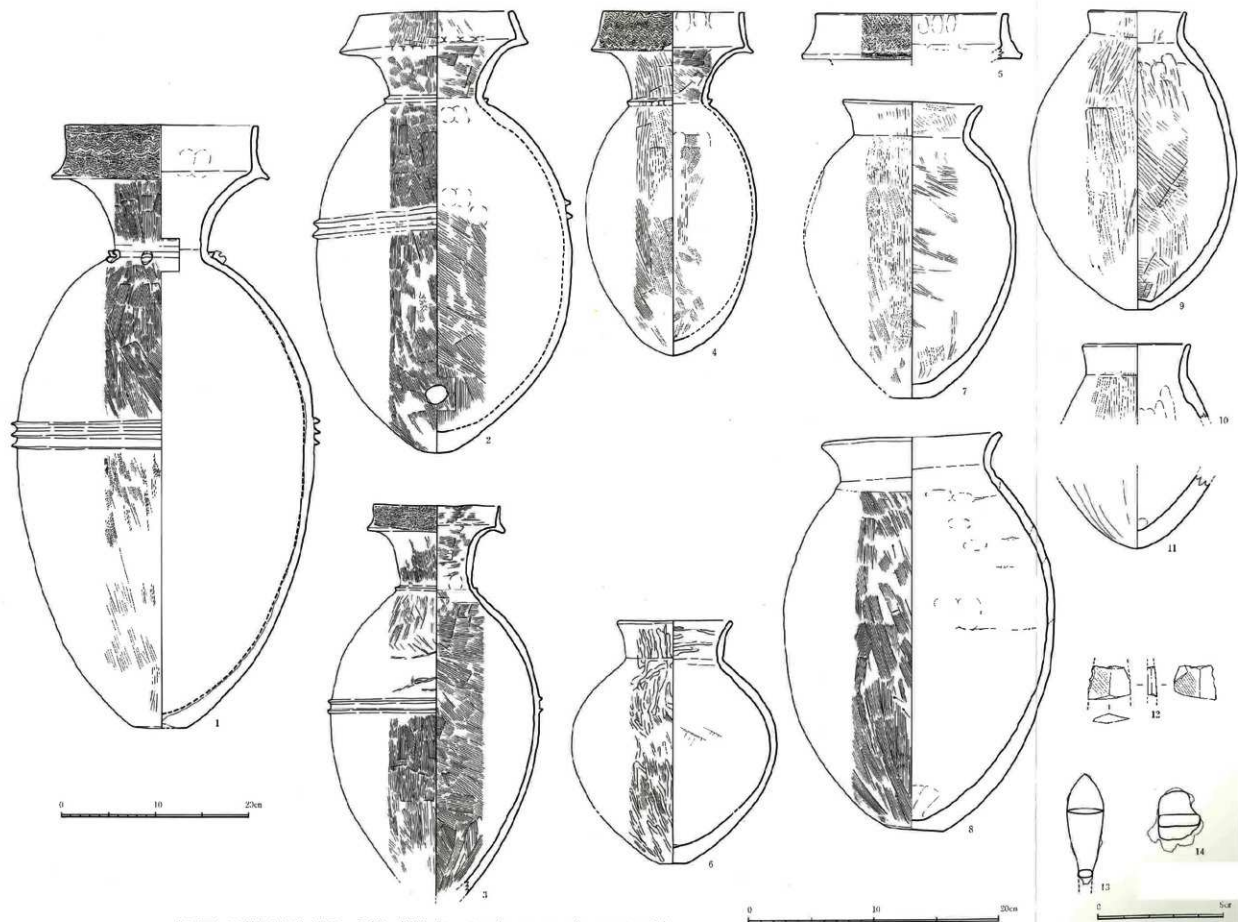
第92図 48号竪穴出土土器 1 (1/3)





第93图 48号竖穴出土土器 2 (1/3)





第94图 48号双穴出土土器 3、石器·铁器 (1~4.1/4, 5~11.1/3, 12~14.2/3)

土に角四石・長石・灰色粒をやや多く含む在地系土器。2はほぼ完形のまま出土した甕(3)の南側において破壊状態で検出された甕、口縁部の開きはやや大きいが胴部の張り出しは弱く1と同様の底部をなす。胎土や調整もほぼ1と変わらないがハケ目は細い。口径20.2cm、器高34.6cm。3は丸底気味の平底からやや膨らむ胴部に至り、頸部との境に沈線を描き緩く開く口縁部に続く。口径18cm、器高33.8cmを測り、胎土は前2点と同様。4は2の西側で破壊状態で出土した甕。器形的には2と類似するが底部は小さく突起した平底となり、外面の縦ハケもより丁寧となる。胎土は1〜3とほぼ同様であり、口径19.9cm、器高34.5cm。

第93図1・2は同一個体と思われる甕で3の西側から分割状態で検出されたもの。やや窪む平底の底部から長胴でやや張り出す胴部に至り、口縁部はやや強く反転して開く。口径24.4cm、推定器高47cm余りの大形甕であり、角四石・長石・赤色粒を含む。3は中央部東寄りの床面より0.1m浮いた所から出土した甕、口縁部の約6割を打欠により欠損する以外は完全に残る。直立しない不安定な平底から長胴の胴部に続き、口縁部はやや強く屈曲して開く。口径16.4cm、器高25.2cmを測り、角四石・灰色粒等を多く含む在地系。4は3の西側から3つに分割された状態で検出された甕。不安定なやや厚い平底の底部からあまり張らない胴部に至り、口縁部は緩く反転して開く。胎土は3と変わらず口径17cm、器高24.8cmを測る。5は中央部床面より約0.25m浮いた位置から出土した高坏で脚の裾部を欠損するもの。反転しながら大きく開く口縁部から屈曲してやや丸みをもつ坏底部に至り、筒状の脚柱部から反転して張り出す裾部に続く器形をなす。内外面とも縦方向のヘラミガキによる仕上げであるが外面には部分的にハケが、脚柱部にはケズリが残る。脚部に円形孔を4箇所空ち、在地系胎土による。6は口縁部の開きがさらに大きい丹塗り高坏の坏部で、外面は縦ハケののち横のミガキを施す。砂粒をあまり含まない移入土器か。7も同様の胎土による脚部で同一個体の可能性があり、円形の透かしを設け外面は丁寧なミガキののち丹塗り。

第94図1はレンズ状の底部からやや長胴の胴部に至り、口縁部はほぼ直立する大形の複合口縁甕で西南部から口縁を下に出土。口縁部外面の全面に櫛播波状文を施し、頸部に三角形突帯と6個の勾玉状浮文を、胴部中に3状のやや高い三角形突帯を巡らす。口径21cm、器高63.7cmを測り、角四石・長石・赤色粒を含む。2は中央西北寄りから横転状態で検出された完形の中形複合口縁甕。口縁部はやや短く直線的に内傾し、卵球形に近い胴部からほぼ丸底の底部に続く。口縁部は無文で頸部と胴部のやや上位に三角形突帯を巡らし、胴部下位に打欠による孔を穿つ。胎土は在地系で口径16.3cm、器高46.9cm。3は底部周辺を欠損する複合口縁甕で2の甕の西側から胴部と頸〜口縁部が分割された状況で出土した。口縁部は直立し、頸部の締めりや胴部の張りは弱く、突帯もやや低いものとなる。外面は縦方向のハケののち非常に粗いミガキを加えた在地系土器。4は小形の完形複合口縁甕で伊勢西側から出土。やや厚い丸底の底部から僅かに膨らむ長胴の胴部に続き、内傾しながら延びる口縁部の外面には丁寧な櫛播波状文を二段に施す。口径15cm、器高36.3cmを測り、角四石・金雲母・灰色粒を含む。5は二段の丁寧な櫛播波状文を施す複合口縁甕の口縁部で外来系か。6は僅かに外に開く口縁部から球形に張り出す胴部に続き、底部はやや不安定な平底をなす無頸甕。外面は縦ハケののちミガキを加え、中程にスガが付着する。口径9.3cm、器高19.2cmを測る在地系。7・8も無頸甕と考えられるものであるが胴部の膨らみがやや弱く、胎土から外来系土器と思われる。7はベッド状遺構の中程から、8は灰層東側から出土。9は口縁部が僅かに開く直口甕で、やや膨らむ胴部から小形平底の底部に続く。外面はケズリののち縦方向のハケを、内面はハケとナデによる調整。口径7.8cm、器高23.6cmを測る在地系。10も同様の器形を呈すると思われるもので、11は在地系甕の底部。12は磨製石製の鍔身部片で、先端と基部を欠く。13は手頭式鉄鍔で基部を欠き、長さ4.2cm・身幅1.4cm・身厚0.25cm。14は厚さ0.5cm余りの鉄片と思われるもの。

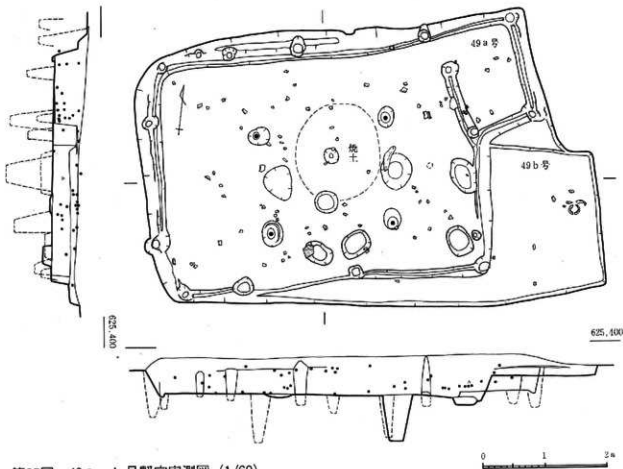
これらの土器にはやや器形に差異が認められる。しかし、7個の完形に近い甕は平底又は不安定な平底を呈し、4個体の複合口縁甕の口縁部形態にもやや差があるが底部は丸底に近いものが多く、無頸甕や直口甕の底部も甕に近い器形を呈することから、弥生後期後葉の代表的資料と考えられよう。

49 a・b号竪穴 (第95図)

調査区中央、46号竪穴の西側約5mに位置する。検出段階では2基の重複と思われたが、b号とした遺構はa号の埋戻しに伴う土取り跡の可能性が強いと考えられる。a号は長辺約5m、短辺約4mの長方形を呈し、東北部に基部幅約2m、長さ約1.2mの出入口と見られる突出部が設けられる。突出部の内側は2つの柱穴と小溝により区切られ、外側は内部より続く壁溝が巡る共に両先端部にも外に傾斜する柱穴が形成される。これらの柱穴は出入口の扉と屋根を支えたものと想定される。床面に段差は無く出入口を除く床面積は16.8㎡と小形の住居跡である。4本支柱と判断されるが東側2本の支柱の間に各支柱穴より規模が大きい柱穴が認められる。各支柱穴は抜取りにより変形し、主軸方位はN-76°-E。中央南側に直径約0.4m、深さ0.1m余りの杯跡があり、この北側の床面には楕円状に広がる焼土が観察された。土坑は伊跡の南側と東側の壁際に各々2基が対をなすように検出されたが、いずれも不整形楕円状を呈し長軸約0.5m前後と小形でやや浅い。

各コーナーと出入口を含む壁際に合計14の柱穴がほぼ全周するように設けられていることに本竪穴の大きな特徴が指摘され、外側に傾斜するものが多く単なる上留めだけでなく補助柱的機能も合わさると考えられる。さらに、西側両端部には3~4本が他と比べ近接した位置に形成され、冬季に於ける当地の厳しい北西風を考慮したものか。出土土器はいずれも小片であり、明らかに魔鏡祭祀を窺わせるものは認められなかった。なお、b号からは第96図8の複合口縁壺のI線部が伏せた状態で検出されている。これについては埋戻し最終の祭祀に関わる可能性も残す。

第96図1は反転してやや強く外に開く口縁部から肩の張った胴部に続く甕で、外面は縦・斜め方向のハケによる調整。a号出土であり胎土に砂粒は少なく、口径17.5cm。2・3も甕の口縁部片。いずれもa号出土で胎土は在地系と思われる。4は複合口縁壺の肩部と考えられるもので頸部との境に三角形突帯を巡らす。内外面ともナ



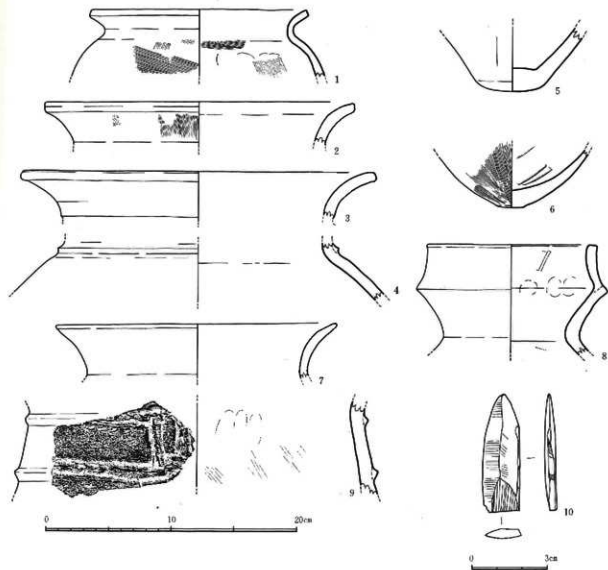
第95図 49 a・b号竪穴実測図 (1/60)

テ調整により、角閃石・長石・茶色粒を含む。5はレンズ状に近い丸底の底部で、石英を含む移入土器。6は底部が小形円形形状に僅かに突出するもので、外面は縦方向のハケにより5と同様の胎土をなす。

7～9はb号からの出土で、7は在地系甕の口縁部片。8は11縁部が反転しながら内傾する複合口縁面の口縁から頸部。口径13.6cmを測り、角閃石・長石・灰色粒などを含む在地系。9は在地系粗製甕の胴部片、頸部の下に工字形の突帯を施す。

10は柳葉状をなす磨製石鏃で緑色片岩を石材とし、長さ4.6cm・身幅1.4cmを測りa号からの出土。

本堅穴は1～6の土器から弥生後期後葉頃に置かれよう。

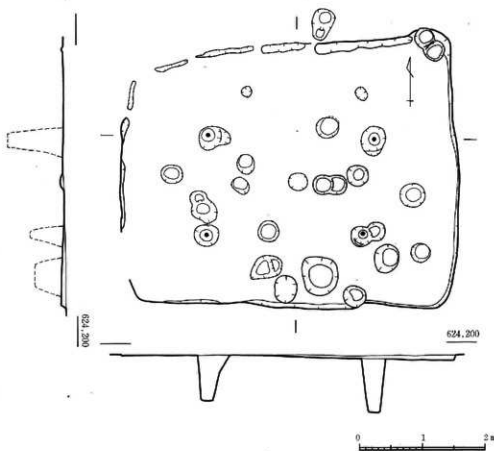


第96図 49a・b号堅穴出土土器 (1/3)、石器 (2/3)

### 50号竪穴（第97図）

48号の西側約6mに位置するが、削平と後世の改変が激しく床面と壁溝の痕跡が僅かに残るに過ぎない。長辺約5.4m、短辺約4.4mの長方形を呈すると思われるが、部分的に残る西半部分は確實ではない。その復原床面積は約21㎡で、主柱穴は図示した4本と考えられる。各主柱穴には抜き取り痕跡が認められ、方位はN-91°-Eとほぼ東西を向く。内部からは主に中世の所産と推定される柱穴が数多く認められるが、炉跡や土坑などの施設は確認できなかった。

出土遺物もほぼ皆無の状況であり、所属時期の特定は不能であるが弥生後期～古墳時代前期の所産であることは間違いないであろう。



第97図 50号竪穴実測図（1/60）

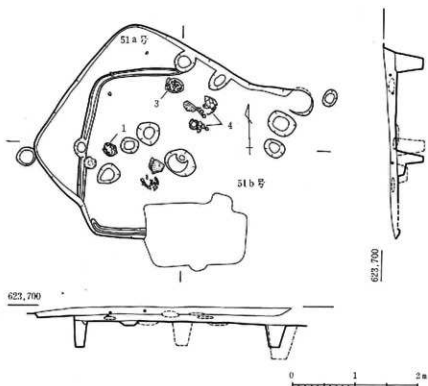
51 a・b号竪穴 (第98図)

調査区の南東隅部分、50号の南約10mに位置するが水田造成に伴う削平と木棺葬(1 a号)との重複により全体プランは不明確となる。小形長方形の2基が重なり、a号が先行すると思われるがいずれも東半分を消失する。

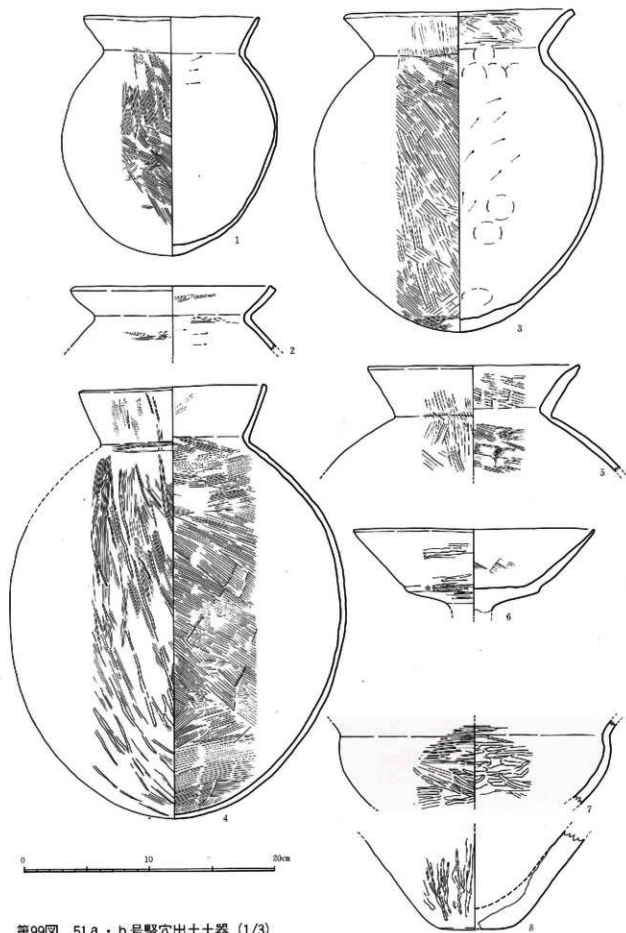
a号はb号により遺構の殆どを失われ現存部分は西側短辺とその周辺に留まるが、床面積は10㎡前後の小形の竪穴と推定される。短辺は2.6m、長辺の現存長約2mを測り、主柱穴は1本とも考えられるがはっきりせず炉跡・土坑については明らかでない。また、確実に伴う出土遺物も認められなかったが第99図7・8から弥生後期後半の所産である可能性が高い。

b号もほぼ床面まで削平を受け西半分の壁溝が残るに過ぎない。西側短辺は4.5m、現存長辺約1.2mを測り、主柱は2本と想定され、この場合の方位はN-89°-Eとほぼ東西を向く。中央部に長軸約0.5mの焼上を伴う炉跡と思われる掘込みがある。この他に本遺構に伴う施設は確認されなかったが、床面積は10㎡余りの小形であることから住居の付属施設と見做されよう。出土土器にはほぼ完形の甕2・壺1があり、竪穴埋戻しの前に行われた廃絶祭祀に使用されたものと考えられ、古墳時代前期中葉に置かれる。

第99図1は小形の甕で直線的に聞く口縁部から球形に張り出す胴部に至る。外面は縦・斜め方向のハケ、内面はヘラケズリとナデによる。口径14cm、器高18.7cmの在地系か。2はやや内湾気味に外に聞く口縁部から球形の胴部に続くと思われる移入甕で胴部外面に横ハケが認められる。3は口径18.2cm、器高25.1cmを測る横做甕。球形の胴部に端部がやや外反する口縁部を付し、外面は縦方向のハケにより内面は右上がりへのヘラケズリによる調整。角閃石・長石を多く含む。4は球形の胴部から直線的に斜め上方に聞く口縁部に続く無頸甕。外面は縦方向のハケのちミガキを粗く加え、内面は斜めのハケによる。口径15cm、器高33.8cmを測り、胎土に角閃石・長石・灰色粒などを含む在地系。5も無頸甕の口縁から胴部であるが、口縁部の開きがやや大きく器壁も厚い。6は高坏の坏部で内湾気味に聞く口縁から屈曲して低平な坏底部に続く、外面はハケ→ナデ→粗いミガキによる調整。口径19.3cmを測り、角閃石・長石をやや多く含む。7・8は弥生後期後半の高坏の坏部と甕の底部で胎土は在地系。



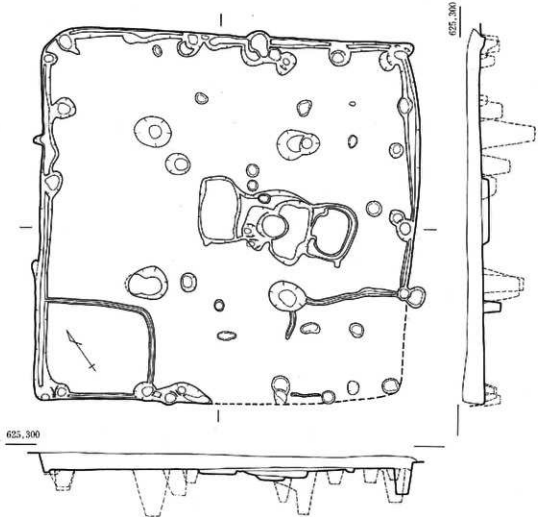
第98図 51 a・b号竪穴実測図 (1/60)



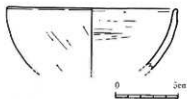
第99圖 51a · b号豎穴出土土器 (1/3)

52号竪穴 (第100図)

51号の北西約22mに位置する方形プランの住居跡であるが、削平を受けており南東コーナー付近を完全に失う。一辺6mを測り現存部分には壁溝が設けられ、復原床面積は約33㎡。四隅と各辺の壁際には小形の柱穴20余りが検出され、49号と同様の壁構造をなすものか。4本主柱の各柱穴には抜き取り跡が認められ、方位はN-41°-E。中央に長軸1.1m、短軸0.7mのやや浅い炉跡があり、この南側にも炉跡状の不定形土坑が重複する。また、炉跡の北西部に2つのやや深い柱穴が検出されていることから2本主柱から4本主柱に拡張したことが考えられる。出土遺物は非常に少なく、図化可能なものは第101図に示した1点のみで、これも小片のため確実性に欠く。口径13.6cmの椀で外面はケズリ、内面はナデによるもの。弥生後期後葉から古墳初の所産か。



第100図 52号竪穴実測図 (1/60)



第101図 52号竪穴出土土器 (1/3)

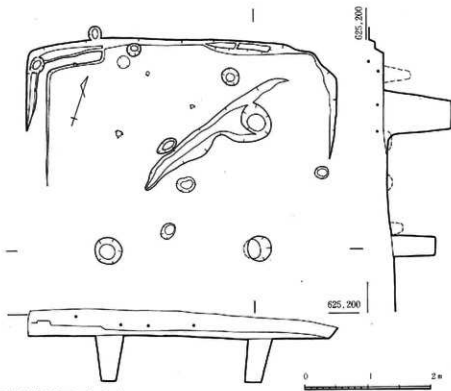


53号竪穴 (第102図)

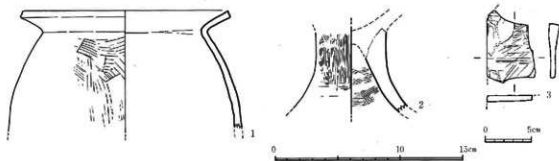
52号の南西部に隣接するが削平のため主柱穴から北側部分しか遺存しない。北側辺のみほぼ原状を保ち東西の両辺は途中で消失する。北側辺の長さ約5m、東側と西側の現存長は約1.8mと1.4mを測り、壁際の床面は一部二段掘となるが本来は段の形成はなかったものと思われる。西北コーナー部分には壁溝が残るが全周していたかは不明である。東北から南西に延びる溝の掘込みは複雑であり、溝内部の柱穴も2本の主柱穴に比べ規模が大きく中世の柱穴と推定される。主柱穴は南側の2本で、主軸方位はN-72°-E。内部から検出された小形の柱穴については本遺構に伴わないものと考えられ、炉跡や土坑などについては確認されなかった。

出土遺物は少なく、図化可能な土器は2点しかない。第103図1はやや強く外に開く口縁から長胴の胴部に絞くと思われる甕で、外面は縦方向のハケを主とし内面はナデによる調整。口径16.3cmを測り、角四石・長石・金尖母・白色粒を含む移入土器。2は高坏の脚柱部と思われ内外面ハケ調整で、胎土に石英を含む移入品。3は頁岩製の砥石片で、主面と側面を使用する。

1の甕から本竪穴は弥生後期後半の所産か。



第102図 53号竪穴実測図 (1/60)



第103図 53号竪穴出土土器 (1/3)、砥石 (1/4)

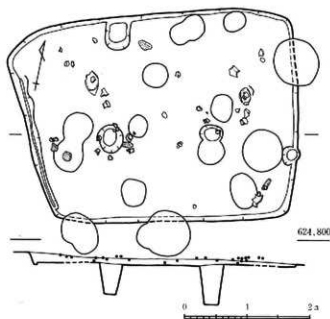
### 54号竪穴 (第104図)

52号の東側約14mにある小形長方形の竪穴である。全体に削平を受けると共に後世の柱穴により遺構の多くが失われる。短辺3.3m、長辺3.8・4.4mの台形に近い長方形を呈し、検出面から床面までは約0.1m前後と残りは浅い。西側辺に沿って浅い溝が検出されたが、他の辺には認められず堅溝として形成されたものであるかは疑問がある。床面積は12.6㎡と小規模であり、2本主柱の主軸方位はN-79°-E。知跡や上坑などの遺構については確認されなかった。

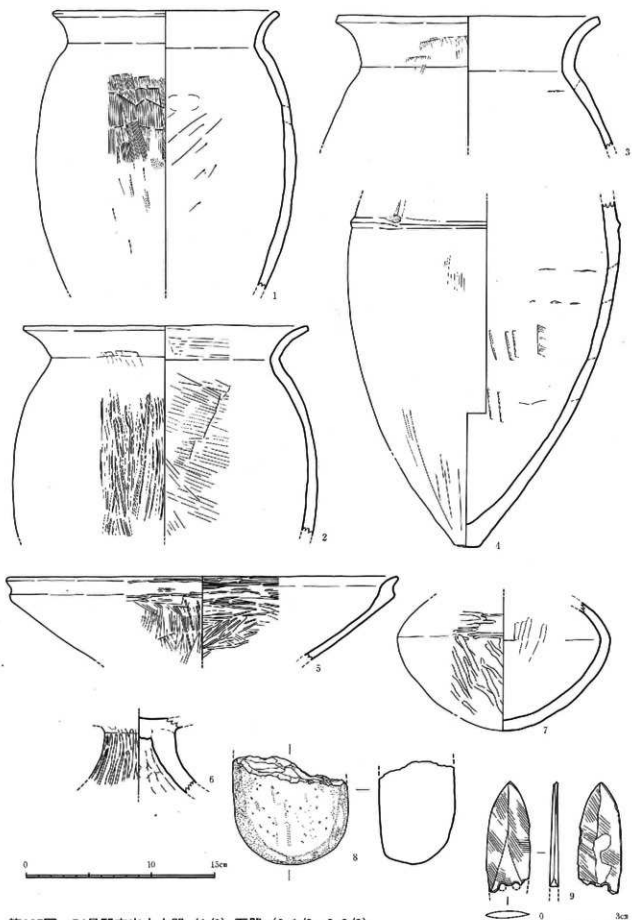
削平にも関わらず比較的多くの遺物が出土し、第105図1・2・4・5等の大形土器片は床面に近接して検出された。これらの欠損部は削平による可能性があり、本来は完形に近い状態で内部に投棄されたものか。従って、埋戻しの前に少なくとも甕3・高坏1・小形壺1個体を使用した廃絶祭祀が行われたものと考えられよう。また、貫部を欠く磨製石鏃1点もこれに祭祀に関係する可能性も否定できない。

第105図1は緩く外反して開く口縁から張りの弱い長胴の胴部に続く甕で胴部下半を欠く。外面はケズリのち縦方向のハケ、内面はケズリとナデによる調整であるが、ケズリは器面平滑を目的としたもので器壁を薄くするものではないと思われる。口径18cmを測り、角閃石・長石・灰色粒を含む在地系。2は胴部の膨らみがやや強く、外面縦方向のハケに粗いミガキを加える甕で胎土は在地系。3も同様の器形を早する在地系甕で調整はナデを主とする。4は口縁部から胴部上位を欠く粗製甕であり、膨らみの弱い胴部から小形平底をなす底部に至る。胴部に工字形の突帯を施し内外面ともナデとハケによる調整で、胎土に角閃石・長石・灰色粒を多く含む。5は短く屈曲して立ち上がる口縁部をもつ高坏で内外面ともハケののちミガキを丁寧に加える。口径31cmを測り、金雲母・石英などを含む移入土器。6は高坏の脚柱部に胎土に石英を含む。7は小形の長頸壺の胴部と考えられ、やや偏球形の胴部から丸底の底部に続く。外面はミガキを施し胎土は在地系か。8は安山岩製の磨石兼敷石。9は緑色片岩の磨製石鏃で基部を欠くが、直径3mm余りの孔を2つ穿つ。

出土土器から本竪穴は弥生後期後葉に比定されよう。



第104図 54号竪穴実測図 (1/60)



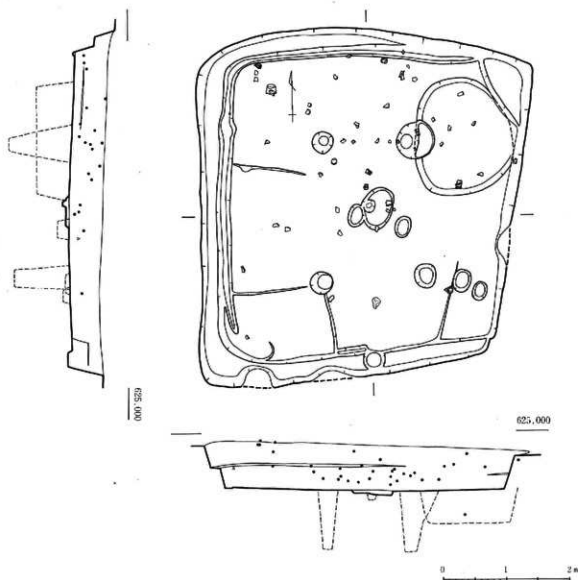
第105图 54号竖穴出土土器 (1/3)、石器 (8.1/3, 9.2/3)

55号竪穴 (第106回)

調査区中央部南側、54号の北約8mに位置する。東辺を除き二段掘りを呈するが、これは竪穴垣戻しの際に壁面の上位が崩落したこと等に因るものと考えられ、本来は一段であった可能性が強い。従って、一辺約4.4mの方形に近いプランを呈する住居跡と言えよう。検出面から床面までは約0.5~0.8mと深く、北・西側には壁溝が巡る。床面積は19.78㎡と中規模の中でもやや小さい。東北部に長軸1.9m、深さ約0.5mの楕円形の上坑があり、これを切って主柱穴が形成されている。上坑内部からは第107回3のI線部や胴部下半を打ち欠く小形甕が検出されたが、この土器と竪穴出土の土器には時期差が無いと判断される。よって、この上坑と土器は主柱などの構造物を建てる前に行われた地鎮祭的祭祀に用いられた可能性が指摘されよう。

主柱は4本であり方位はN-3°-Eとほぼ南北を向く。南西隅部に低いベッド状遺構(約1.6×1m)が、中央部に長軸0.7m、短軸0.5m、深さ0.05mの楕円形炉跡が設けられる。炉跡の東西には浅い柱穴が認められ、如に伴うことも考えられる。出土土器は小片が多く、廃絶祭祀を窺わせる資料は確認されなかった。

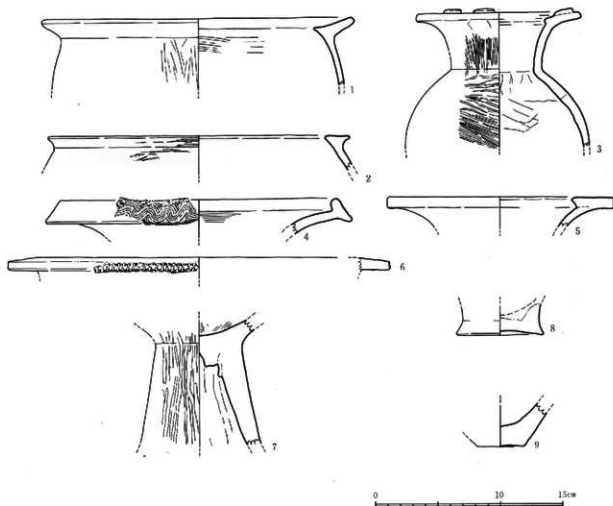
第107回1はI線部が9内外に突出する黒髪式甕のI線から胴部。I径24.8cmを測り、角閃石・長石を含む。2はI線部が逆L字状をなす甕で外面丹塗り、角閃石・石英を含む移入土器。3は上坑出土の甕、鋸先状のI線部上面に2個一対の円形を対向する二か所に添付し、外面はハケによる調整。I径13.1cmを測り、角閃石・長石・



第106回 55号竪穴実測図 (1/60)

灰色粒などを含む在地系。4は短く内傾する口縁部下縁がやや下垂する壺の口縁部片、外面に櫛状波状文を施す。口径22.2cm、角閃石・石英を少量含む。5は口径18cmの鬚先状口縁を呈する壺の口縁部、胎土は在地系である。6も壺の口縁部で外側に刻目と円形刺突文を施し、外来系胎土によるもの。7は高坏の脚柱部で接合部は充填する。外面ヘラミガキによる仕上げで胎土は在地系と思われる。8は下縁部がやや外に張る平底の底部で、外底部分がわずかに窪み石英を含む。9は壺の底部と思われるもので内外面ともナデによる調整。胎知多に角閃石や赤色粒を含む。

本壺穴は弥生中期後半から末頃に営まれたものと考えられる。



第107図 55号壺穴出土土器 (1/3)

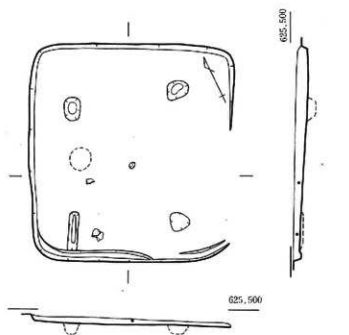
### 56号竪穴 (第108図)

52号の北西約4mにあり57号と隣接する。長辺3.4m、短辺3.2mの小形長方形を呈するが削平のため東側長辺の半分を失う。南側には壁溝が部分的に認められるが途中で途切れ全周しない。床面積は9.92㎡と小さく、主柱穴と見做される柱穴は確認されなかった。中央西側に焼土が直径約0.3mの円形に分布するが掘込みは無く、恒常的な炉跡とは異なる。南西部には壁溝から内側に延びる小溝があり、小形の浅い柱穴2つが認められた以外に明確な施設は設けられない。以上から住居ではなく倉庫・工房などの性格が強いものと判断される。

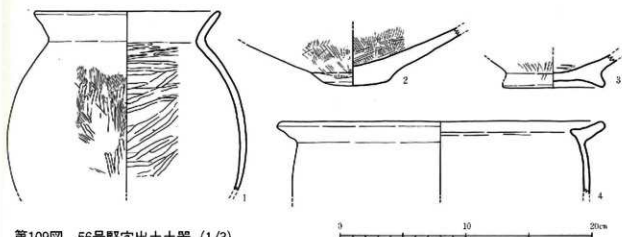
内部からの出土遺物もやや少ないが、第109図1の胴下半を欠く甕は南西部床面から検出されたもので廃絶祭祀に使用されたと考えられる。

第109図1はほぼ直線的に外に開く口縁からやや張った胴部に続く甕で、外面は縦方向のハケののちミガキを粗く施し、内面はナダとミガキによる調整。口径14.7cm、胴部最大径19cmを測り、角閃石・金雲母・灰色粒を含む。2は大形の鉢又は壺の底部と考えられるものでレンズ状に突起した底部をなす。内外ともハケ似寄る調整で1と同様の胎土を示す。3は鉢の底部と思われ、高台状に張り出す底部をなす。外面はハケ、内面はミガキを施し角閃石・長石を多く含む在地系。4は黒髪式甕の口縁が胴部片で混入と判断されるもの。

1～3の土器からすれば本遺構は弥生終末から古墳時代初に属すると言えよう。



第108図 56号竪穴実測図 (1/60) 0 1 2m



第109図 56号竪穴出土土器 (1/3)

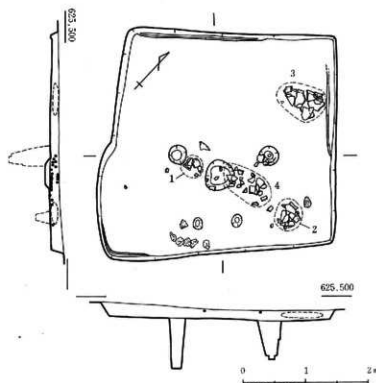
### 57号竪穴（第110図）

56号の北側に接する小形の竪穴であり、近接するが切り合わないことから両者には前後関係があると考えられよう。一辺3.3～3.6mの方形に近いプランを呈するが、南西部がやや外に張り出す。これも全体に削平を受け検出面から床面までは0.1～0.2mと残りは浅い。南西コーナーや東・北側辺に部分的に壁溝が認められ、床面積は10.9㎡と56号より僅かに大きい。2本支柱の方位はN-48°-Eで、支柱穴の平面径は約0.3mと小さいが深さは0.7m前後と深く掘込まれる。両支柱穴の間やや南に直径約0.5mの不整円形の炉跡が設けられる。炉跡と南側壁の間には小形のやや浅い一對の柱穴があり、何らかの施設を構成したものと考えられる。

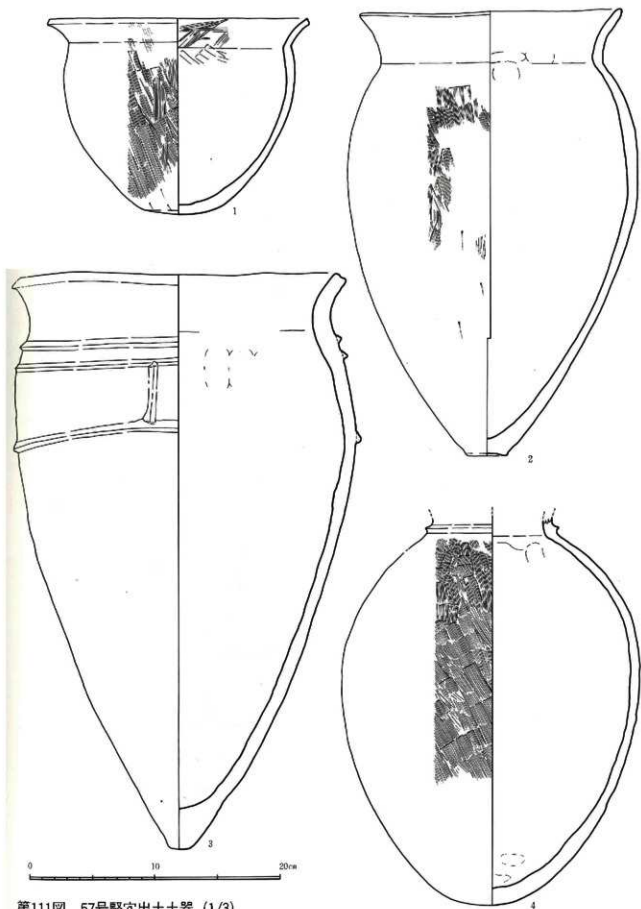
削平にも関わらず内部からは甕2・釜1・鉢1の4個体の大形土器片が検出され、各々破壊され床面のほぼ直上からまとめて出土した。各土器は埋戻しの前に行われた竪穴廃絶に用いられたものと想定され、使用後に内部に投棄・破壊されたと理解される。この内、第111図3の粗製甕内には比較的多量の赤色顔料が入れられており、本竪穴が赤色顔料の製作に関係する施設であった可能性が考えられよう。

第111図1は炉跡と西側支柱穴の間から出土した完形の鉢、外反して置く口縁部から張り出しの弱い胴部に続き底部は丸底をなす。外面は縦方向のハケによるが底部周辺は浅いケズリによる調整。口径21cm、器高15.3cmを測り、2は南東隅付近から出土した完形の甕。小形平底の底部から長胴のでやや肩の張る胴部に至り、口縁部は緩く反転して開く。内面はナデ、外面は縦方向のハケによるが胴下半には浅いケズリが残る。器面にはスヤコゲが付着し、口径21cm、器高34.8cm。3は北東部から押し潰された状態で検出された粗製甕である。尖底状の底部から僅かに肩の張る長胴の胴部に続き、口縁部は反転してやや短く外に開く。胴部の上位に3条の突帯を巡らせ、下の2条は工字状突帯を形成する。口径27.8cm、器高45.2cm。4は頸部から口縁部を欠損する複合口縁甕で、卵球形に近い胴部から丸底の底部に至る器形をなす。外面は縦方向のハケによるがスヤコゲが付着し、内面にもコゲが認められ煮炊きに使用されたことを示す。以上の4個体の胎土は全て在地系と思われる。

本竪穴は、出土土器から弥生後期後葉に比定される。



第110図 57号竪穴実測図 (1/60)



第111图 57号竖穴出土土器 (1/3)

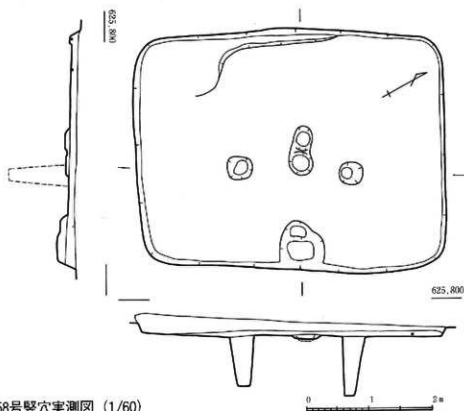


58号竪穴（第112図）

57号の北西約3mに位置する。全体に削平を受けるが、長辺約4.8m、短辺約3.6mの隅丸長方形プランを示す。検出面から床面までは0.1~0.3mと浅く、床面積は16.56㎡の小形の竪穴である。中央部にある2つ掘込みは直径0.4m余りの浅いもので炉跡と思われる。支柱穴は中軸よりやや東側に寄る2本であり、小形ではあるが深く主軸方位はN-32°-E。東側壁の中段に接し二段掘の上坑が設けられ、長軸約0.6m、深さ約0.4mの不整円形を呈する。西側辺には一部壁溝状の掘込みが認められるが、明確なものではない。出土遺物は非常に少なく、土器はいずれも小片である。

第113図1は堯の口縁部片でやや直線的に外に開くもの。内外面ともハケを主調整とし、角閃石・金雲母・灰色粒を含む。2は内傾して立ち上がる複合口縁甕の口縁部、外面に二段の櫛描波状文を施す。復元口径17cmで胎上に角閃石・長石・灰色粒を含む在地系。

遺構の時期決定にはやや躊躇するが、弥生後期終末頃の所産と思われる。



第112図 58号竪穴実測図 (1/60)

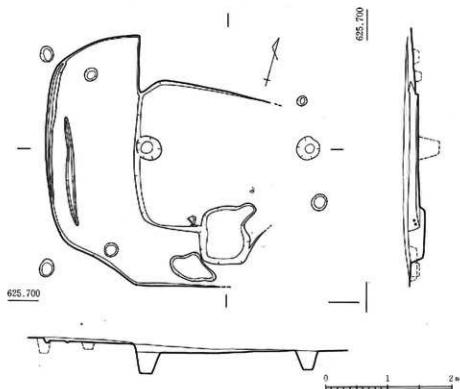


第113図 58号竪穴出土土器 (1/3)

59号竪穴 (第114図)

調査区の中央部南側、58号の東約5mに形成されるが本竪穴も削平のため遺構の東半部分を消失する。全体プランは不明であるが、花弁型に近い変則形をなすものと思われる。二段掘りの内側は短辺約2m、現存長辺約2.2mを測る隅丸長方形をなすが本来の長辺は約3m前後と想定される。その南側辺の中央に一段口から掘込まれた不整形長方形を呈する土坑が配され、長辺約0.9m、短辺約0.75mを測る。一段口の西側には二重の壁溝が設けられるが途中で収束し全周しない。長さ約3~4m、幅約1.5mと比較的西側は広いが、北・南側は0.8m余りと狭くなる。支柱はほぼ中軸線上の2本と考えられ、掘込みはやや浅く主軸方位はN-75°-E。中央部土坑と南側壁の間に不定形の土坑が認められる他、竪穴の内外に小形のピットが検出されている。か跡や他の遺構は検出されなかった。

本竪穴に伴う遺物は非常に少なく、図示可能な土器片はないが弥生中期後半に属するものと思われる。



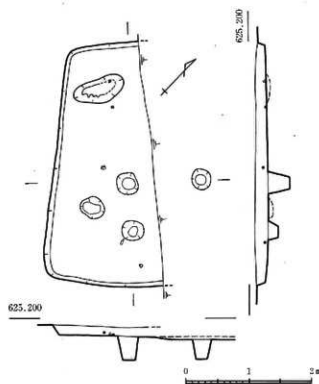
第114図 59号竪穴実測図 (1/60)

60号竪穴 (第115図)

59号の南側約10mに位置するが、中世の擾乱により中央部から東側をほぼ完全に失う。西側辺は3.6m、南側辺の現存長1.9m、北側辺現存1.1mを測り、壁溝は設けられない。主柱穴と思われる柱穴は東西方向の2本であり、主軸方位はN-43°-E。東北部に長軸約0.8m、短軸約0.4mの楕円状の浅い上坑が検出され、西側主柱穴の南には浅いピット2つが認められた。この他の遺構は確認されず、共存遺物も少ない。

第116図1は鉢と思われるものの口縁部片で、口縁から縦方向に貼付した類例の少ない耳状把手をもつ。把手の中間には孔を穿ち、内外の調整はナデによる。復元口径17cmで胎土に角閃石・赤色粒を含む移入品。2は姫島産黒曜石製の打製石鏃、全体にやや雑な剝離により整形し長さ2.8cm、重さ0.9g。

出土土器に乏しいが1の鉢から弥生中期後半の所産と思われる竪穴である。



第115図 60号竪穴実測図 (1/60)

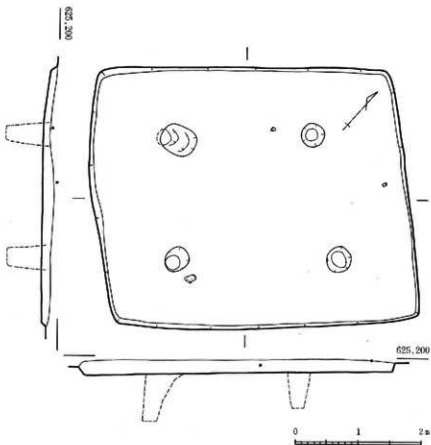


第116図 60号竪穴出土土器 (1/3)、石器 (2/3)

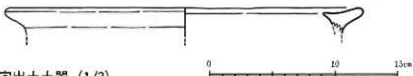
61号竪穴 (第117図)

59号の北約5mにあり、長辺4.7・4.9m、短辺約4.0mの東西方向に長い長方形プランをなす。本竪穴も全体に削平され、検出面から床面までは約0.1~0.2mと残りは浅い。整溝・炉跡・土坑などの内部施設は検出されなかった。床面積は19.11㎡と中規模の中でもやや小さい。主柱穴は四方に配置された4本で、西北部主柱穴は抜取りにより変形する。主軸方位はN-46°-E。一般的住居跡とは様相を異にするが、その性格を示す遺物は検出されなかった。出土土器もごく少なく図示できたものは1点に留まる。

第118図は弥生中期の黒髪式の甕であり、他と比べよりT字状に近いT縁部をなす。復元口径28.6cmを測り、石英・金堂母・角閃石・長石を含む移入土器。この資料1点のみで時期判断を下すにはやや無理がある。竪穴の平面形からすれば、本竪穴は弥生後期の所産である可能性が高いものとする。



第117図 61号竪穴実測図 (1/60)



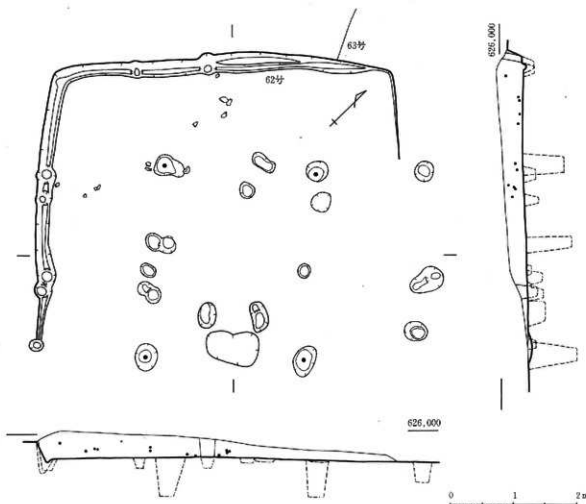
第118図 61号竪穴出土土器 (1/3)

62号竪穴 (第119図)

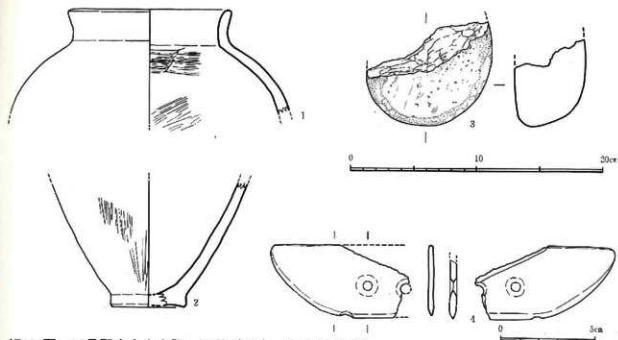
58号の北側に接し、63号とも一部重複する。検出時点では63号に後出することは確認されたが、58号との前後関係は不明であった。遺物整理の結果、58号が木竪穴を切り形成されたものと判明した。削平により中央部から東側を失うが短辺約5.5m、推定長辺6.4mの長方形プランを呈するものと考えられ、復原床面積は約33m<sup>2</sup>。4本主柱の主柱穴には抜取り痕跡を残すものも認められ、主軸方位はN-42°-W。南側両主柱穴間の中程に長軸0.9m、深さ5cm余りの不整形円状をなす炉跡が設けられ、その北側に接し一対の小形楕円状の柱穴が伴う。また、現存する北・西側の壕溝内に計7つの小形の柱穴が検出された。この柱穴は49号竪穴燧石柱穴と同様の性格が考えられよう。出土遺物はやや少ないが、石杵<sup>1</sup>は注目される。

第120図1は短く外反するL線部からやや肩の張る胴部に至る無頸壺。外面はナデによるが内面には細かいハケによる調整。口径13cmを測り、角閃石・長石・赤色粒・灰色粒を含む在地系と思われるもの。2は上げ底気味の平底をなす壺の底部。外面は縦方向のハケにより、胎土は在地系。3は安山岩製の磨石で上半部分を欠くが、片方の主面のみ使用する。4は灰白色シルト質の石材を用いた外溝刃石甕<sup>2</sup>、現存部は約半分となり刃部は使用によりかなり擦り減り孔に寄る。現長7.3cm、幅3.8cm、重さ15g。

壺底部から判断すれば、弥生後期後葉に属する住居跡と考えられよう。



第119図 62号竪穴実測図 (1/60)



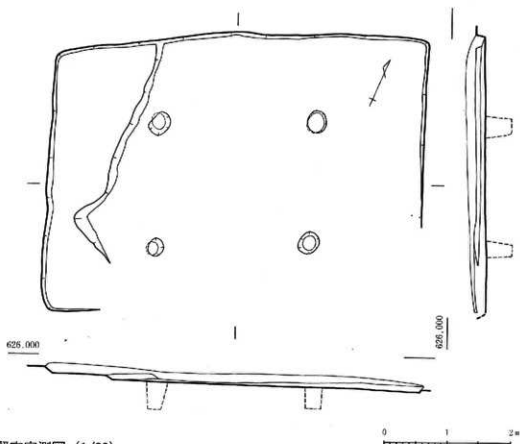
第120図 62号竪穴出土土器、石器 (1/3)、石庖丁 (1/2)

63号竪穴 (第121図)

62号の北側に位置し、これに先行する竪穴であるが削平を大きく受ける。このため遺構の中央から南側は床面付近まで消失する。長辺約6.0m、短辺約4.2mの長方形を呈し、復原床面積は約25㎡。

西側のベッド

状の段は不規則ではあるが、本来の床面であった可能性もある。4本柱の方位はN-65°-E。炉跡・土坑などは確認されず、遺物もほぼ皆無であった。62号に先立つ弥生後期前半の所産か。

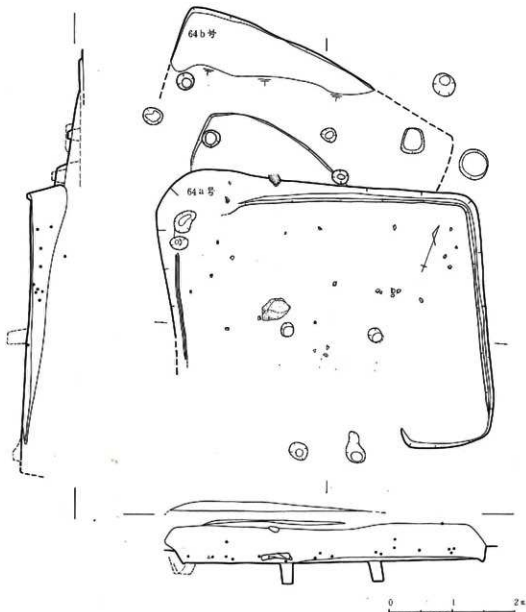


第121図 63号竪穴実測図 (1/60)

64 a・b号竪穴 (第122回)

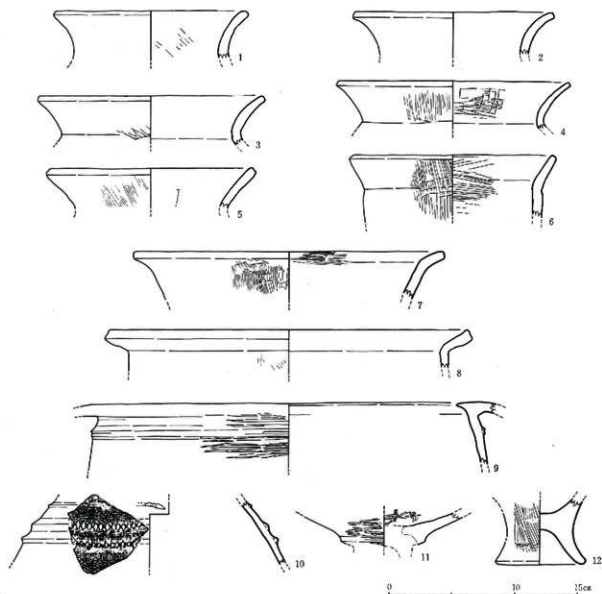
63号の北側約8mにあり65号を含め3基が重複するが水田造営時の削平により遺構の残存状態は良くない。a号がb号を切ることは間違いないが65号とa号との関係は明確ではなかった。しかし、大きく切り合わないことから時期的には近いものと考えられる。

64 a号の南半部分は消失するが長辺約5.0m、短辺約4.0mの東西に長い長方形をなし、南側を除き壁溝が巡らされる。復原床面積は17.48㎡。中軸よりやや南側に2本支柱の柱穴が設けられ、主軸方位はN-75°-E。加跡や上坑は検出されなかったが、南壁側中程に一对の小形の柱穴が設けられる。やや浅いことから出入口の梯子穴の可能性がある。出土遺物は少なく、土器も全て小片であり竪穴の廃絶祭祀を示すものは認められなかった。第123回1～5は本竪穴に伴うと考えられる甕の口縁部片。1は外反する口縁部の開きがやや弱く、2～4は次第に大きく開く。5はほぼ直線的に開く口縁部をもつ。これらの胎土は角閃石・長石・灰色粒などを含む在地系。6はa号に帰属するか明らかではないが直線的に開く口縁部の開きは弱く、胴部もほとんど張り出さない小形の在地系甕である。1～5からすれば弥生後期中葉から後半の所産か。



第122回 64 a・b号竪穴実測図 (1/60)

64b号は中央部から南側をa号により完全に尖い、残存部も削平により床面も部分的に残るのみとなる。二段掘りの竪穴であるが支柱穴や炉跡・土坑なども不明であり、平面プランについても復原不能と言える。出土遺物もほぼ皆無の状態であるが、第123図7～12はa号に混入したと考えられる土器で本竪穴に伴う可能性を有するもの。7は口縁部が短く屈折して開く甕で、8は跳ね上げ状口縁をなす移人系甕。9は口縁部断面がT字状に近い外面丹塗りの甕で、頸部に1条のM字状突帯を巡らす。10は胴部上半に3条の三角形刻口突帯を巡らす甕の胴部片。11は高杯の杯底部片で脚部との境に突帯を施し、内外面ともミガキののち丹塗り。12は黒髪式甕の底部であり、石英を多く含む。これらの土器にはやや時期幅が認められるが、弥生中期後半に置かれるものと考えられ本竪穴もここに属するものであろう。



第123図 64a・b号竪穴出土土器 (1/3)

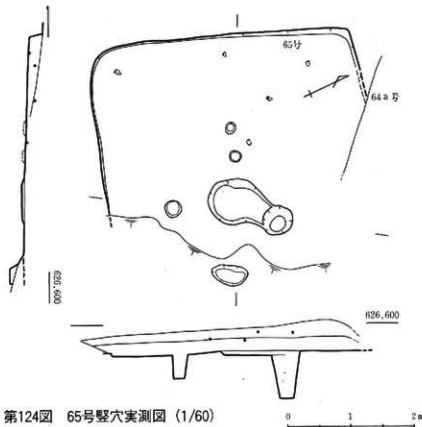


65号竪穴 (第124図)

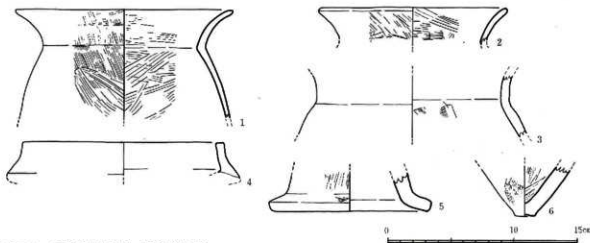
64a号の南西部に重なり検出段階では本竪穴が先行すると思われたが逆である可能性が高い。中央部から東側は削平が床面の下まで及ぶが、小形長方形の竪穴と考えられる。西側辺4.2m、南側辺の現存長約2.5mを測り、壁溝はない。主柱穴は南北方向の2つと判断され、主軸方位はN-33°-E。抜取り痕跡が見られる北側主柱穴に接し、竪跡と思われる長軸約1mの不整形円状の掘込みが認められる。が跡の東側には楕円形の土坑の下部が残る他に内部施設は検出されなかった。本遺構に伴う遺物も少なく、特異な情況も示さない。

第125図1は緩く反転して延びる口縁から長胴の胴部に続く甕で、胴部の張りだしは口径より僅かに張ると思われる。内外面ともハケ長生により、角閃石・灰色粒を含む在地系。2も同様の器形をなすと考えられる甕口縁部片で胎土は在地系。3は2と類似する胎土をなす甕の胴部片。4はやや短く内傾する複合口縁甕の口縁部で角閃石・長石を含む。5は高坏の脚部で裾部は屈折して短く外に開く。6は在地系甕の底部であり、外底部が僅かに窪む小形の平底を呈する。

これらの土器から本竪穴は弥生後期後葉に置かれよう。



第124図 65号竪穴実測図 (1/60)



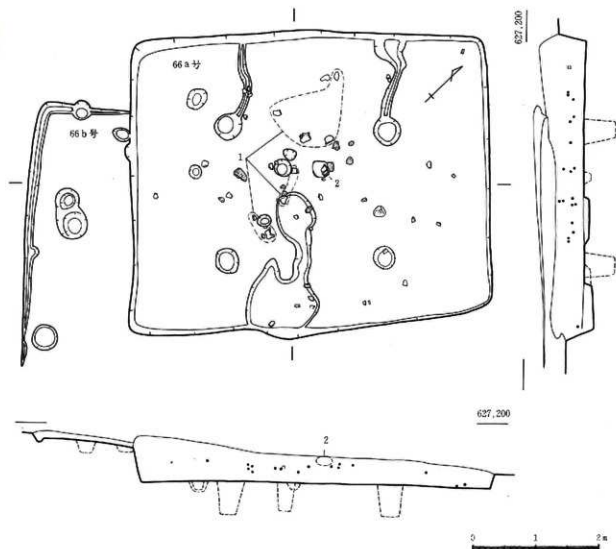
第125図 65号竪穴出土土器 (1/3)

66 a・b号竪穴 (第126図)

65号の南西約10mに位置し2基が重複するが、b号はa号と削平により遺構の大半を尖い平面形や規模・構造等は不明となる。

a号は長辺5.6~5.8m、短辺4.2~4.7mの長方形プランをなし検出面から床面までは約0.2~0.7mと遺存状態は比較的良好である。壁溝はもたず床面積25.76㎡と中規模の住居跡である。4本主柱の方位はN-43°-E。主柱穴には抜取りと思われる痕跡が観察されるものもあり、北側の2主柱穴からは北壁に向かう小溝が蛇行するように設けられている。中央部に長軸0.7m余りの楕円状をなし深さ約0.1mの炉跡があり、これと東壁側の不定形土坑は溝状の掘込みにより結ばれている。

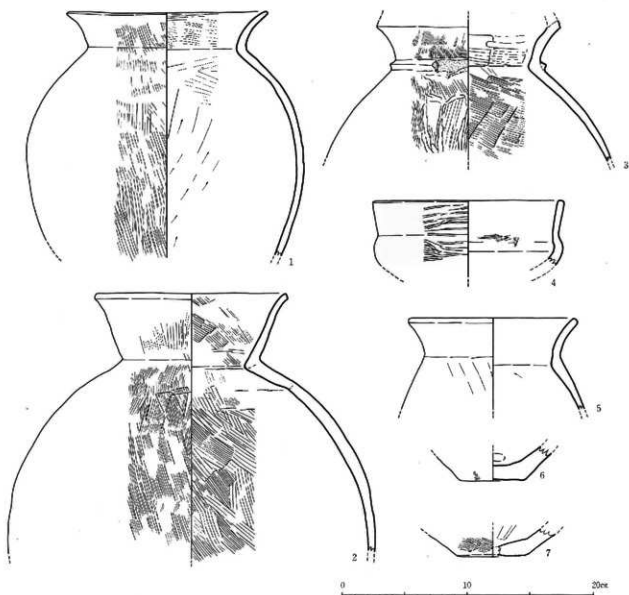
出土遺物は覆土の中へ上層に多く第127図1の壺は8片に別れやや広く分布していたものが接合し、2の壺の大形破片は中央の検出面に近い位置からまともな検出された。この2点は埋戻し終了間際に行われた祭祀に使用・投棄されたものと考えられよう。第127図1は底部周辺を失う壺。緩く外反して開く口縁部から頸部で反転し球形に近い張りだしをもつ胴部に続く。外面は縦方向のハケ、内面は右上がりのヘラケズリと横のハケによる調整。口径22cmを測り、角閃石・長石・石英などを含む移入土器。2は外に開く口縁の端部付近が外反し、締まりのやや強い頸部から肩の張った球形の胴部に至る長頸壺。外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる。胎土に灰色粒・赤色粒を多く、角閃石・金雲母を少々ふくむ。3は在地系複合口縁壺の頸部から胴部と



第126図 66 a・b号竪穴実測図 (1/60)

の境に三角形突帯を巡らせ末端を下垂させ、外面は縦方向のハケののち粗いミガキを加える。4は1縁部が僅かに外に開く鉢、外面は横のミガキののち丹塗りで砂粒の少ない移入土器。これらの土器から、a号は古墳時代前期前葉でもやや新しい時期に属せよう。

b号は西側から北側にかけて巡る壁溝から長方形のプランと推定されるが、主要部を失うため確実ではない。内部に残る柱穴はいずれも浅く支柱穴や炉跡などについては不明である。遺物もほぼ皆無であるがa号内部から出土した第127図5～7は本遺構に伴う可能性がある。5は剛きの弱い口縁から口径より張り出す長胴の胴部に続くと考えられる甕。6・7は甕又は壺の底部でいずれもやや浅い平底を呈し、6は移入品で7は在地系と思われる。これらの土器から、b号は弥生後期前葉頃の所産と考えられる。

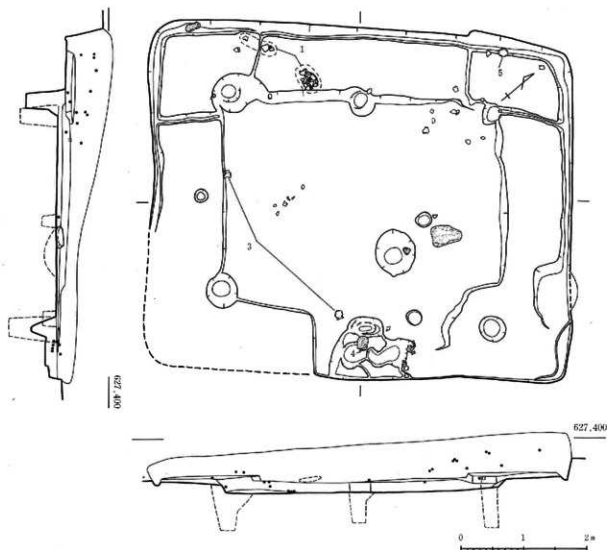


第127図 66号竪穴出土土器 (1/3)

67号竪穴 (第128図)

65号の北西約2mに位置する長方形プランの竪穴であるが南側コーナー付近を削平により失う。長辺約6.8m、短辺約5.5mの長方形を呈し、南壁側中程を除き幅1m前後のベッド状遺構が設けられ、北側の向コーナー部分はこれよりさらに一段高いベッド状をなす。南側辺以外には埃溝が巡り、床面積は33.28㎡と中規模の中でも大きい住居跡である。主柱は四方の4本と考えられるが、長辺側のほぼ中間に主柱穴よりやや規模の小さい補助柱穴が各1つ設けられている。各柱穴には柱の抜取り跡を残すものが多く、主軸方位はN-44°-E。炉跡は中央やや南東にあり直径0.65mの不整形をなし、深さは0.15m余りの皿状の断面を呈する。南側中央の壁に接し床面が三段となる不定形土坑があり、内部からは第129図4の複合I線壺の大形胴部片が検出された。また、第129図1の甕は北西部主柱穴の東側ベッド状遺構の床面から約0.1m余り浮いた所から破碎・分割された情況で検出され、3の山陰系二重口線壺は土坑近くと北西部主柱穴の南東の二か所に分かれ、5の完形の甕は北東部ベッド状遺構の壁溝の上位から各々出土し埋戻しの前に行われた廃絶祭祀を窺わせる。

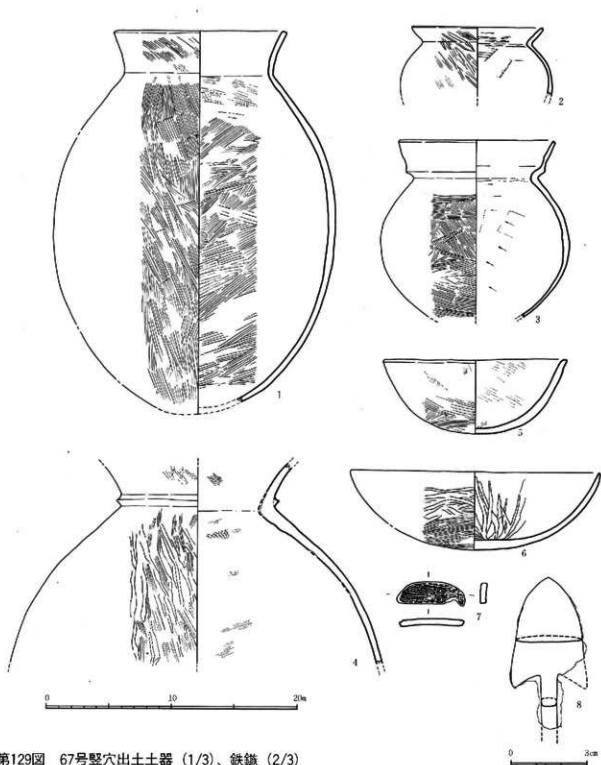
第129図1は底部周辺を失う甕、開きの弱い口縁部から卵球形の胴部に至り器面はハケ調整による。スヤコゲが付着し、胎上に角閃石・金雲母・赤色粒などを含む。2は口径10.6cmの小形の甕でやや強く外に開く口縁から球形の胴に至り、胎土は在地系か。3は山陰系二重口線壺で胴部外面は縦方向のハケののち横ハケを加え、内面はヘラケズリによる。移入品と思われるが着炊きで使用されている。4は複合I線壺の頸部から胴部片、外面



第128図 67号竪穴実測図 (1/60)

は縦方向のハケののち粗いミガキを加える在地系。5は口径14.8cm、器高5.3cm余りとやや深い完形碗、内外面ハケ調整により角閃石・長石・赤色粒を含む。6は口径10.8cm、器高6.2cmとやや大きい碗で外面はハケののち、内面はナデののち粗いミガキを加える。金雲母を含むことから移入品と思われる。7は土坑内部から出土した土器片加工品。8は有茎錐状三角形鉄鏃、現長6.0cm、鏃身最大幅約3.0cm。

本壜穴は、古墳時代前期前葉 ~~中葉~~ に置かれる。

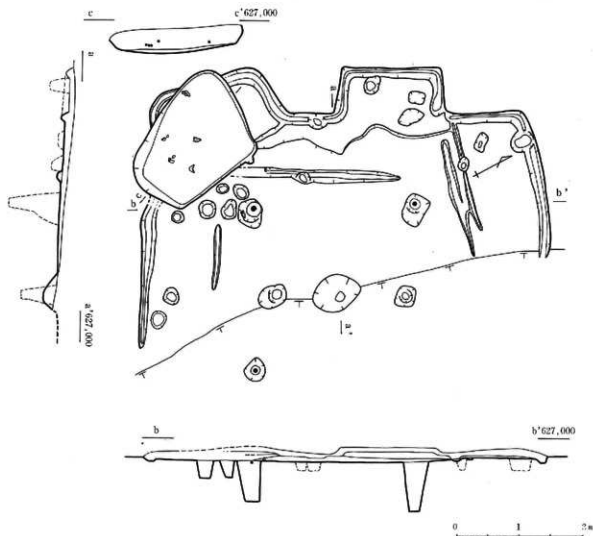


第129図 67号壜穴出土土器 (1/3)、鉄鏃 (2/3)

68号竪穴 (第130図)

66号の南端約8mに花弁型住居跡であるが東半部分は土取りにより失い、南西突出部分は弥生後期の土坑により切られる。また削平を受けており余体プランは不明である。西側に二か所の突出部が設けられ、北側は基部幅約1.8m、長さ約0.8mの長方形を呈する。南側突出部の基部幅は土坑に切られるため明確ではないが約2m前後と推定され長さは約1m。主柱穴は4本と考えられるが東北部主柱穴は消失し、主軸方位はN-28°-E。炉跡は主柱穴間のほぼ中心に位置し長軸約0.8m、深さ約0.2mの楕円状を呈する。その左右にはやや深い小形の柱穴一対があり炉とセットをなすものと思われる。主柱穴の外側には主柱穴内部の空間を区画するように小溝が掘られ、北側は二重となり壁溝と交差する。これらの溝は途中で途切れるが削平が床面まで及んでいることから、当初は二段掘りの内部を区画したものであったと考えられる。竪穴出土の遺物は少なく共存する可能性がある遺物は第131図5～7と9の石鏃のみであり、その他の図示したものは土坑からの出土である。

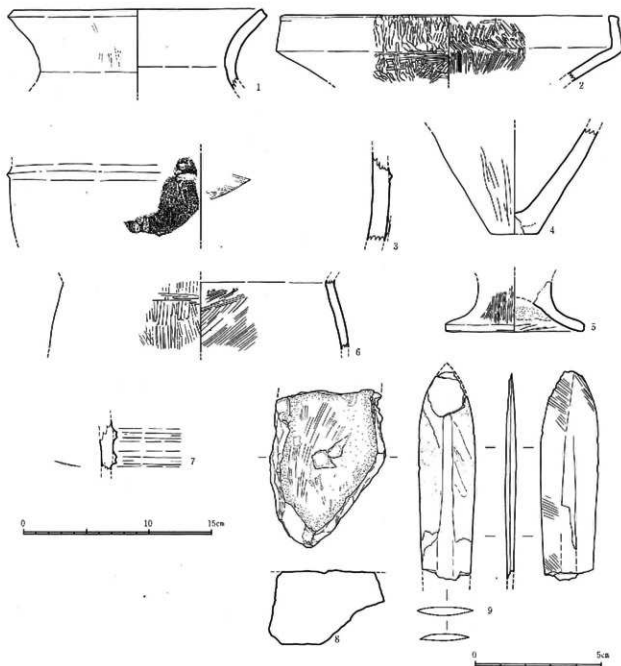
第131図1は緩く外反転して開く壺の口縁部片でやや膨らみをもつと思われる胴部に続く。2は短く内傾する高坏の口縁部片、器面はハケののち丁寧なミガキによる調整。3は胴上下にJ字状の突帯を貼付する粗製製の胴部片である。4はやや小形の平底をなす甕の底部で胎土は在地系。5は黒髪式の壺底部。脚部は反転してやや強く張り出し内面に砂型痕跡を明瞭に残すもので、角閃石・石英などを含む移入土器。6はあまり張り出さない壺胴部片、器壁がやや薄く内外ともハケを主とする調整。7は2条のM字状突帯を巡らす壺又は甕の胴部片で砂粒



第130図 68号竪穴実測図 (1/60)

を殆ど含まない。8は砂岩製の砥石片で1面のみで使用である。重量が1Kgを超えることから平置き砥石と思われる。9は柳葉形をなすと思われる磨製石鏃で先端と基部を欠く。身の中央には柄の着装痕跡が認められ、現存長8.2cm、身の最大幅2.3cmを測る。

本堅穴の時期は5～7から弥生中期後半に、土坑は弥生後期中葉に置かれよう。



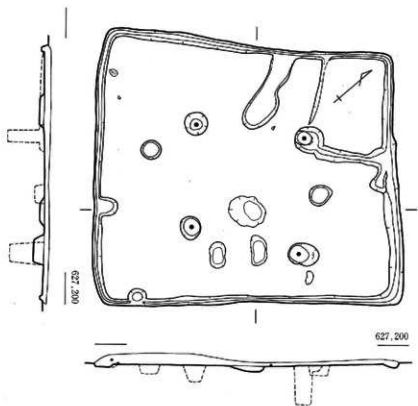
第131図 68号堅穴出土土器、石器 (1/3)、(9.2/3)

69号竪穴 (第132図)

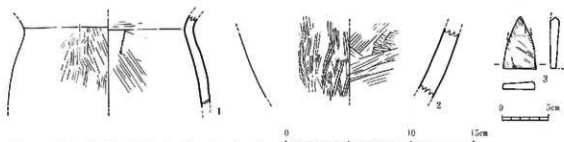
68号の西側約1mに隣接する住居跡である。長辺4.6~4.8m、短辺4.0~4.4mの台形に近い長方形を呈し、検出面から床面までは5cm前後と全体に削平されている。壁溝は全周するが東側壁溝から東北部主柱穴に延びる小溝が掘られ、床面積は17.1㎡と小形の竪穴である。4本主柱の東側両主柱穴には抜取り跡が認められ、その主軸方位はN-45°-E。中央やや南東に長軸0.6mの不整形門状の浅い炉跡があり、これに近接し一対の楕円状をなす柱穴が伴う。明瞭な上炕は形成されず、出土遺物も少ない。

第133図1は長胴をなす甕の胴部片で張り出しはやや弱く、内外面ともハケ調整を主とする。胎土に金赤母・白色粒・赤色粒を含む。2も甕の胴部下半部で外面は縦方向のハケののち粗いミガキを加える。角閃石・長石・灰色粒を含む在地系。3は頁岩製小形瓦石片で、片方の主面のみを使用する。

これらの土器から時期の決定を行うにはやや躊躇するが弥生後期であることは疑いない。



第132図 69号竪穴実測図 (1/60)



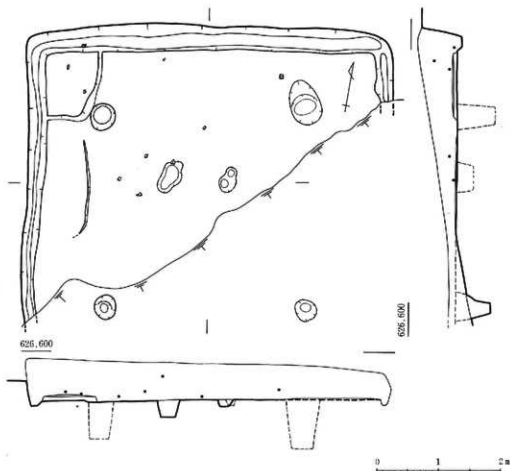
第133図 69号竪穴出土土器 (1/3)、他 (1/4)



70号竪穴 (第134図)

69号の南側約4mにあり西側を71号と重複しこれを切って営まれる。北東部から南西部にかけては水田造成による土取りを大きく受けて床面も消失するが、南側の両主柱穴の下部は辛くも残存する。現存する竪穴北西部分は比較的良好に残り、検出面から床面までは0.4~0.6mと深い。主柱穴に位置と北側長辺から約6×5.5mの長方形をなす住居跡に復原され、現存の各壁には味噌が巡り推定床面積は26.5m<sup>2</sup>。主軸方位はN-81°-E、東北部主柱穴には抜き取り痕跡が認められる。北西コーナー部分には約1×0.8m、高さ5cm余りのベッド状遺構が主柱穴と接し設けられる。跡跡や土坑は検出されず、中央の小形不定形ピットは竪に付属するものではない。出土遺物もやや少なく廃絶祭祀を明らかに示す大形の土器片などは確認されなかったが、石施丁の転用品や刀子片が検出されている。

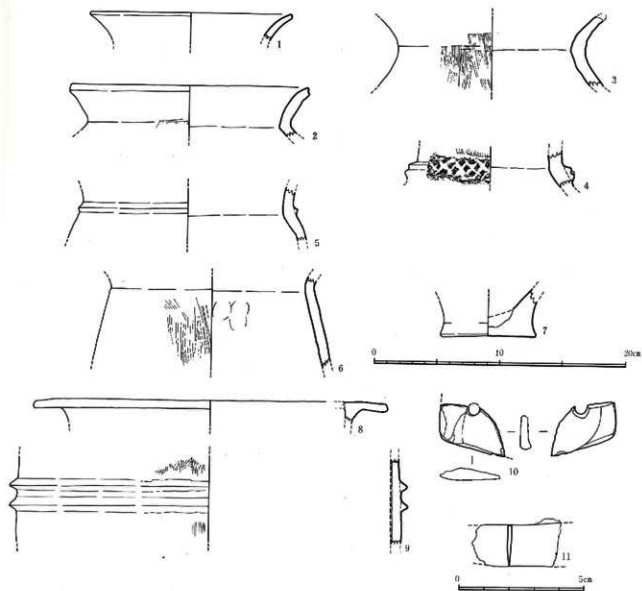
第135図1・2は罫の口縁部片でやや開きの大きいもの。胎土に角閃石・長石・灰色粒などを含む在地系と思われる。3は1線端部を欠くがやや張り出した胴部に続く罫の口縁から胴部片。外面は縦方向のハケにより内面はナデ調整で、金雲母・角閃石・長石・赤色粒を含む。4は短頸壺の頸部と考えられ、胴部との境に突帯を巡らせX字状の刻目を加える。大粒の石英や角閃石・赤色粒を含む移入土器である。5は粗製罫と思われるものの頸部から胴部片で三角形の突帯を巡らせ、胎土に角閃石・灰色粒を含む在地系。6~8は混入と見られる弥生中期の土器片。6は罫の胴部で金雲母を含み、7は安定した平底をなし胎土は在地系。8はT字状口縁を呈すると思われる罫の口縁部片で、角閃石・長石・灰色粒などを含む在地系。9は複合口縁壺の胴部片、2条の三角形突帯を巡らせ胎土は8とはほぼ同様である。



第134図 70号竪穴実測図 (1/60)

10は石施丁の背骨から身の部分を砥石に転用したと考えられるもので、孔の周辺から刃部にかけて研面が明瞭となる。11は刀子の刃部で先端と基部を欠き、刃部幅1.7cm、現存長3.6cm。

本壜穴も時期判定の資料に乏しいが3の壜から弥生後期後半の所産と考えられよう。



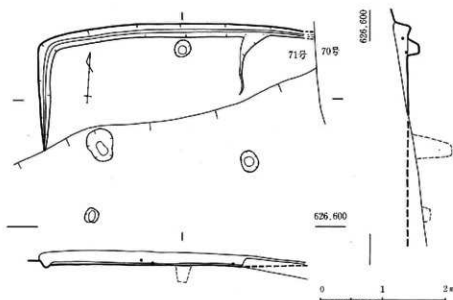
第135図 70号壜穴出土土器 (1/3)、石器、鉄器 (2/3)

71号竪穴 (第136図)

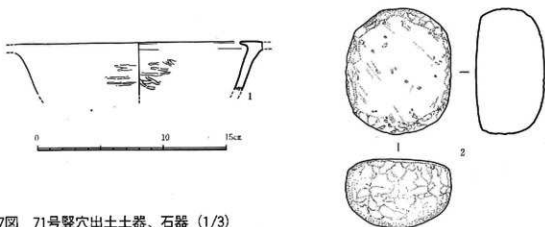
70号の西側に接する竪穴で削平と土取りのため北部の床面幅約1~2mが残るに過ぎず、西側も70号により失われる。東西に長い長方形をなすと思われるが全体プランは不明。北側辺の現存長さ約4.4m、西側辺は約1.8mを測り。東北部には不明確ながらベッド状が認められ壁際には壁溝が高る。中央付近から南側を消失しが跡や土坑の有無については明らかではないが、支柱は2本と判断される。両支柱穴はいずれもやや深く掘り込まれ、主軸方位は $N-88^{\circ}-E$ とほぼ東西を向く。出土遺物も非常に少ないが、70号竪穴出土の弥生中期の土器は本遺構に伴う可能性をもつ。

第137図1は壺の口縁と考えられ、口縁部は鋤先状を呈する。内外面ともやや粗雑なヘラミガキを施し、胎土に砂粒の少ない移入土器と思われるもの。2は安山岩を利用した磨石兼敲石。

本遺構は、弥生中期後半に属するものと考えられよう。



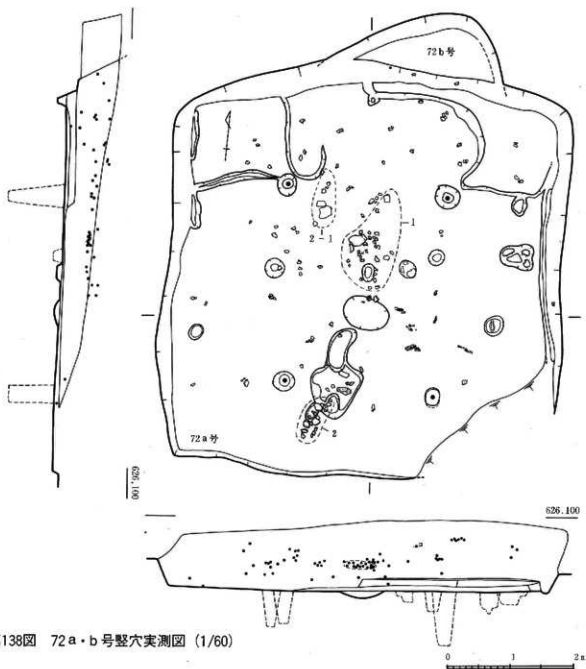
第136図 71号竪穴実測図 (1/60)



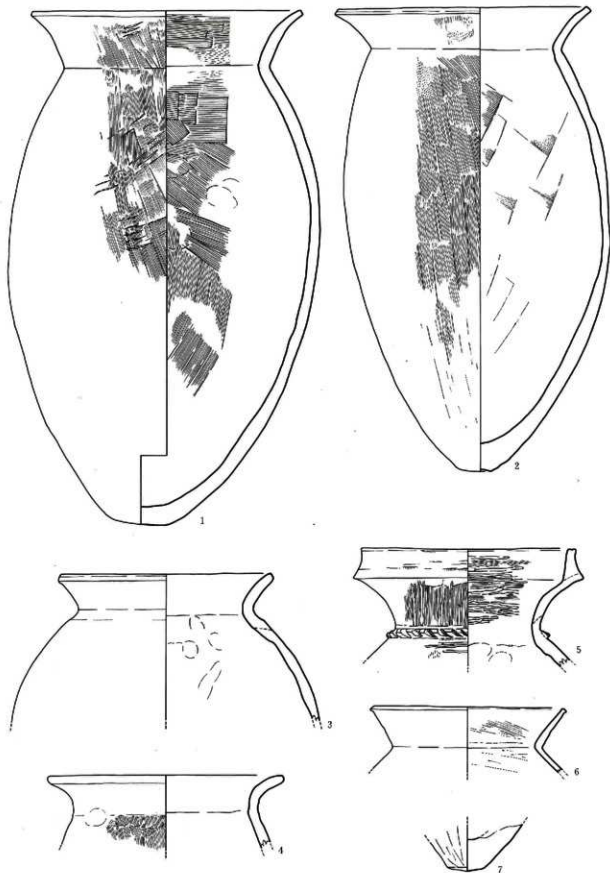
第137図 71号竪穴出土土器、石器 (1/3)

72 a・b号竪穴 (第138図)

調査区の最も南側、71号の西側約1mに位置する。a号がb号の大半を切るためb号のプランや規模等の詳細は不明である。a号の北半部分は検出面から床面まで約0.4~0.8mと深く良好に残るが、南側は削平により次第に浅くなり南東側周辺は消失する。一辺約6.2mの方形に近いプランをなし、床面積は33.6mの中規模の住居跡である。北側の両コーナーにベッド状遺構が設けられるが、いずれもやや変則形をなす。土柱は四方の4本と考えられるが、中央にも同様の規模をなす一対の柱穴が認められる。この柱穴が当初の主柱穴である場合、拡張された可能性がある。4本土柱の主軸方位はN-6°-Wでありほぼ南北を向く。中央やや南に長軸約0.7mの楕円形をなし深さ0.1m余りの炉跡が、その南西側には二段掘りの不定形土坑が認められる。この土坑は一般的な壁際土坑の位置と異なりやや浅いことから如に付属するものと思われる。内部からはやや多くの遺物が出上しているが、第139図1・2等の完形に近い土器はいずれも床面より約0.2m余り浮いた位置から検出された。炭化物なども同一レベルで出土していることから、埋戻しの途中における廃絶祭祀と内部への遺物投棄が行われたと考えられよう。



第138図 72 a・b号竪穴実測図 (1/60)



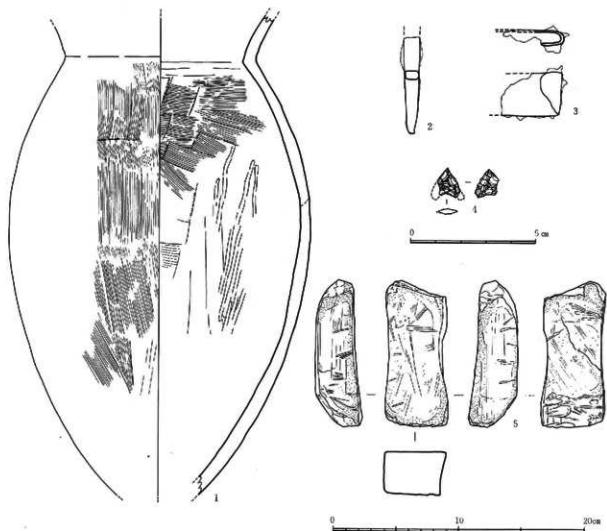
第139圖 72a・b号豎穴出土土器1 (1/3)

0 10 20cm

第139図1は竪穴の北側から破壊された状態で検出された甕で全体の約半分に接合した。口縁部は細く外反して開き、胴部はやや膨らみをもつ長胴を呈し底部は平底に近い丸底をなす。外面はタタキののち縦方向のハケ、内面は斜・横方向のハケによる。口径21.4cm、器高40.5cm、胴部最大径21.4cmを測り、胎上に石英を多く含む移入土層。2は土坑の南側からまともに出てきた破片がほぼ完形に接合した甕、反転して開く口縁部から長胴の胴部に続き底部は小さく窪む平底をなす。外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる。口径23.1cm、器高36.4cm、胴部最大径20.9cmを測り、やや多くの角閃石・長石・灰色粒と金雲母を少々含む。3は内外面ナデ調整を主とし粗製甕に類似するが、胎上に石英を多く含むことから大野川流域産ではない移入品。4は口縁部の開きが大きい甕でこれも胎土に石英を含む。5は複合口縁甕の口縁から胴部片。口縁部はやや短く直立し胴部と胴部の境に刻み突帯を施し、内外面ともハケののちミガキを加える。角閃石・長石・茶色粒を含む。6は直線的に外に開く口縁部から大きく張り出す胴部に続くと思われる外米系甕、胴部内面はヘラケズリによる。7は尖底に近い底部をなすもので、外面は浅いケズリによる調整により胎上は在地系。

第140図1は北西部主柱穴の東側から出土した甕で口縁部と底部を欠く。外面は縦方向のハケ、内面はハケののちミガキを部分的に加える。角閃石・長石・金雲母を含む。2は鉄鎌の茎部で、現長3.7cm。3は両端を折り曲げる手鎌片で、幅1.7cm・現長2.3cm。5は頁岩製の砥石で4面を使用する。

以上の土器から a 号は弥生終末から古墳初期に、b 号は複合口縁甕から弥生後期中葉の時期に考えられよう。



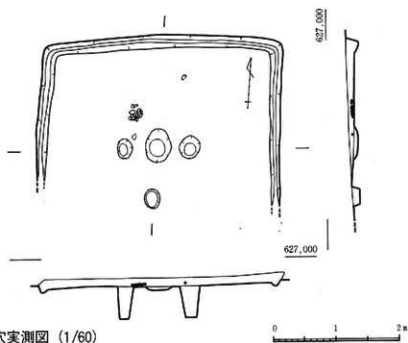
第140図 72a・b号竪穴出土土器 2 (1/3)、鉄器 (2/3)、石器 (2/3、1/3)

73号竪穴 (第141図)

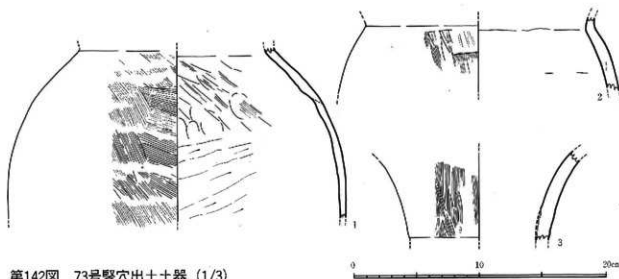
72号の北側約4mに位置する小形の竪穴である。削平により南側を失うが長辺3.8m、短辺は現長2.6mであるが約3mの長方形プランに復原されよう。現存する各辺には塹溝が認められ、推定床面積は約10㎡。中央に長軸約0.5mの楕円状をなす方跡があり、その左右にやや深い2本の主柱穴が設けられる。主軸方位はN-87°-Eとほぼ東西を向く。炉跡の南側には小形楕円形の土坑が配置されるが、他に施設は認められなかった。出土遺物は少ないが、第142図1-3はほぼ床面に接し検出され、埋戻しの前に行われた祭祀に使用されたものと判断される。

第142図1は西側主柱穴の北側から掘り出された甕で口縁部と胴部下半を失う。外面は斜・横方向のハケにより、内面はヘラケズリを刃部付近まで施す。胎上に石英を多く含む移入品。2は甕の肩部で、3は複合口縁甕の頸部でいずれも在地系胎上による。

本竪穴は付属施設的性格が考えられ、古墳時代前期前半の所産か。



第141図 73号竪穴実測図 (1/60)



第142図 73号竪穴出土土器 (1/3)

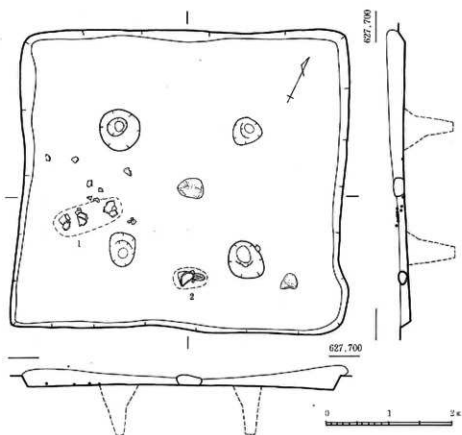
74号竪穴 (第143図)

73号の北々西約20mに位置する。長辺約5.2m、短辺約4.8mの長方形をなし検出面から床面までは約0.1~0.3mで削平を受ける。壁溝は見られず床面積は21.12㎡の中規模竪穴である。4本支柱の各支柱穴には抜き取り跡が認められ、主軸方位はN-66°-E。炉跡や土坑については検出されなかった。

出土遺物も豊富ではないが、第144図1の口縁部を欠く壺は南西部支柱穴の西北から分割された状態で検出され、2の底部は南側支柱穴の中間の床面に接し出土した。これらの土器は竪穴の埋戻しに先立ち行われた祭祀に使用ののち投棄されたものと考えられる。

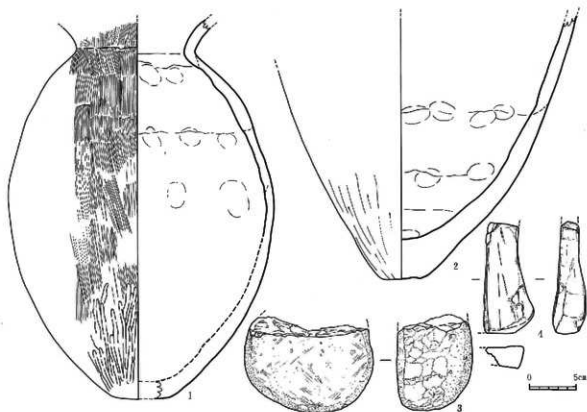
第144図1はレンズ状をなす底部から張り出しのやや大きい胴部に至り、頸部で反転し口縁部に続く壺。外面は縦方向のハケののち底部周辺にミガキを加え、内面はナデによる調整。器壁がやや厚く、胎土に角閃石・長石・灰色粒などを多く含む地系。2は壺の底部と思われるもので、不安定でやや厚い平底をなす。内外面はナデ調整によるが、底部周辺は浅いケズリによる。1と同様の砂粒を多く含み、内外にススとコゲが付着している。3は一方の主面と側面を利用する磨石兼蔽石で安山岩を石材とする。4は砂岩製の砥石片、両主面と側面を利用する。

本竪穴は出土土器から弥生後期後葉に比定されよう。



第143図 74号竪穴実測図 (1/60)

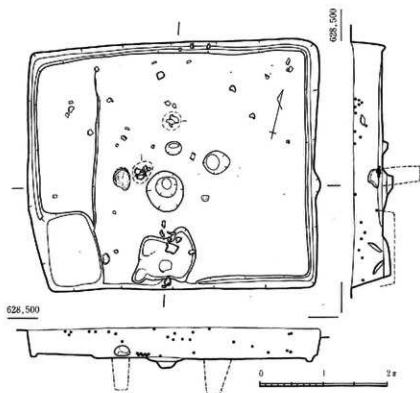




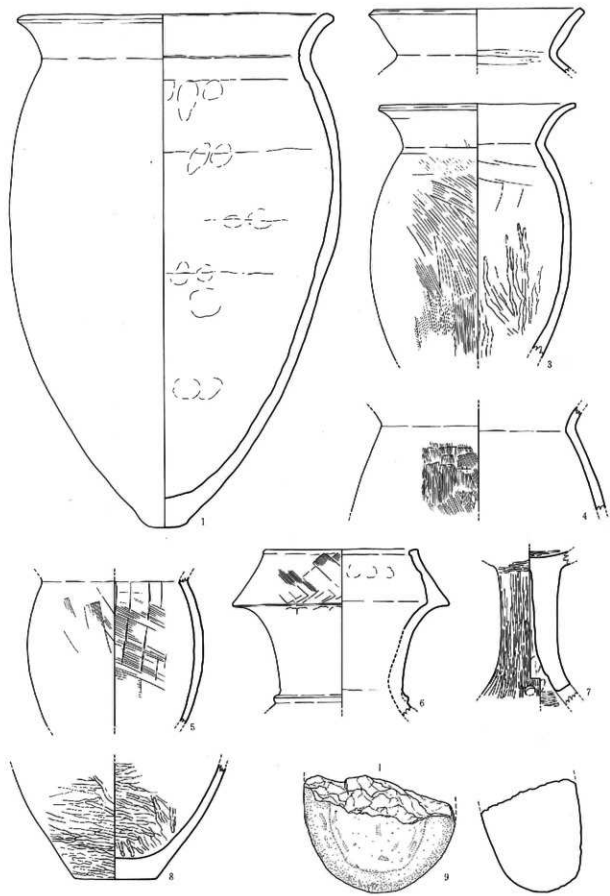
第144図 74号竪穴出土土器、石器(1/3)、砥石(1/4)

75号竪穴 (第145図)

74号の北側約10m、調査区の西北部に位置する小形の竪穴である。長辺4.3~4.6m、短辺3.8~3.9mを測り、検出面から床面までは約0.4mと比較的良好に残る。壁溝は南西部と南壁側上坑の手前で途切れる他は全周し、床面積は15.12㎡。中央やや南寄りに直径約0.6mの二段掘りの炉跡があり、その東西内側に2本主柱の柱穴が設けられる。主軸方位はN-72°-E。西側主柱穴の上面は人頭大の礫(台石か)により覆われる。西側壁に並行し幅約1mのベッド状遺構が設けられるが、南西コーナー部分には1.1×0.8m、深さ0.2m余りの長方形土坑が設けられる。また、



第145図 75号竪穴実測図 (1/60)

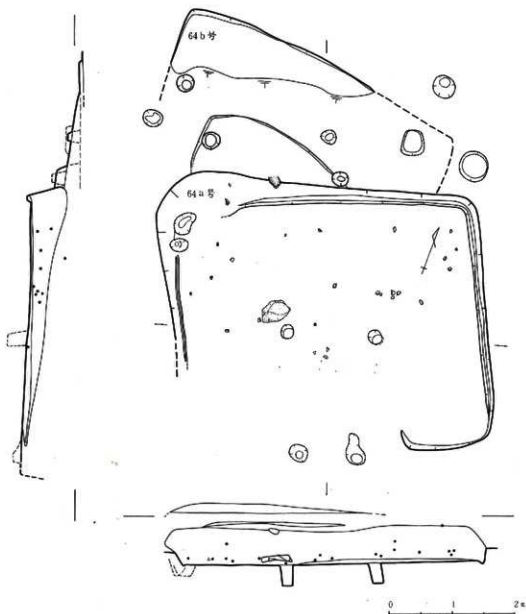


第146图 75号竖穴出土土器、石器 (1/3)

64 a・b号竪穴 (第122回)

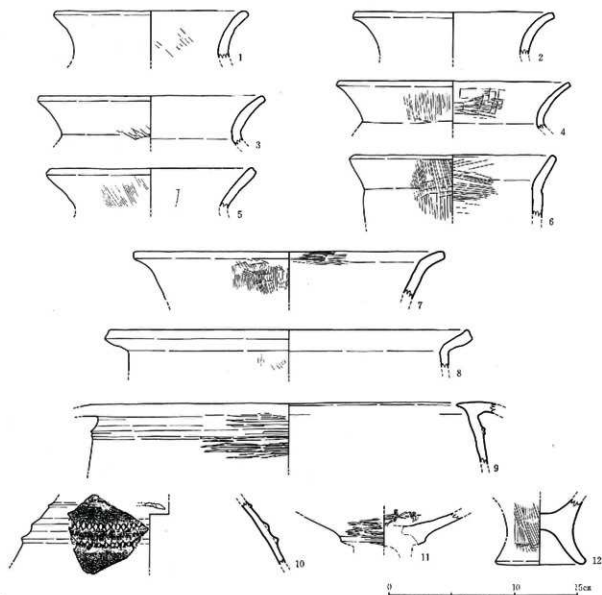
63号の北側約8mにあり65号を含め3基が重複するが水田造営時の削平により遺構の残存状態は良くない。a号がb号を切ることは間違いないが65号とa号との関係は明確ではなかった。しかし、大きく切り合わないことから時期的には近いものと考えられる。

64 a号の南半部分は消失するが長辺約5.0m、短辺約4.0mの東西に長い長方形をなし、南側を除き壁溝が巡らされる。復原床面積は17.48㎡。中軸よりやや南側に2本主柱の柱穴が設けられ、主軸方位はN-75°-E。加跡や土坑は検出されなかったが、南壁側中程に一对の小形の柱穴が設けられる。やや浅いことから出入口の梯子穴の可能性がある。出土遺物は少なく、土器も全て小片であり竪穴の廃絶祭祀を示すものは認められなかった。第123回1～5は本竪穴に伴うと考えられる甕の口縁部片。1は外反する口縁部の開きがやや弱く、2～4は次第に大きく開く。5はほぼ直線的に開く口縁部をもつ。これらの胎土は角閃石・長石・灰色粒などを含む在地系。6はa号に帰属するか明らかではないが直線的に開く口縁部の開きは弱く、胴部もほとんど張り出さない小形の在地系甕である。1～5からすれば弥生後期中葉から後半の所産か。



第122回 64 a・b号竪穴実測図 (1/60)

64b号は中央部から南側をa号により完全に尖い、残存部も削平により床面も部分的に残るのみとなる。二段掘りの竈穴であるが支柱穴や炉跡・土坑なども不明であり、平面プランについても復原不能と言える。出土遺物もほぼ皆無の状態であるが、第123図7～12はa号に混入したと考えられる上器で本竈穴に伴う可能性を有するもの。7は口縁部が短く屈折して開く甕で、8は跳ね上げ状口縁をなす移人系甕。9は口縁部断面がT字状に近い外面丹塗りの甕で、頸部に1条のM字状突帯を巡らす。10は胴部上半に3条の三角形刻口突帯を巡らす甕の胴部片。11は高杯の杯底部片で脚部との境に突帯を施し、内外面ともミガキののち丹塗り。12は黒髪式甕の底部であり、石英を多く含む。これらの土器にはやや時期幅が認められるが、弥生中期後半に置かれるものと考えられ本竈穴もここに属するものであろう。



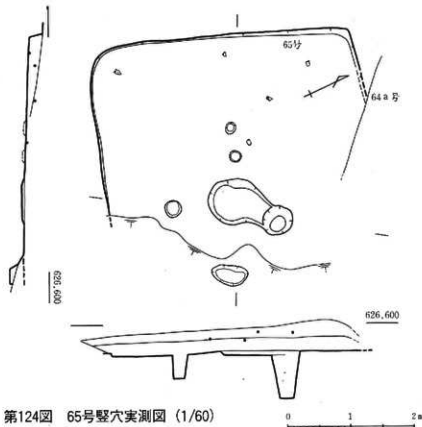
第123図 64a・b号竈穴出土土器 (1/3)

65号竪穴 (第124図)

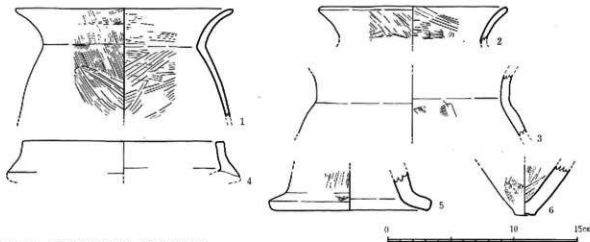
64a号の南西部に重なり検出段階では本竪穴が先行すると思われたが逆である可能性が高い。中央部から東側は削平が床面の下まで及ぶが、小形長方形の竪穴と考えられる。西側辺4.2m、南側辺の現存長約2.5mを測り、壁溝はない。主柱穴は南北方向の2つと判断され、主軸方位はN-33°-E。抜取り痕跡が見られる北側主柱穴に接し、竪跡と思われる長軸約1mの不整形円状の掘込みが認められる。が跡の東側には楕円形の土坑の下部が残る他に内部施設は検出されなかった。本遺構に伴う遺物も少なく、特異な情況も示さない。

第125図1は緩く反転して延びる口縁から長胴の胴部に続く甕で、胴部の張りだしは口径より僅かに張ると思われる。内外面ともハケ長生により、角閃石・灰色粒を含む在地系。2も同様の器形をなすと考えられる甕口縁部片で胎土は在地系。3は2と類似する胎土をなす甕の胴部片。4はやや短く内傾する複合口縁甕の口縁部で角閃石・長石を含む。5は高坏の脚部で裾部は屈折して短く外に開く。6は在地系甕の底部であり、外底部が僅かに窪む小形の平底を呈する。

これらの土器から本竪穴は弥生後期後葉に置かれよう。



第124図 65号竪穴実測図 (1/60)



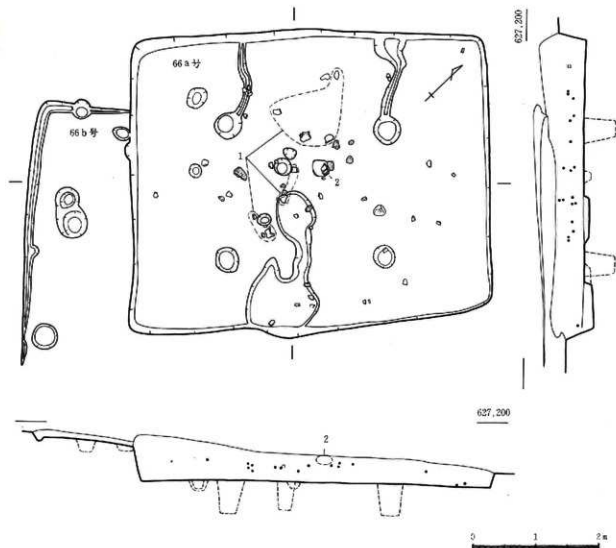
第125図 65号竪穴出土土器 (1/3)

66 a・b号竪穴 (第126図)

65号の南西約10mに位置し2基が重複するが、b号はa号と削平により遺構の大半を尖い平面形や規模・構造等は不明となる。

a号は長辺5.6~5.8m、短辺4.2~4.7mの長方形プランをなし検出面から床面までは約0.2~0.7mと遺存状態は比較的良好である。壁溝はもたず床面積25.76m<sup>2</sup>と中規模の住居跡である。4本主柱の方位はN-43°-E。主柱穴には抜取りと思われる痕跡が観察されるものもあり、北側の2主柱穴からは北壁に向かう小溝が蛇行するように設けられている。中央部に長軸0.7m余りの楕円状をなし深さ約0.1mの炉跡があり、これと東壁側の不定形土坑は溝状の掘込みにより結ばれている。

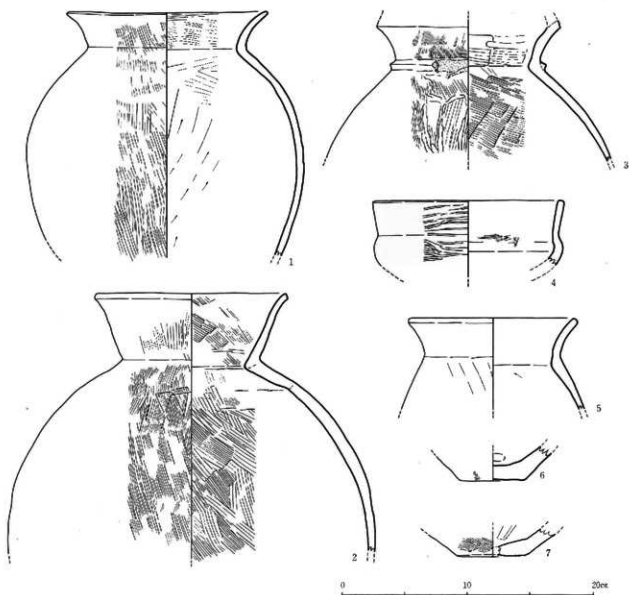
出土遺物は覆上の中へ上層に多く第127図1の壺は8片に別れやや広く分布していたものが接合し、2の壺の大形破片は中央の検出面に近い位置からまともな検出された。この2点は煙灰し終了間際に行われた祭祀に使用・投棄されたものと考えられよう。第127図1は底部周辺を失う壺。緩く外反して開く口縁部から頸部で反転し球形に近い張りだしをもつ胴部に続く。外面は縦方向のハケ、内面は右上がりのヘラケズリと横のハケによる調整。口径22cmを測り、角閃石・長石・石英などを含む移入土器。2は外に開く口縁の端部付近が外反し、締まりのやや強い頸部から肩の張った球形の胴部に至る長頸壺。外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる。胎土に灰色粒・赤色粒を多く、角閃石・金雲母を少々ふくむ。3は在地系複合口縁壺の頸部から胴部と



第126図 66 a・b号竪穴実測図 (1/60)

の境に三角形突帯を巡らせ末端を下垂させ、外面は縦方向のハケののち粗いミガキを加える。4は1縁部が僅かに外に開く鉢、外面は横のミガキののち丹塗りで砂粒の少ない移入土器。これらの土器から、a号は古墳時代前期前葉でもやや新しい時期に属せよう。

b号は西側から北側にかけて巡る壁溝から長方形のプランと推定されるが、主要部を失うため確実ではない。内部に残る柱穴はいずれも浅く支柱穴や炉跡などについては不明である。遺物もほぼ皆無であるがa号内部から出土した第127図5～7は本遺構に伴う可能性がある。5は剛きの弱い口縁から口径より張り出す長胴の胴部に続くと考えられる甕。6・7は甕又は壺の底部でいずれもやや浅い平底を呈し、6は移入品で7は在地系と思われる。これらの土器から、b号は弥生後期前葉頃の所産と考えられる。

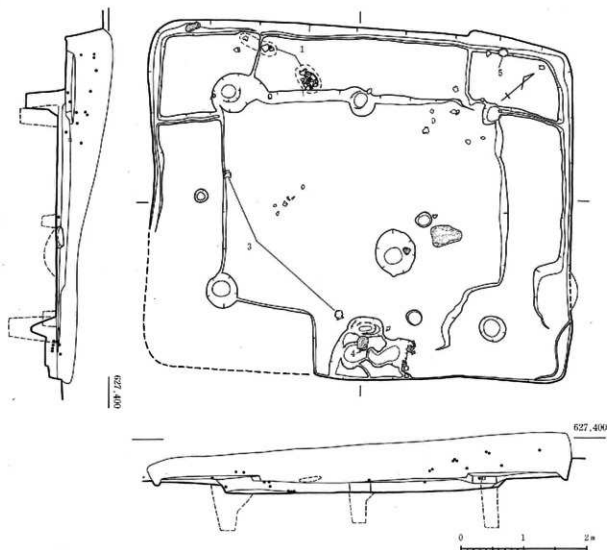


第127図 66号竪穴出土土器 (1/3)

67号竪穴 (第128図)

65号の北西約2mに位置する長方形プランの竪穴であるが南側コーナー付近を削平により失う。長辺約6.8m、短辺約5.5mの長方形を呈し、南側側面を除き幅1m前後のベッド状遺構が設けられ、北側の向コーナー部分はこれよりさらに一段高いベッド状をなす。南側面以外には埃溝が巡り、床面積は33.28㎡と中規模の中でも大きい住居跡である。主柱は四方の4本と考えられるが、長辺側のほぼ中間に主柱穴よりやや規模の小さい補助柱穴が各1つ設けられている。各柱穴には柱の抜取り跡を残すものが多く、主軸方位はN-44°-E。炉跡は中央やや南東にあり直径0.65mの不整形をなし、深さは0.15m余りの皿状の断面を呈する。南側中央の壁に接し床面が三段となる不定形土坑があり、内部からは第129図4の複合I線壺の大形胴部片が検出された。また、第129図1の甕は北西部主柱穴の東側ベッド状遺構の床面から約0.1m余り浮いた所から破碎・分割された情況で検出され、3の山陰系二重口線壺は土坑近くと北西部主柱穴の南東の二か所に分かれ、5の完形の甕は北東部ベッド状遺構の壁溝の上位から各々出土し埋戻しの前に行われた廃絶祭祀を窺わせる。

第129図1は底部周辺を失う甕、開きの弱い口縁部から卵球形の胴部に至り器面はハケ調整による。ススやコゲが付着し、胎上に角閃石・金雲母・赤色粒などを含む。2は口径10.6cmの小形の甕でやや強く外に開く口縁から球形の胴に至り、胎土は在地系か。3は山陰系二重口線壺で胴部外面は縦方向のハケののち横ハケを加え、内面はヘラケズリによる。移入品と思われるが着炊きで使用されている。4は複合I線壺の頸部から胴部片、外面

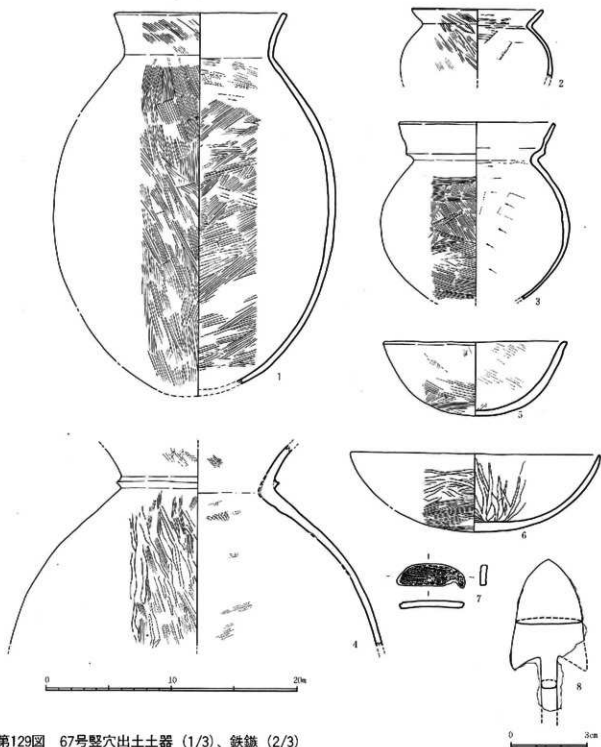


第128図 67号竪穴実測図 (1/60)



は縦方向のハケののち粗いミガキを加える在地系。5は口径14.8cm、器高5.3cm余りとやや深い完形碗、内外面ハケ調整により角閃石・長石・赤色粒を含む。6は口径10.8cm、器高6.2cmとやや大きい碗で外面はハケののち、内面はナデののち粗いミガキを加える。金雲母を含むことから移入品と思われる。7は土坑内部から出土した土器片加工品。8は有茎錐状三角形鉄鏃、現長6.0cm、鏃身最大幅約3.0cm。

本壜穴は、古墳時代前期前葉 ~~中葉~~ に置かれる。

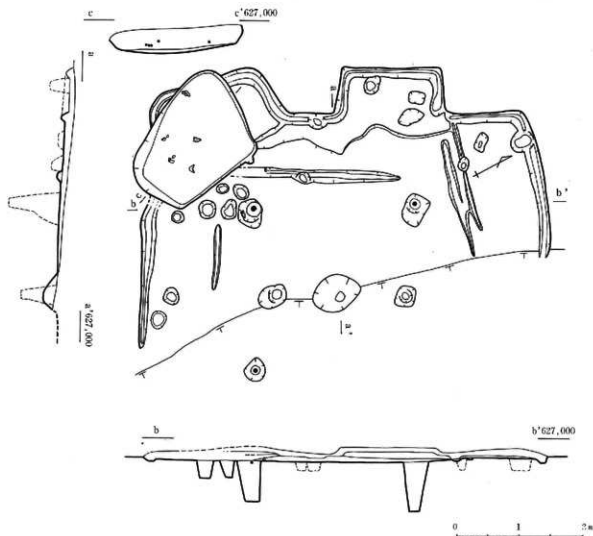


第129図 67号壜穴出土土器 (1/3)、鉄鏃 (2/3)

68号竪穴 (第130図)

66号の南竪約8mに花弁型住居跡であるが東半部分は土取りにより失い、南西突出部分は弥生後期の上坑により切られる。また削平を受けており余体プランは不明である。西側に二か所の突出部が設けられ、北側は基部幅約1.8m、長さ約0.8mの長方形を呈する。南側突出部の基部幅は土坑に切られるため明確ではないが約2m前後と推定され長さは約1m。主柱穴は4本と考えられるが東北部主柱穴は消失し、主軸方位はN-28°-E。炉跡は主柱穴間のほぼ中心に位置し長軸約0.8m、深さ約0.2mの楕円状を呈する。その左右にはやや深い小形の柱穴一対があり炉とセットをなすものと思われる。主柱穴の外側には主柱穴内部の空間を区画するように小溝が掘られ、北側は二重となり壁溝と交差する。これらの溝は途中で途切れるが削平が床面まで及んでいることから、当初は二段掘りの内部を区画したものであったと考えられる。竪穴出土の遺物は少なく共存する可能性がある遺物は第131図5~7と9の石鏃のみであり、その他の図示したものは土坑からの出土である。

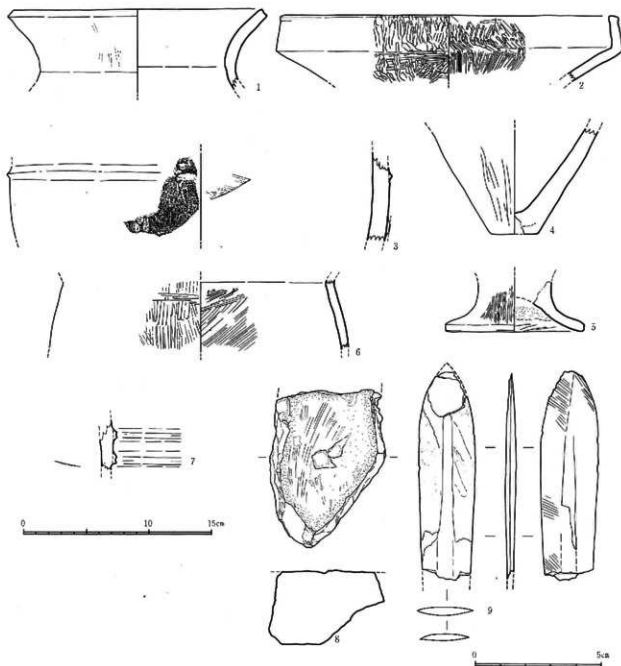
第131図1は緩く外反転して開く莖の口縁部片でやや膨らみをもつと思われる胴部に続く。2は短く内傾する高坏の口縁部片、器面はハケののち丁寧なミガキによる調整。3は胴上下にJ字状の突帯を貼付する粗製製の胴部片である。4はやや小形の平底をなす甕の底部で胎土は在地系。5は黒髪式の甕底部。脚部は反転してやや強く張り出し内面に砂型痕跡を明瞭に残すもので、角閃石・石英などを含む移入土器。6はあまり張り出さない甕胴部片、器壁がやや薄く内外ともハケを主とする調整。7は2条のM字状突帯を巡らす甕又は甕の胴部片で砂粒



第130図 68号竪穴実測図 (1/60)

を殆ど含まない。8は砂岩製の砥石片で1面のみの使用である。重量が1Kgを超えることから平置き砥石と思われる。9は柳葉形をなすと思われる磨製石鏃で先端と基部を欠く。身の中央には柄の着装痕跡が認められ、現存長8.2cm、身の最大幅2.3cmを測る。

本堅穴の時期は5～7から弥生中期後半に、土坑は弥生後期中葉に置かれよう。



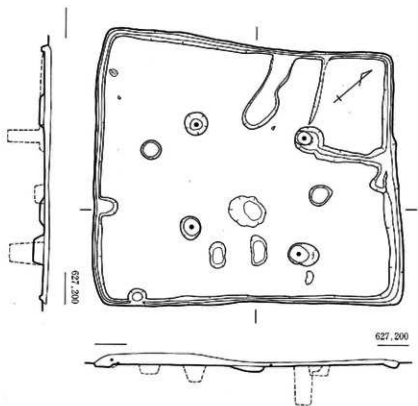
第131図 68号堅穴出土土器、石器 (1/3)、(9.2/3)

69号竪穴 (第132図)

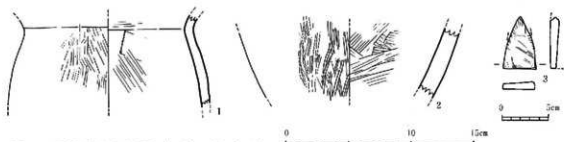
68号の西側約1mに隣接する住居跡である。長辺4.6~4.8m、短辺4.0~4.4mの台形に近い長方形を呈し、検出面から床面までは5cm前後と全体に削平されている。壁溝は全周するが東側壁溝から東北部主柱穴に延びる小溝が掘られ、床面積は17.1㎡と小形の竪穴である。4本主柱の東側両主柱穴には抜取り跡が認められ、その主軸方位はN-45°-E。中央やや南東に長軸0.6mの不整楕円状の浅い炉跡があり、これに近接し一対の楕円状をなす柱穴が伴う。明瞭な上坑は形成されず、出土遺物も少ない。

第133図1は長胴をなす甕の胴部片で張り出しはやや弱く、内外面ともハケ調整を主とする。胎土に金赤母・白色粒・赤色粒を含む。2も甕の胴部下半部で外面は縦方向のハケののち粗いミガキを加える。角閃石・長石・灰色粒を含む在地系。3は頁岩製小形砥石片で、片方の主面のみを使用する。

これらの土器から時期の決定を行うにはやや躊躇するが弥生後期であることは疑いない。



第132図 69号竪穴実測図 (1/60)

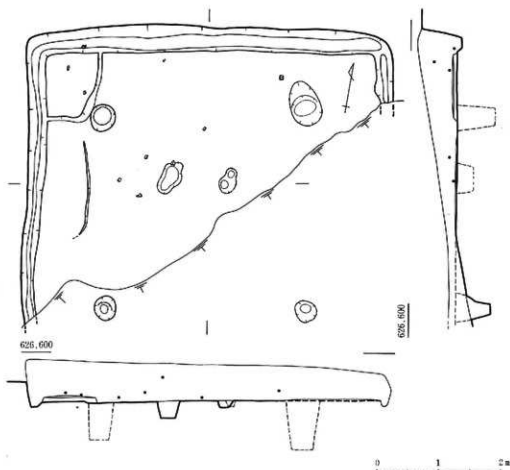


第133図 69号竪穴出土土器 (1/3)、他 (1/4)

70号竪穴 (第134図)

69号の南側約4mにあり西側を71号と重複しこれを切って営まれる。北東部から南西部にかけては水田造成による土取りを大きく受けて床面も消失するが、南側の両主柱穴の下部は辛くも残存する。現存する竪穴北西部分は比較的好く残り、検出面から床面までは0.4~0.6mと深い。主柱穴に位置と北側長辺から約6×5.5mの長方形をなす住居跡に復原され、現存の各壁には味噌が巡り推定床面積は26.5m<sup>2</sup>。主軸方位はN-81°-E、東北部主柱穴には抜き取り痕跡が認められる。北西コーナー部分には約1×0.8m、高さ5cm余りのベッド状遺構が主柱穴と接し設けられる。炉跡や土坑は検出されず、中央の小形不定形ピットは竈に付属するものではない。出土遺物もやや少なく廃絶祭祀を明らかに示す大形の土器片などは確認されなかったが、石施丁の転用品や刀子片が検出されている。

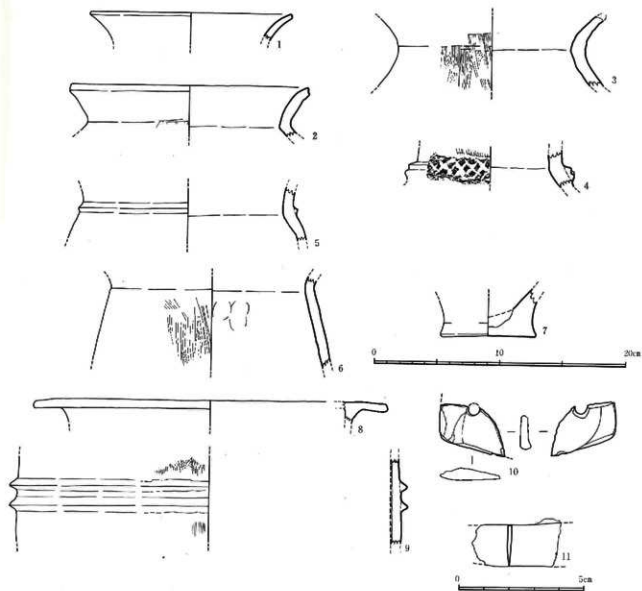
第135図1・2は竈の口縁部片でやや開きの大きいもの。胎土に角閃石・長石・灰色粒などを含む在地系と思われる。3は1線端部を欠くがやや張り出した胴部に続く壺の口縁から胴部片。外面は縦方向のハケにより内面はナデ調整で、金雲母・角閃石・長石・赤色粒を含む。4は短頸壺の頸部と考えられ、胴部との境に突帯を巡らせX字状の刻目を加える。大粒の石英や角閃石・赤色粒を含む移入土器である。5は粗製壺と思われるものの頸部から胴部片で三角形の突帯を巡らせ、胎土に角閃石・灰色粒を含む在地系。6~8は混入と見られる弥生中期の土器片。6は壺の胴部で金雲母を含み、7は安定した平底をなし胎土は在地系。8はT字状口縁を呈すると思われる壺の口縁部片で、角閃石・長石・灰色粒などを含む在地系。9は複合口縁壺の胴部片、2条の三角形突帯を巡らせ胎土は8とはほぼ同様である。



第134図 70号竪穴実測図 (1/60)

10は石施丁の背部から身の部分を砥石に転用したと考えられるもので、孔の周辺から刃部にかけて研面が明瞭となる。11は刀子の刃部で先端と基部を欠き、刃部幅1.7cm、現存長3.6cm。

本壑穴も時期判定の資料に乏しいが3の壑から弥生後期後半の所産と考えられよう。



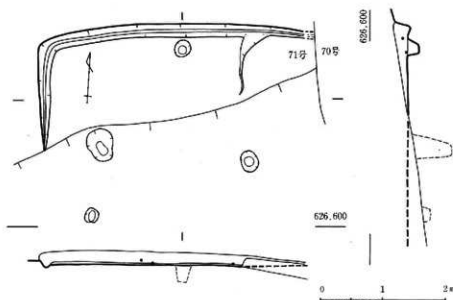
第135図 70号壑穴出土土器 (1/3)、石器、鉄器 (2/3)

71号竪穴 (第136図)

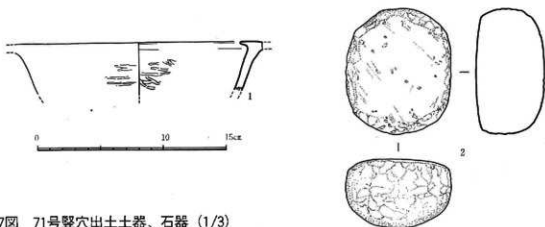
70号の西側に接する竪穴で削平と土取りのため北部の床面幅約1~2mが残るに過ぎず、西側も70号により失われる。東西に長い長方形をなすと思われるが全体プランは不明。北側辺の現存長さ約4.4m、西側辺は約1.8mを測り。東北部には不明確ながらベッド状が認められ壁際には壁溝が高る。中央付近から南側を消失しが跡や土坑の有無については明らかではないが、支柱は2本と判断される。両支柱穴はいずれもやや深く掘り込まれ、主軸方位はN-88°-Eとほぼ東西を向く。出土遺物も非常に少ないが、70号竪穴出土の弥生中期の土器は本遺構に伴う可能性をもつ。

第137図1は壺の口縁と考えられ、口縁部は鋤先状を呈する。内外面ともやや粗雑なヘラミガキを施し、胎土に砂粒の少ない移入土器と思われるもの。2は安山岩を利用した磨石兼敲石。

本遺構は、弥生中期後半に属するものと考えられよう。



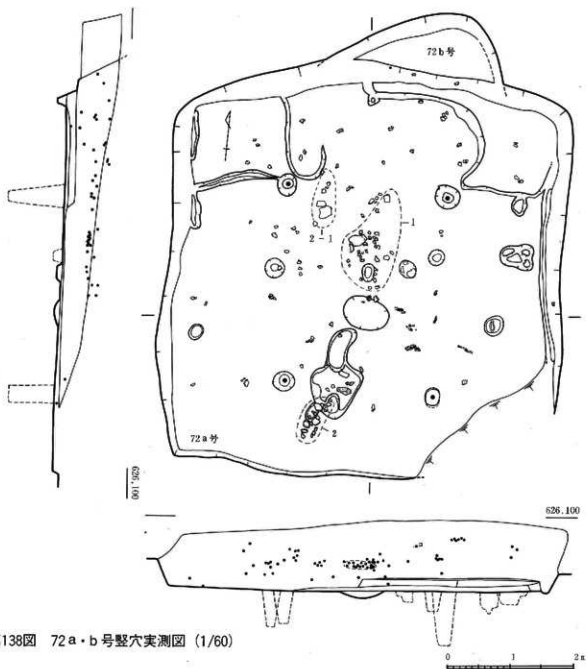
第136図 71号竪穴実測図 (1/60)



第137図 71号竪穴出土土器、石器 (1/3)

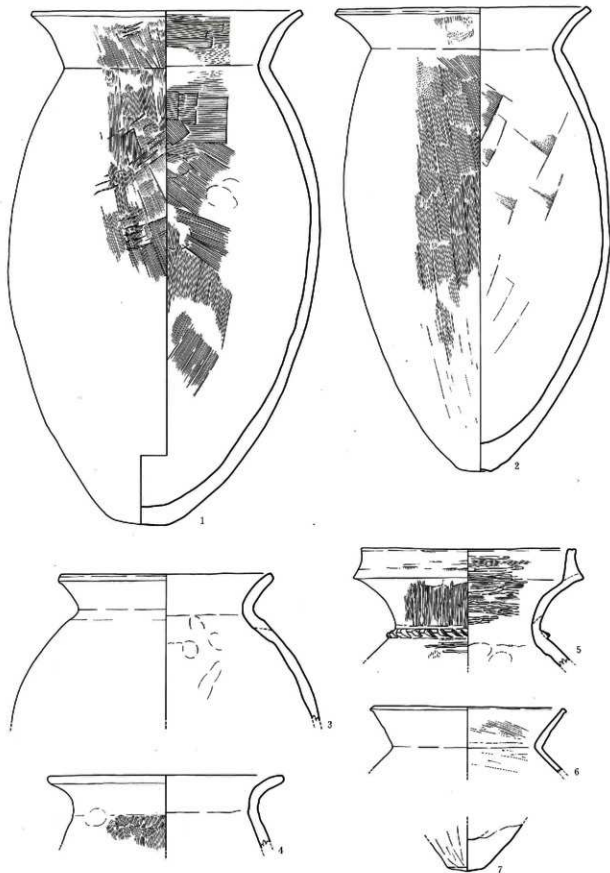
72 a・b号竪穴 (第138図)

調査区の最も南側、71号の西側約1mに位置する。a号がb号の大半を切るためb号のプランや規模等の詳細は不明である。a号の北半部分は検出面から床面まで約0.4~0.8mと深く良好に残るが、南側は削平により次第に浅くなり南東隅周辺は消失する。一辺約6.2mの方形に近いプランをなし、床面積は33.6mの中規模の住居跡である。北側の両コーナーにベッド状遺構が設けられるが、いずれもやや変則形をなす。土柱は四方の4本と考えられるが、中央にも同様の規模をなす一対の柱穴が認められる。この柱穴が当初の主柱穴である場合、拡張された可能性がある。4本土柱の主軸方位はN-6°-Wでありほぼ南北を向く。中央やや南に長軸約0.7mの楕円形をなし深さ0.1m余りの炉跡が、その南西側には二段掘りの不定形土坑が認められる。この土坑は一般的な壁際土坑の位置と異なりやや浅いことから如に付属するものと思われる。内部からはやや多くの遺物が出上しているが、第139図1・2等の完形に近い土器はいずれも床面より約0.2m余り浮いた位置から検出された。炭化物なども同一レベルで出土していることから、埋戻しの途中における廃絶祭祀と内部への遺物投棄が行われたと考えられよう。



第138図 72 a・b号竪穴実測図 (1/60)





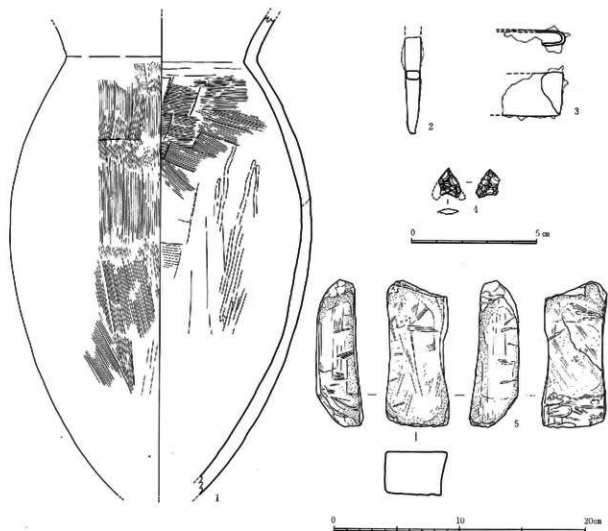
第139圖 72a・b号豎穴出土土器1 (1/3)



第139図1は竪穴の北側から破壊された状態で検出された甕で全体の約半分に接合した。口縁部は細く外反して開き、胴部はやや膨らみをもつ長胴を呈し底部は平底に近い丸底をなす。外面はタタキののち縦方向のハケ、内面は斜・横方向のハケによる。口径21.4cm、器高40.5cm、胴部最大径21.4cmを測り、胎上に石英を多く含む移入土層。2は土坑の南側からまともに出てきた破片がほぼ完形に接合した甕、反転して開く口縁部から長胴の胴部に続き底部は小さく窪む平底をなす。外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる。口径23.1cm、器高36.4cm、胴部最大径20.9cmを測り、やや多くの角閃石・長石・灰色粒と金雲母を少々含む。3は内外面ナデ調整を主とし粗製甕に類似するが、胎上に石英を多く含むことから大野川流域産ではない移入品。4は口縁部の開きが大きい甕でこれも胎土に石英を含む。5は複合口縁甕の口縁から胴部片。口縁部はやや短く直立し胴部と胴部の境に刻口突帯を施し、内外面ともハケののちミガキを加える。角閃石・長石・茶色粒を含む。6は直線的に外に開く口縁部から大きく張り出す胴部に続くと思われる外米系甕、胴部内面はヘラケズリによる。7は尖底に近い底部をなすもので、外面は浅いケズリによる調整により胎土は在地系。

第140図1は北西部主柱穴の東側から出土した甕で口縁部と底部を欠く。外面は縦方向のハケ、内面はハケののちミガキを部分的に加える。角閃石・長石・金雲母を含む。2は鉄鎌の茎部で、現長3.7cm。3は両端を折り曲げる手鎌片で、幅1.7cm・現長2.3cm。5は頁岩製の砥石で4面を使用する。

以上の土器から a 号は弥生終末から古墳初頭に、b 号は複合口縁甕から弥生後期中葉の時期に考えられよう。



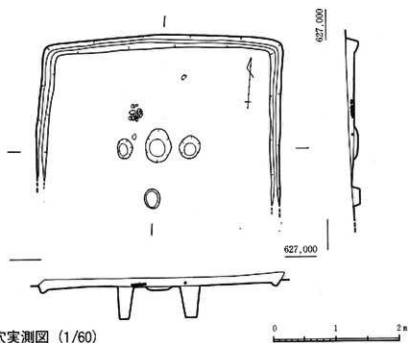
第140図 72a・b号竪穴出土土器 2 (1/3)、鉄器 (2/3)、石器 (2/3、1/3)

73号竪穴 (第141図)

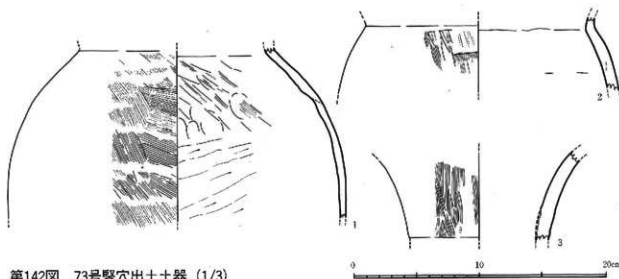
72号の北側約4mに位置する小形の竪穴である。削平により南側を失うが長辺3.8m、短辺は現長2.6mであるが約3mの長方形プランに復原されよう。現存する各辺には塹溝が認められ、推定床面積は約10㎡。中央に長軸約0.5mの横円状をなす跡があり、その左右にやや深い2本の支柱穴が設けられる。主軸方位はN-87°-Eとほぼ東西を向く。炉跡の南側には小形楕円形の土坑が配置されるが、他に施設は認められなかった。出土遺物は少ないが、第142図1-3はほぼ床面に接し検出され、埋戻しの前に行われた祭祀に使用されたものと判断される。

第142図1は西側支柱穴の北側から掘り出された甕で口縁部と胴部下半を失う。外面は斜・横方向のハケにより、内面はヘラケズリを刃部付近まで施す。胎上に石英を多く含む移入品。2は甕の肩部で、3は複合口縁甕の頸部でいずれも在地系胎上による。

本竪穴は付属施設的性格が考えられ、古墳時代前期前半の所産か。



第141図 73号竪穴実測図 (1/60)



第142図 73号竪穴出土土器 (1/3)

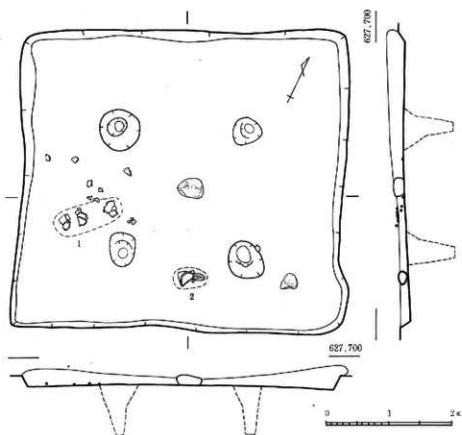
74号竪穴 (第143図)

73号の北々西約20mに位置する。長辺約5.2m、短辺約4.8mの長方形をなし検出面から床面までは約0.1~0.3mで削平を受ける。壁溝は見られず床面積は21.12㎡の中規模竪穴である。4本支柱の各支柱穴には抜き取り跡が認められ、主軸方位はN-66°-E。炉跡や土坑については検出されなかった。

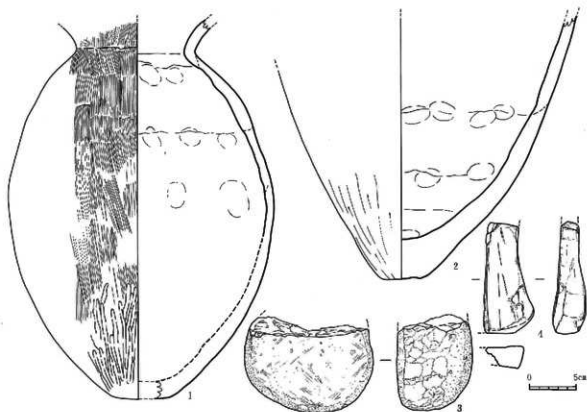
出土遺物も豊富ではないが、第144図1の口縁部を欠く壺は南西部支柱穴の西北から分割された状態で検出され、2の底部は南側支柱穴の中間の床面に接し出土した。これらの土器は竪穴の埋戻しに先立ち行われた祭祀に使用ののち投棄されたものと考えられる。

第144図1はレンズ状をなす底部から張り出しのやや大きい胴部に至り、頸部で反転し口縁部に続く壺。外面は縦方向のハケののち底部周辺にミガキを加え、内面はナデによる調整。器壁がやや厚く、胎土に角閃石・長石・灰色粒などを多く含む地系。2は壺の底部と思われるもので、不安定でやや厚い平底をなす。内外面はナデ調整によるが、底部周辺は浅いケズリによる。1と同様の砂粒を多く含み、内外にススとコゲが付着している。3は一方の主面と側面を利用する磨石兼蔽石で安山岩を石材とする。4は砂岩製の砥石片、両主面と側面を利用する。

本竪穴は出土土器から弥生後期後葉に比定されよう。



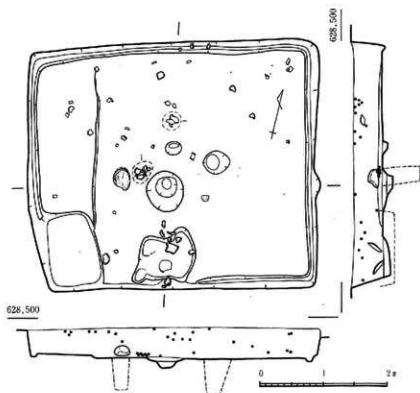
第143図 74号竪穴実測図 (1/60)



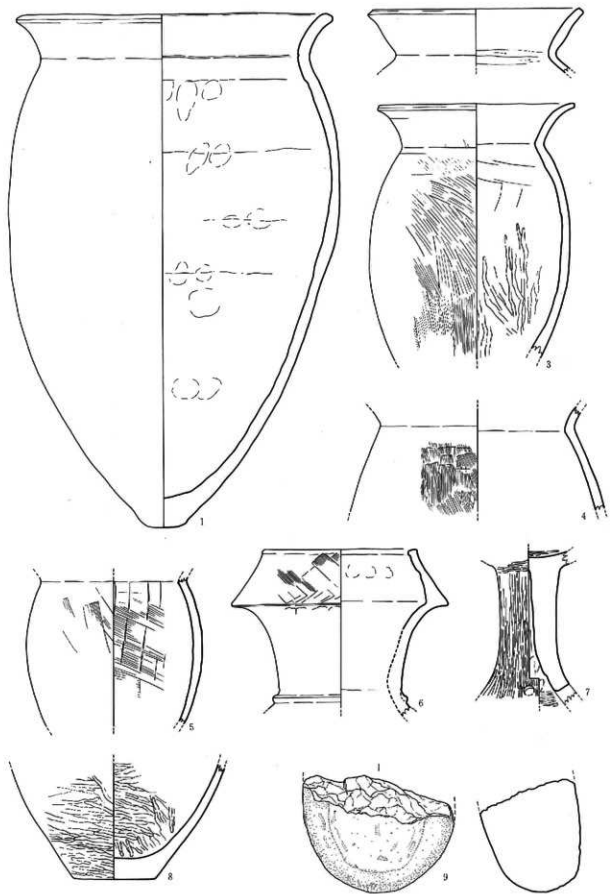
第144図 74号竪穴出土土器、石器(1/3)、砥石(1/4)

75号竪穴 (第145図)

74号の北側約10m、調査区の西北部に位置する小形の竪穴である。長辺4.3~4.6m、短辺3.8~3.9mを測り、検出面から床面までは約0.4mと比較的良好に残る。壁溝は南西部と南壁側上坑の手前で途切れる他は全周し、床面積は15.12㎡。中央やや南寄りに直径約0.6mの二段掘りの炉跡があり、その東西内側に2本主柱の柱穴が設けられる。主軸方位はN-72°-E。西側主柱穴の上面は人頭大の礫(台石か)により覆われる。西側壁に並行し幅約1mのベッド状遺構が設けられるが、南西コーナー部分には1.1×0.8m、深さ0.2m余りの長方形土坑が設けられる。また、



第145図 75号竪穴実測図 (1/60)



第146图 75号豎穴出土土器、石器 (1/3)

南側中央部には壁面と接する約0.9×0.6mの不定形土坑があり、この内外から第146図1の甕が分割された状態で出土した。3の底部周辺を欠く甕は伊勢の北側から、6の胴部を失う複合口縁甕は伊勢と西側主柱穴の間の床面から破砕された状態で検出されている。これらの土器は竪穴埋戻し前の廃絶祭祀に使用・遺棄されたものと見做されよう。

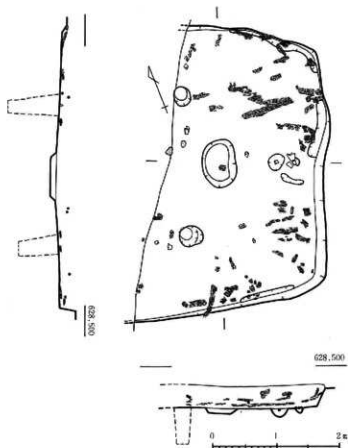
第146図1は緩く反転して外に開く口縁部から長割でわずかに膨らみをもつ胴部に続き、底部は小形で不安定な平底を呈する粗製甕。角四石・長石・灰色粒を多く含む在地系で、1径25cm・器高40.4cmを測る。2は検出面からの出土で混入の可能性が強いと考えられる甕、金雲母を含むことから外来系か。3も在地系と思われる甕で胴部の膨らみは弱く底部周辺を欠く。4・5も同様の器形を呈すると思われる甕の胴部片で胎土は在地系。6はより直線的に内傾する口縁部をもつ複合口縁甕の口縁から頭部で角四石・長石・灰色粒を含む在地系。7は高坏の筒状をなす脚柱部で丁寧なミガキを主調整とし、角四石・長石・白色粒を含む。8は内外面とも横方向のミガキによる鉢の底部（平底）で胎土は在地系か。9は安山岩製の磨石兼敲石。

1・3の甕や6・8から本竪穴は、弥生後期後葉の時期に置かれよう。

#### 76号竪穴（第147図）

調査区の西端部、75号の西側約2mに位置する。遺構の西半部分は調査区の外に続くため全体プランは明らかでない。西側辺の長さは3.6m、南側の現存長3.2m、北側辺の現長2.1mを測り、やや削平を受けているが検出面から床面までは約0.1～0.4m。主柱は断定できないものの2本と思われ、主軸方位はN-20°-E。主柱穴間の東側に長軸0.75m、短軸約0.5mの楕円状を呈し、深さ0.07m余りの伊跡が認められる。部分的に壁際に溝状の掘込みがあるが明確な壘溝ではなく、土坑などの施設も検出されなかった。

内部からは垂木などの屋根材と判断される炭化材が東側の床面よりやや浮いた位置から検出されたが、梁・桁材などの主要部材は認められず主柱も採取されたものと考えられる。従って、焼失住居ではなく主柱・

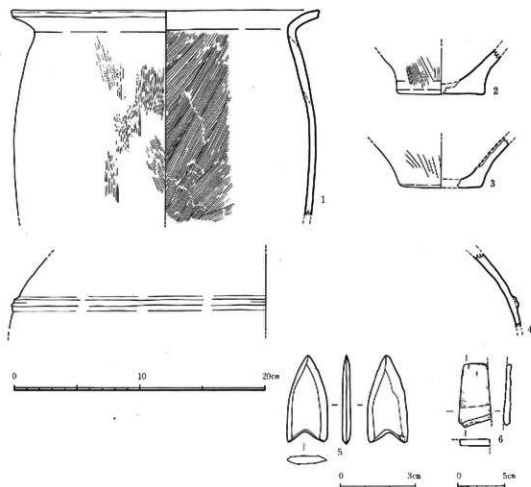


第147図 76号竪穴実測図 (1/60)

梁・桁等の主要部材を撤去した後に残余の尻根材を焼却し、その後に竪穴の埋戻しを行ったものと理解される。また、第148図1の胴部下半部分を欠く甕は焼却以前の祭祀に伴う可能性がある。

第148図1は炭化材より下位から出土した甕である。口縁部はく字状に屈曲して開き、口径より張り出さないが膨らみをもつ胴部に続く。外面は縦方向のハケ、内面は斜方向のハケによる調整。口径24.6cmを測り、石英や金雲母等をおく含む移入土器。2・3は平底をなす甕の底部で、いずれもやや薄い底部となり胎土は在地系か。4は甕の肩部で断面が台形に近い突帯を巡らせ、胎土は2と類似する。5は三角磨製砥石で基部は凹基をなし、長さ3.5cm、基部幅1.1cm、厚さ0.25cm。6は頁岩製砥石片、主面は砥ぎにより非常に平滑となる。

本竪穴は出土土器から弥生後期前葉の所産と考えられよう。



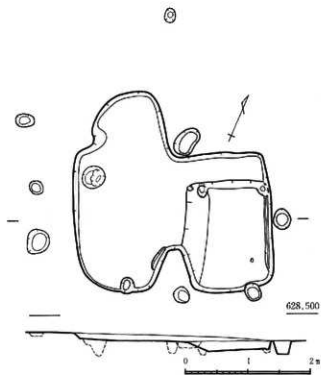
第148図 76号竪穴出土土器(1/3)、石器(2/3)、砥石(1/4)



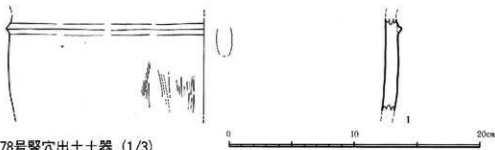
78号竪穴 (第149図)

75号の南東約5mに位置する小形変則形の竪穴である。平面形は長軸3.2m、短軸1.5mの楕円形と2.1×1.3m余りの長方形が接合した変則プランをなし、長方形部分は二段掘りとなる。全体に削平を受けているため検出面から床面までは約0.1~0.2mと浅く、二段目の西側壁には壁溝が付設されるが炉跡や土坑は確認されなかった。遺構の内外には浅いピットが10数個検出されているが主柱穴の特定は不能である。現状では類似遺構の存在は他に認められず住居跡とは異なることは明らかであるものの、その性格を示す遺物等の出土もない。

出土遺物は若干の土器小片に過ぎないが第150図は粗製甕の胴部片である。胴部のやや上位に三角突帯を巡らせ、外面はハケにより内面はナデ調整。角閃石・長石などの砂粒を多く含む地系土器で、弥生中期から後期の範疇に納まるが時期の特定は困難である。



第149図 78号竪穴実測図 (1/60)



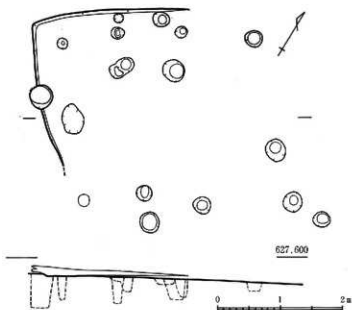
第150図 78号竪穴出土土器 (1/3)

79号竪穴 (第151図)

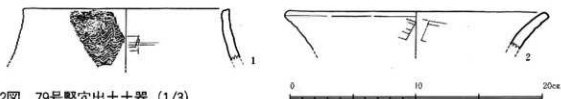
78号の南東約6m、小さい谷の西側に位置するが削平が著しく遺構の西北コーナー付近が残存するのみである。そのプランはコーナー部分がほぼ直角を呈することから長方形と推定されるが确实ではなく規模や床面積も不明である。壁溝や炉跡・土坑などの内部施設についても確認されず、支柱穴も明確にし得なかった。従って、住居跡ではなくその付属施設である可能性が高いものと思われる。

本遺構に伴う遺物も少量であり、図示可能な土器は2点に留まる。第152図2は複合口縁壺の口縁部片で、内反しながら延びるもの。外面に溝状波状文を全面に施し、角閃石・長石・灰色粒などを含む在地系。2は壺の口縁部片でやや開きが大きい。胎土に角閃石・長石・赤色粒を含み、復元口径は21cm。

これらの土器から本遺構の時期は弥生後期後葉から終末に置かれよう。



第151図 79号竪穴実測図 (1/60)



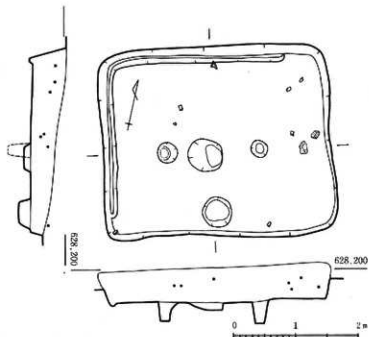
第152図 79号竪穴出土土器 (1/3)

80号竪穴 (第153図)

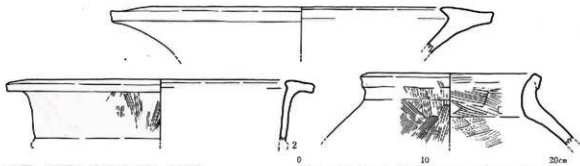
79号の北側約15mの緩斜面に位置する小形の竪穴である。長辺3.6m、短辺約3.0mを測り東西方向に長い隅丸長方形プランを示す。検出面から床面までは約0.2~0.5mと比較的残りは良いが、南側は削平により浅くなる。壁溝は西側短辺から北側長辺のみ付設され、床面積は8.58㎡。中央部南側に直径0.5m、深さ約0.15mの円形に近い跡が設けられ、その東西に2本支柱のやや深い支柱穴が隔込まれる。主軸方位はN-75°-E。南壁側の中程に直径0.45m、深さ0.2mの円形土坑が壁際に形成されている。出土遺物は少なく、土器はいずれも埋土の中〜上位からの小片であり、出土状態にも変化は観察されなかった。

第154図1は鋤先状口縁を呈する壺の口縁部、口縁部の延びはやや短い。内外面ともナデ調整により胎土に角閃石・長石・灰色粒を含む在地系。2は口縁部から胴部外面を丹塗りする甕。L字状をなす口縁部の延びや内側の突出は小さくなる。口径24.4cmを測り、角閃石や赤色粒を含む外來系か。3は反転して短く開く口縁部からやや肩の張った胴部に続く短頸壺で、81号竪穴出土の短頸壺と同一個体と考えられる。内外面ともハケを主調整とし、口径14.4cmを測り角閃石・長石などを含む。

1・2は弥生後期前葉に、3は後期後葉に比定されるものである。いずれも小片のため時期決定にやや苦慮するが、竪穴の平面形と内部施設の構成や84号と同じ時期に廃絶した付属施設であるとするれば、弥生後期後葉の所産と考えられる。



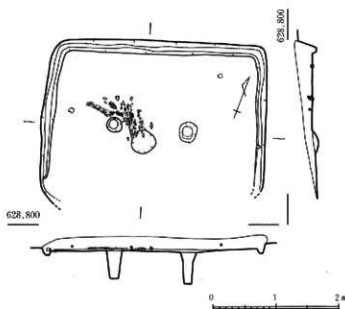
第153図 80号竪穴実測図 (1/60)



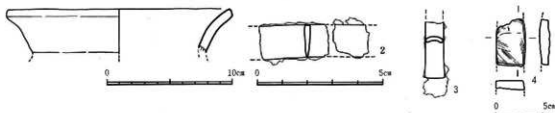
第154図 80号竪穴出土土器 (1/3)

### 81号竪穴 (第155図)

80号の北西約2mにある小形の竪穴で南側長辺は削平により消失する。長辺約3.5m、短辺約2.6mの長方形プランに復原され、推定床面積は7.68㎡で最小規模の一つ。現存の各辺には壁溝が廻り、中央部に直径約0.4mの断面が皿状をなす炉跡がある。炉跡のやや北側の東西に2本の主柱穴があり、方位はN-74°-Eと80号と近い。遺物は少ないが、炉跡から西側主柱穴にかけ炭化物の集中が認められた。第156図1は緩く外反して開く甕I縁部で、胎土は在地系。2は刀子の刃部片で、3は裏すきがカーブする鉋片。4は頁岩製砥石片で手持ち用か。本竪穴の時期も断定し難いが弥生後期後半に属するものと思われる。



第155図 81号竪穴実測図 (1/60)

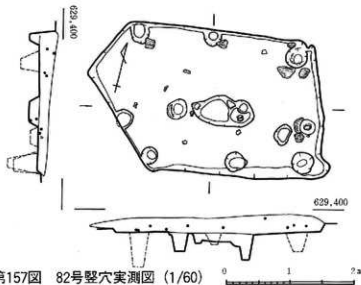


第156図 81号竪穴出土土器 (1/3)、鉄器 (2/3)、砥石 (1/4)

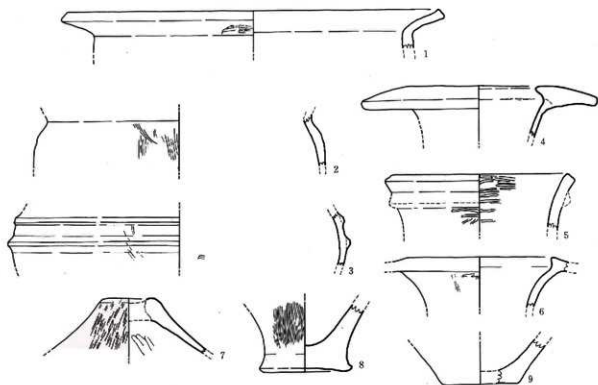
### 82号竪穴 (第157図)

81号の北東約3mに位置する。平面形は西側に突出部をもつ五角形に近い変則形をなすが、この平面形が本来のものであるのか削平によるものなのかは不明である。本来の場合、床面積は6.54㎡と本遺跡で最小である。中央部に楕円状を呈する炉跡があり、炉跡の東部と西側に一対をなすと考えられる柱穴を伴う。主柱は南北の噴際に設けられた6本と判断され、抜き取り痕跡が認められるものもある。方位はN-80°-E。内部からはやや多くの上器が出上している。第158図1は跳ね上げ状I縁の退化したと見られる甕I縁部で胎土は在地系。2はやや厚の張る甕胴部片で同様の胎土による。3は突帯を巡らす蓋の胴部で、4・6は鋤先状を示す甕のI縁部。5は長頸甕の口縁で、7は蓋と思われるもの。8・9は平底なす甕と甕の底部。

これらの上器から、本遺構は弥生中期後半から終末に置かれよう。



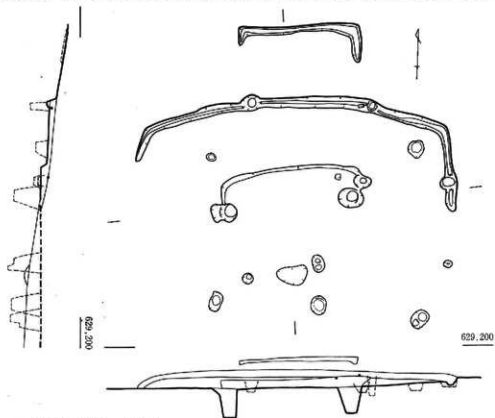
第157図 82号竪穴実測図 (1/60)



第158図 82号竪穴出土土器 (1/3)

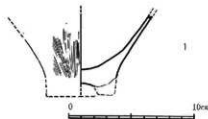
83号竪穴 (第159図)

80号と82号の中間に位置する竪穴であるが、中央付近から南側は床面の下位に至るまで削平を受ける。全体プランは明確ではないが、三段掘りの竪穴で北側に小溝により区画されたと考えられる約2.0×1.2mの突出部が認



第159図 83号竪穴実測図 (1/60)

められることから花卉型又は変則プランの住居跡である。溝の南側は削平のため途切れるが、その延長部にあたる二段目の壁溝内にはこれと関連すると思われる小形の柱穴が設けられる。二段目も北辺とその周辺が残るのみで、北辺はやや外にカーブし長さは4.8mを測る。幅1.0~1.2m余りのコ字状に巡ると思



第160図 83号竪穴出土土器 (1/3)

われるがはっきりしない。三段目も北辺周辺しか残存しないが方形又は長方形をなすものと思われ、南側に楕円状を呈する如跡の下部が僅かに残る。如跡の東西にある小形の柱穴は埴に付随する可能性があり、主柱穴に比定される柱穴の2つは確認できたが他は不明である。出土遺物も非常に少ない。

第160図は上げ底状をなす甕の底部。外面は縦方向のハケ、内面はナデによる調整。角閃石・長石などの砂粒を多く含み在地系と思われる。この土器からすれば、本竪穴は弥生中期中頃から後半の所産か。

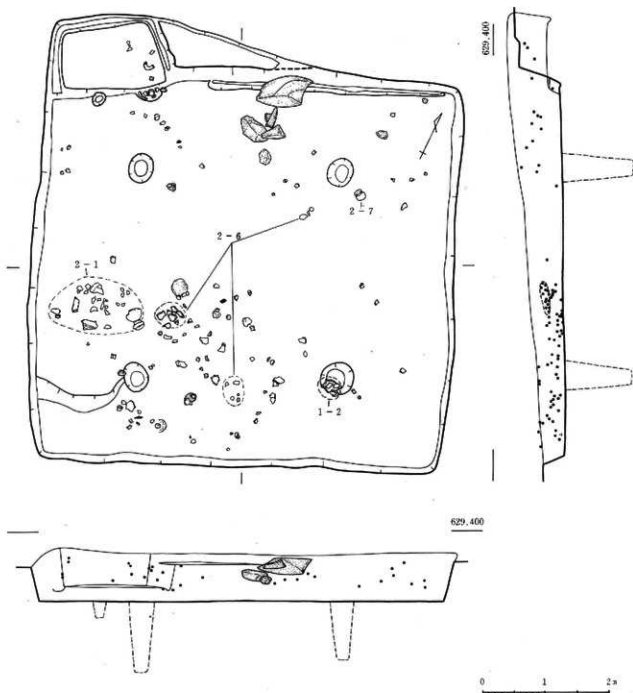
#### 84号竪穴 (第161図)

83号の東側約3mに位置する竪穴で本遺跡では最も規模が大きい。南半は削平により床面まではやや浅くなるが長辺6.4~6.6m、短辺6.2m余りの長方形プランをなし、北西隅に出入口としての突出部が設けられる。基部幅約2m、先端幅1.5mの台形状を呈し、約1m余り北側に突出し床面には埴溝が巡る。突出部の床面は竪穴内部の床面より約0.2m高く、検出面からの深さは約0.5m。この東側に認められる三角形の平坦面は竪穴の外側にあたり、本来の壁面が埋戻しの際に部分的に崩落したことによると考えられる。壁溝は出入口の東側の壁に沿って約3.8mに渡り見られるのみである。床面積は36.54㎡。4本主柱穴の主軸方位はN-65°-E。如跡や土坑については検出されなかったが、内部からは多量の遺物が出土している。土器は埋土の中位に多く、完形の第163図7の鉢は北東部主柱穴の南東部床面より約15cm上から、同図1の胴部下位を欠く大形の複合口縁甕は破砕された状況で南西部床面から約20cm程上から、第162図2の甕南東部主柱穴の上位からまともに出土している。また、中央部北壁には大きな台石状の石材が認められる。これらの遺物は竪穴埋戻しの途中における祭祀を示すと考えられ、その後土器の破壊・投棄がなされたものであろう。

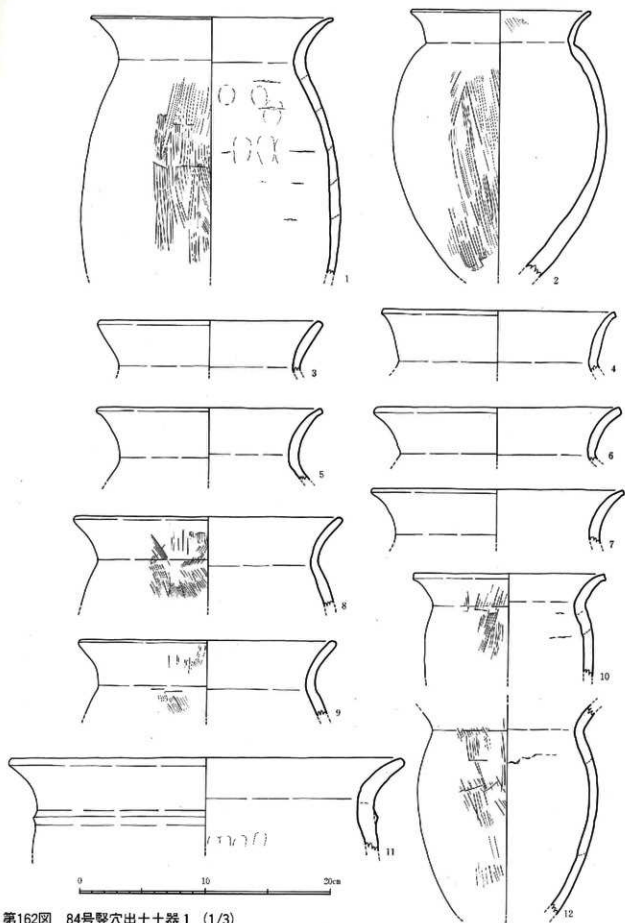
第162図はいずれも甕の口縁部から胴部片で完形に復元されるものは認められなかった。1は反転しながらやや大きく外に開く口縁部から口径より僅かに張り出す長胴の胴部に至る。外面は縦方向のハケ、内面は指オサエとナデによる調整。復元1は径19.2cm、角閃石・長石・灰色粒・赤色粒などを含む在地系。2はやや唇の張り出した胴部から緩く外反して開く口縁に続く甕で、外面の調整や胎土は1と同様である。3~9は口縁部片で器形や面壁は1・2と大差のないもの、胎土も類似するが5には金雲母が少々含まれる。10は口径15.2cmを測る小形の甕で胴部の張り出しが弱く口径をドまわる。11は粗製甕の口縁から頸部片、胴部との境にやや低い三角形の突帯を巡らせる。器壁がやや厚く、角閃石・長石・灰色粒などを多く含む在地系。12は10と同様の小形甕の胴部で金雲母を若干含む。

第163図1は大形の複合口縁甕で胴部下平を欠く。ほぼ直線的に内傾して延びる口縁部からよく締まる頸部に至り、胴部は卵球形に張り出す。胴部の中位に3条のやや高い三角形突帯を巡らせ、頸部との境にも低い突帯を施す。口縁部外面には縦方向の目のやや広いハケ、頸部から胴部には細かい縦方向のハケによる調整である。胴部内面は器面が剥落した部分が多く、1は径17.0cm、胴部最大径31.8cmを測り、角閃石・灰色粒・赤色粒などを含む在地系土器。2も同様の複合口縁甕の胴部片で3条の突帯は中程よりやや上に巡らせ、金雲母を少量含むことから移入品か。3は狭く内傾する口縁からやや締まりの弱い頸部に続く複合口縁甕、角閃石・長石・灰色粒・赤色粒などを含む。4は内外面ともハケ調整を主とする短頸甕で、80号竪穴に同一個体の破片が認められたもの。5は胴部下平が大きく張り出す小形甕で、類似は少なく胎土は在地系。6は卵球形の胴部から口径の小さい口縁部に至る短頸甕。口径13cm、胴部最大径22cmを測り、角閃石・長石・赤色粒を含む在地系胎土による。7はほぼ

完形の小形。短く外に開く口縁部から球形の胴部に至り、底部は丸底をなす。口径11.5cm、器高13.3cmを測り、全体に器壁がやや厚い在地系の胎土を示す。8は在地系高坏の脚部で外面はハケのちミガキによる調整。第164図1～14は壺及び壺の底部。1・2は平底をなすが3は尖底に近いもの。4・5は丸底を呈し、6は丸底の外側がやや窪むもの。7は小形の平底の外側が僅かに窪み、8・9は小形円盤状の平底の外側が窪む。10～12はやや大形の壺の底部で、丸底に近い平底をなすものと窪むをもつ円盤状平底をなす。13・14は壺の底部と考えられ、平底に近いもの。これらの底部の胎土はいずれも在地系である。15は鉤の身部で裏すきが形成されており、現存長2.8cm、幅0.9cm。16は姫島黒曜石を石材とする打製石鏃。17は砂岩製砥石片で、18は安山岩製の磨石兼敲石。これらの土器は弥生後期後葉に置かれ、本竪穴もこの時期の所産と考えられよう。

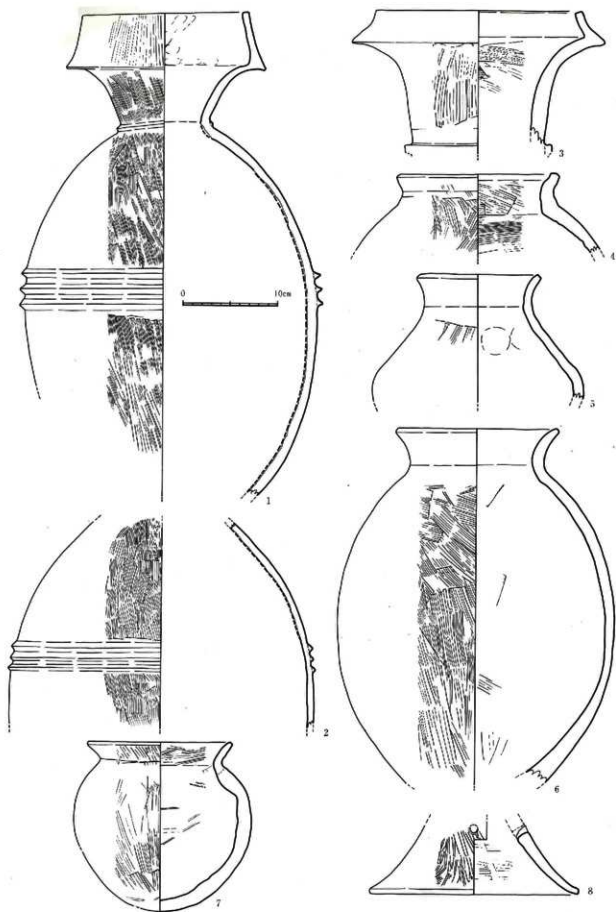


第161図 84号竪穴実測図 (1/60)

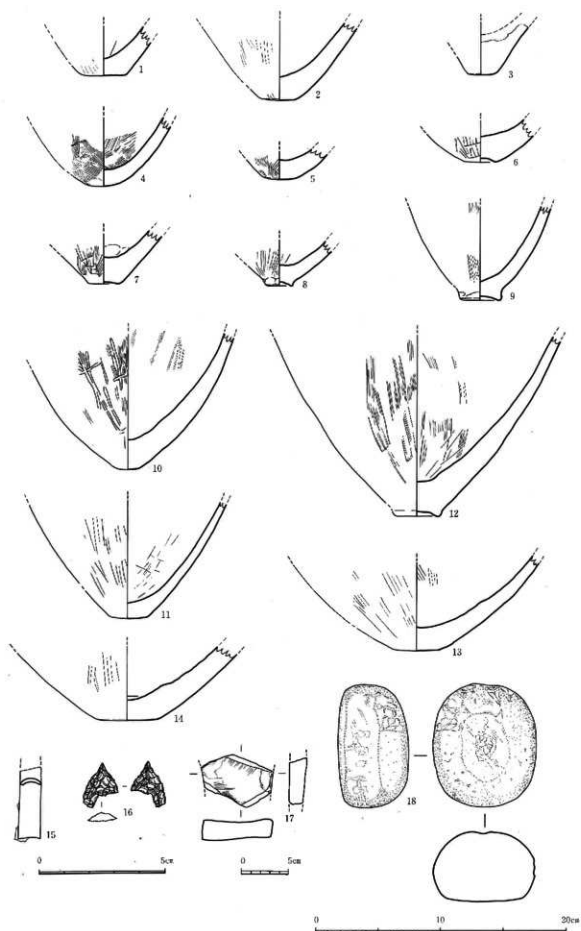


第162图 84号竖穴出土土器1 (1/3)





第163图 84号竖穴出土土器 2 (1·2.1/4、他1/3)

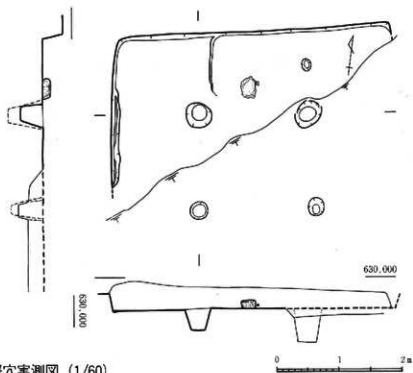


第164图 84号竖穴出土土器 3 (1/3)、他 (15·16.2/3.17.1/4.18.1/3)

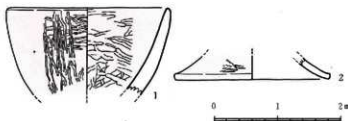
85号竪穴 (第165図)

83号の北西約8mに位置し87号を切って形成されるが、土取りにより竪穴の北東部から南西にかけて大半を消失する。現存するのは北側長辺(4.3m)から西側短辺の中程(2.3m)に留まるが、主柱穴の位置などから長辺約4.5m・短辺約4mの長方形プランをなすものと考えられる。壁溝と思われる小溝は西側に部分的に見られるが、本来壁溝として掘込まれたものか竪穴形成時の工具痕かは明らかではない。4本主柱の柱穴の中で原状を保つのは西北部主穴のみであり、この他は部分的に残存する。主軸方位はN-83°-Eでほぼ東西を向く。炉跡や土坑などの遺構は不明であり、出土遺物も少ない。

第166図1は内外面丹塗りの碗である。器面調整はやや粗いミガキにより、口径12.6cmを測る。胎土に角閃石・長石・灰色粒を含む在地系。2は高坏又は鉢の脚部で、外面は丹塗り。1と胎上に砂粒を余り含まない移入土器か。これらの土器は弥生後期後葉から終末と考えられ、本竪穴もここに置かれる。



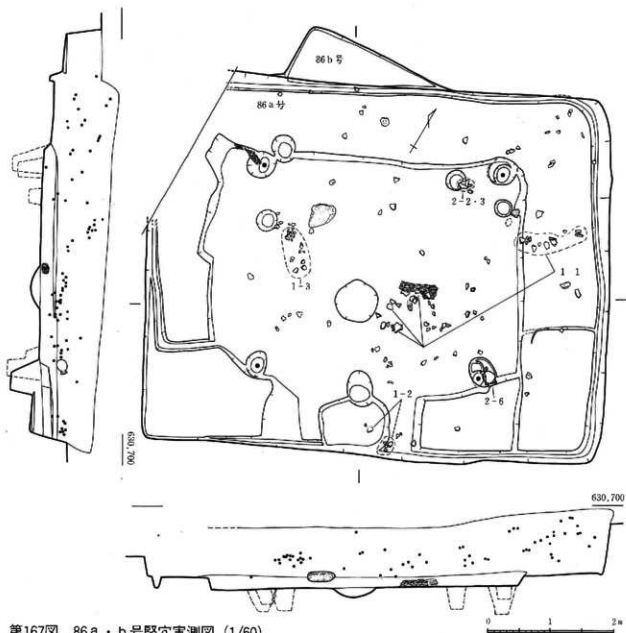
第165図 85号竪穴実測図 (1/60)



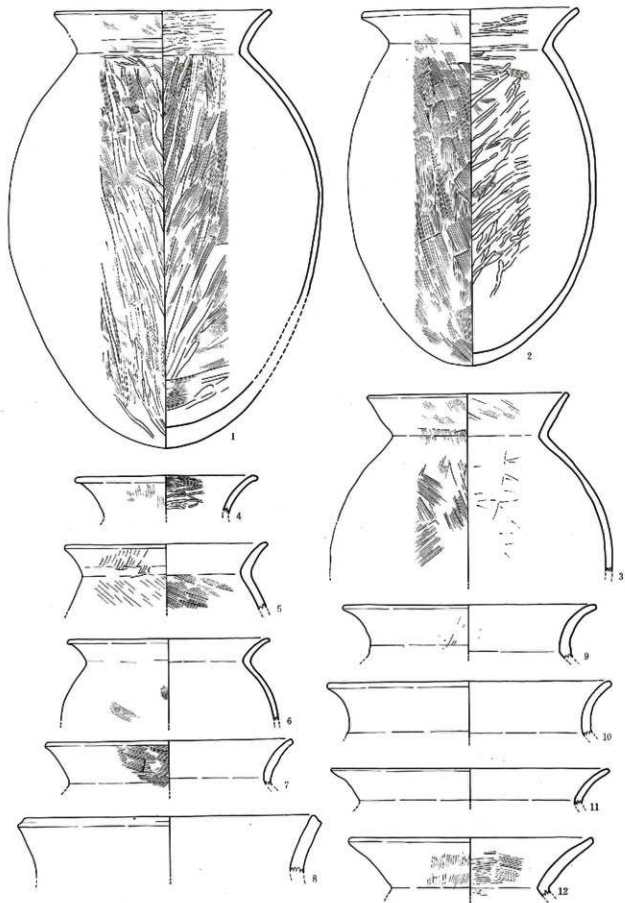
第166図 85号竪穴出土土器 (1/3)

86 a・b号竪穴 (第167図)

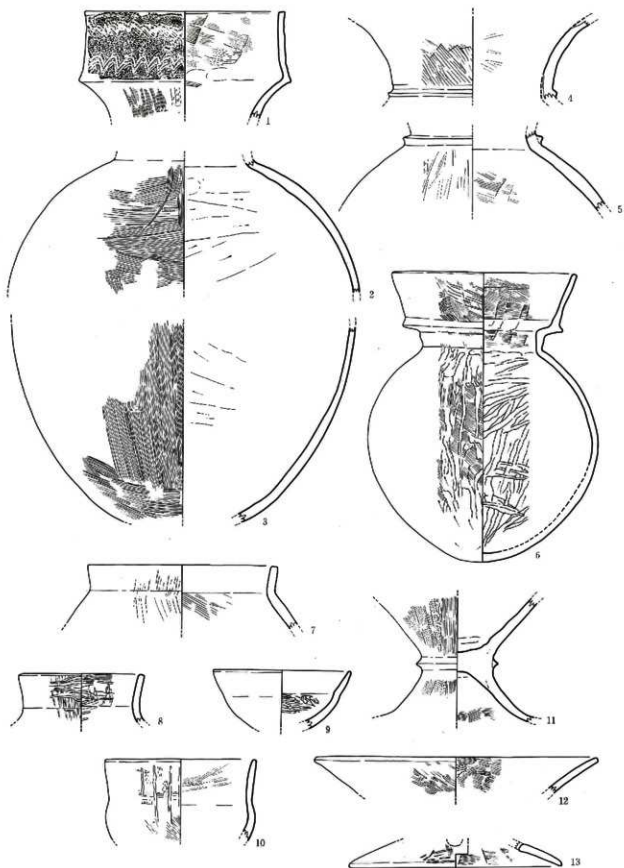
調査区西北部の最も標高の高い所に位置し、a号がb号を切り営まれるがb号のプランや構造は不明である。a号の西北コーナー付近は調査区の外に続くが長辺7.2m、短辺5.8mの長方形プランをなす。南側中央の壁面と接する土坑の周辺を除き幅0.8~1.2mのベッド状遺構が各辺にほぼ並行して設けられ、南東隅部分にはさらに一段高い二段のベッド状を呈する。喉溝はほぼ全周するが西側壁溝はコーナー部の手前で内側に屈曲しベッド状遺構を分断して終息する。復原床面積は38.5㎡。4本主柱の各主柱穴には柱の抜取り跡が認められ、N-62°-Eの方位を示す。中央やや南に直径0.7mのほぼ円形のほぼ円形をなし深さ0.15mを測る断面皿状の伊跡が認められ、その南側の壁面には長軸1.1m、短軸0.7m余りの楕円形に近い土坑がある。この土坑を切る柱穴は主柱穴と同規模であり、補助柱の可能性もある。内部からはやや多くの遺物が出土し、第169図6の完形の帯は南東部主柱穴の上位から、第168図1の甕は伊跡の東側と東側ベッド状遺構の中程から、同図2の甕は土坑とその南東部から出土した。



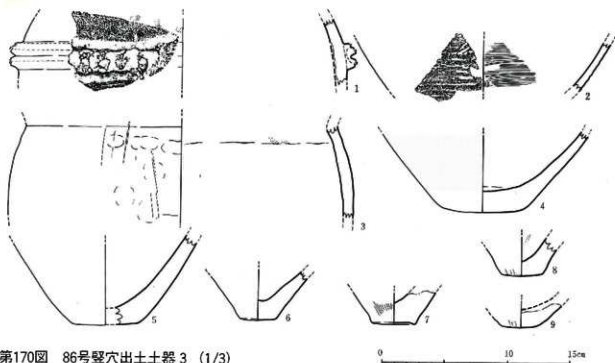
第167図 86 a・b号竪穴実測図 (1/60)



第168图 86号竖穴出土土器 1 (1/3)



第169图 86号竖穴出土土器 2 (1/3)



第170図 86号竪穴出土土器 3 (1/3)

これらは竪穴埋戻しの途中に於ける祭祀に使用・投棄されたと考えられる土器である。

第168図1はやや厚い丸底の底部からやや張り出した卵球形の胴部に至り、口縁部は僅かに外反して開く甕。内外面ともケズリ縦方向のハケ粗ミガキによる調整。復元口径17.2cm、器高34.4cmを測る移入土器か。2は長胴に近い卵球形の胴部からより直線的に里に開く甕で、外面は縦方向のハケにより内面はハケのちミガキによる。1と同様の胎土を示し、口径17.2cm、器高28.1cm。3はほぼ直線的に開く口縁部から球形に張り出す胴部に至る甕で、内面はヘラケズリによる調整。角閃石・長石・灰色粒・赤色粒等を含み在地系か。4～7の甕の口縁部片、6には石英が含まれるが外は在地系胎土による。8は粗製甕の口縁部で、9～12m在地系甕の口縁部片。

第169図1は口縁部がほぼ直立する複合口縁甕の口縁から頸部、二段の櫛播波状文を施し胎土は在地系。2と3は同一器体と思われる在地系甕の胴部、内面はヘラケズリで外面は縦方向のハケのち横のハケを加える。4は複合口縁甕の頸部で5は胴部片。6は完形の山陰系小形二重口縁甕、口縁部は直線的に斜めに開き短く締まる頸部に球形の胴部を付す。外面はハケのちミガキを加えるが底部周辺にはヘラケズリが残り、胴部内面はヘラケズリのちミガキ。口径14.6cm、器高22.8cmを測り、胎土に石英を含む移入品。7と8は短頸壺口縁部片で、9・10は小形の丸底をなすと思われる鉢。11は外来系胎土の高坏で、12・13は高坏の口縁部片と脚部片。

第170図1はb号に伴う可能性がある甕の胴部で弥生中期後半に属するものか。2は甕の胴部片で外面にタタキが見られる。3は粗製甕の胴部片で、4は甕の底部。5～9は甕の各種底部。

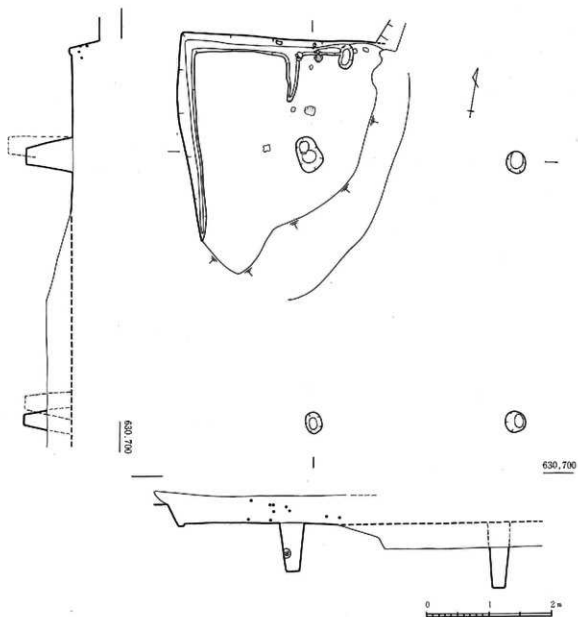
出土の土器にはやや時期幅が認められるが、二重口縁甕などから本竪穴は古墳時代前期前葉に置かれよう。

### 87号竪穴 (第171図)

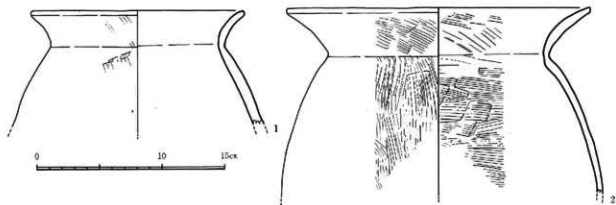
85号の北側に重複し一辺7mを越える本遺跡最大の竪穴であるが、削平等により遺構の北西コーナー付近しか現存しない。北側辺の現存長約3.2m、西側辺現存長約3.3mを測り、壁溝が設けられている。北側壁溝から北西部主柱穴に向かい延びる溝は途中で終息する。4本主柱の南北と東西の中心距離は4.1mと3.3mを測り、南北に長い長方形をなすと思われる。主軸方位はN-10°-W、北西部主穴には柱の抜取り跡が認められた。

第172図1は縦く外反して開く口縁部から口径より張り出す長胴の胴部に続く在地系甕。2も同様の器形を示す甕で内外面ともハケ調整を主とする。口径14cmを測り、石英を多く含む移入土器。

これらの土器から、本竪穴は弥生後期後半に置かれよう。



第171図 87号竪穴実測図 (1/60)



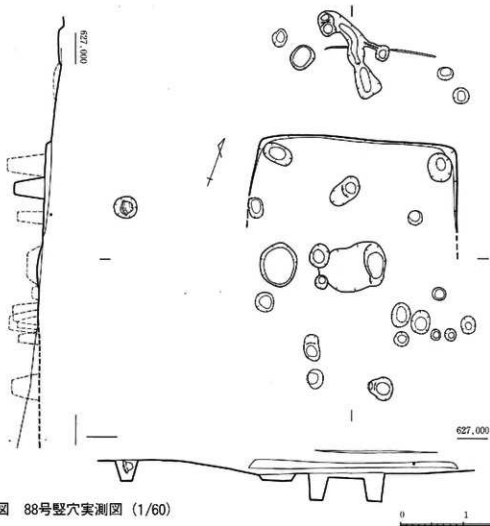
第172図 87号竪穴出土土器 (1/3)



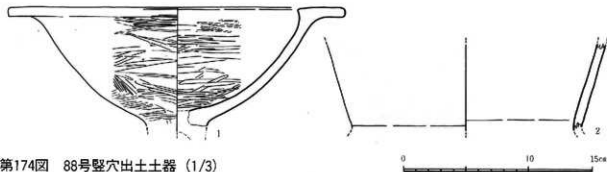
88号竪穴（第173図）

84号の南東約10mの緩斜面に位置するが、これも削平のため全体プランは明らかとならない。二段掘りと思われるが一段目の壁面は北側の一部が僅かに残るに過ぎない。長方形を呈すると思われる二段目は炉跡から北部が比較的明瞭であるが、南側は削平により消失する。北側辺の長さ3.1m、東側辺の現存長1.3m、西側辺現存長0.9m。炉跡は長軸約1mの楕円状をなし、その東西両端には一対の柱穴を伴う。主柱穴に想定される柱穴は明確ではなく、方位も不明である。西端部のピットから第174図1の高坏坏部片が出土したが、この外はいずれも小破片である。1は口縁部が鬚先状をなし内外面ともヘラミガキによる仕上げの移入土器と思われるもの。2は壺の頸部片で外面丹塗りの移入品。

本遺構は弥生中期後半の時期に置かれ、花弁型または変形形の住居跡と考えられる。



第173図 88号竪穴実測図 (1/60)

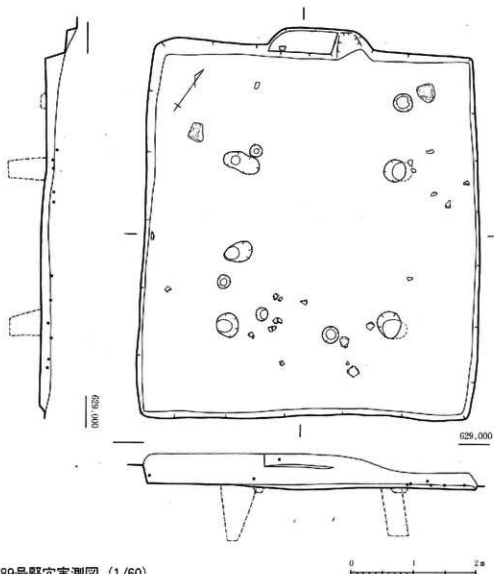


第174図 88号竪穴出土土器 (1/3)

89号竪穴 (第175図)

88号の北々東約12mに位置する。削平を受けているが長辺5.8~6.0m、短辺5.1~5.3mの長方形プランをなし、北側辺の途中に出入口としての突出部が設けられる。基部幅1.7m、先端部幅1.2m、長さ0.3mのやや短い台形状を呈し、床面の東端部分は調査ミスにより失う。内部床面との比高差は0.3m。竪穴の床面積は28.6㎡で階溝は設けられない。4本主柱の各柱穴には抜取り痕跡が認められ、柱穴の平面形や断面は変形する。その主軸方位はN-56°-E。炉跡や土坑は確認されず、出土土器にも竪穴の廃絶祭祀を示すものは観察されなかった。

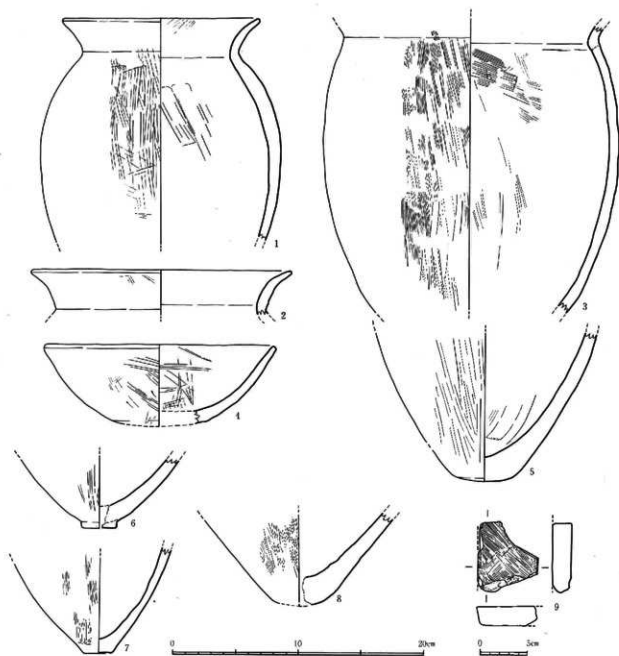
第176図1は反転し緩く外に開く口縁部からやや張り出した胴部に続く甕で口径より胴部最大径が上回る。外面は縦方向のやや粗いハケ、内面はハケとナデによる調整。胴部の器壁はやや厚く、角四石・長石・灰色粒などを含む在地系土器。2は同様の器形をなすと思われる甕の口縁部片。3は口縁部と胴部下位を欠く甕で、胴部は長胴を呈する。外面は縦方向の細かいハケにより、内面はハケとナデによる。器面にはスズやコゲが付着し、角四石・灰色粒などを含む。4は丸底のやや深い碗、内外面とのハケとナデによるが、底部外面には浅いケズリが見られる。口径18.4cmを測り、角四石・灰色粒・赤色粒を含む。5は平底気味の丸底を呈する甕の底部。外面は



第175図 89号竪穴実測図 (1/60)

ケズリののち縦方向のハケによる調整で、胎土は4と同様の在地系。6は小さく突出した平底をなすもので胎土に石英を含む。7は小形の平底なす在地系甕の底部。8も在地系甕の底部で丸底を呈すると思われる。9は頁岩製砥石片で両主面と側面を使用する。

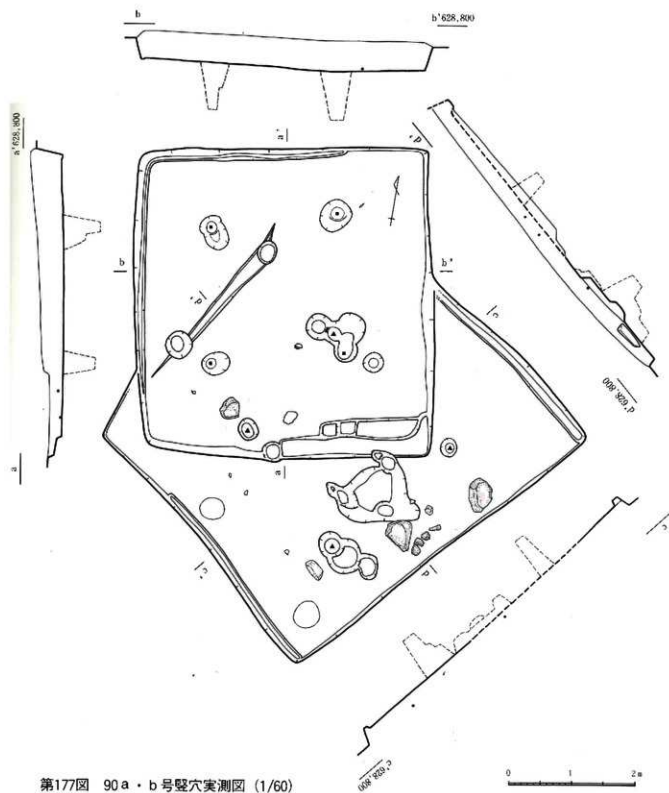
本堅穴は出土上器から弥生後期後葉に置かれる。



第176図 89号堅穴出土土器 (1/3)、砥石 (1/4)

90 a・b号堅穴 (第177図)

89号の東側約5mにありa号がb号の北半部分を切り形成される。両堅穴とも削平等のため遺存状況はやや不良である。a号は一辺4.6m余りの方形プランを示し、北側から西側にかけて城溝が巡る。床面積は19.36㎡で中規模の中でも小さい堅穴である。主柱は4本で各主柱穴には抜取り跡が認められ、主軸方位はN-76°-E。加跡



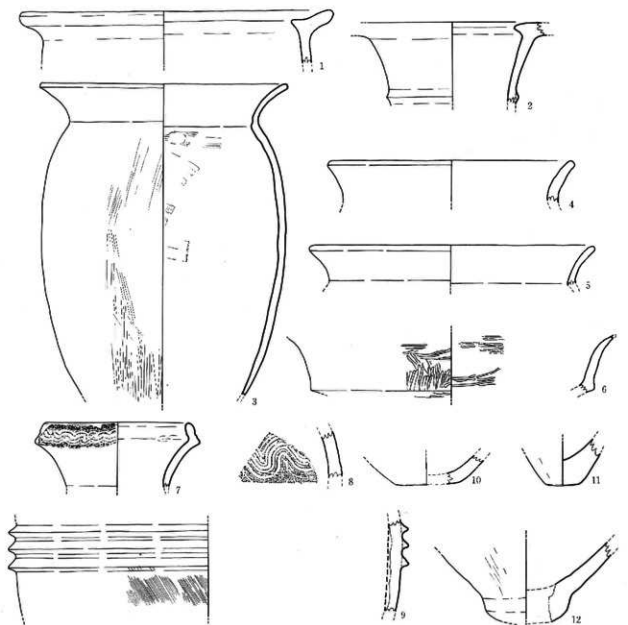
第177図 90 a・b号堅穴実測図 (1/60)

と土坑については確認されなかった。出土遺物は少ないが第178図3の壺大形片は南側中央の床面から検出された。

b号は中央部から北側をa号により失うためプランは明確ではないが長辺5.8m、短辺約5.4mの長方形を呈するものと考えられる。壁溝は東西両辺と北辺に見られるが全周しないものと思われ、復原床面積は27㎡。支柱は4本と判断され、方位はN-46°-Eとa号と大きく異なる。炉跡は南側中央の支柱穴の間に位置する。長軸1.2m、短軸1.1mの三角形を呈し左右に一对の柱穴を含め3つの柱穴を伴う。

第178図1~11はa号、12はb号からの出土。1は黒髪式の甕口縁部、2は鐮先状口縁をなすと思われる壺の口縁から頸部。3は継ぐ外反して開く口縁部から長胴の胴部に続く在地系胎土による甕。4・5も同様の器形を呈すると思われる在地系甕の口縁部。6は高環の口縁と推定され、器面はミガキによる仕上げ。7は小形複合口縁壺、8は粗裂葉の胴部片か。9は複合口縁壺の胴部で、10~12は各種の底部。

a号は3・7などから弥生後期中葉から後半に、b号は1・2から弥生中期後半から末頃と考えられよう。

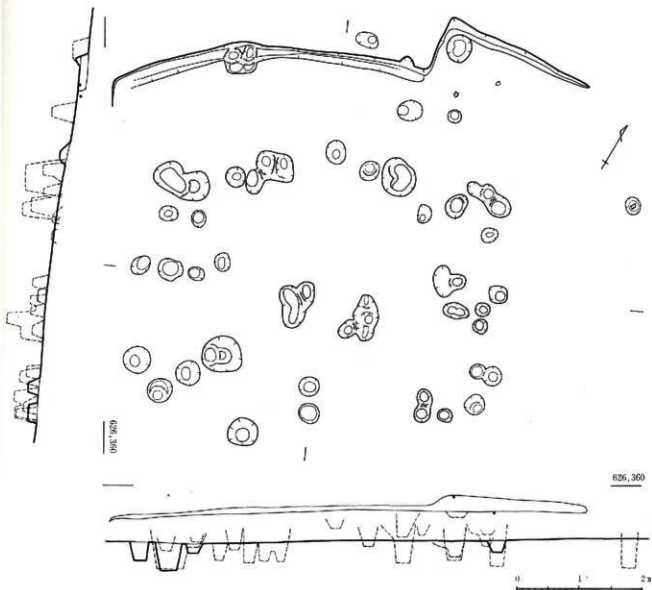


第178図 90 a・b号竪穴出土土器 (1/3)

91号壑穴（第179図）

調査区の中央部、88号の南側約6mの斜面に位置するが全体に大きく削平を受ける。原状を保つのは北側辺の壁とこれに部分的に付随する壕溝のみであり、床面も殆ど失われるが柱穴はその下部が残る。北辺は西側コーナー部分から始まり緩いカーブを描き約5mの所で北へ1m余り突き出し、ほぼ直角に屈曲し東へ約2.4m延びる。この突出部から本壑穴は、花弁型又は変則プランを呈すると考えられるが全形は明らかでない。北辺の内側約1.4~2.2mには10数の柱穴が壁と並行するように設けられ、この南側にもおおそ長方形に巡る柱穴群が認められる。中央部を除くこれらの柱穴が主柱や補助柱を形成したものであろうことは容易に推測されるが、主柱穴・補助柱穴の数やその構成は上面を失うこともあり特定できなかつた。炉跡や土坑などの内部施設についても確認できなかったが、床面積は30㎡を越える中規模の壑穴と思われる。出土土器も少なく特異な状況は観察されない。

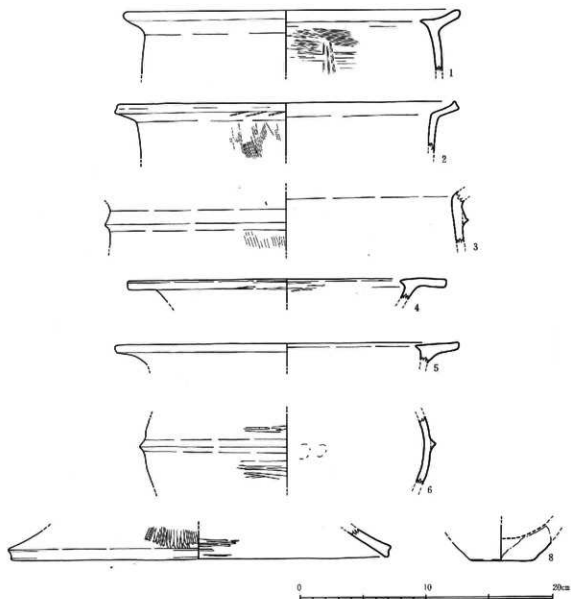
第180図1は黒髮式の甕で外面はナデによるが内面は横のハケによる調整。2は跳上げ状口縁を呈する甕で胴部の膨らまないものと思われる。3は甕の頸部から胴部片でやや低い三角形突帯を巡らす。4は甕又は高杯の口縁部片で、鋤先状口縁をなく内外面とも丹塗りの移入土器と思われる。5も同様の口縁部で胎土は在地系。6は



第179図 91号壑穴実測図（1/60）

球形に張り出す壺の胴部でやや高い三角形突帯を施し、外面は横方向のミガキによる調整。7は外面縦方向のミガキのち丹塗りの高坏椀部。8は壺の底部と思われるもので安定した平底をなす。

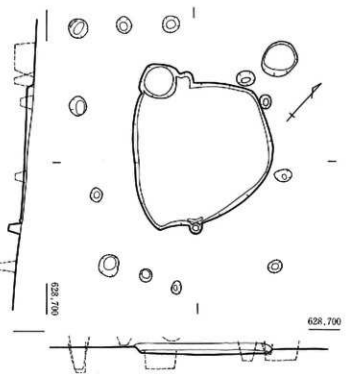
以上の土器から本壑穴は弥生中期後半に置かれよう。



第180図 91号壑穴出土土器 (1/3)

### 92号竪穴 (第181図)

90号と方形周溝竈の間に位置する小形不定形の遺構である。削平のため検出面から床面までは約0.1m前後と残りは浅い。長軸2.4m、短軸2.2m余りの不整台形状をなし、北西部はやや深い円形の土坑と重複する。周辺には大小の柱穴10数や円形土坑が認められるが、柱穴の規模・配置は一定せず主柱穴と判断されるものは見だし難い。内部からの遺物もほぼ皆無でありその性格・機能は明らかではないが、遺構の規模などから付属施設の一つと思われる。また、その所属時期も不明であるが中世に下ることはなく、弥生中期から古墳時代前期の間の遺構であることは疑いない。

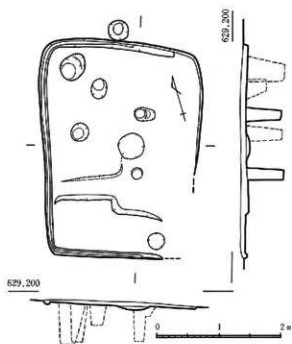


第181図 92号竪穴実測図 (1/60)

### 93号竪穴 (第182図)

92号の北西約6mに位置する本遺跡最小の竪穴である。全体に削平を受け、南東コーナー周辺を失うものの長辺3.4m、短辺2.4m程の長方形プランを呈する。東側を除き壁溝が走り、床面積は7.36㎡で住居の付属施設か。中央に直径0.4mの浅い円形の跡があり、その南北に2本主柱の深い柱穴が設けられる。方位はN-22°-E。南側にはベッド状遺構が認められるが、土坑は確認されなかった。遺物は少なく図示可能なものは2点であった。

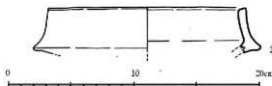
第183図1・2は小形の複合口縁壺の口縁部で、いずれもやや短く内傾する。1には金蓋母が含まれ、2は砂粒を殆ど含まないことから両者とも移入土器か。これらから、本竪穴は弥生後期中葉から後葉に置かれるよう。



第182図 93号竪穴実測図 (1/60)



第183図 93号竪穴出土土器 (1/3)





## (2) 方形周溝墓と集団墓

### i 方形周溝墓と付属墓

方形周溝墓は調査区の東北部、標高627～628mの緩斜面に形成されている。石棺を主体部とするがその床面近くまで削平を受け、主体部から東側は土取りのため消失し南・北周溝もその床面付近が残存するに過ぎない。周溝の外側や周溝内と思われる所に、付属墓と考えられるA～D号の4基の木棺墓や土坑が主体部と平行・直交し営まれている(第185図)。また、方形周溝墓の周辺に同時期と判断される住居跡は認められず、それ以前の塚穴との重複もない。そして、集団墓は約120m隔てた調査区南西端にあり両者の立地には明確な違いが見られる。従って、方形周溝墓はその造墓にあたり集落内部のやや高く同時期の住居から離れた場所を意識して選定していることが窺えよう。

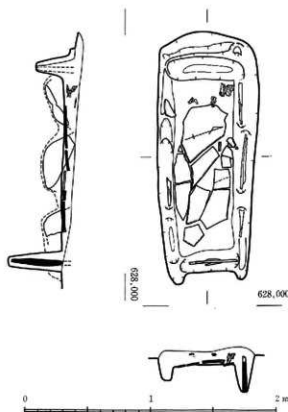
北・西側の周溝は主体部と平行・直交し比較的明確に残るが南側は削平等によりややいびつな平面形を示し、床面までの深さも0.1m前後と浅い。北側溝の現存長さ5.2m、幅0.2～0.7mで溝の床面付近の残存である。西側溝は長さ6.5m、幅0.9～1.5m、深さ0.2～0.4mを測り、断面は逆台形に近い。北西部と南西部には陸橋部が設けられ、南北辺の長さは9.2m、東西辺の現存長さ7.6mを測る。その主体部の位置などから本方形周溝墓は、辺約9mの規模を有するものと考えられる。盛土の存在は確認されなかったが、主体部が床面周辺しか遺存しないことからその高さは2m前後と想定されよう。周溝内部からの土器の出土はほぼ皆無であるが、その造営は古墳時代前期前葉から中葉に比定して大過ないと考えられよう。以下、主体部と付属墓について個別に述べることとする。なお、E号墓は本来は単独存在であるが方形周溝墓の石棺と方位をほぼ同じくすること等からここで一括することとする。

#### 主体部(第184図)

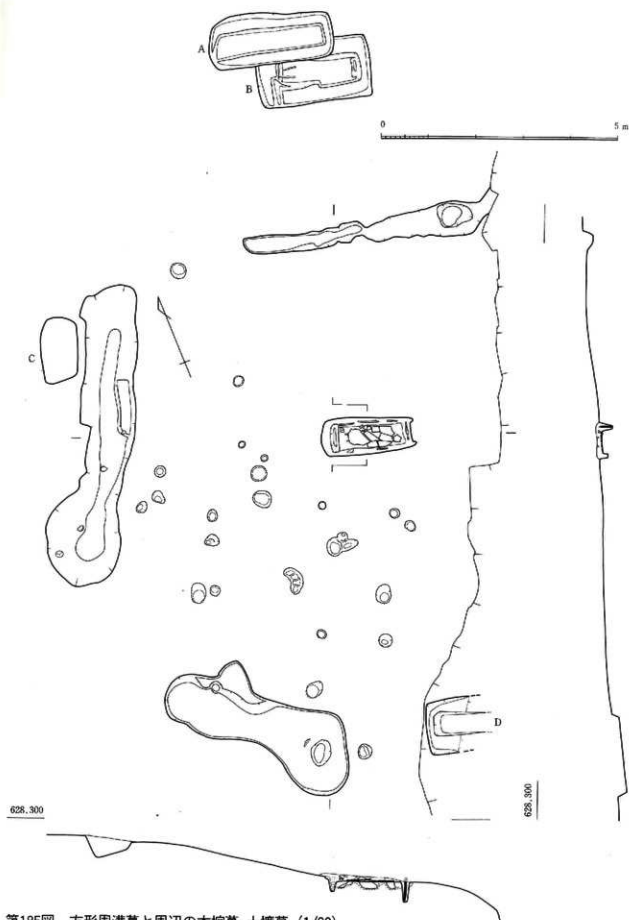
ほぼ中央に位置し東西方向に設けられた石棺墓で、床面に至るまで削平と擾乱を受ける。検出面の墓壁の長さ1.9m、西側小1幅0.76m、東側小口幅0.61m、検出面から床板まで深い所で0.1m余り。西側小口の石材と南側側板の石材はほぼ完全に抜取られ、東側小口板3枚と北側小口板の石材の基底部が部分的に残存する。床板は厚さ約2cmと薄く破損と部分的抜取りのため原状を保っていないが、本来は一枚板の石材であったと思われる。また、両側板の先端が短く突出することから側板が小口を挟む構造である。床面の内法は長さ1.36m、西側小口幅0.49m、東側小口幅0.43mを測る。西頭位と想定され、主軸方位は $N-72^{\circ}-W$ 。

西側小1近くの内部から7片に別れた鉄器が出土した。これらは第188図1と2の鉄剣に接合し、石棺内には2口の鉄剣が副葬されていたことが判明した。1は剣先と茎尻を欠損するが全長25.5cm、胴部幅3.1cm、剣身の厚さ0.5cmを測り、茎部中程に直径0.3cmの目釘穴が穿たれる。剣身には布が鑄着し、抜き身を布に巻いて副葬したと考えられる。2は胴部から茎部の破片で、現存長11.5cm、茎部長10.4cm、茎部厚さ0.35cm、胴部幅2.9cm。全体に布が付着し1と同様に副葬されていたことを示す。

人骨が遺存しないことから被葬者の性別は不明ではあ



第184図 方形周溝墓主体部実測図(1/30)



第185図 方形周溝墓と周辺の木棺墓・土墳墓 (1/80)

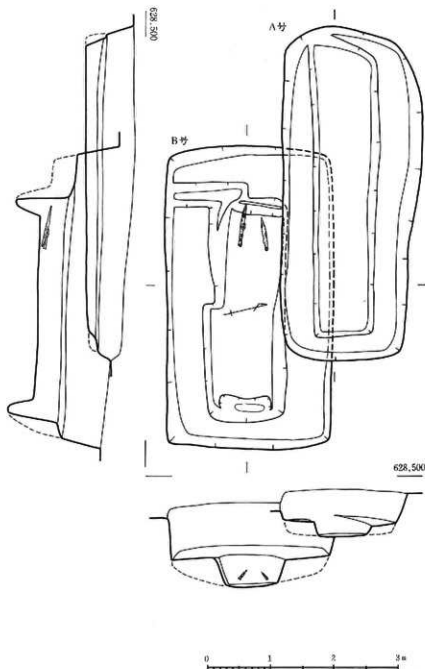
るが、石棺を主体部とし鉄剣の副葬などから本集落を率いた成人男性である可能性が高いものと考えられる。

### A・B号墓 (第186図)

周溝の外側、主体部の北東約8mに2基の墓が重複し検出された。A号(土槨墓)がB号(木棺墓)を切るが、主軸を同じくし破壊はB号の主体部には及ばないよう意識して形成されている。B号の造墓は方形周溝墓に続く時期と考えられ、A号も含めその下位の近視者の系列と推定されよう。

A号は墓壁の長さ2.65m、幅1.0~1.2mの長方形に近いプランをなし、床面までは約0.35m。西側の一部を除き検出面から0.07~0.25m下で盛土による段が巡らされ、床面まではやや浅いが木蓋の土槨墓と判断される。床面の長さ2.23m、西小口幅0.45m、東小口幅0.36m。西側が0.1m余り広く、副葬品などは検出されていないが西頭位と推定される。方位はN-77°-Wで石棺墓や木棺墓と近い。被葬者は成人と考えられるが性別は不明。

B号墓は長さ2.39m、中央部幅1.34m、深さ0.67m余りの長方形墓壁をなす。木棺を主体部とし東西両小口の掘込みは深く明瞭であるが、銅板の掘込みは認められなかった。主体部床面の長さ1.46m、西小口幅0.43m、東小口幅0.47m。床面の中程で南北両側とも床のラインが屈折することから銅板は各2枚と判断され、控えは床面から0.2~0.25mの高さを測りここに蓋板が置かれたと判断される。また、木棺の銅板と小口板はいずれも突出しないことからほぼ直角に組み合わせた構造と考えられ、



第186図 A・B号墓実測図 (1/30)

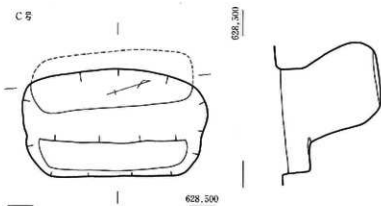
銅板1枚の大きさは約0.2×0.8m程の細長い銅板材と推定される。西小口に接し完形の鉄剣2口がやや浮いた状態で検出された。こちらが頭位とすればN-75°-WでA号墓とほぼ平行する。また、両鉄剣とも剣先が小口に掛かることから棺外副葬と考えられ、被葬者は成人男性と思われる。

第188図3は南側出土の鉄剣で全長32.5cm、剣身長21.7cm、剣身中央部幅2.6cm、同厚さ0.25cm、刃部幅2.7cm、茎部長10.7cm、同厚さ0.3cm。布が付着し剣身は全体に薄く錆も不明瞭であり、茎部のやや上位に目釘穴を1孔穿つ。4は全長26.7cm、剣身長19.1cm、同中央部厚さ0.3cm、茎部長7.5cm、同厚さ0.3cmを測り、3に比べやや少ないが同様の布の錆着が認められる。

#### C号墓 (第187図)

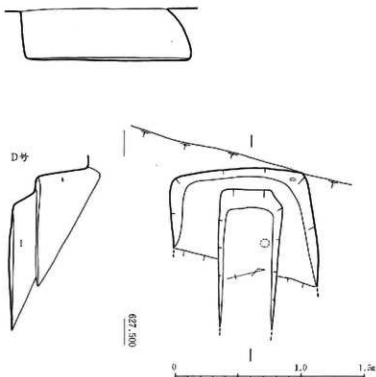
西側周溝の外側に溝と平行し南北に形成された土墳墓で、上面は長軸1.44m、短軸0.75mの不蓋椁円状をなす。東側は検出面より約0.2mの深さで、幅0.2m余りの平坦面が幅方と平行して設けられ二段掘りとなる。この段に木蓋が置かれた可能性があるが、設置痕跡は確認できなかった。西側の壁面はこの平坦面まではほぼ垂直であるが、そこから壁面はさらに西側に湾曲し床面に至る。検出面から床面までは0.8mと深く、床面は長さ1.29m、中央部幅0.45mの比較的平坦な隅丸長方形を呈する。

内部から遺物は全く検出されず、被葬者は成人と思われるが性別等は不明である。



#### D号墓 (第187図)

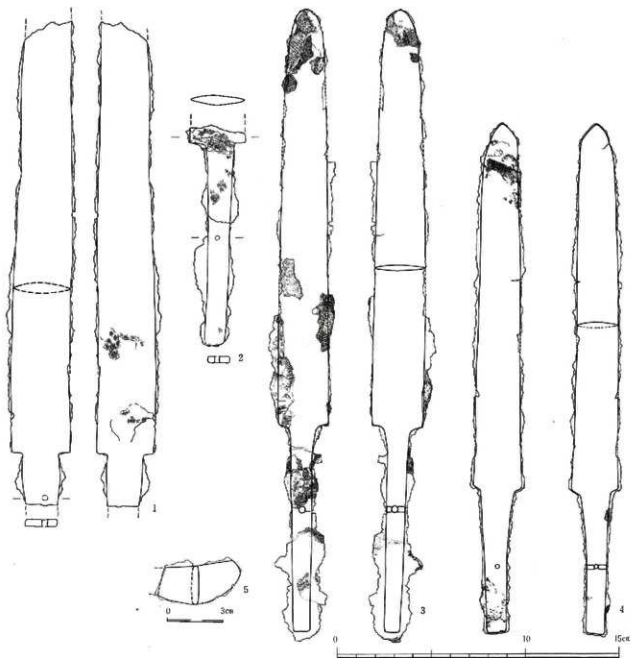
主体部である石棺の南側約5mにあり、C号墓と同じく周溝の外側に隣接して形成されていた可能性が強いと思われる。主軸は石棺と同様東西を向く木蓋の土墳墓であるが、削平により遺構の東半を失い全体規模は不明。墓域は長方形を呈し西側短辺の長さ1.1m、北側長辺の現存長約0.9mを測り、検出面より約0.5m下に蓋板設置の平坦面が設け



第187図 C・D号墓実測図 (1/30)

られ一段掘となる。この段から土壌床面までは約0.2m、床面の幅0.4m、同現存長約1mを測る。幕壁の北西部から刀子片が、土壌からは赤色顔料の小ブロックが検出された。これらは棺外の副葬と蓋板上に蒔かれたものと思われる。第188図5は刀子基部と考えられ、現長4.4cm、同幅2.6cm、厚さ0.35cm。

主軸方位はN-76°-Wで石椁の方位と近く、被葬者は成人と思われる。

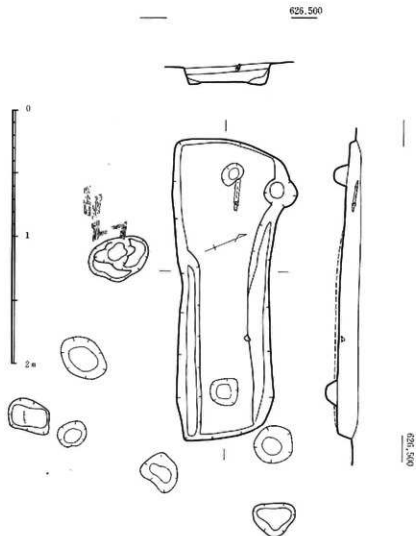


第188図 主体部 (1. 2)、B号墓 (3. 4)、E号墓 (5)。出土鉄器 (1/2)

E号墓 (第189図)

D号墓の南東約10m、調査区北東部にある22号塚穴の西側に単独で営まれた木棺墓である。二段掘りと考えられるが、墓壁は削平のため消失し主体部も検出面から床面まで0.1~0.15mと残りは浅い。検出面は全長2.35m、東側小口幅0.65m、西側小口幅0.85mの不整長方形を呈する。床面は全長2.25m、西側小口幅は0.75m、東側小口幅0.42mを測り、中程から東の南北両側に甌板の掘込み跡が認められ床面の幅も狭くなる。掘込みはいずれも3cm前後と浅く、北側はやや屈折して西小口へ0.4mの所で終息する。南側の甌板の掘込みはほぼ直線的であるが、両甌板の枚数は少なくとも2枚で3枚設置の可能性もある。小1の掘込みは確認されず床面に直接設置したのか。また、両小1近くに小形の柱穴状の掘込みが設けられているが、その機能は明らかにし難いものの腰坑的性格の可能性も残す。南側から東側の外に認められた柱穴7つが木棺墓に関係するものか否かは不明であるが、南側に近接する穴の周辺からは炭化物が検出されており、遺墓の前の祭祀に伴うことも考慮されよう。

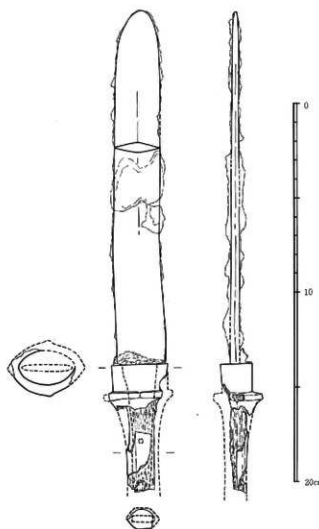
西側の掘込みに接し剣1口が床面より5~8cm余り浮いた位置から出土した。棺外副葬と考えられ木製柄が部分的に残るが鞘は認められず、抜き身の状態で副葬したものと判断される。剣の出土と西小口が広いこと等から西頭位で、方位はN-68°-W。この方位は方形周溝墓の主体部と5°しか変わらず、両者に前後関係があることを窺わせるものである。被葬者は成人男性と推定され、木棺墓の構造が定型化したものでないことなどから方



第189図 E号墓実測図 (1/30)

形周溝墓に先行する可能性が高いものと考えられる。

第190図は木製柄が残る剣で柄尻部分を欠く。剣の全長は25.4cm、剣身長18.7cm、中央部身幅2.5cm、同厚さ0.45cm、両部幅2.7cm、基部長6.7cm、同厚さ0.4cmを測る。柄は鏝口から柄尻まで一体で造られ、鏝の突出は0.5cm余りと短く鑢と刃の四方が短く突き出す。柄間は細く締まり柄中央部の断面は六角形を呈する。柄尻を欠くため柄の全形は不明であるが、珠珠町瀬戸1号墳出土の木製柄と近い形態をなすものと思われる。



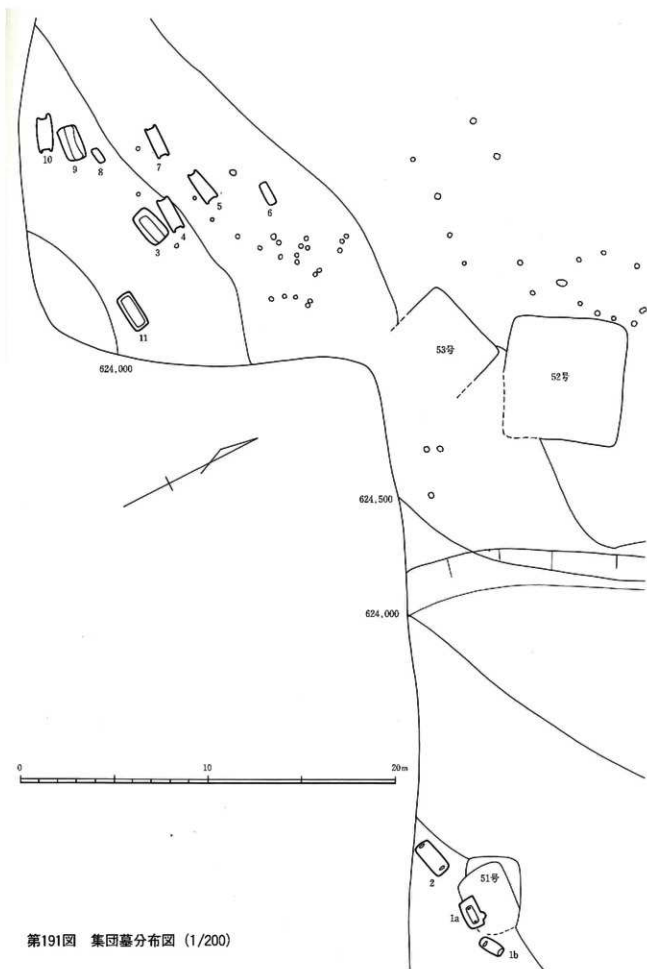
第190図 E号墓出土鉄剣(1/2)

## ii 集団墓(第191団)

調査区の南西部、比較的平坦な丘陵の端部に造墓される。ほぼ主軸を揃え木棺墓と土槨墓が東に3基、西に9基の計12基が二か所に別れて分布する。その中間は調査対象外であり、墓が系統的に営まれた可能性を有するが丘陵斜面に近いことから、存在していたとしても数基に留まるものと思われる。

東側は成人墓1基に小児墓2基が列状に営まれている。1a・b号墓は51a・b号堅穴と重複し、古墳前期中葉のb号堅穴が後出する。弥生後期後半と推定されるa号堅穴との前後関係は不明であるが、両堅穴の間の弥生終末頃の時期に造墓された可能性が強いものとする。また、2号墓もこれに近接する時期の所産であろう。

西側には成人墓7基と小児墓2基が約10×15mの範囲に分布する。各墓は間隔を置きながら営まれるが、3・4号墓や8～10号墓などのように近接する場合でも互いに意識し切り合わない。さらに東側と異なり堅穴と重複することもなく、周辺で最も近い52・53号堅穴や70・71号堅穴の間には約10m余りの空白部が認められる。従って、この一帯が居住の場ではなく墓域として認識・維持されていたと判断される。また、周辺の堅穴は弥生後期中葉から古墳時代前期前葉に属するものが多く、堅穴と墓が重複しないことは両者の同時性を示すと考えられよう。各墓は3～6・11号と7～10号の2群に分けることも可能であるが、明確に群構成をなすものではなく1群



第191図 集団墓分布図 (1/200)



であることの可能性も否定できない。各墓が相互を意識し近接して形成されていることは系譜関係を示し、集落内の集団からの選択的造墓と考えられる。各墓から人骨は検出されず性別等の詳細は不明であるが、3・4号墓からは鉄剣が出土しており被葬者は男性と考えられる。以下、個別に各墓の説明を行う。

#### 1 a 号墓 (第192図)

東側の小児墓で51号墓穴により墓壇の上部を切られる。墓壇上面は0.8~1.0×1.65mの長方形をなし、検出面からの深さ約0.3mで平坦な段が形成され二段掘りとなる。この段から床面までは約0.1mを測り、両小口には楕円形の掘込みがあるが側板の掘込みはない。床面の長さ0.71m、中央部幅0.3m、東小口の幅が僅かに広いが頭位は不明。木棺は小口板が側板を挟む構造と考えられ、主軸方位はN-89°-Eとほぼ東西を向く。

小児木棺墓としては比較的丁寧な造りであるが副葬品等は皆無であった。

#### 1 b 号墓 (第192図)

1 a 号墓の東に隣接する小児墓であるが方位をやや異にする。削平等により変形するが上面は長さ1.35m、中央部幅0.55mの長方形を呈する。検出面から床面までは約0.3mを測り、両小口の掘込みが認められ1 a 号と同様の楕円構造・規模を示す。棺内の床面長は0.72m、小口幅はいずれも0.35mを測り、方位はN-62°-E。

#### 2 号墓 (第192図)

1 a 号の西側約2mに位置する小棺墓である。上面は全長1.87m、幅0.88mの長方形に近い形をなすが、東側短辺は緩く外に張り出す。検出面から床面までは約0.25mと削平のため浅い残りとなる。両小口は長楕円状に掘込まれ床面からの深さ0.2~0.25m、基底部の長さ0.32m。床面中央部に幅0.3m前後の薄く黒変した帯状部分が認められるが、これは木棺内部の床面を示すと考えられる。木棺の内法は東小口幅0.35m、西小口幅0.3m、長さ1.45mに復原される。東側がやや広いことから頭位の可能性をもち、主軸方位はN-72°-E。成人墓と想定されるが、副葬品などの出土遺物はない。

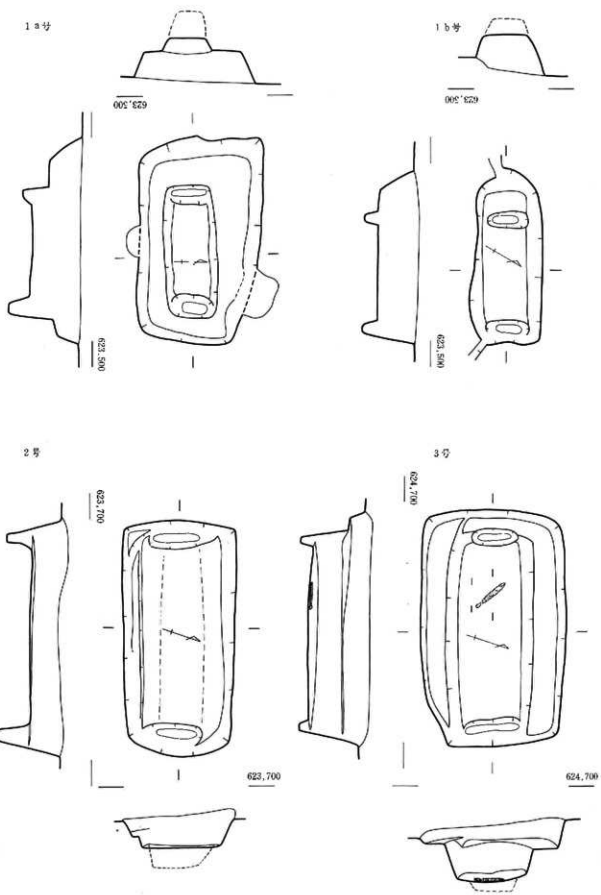
#### 3 号墓 (第192図)

西側中央部にあり4号墓と隣接する木棺墓である。上面は1.86×1.17mの東西方向の長方形に近いプランをなし、南側は深さ約0.1mで、北から西側は深さ約0.2mの所で幅0.1~0.2mの平坦な段が設けられ二段掘りとなる。この段から木棺基床面までは0.2~0.3mを測り、床面の全長1.36m、東側小口幅0.45m、西側小口幅0.43m。両小口の深さは0.1m前後とやや浅く、両側板の設置痕跡は確認されなかったが小口板が側板を挟む組合せの木棺墓と考えられる。床面は西小口幅が僅かに高く東側には蓋板設置の段が設けられないことと鉄剣の出土から西頭位と推定され、方位はN-106°-W。鉄剣はほぼ床面に接することから棺内副葬であり、主軸に対し剣先を斜め上に置く。床面長がやや短い成人男性墓と考えられる。

第194図1は全長23.6cmの鉄剣で胴部周辺を欠く。劍身中央部幅2.0cm・同厚さ0.4cm、茎部長5.7cm・同厚さ0.35cmを測る。目釘穴は胴部寄りに両側穿孔により1孔穿たれるが中心より片寄った位置にあり、本来は2孔である可能性をもつが欠損のため不明である。劍身部分には右の錆着が認められ、抜身に布を巻いた状態で副葬したものである。

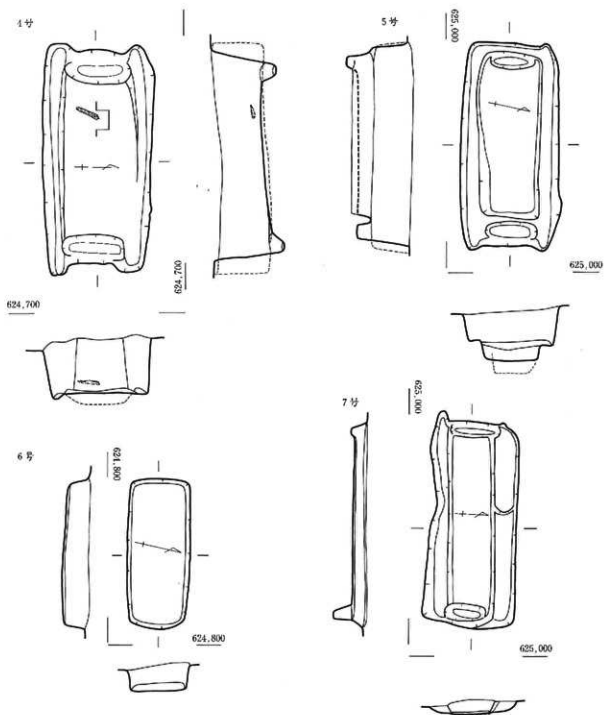
#### 4 号墓 (第193図)

3号墓の北側に隣接しこれと前後関係にあり、5号墓とは平行して営まれることからペアをなす可能性をもつ木棺墓である。上面は1.68×0.87mの長方形を呈するが、側板の掘込みにより四隅が東西南方向に短く突出する。床面までの深さは約0.4mを測り、両小口の掘込みは側板よりやや深い。北側の側板の掘込みは中程で不明瞭と



第192图 1 a · b 墓 · 2 号墓 · 3 号墓实测图 (1/30)





第193図 4～7号墓実測図 (1/30)

なるが、側板が小口板を挟む箱構造である。両小口は1枚、側板は各2枚と考えられ東側の床面幅がやや狭くなる。床面内法の長さは1.32m、西小口幅0.55m、東小口幅0.5m。西原位の場合、方位はN-92°-Wであり被葬者は成人男性か。西小口から0.2m、床面から0.07mの所で鉄剣1口が3号墓とは剣先を逆に出土した。

第194図2は劍身からそのままやや幅広い茎部に続く鉄剣である。刃部は明確に形成されないが、茎部上方の目釘穴よりやや上に想定される。劍身長14.0cm、同中央部2.2cm、同厚さ0.4cm、幅茎部長4.1cm、同幅2.6cm、同厚さ0.4cmを測る。片方の刃部はやや擦り減り、茎尻は円基に近い。茎部の目釘穴は茎尻側に2孔が対に、茎上部1孔の3孔が穿たれ、茎部の中央には挟り込みが設けられ特異な着柄を示す。また、劍身部分がやや短いこと

等から鎧の可能性も指摘されよう。

#### 5号墓 (第193図)

4号墓の北側約1.5mにあり主軸をほぼ平行して造られた木棺墓である。上面は長さ1.60m、幅0.78mの長方形をなし、東側の両側部と西北側部が短く突出する。上面から0.2~0.3mの深さで幅0.05~0.1mの段が設けられ両側板はこの面に設置されるが、床面はさらに0.1m余り下に形成される。西側小口の掘込みは床面からであるが東側小口は段の外側に設けられ、4号墓と同じく側板が小口板を挟む構造を示すもの小口の処理が異なる。同様の小口をなすものは10号墓と合わせ2例が認められる。床面長は1.15m、西小口幅は0.45mで東小口幅より0.1m広いことから西頭位と想定され、方位はN-98°-W。床面の全体に赤色顔料が蒔かれていた可能性がある。副葬品等は検出されず、床面長がやや短い成人墓と思われる。

#### 6号墓 (第193図)

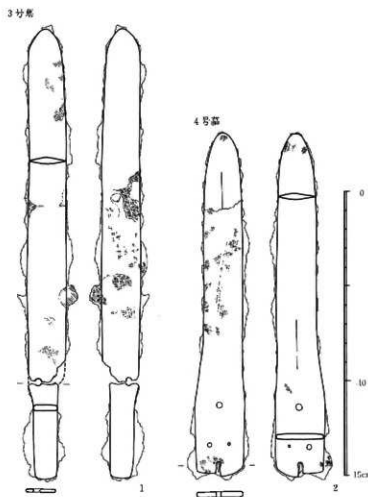
5号墓の北東約2mに形成された土槨墓である。上面は長さ1.14m、西側幅0.48m、東側幅0.44mの長方形を呈し、床面までの深さは約0.2mとやや浅い。床面はほぼ平坦をなすが西側が5cm余り高く、長さは1.10m、西側幅0.41m、東側幅0.39m。西側床面の幅がやや広いことなどから西頭位と思われ、方位はN-101°-W。出土遺物は皆無であり被葬者の性別等は不明。

#### 7号墓 (第193図)

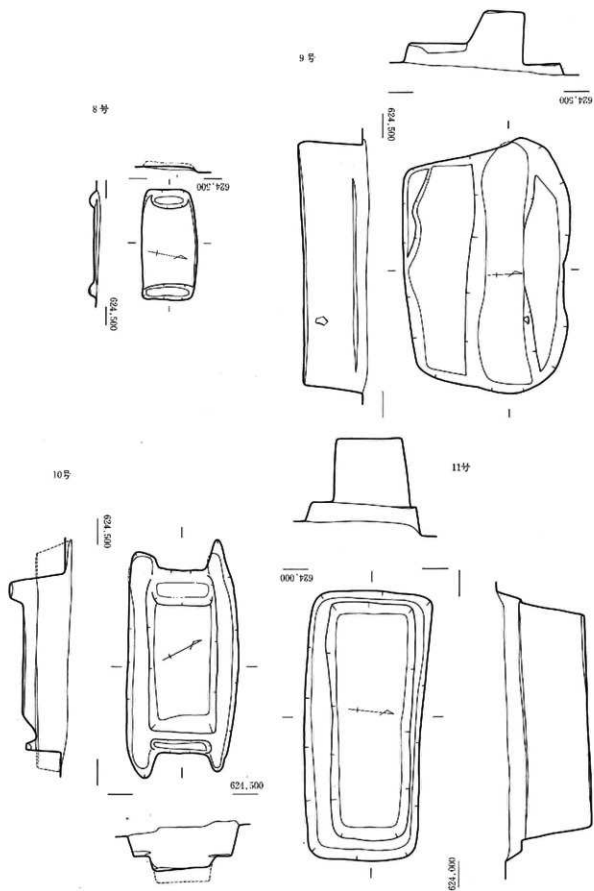
5号墓の西側約1.6mに位置する木棺墓で削平のため検出面から床面までは約0.1mと残りは浅い。上面は長方形を呈するが西側側板の掘込みが主軸方向に短く突出し、全長1.61m、幅0.65~0.73m。両側板が小口板を挟む構造で、側板は各2枚から構成されたものと思われる。床面長1.35m、中央部幅約0.3mを測り両小口の幅に差はない。成人墓と考えられ他と同じく西頭位である場合、方位はN-93°-W。

#### 8号墓 (第195図)

7号の南側約2.5mにあり9・10号墓と近接し両者と系譜関係を有すると思われる小児木棺墓である。床面付近に至るまで削平を受け遺構の残りは不良であるが、上面の長さ0.87m、幅0.38~0.44mの長方形を呈する。両小口の掘込みは深さ約5cmと浅く、側板の掘込みはないが小口が側板を挟む構造と考えられる。床面長約0.65m、幅約0.3mに復原され、西頭位である場合方位はN-100°-W。



第194図 3・4号墓出土鉄剣 (1/2)



第195图 8~11号基实测图 (1/30)

### 9号墓 (第195図)

8号墓と10号墓の間に位置する木蓋土槨墓。墓壇上面は長さ2.02~1.58m、幅1.12~1.33mの台形に近いプランをなし、深さ0.1~0.2mの南北両側に平坦面が設けられ二段掘りとなる。南側の平坦面は幅広で墓壇の掘方とほぼ並行するが、北側は幅のやや狭い弓状をなし南側と対応する造りとはならない。床面は平坦で西小口は弧状をなすが東小口は直線的に終息し、両側のラインもやや出入りが認められる。床面長1.9m、幅0.3~0.4mを測り西頭位の場合、方位はN-88°-Wとなる。墓壇・床面の規模から成人墓と考えられ、8・10号の被害者と近い関係にあると言えよう。

### 10号墓 (第195図)

9号墓の西に隣接する木棺墓で両側板の掘込みが主軸方向に突出する。突出部を除く上面の全長は1.44m、中央部幅0.89mを測り、深さ0.3~0.5mの所で幅0.1m余りの側板を設置する段が設けられる。東側小口はこの段から掘込まれるが西側小口は約0.1m深い床面からの掘込であり、木棺内部の床面は部分的に二段となり5号墓と同様の棺構造を示す。両小口間の長さは1.15m、床面の長さは0.9m、幅は西側が0.45mで東側より5cm余り広い。また、西側小口は東側に比べやや深いこと等から西東頭位と推定され、方位はN-66°-Wとなる。

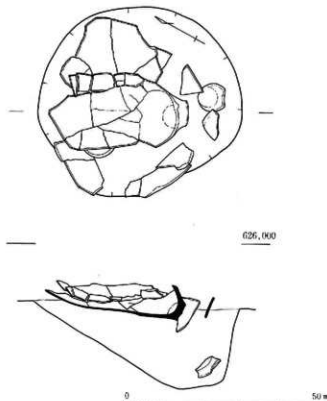
### 11号墓 (第195図)

3号墓の南東約3mに位置する土槨墓である。上面は2.13×0.92mの長方形を呈し、深さ約0.1mの所で四方に蓋板設置の段が形成される。南側はやや幅広いが他は数cmと狭い。段から床面までは0.5m前後を測り、床面の全長は1.67m、西側幅0.55m、東側幅0.45mで西側が広く造られる。N-96°-Wの西頭位と考えられ5号墓と近い方位を取る。土槨墓としては丁寧な造りの成人墓であるが、出土遺物は皆無であった。

### 甕棺墓 (第196図)

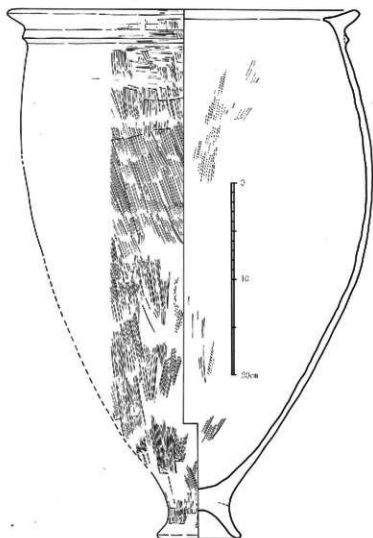
19号墓穴の北東約1mに位置するが上部を削平により消失し、蓋又は上甕は遺存しない。墓甕は長軸0.55mの南北方向の楕円形をなし、北側は緩斜面をなすが南側は直角に近い角度で掘込まれる。検出面から床面までは約0.2mと残りは浅く、床面のやや上に甕の底部(脚部)を取り外して置く。甕は口縁部を北側に置き、底部を墓壇床面より約0.2m上に斜めに設置する。推定方位はN-27°-Eで、内部から遺物は検出されなかったが第197図に示したように完形復原が可能となった。

第197図は黒髪式甕で、T字状をなす口縁部から僅かに膨らむ脚部に続き底部に外に張り出す脚部を付す。口縁部上面は比較的平坦で内・外側



第196図 小児甕棺墓実測図 (1/10)

への突出もやや弱く、頸部に三角形突帯を巡らす。外面は縦方向のハケ、内面はハケののちミガキに近い丁寧なナデを加える。口径37.0cm、器高55.0cm、胴部最大径36.4cmを測り、当初から埋葬用として製作されたと考えられる移入土器である。



第197図 1号墓出土小児甕棺 (1/4)

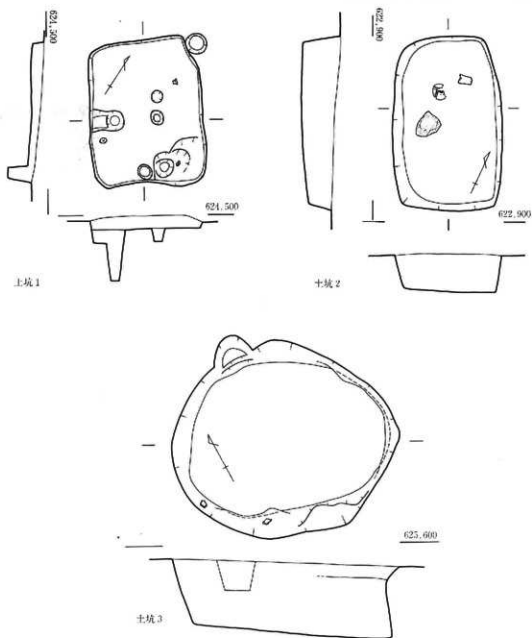
### (3) 土坑

#### 土坑 (第198図)

調査区からは10基前後の上坑が検出されたが、34b号・36b号・68号竪穴と重複する3基については前述した。ここではプラン・時期等が明確な3基の概要を述べ、これらが不明なものや風倒木痕などについては省略する。

**土坑1** 調査区の東南部、47号竪穴の北約8mに位置する。長辺約2.2m、短辺約1.8mの長方形を呈し、検出面から床面までは0.1~0.2mと削平を受ける。床面の西側中央にやや深い柱穴と土坑が、南東隅部には不定形の土坑が認められることなどから下房的性格も考慮される。出土遺物は少なく第199図1は、内外面ともミガキによる蓋の胴部片で弥生中期後半に属されるものか。

**土坑2** 47号竪穴の南東5mに位置する。長辺1.38m、中央部幅0.88mの長方形に近いプランをなし、検出面から床面までは0.2~0.3mと比較的残りは良い。床面は平坦となり、内部からは第199図2~4の土器が出土したこと等から土坑墓ではないものと判断した。2は黒髪式甕の口縁部片、3・4は高杯の裾部



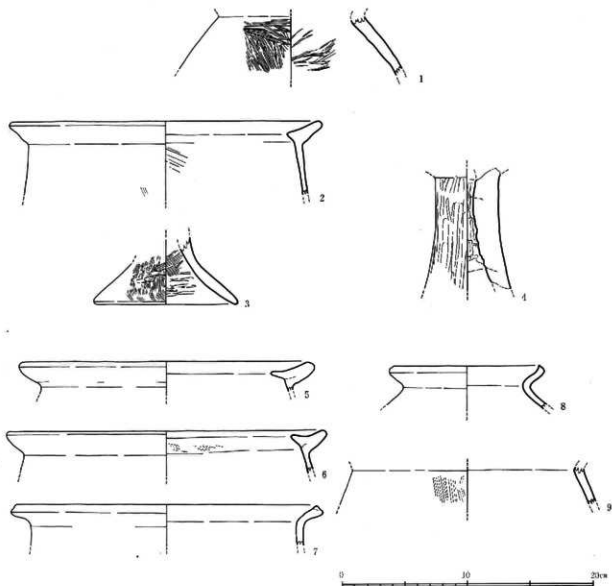
第198図 土坑1・2・3実測図 (1/30)





と脚柱部。これらの土器から弥生中期後半の所産と思われる。

土坑3 20号竪穴の北東約2mで検出された。長軸1.82m、短軸1.56mの楕円形プランを呈し、検出面から床面までは0.5~0.6mとやや深い。東半部分の壁がやや外側に張り出すことから本来はフラスコ状の断面形であった可能性があり、貯蔵穴とも考えられる。出土土器の中で8は小片で後世の混入と考えられる。5・6は黒髪式甕の口縁部片で石炭・金雲母等が含まれる。7は跳上げ状口縁に類する甕で胴部の張り出さないもの。8は古墳時代前期前葉の甕口縁部で、口縁端部が内側に短く突出する。9は弥生中期の甕胴部片。5~7から本遺構は弥生中期後半に置かれよう。



第199図 土坑1・2・3出土土器 (1/3)

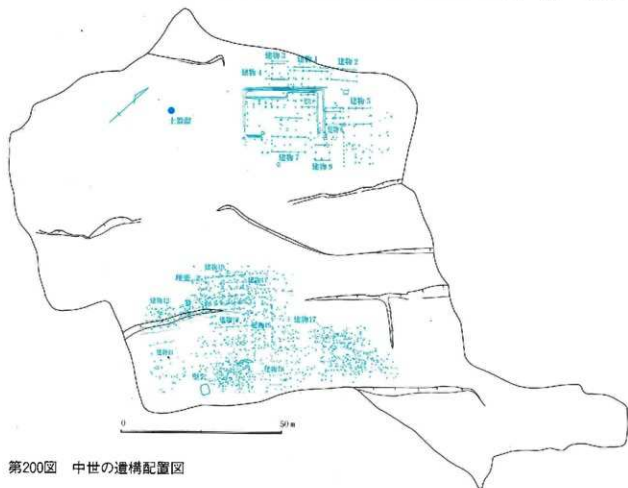
### 3 中世の遺構と遺物

中世の遺構は掘立柱建物18棟を始め、溝、堅穴、土坑などが検出され、これらは第200図に示す如く空白部を挟み調査区の北部と南部に大きく二分されると共にその性格を異にすると考えられる。中央部や東西の空間にも若干の建物などの遺構が存在した可能性もあるが、主要な施設が認められないことはほぼ確実である。南部の遺構は標高620～625mの無造成と思われる緩斜面に建物9棟・堅穴・土坑等が分布すると共に、多数の柱穴が検出されており本来は更に多くの建物が致時期に渡り存在したものと考えられる。北部の遺構群は標高630m余りの尾根の斜面を約45×35mの範囲に平坦に造成し、掘立柱建物9棟からなる建物群が長方形に巡る溝の内外に計画的にコ字状に配置されている。その配置や規格性から中世の館跡に類似するが建物の重複は少なくほぼ一時期の短期間の所産と判断されることも特徴の一つと言えよう。南部地区の建物の一部は北部の建物群と時期を同じくする可能性もあるが、両者には時期差があり南部地区の建物群は戦国期の出城の中心的施設と考えられる。また、北部と南部の建物群を結ぶ道路跡は検出されていない。

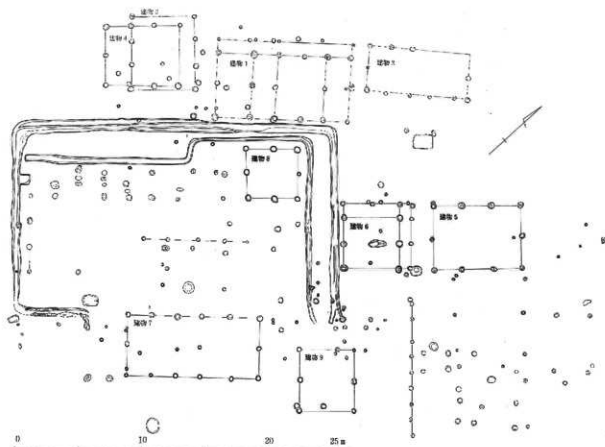
調査区の南東外側約280mの範囲には土塁・郭や堀などが認められるがその規模は小さく、大規模な防衛施設は伴わないことから本格的な城跡ではなく、戦国期においてはまさにその字名の通りに比較的小規模な出城と考えられよう。以下、地区毎に遺構の概要を述べる。

**北部地区遺構**（第201図） 溝・建物9棟・橋列3からなり方位をほぼ同一又は直交する。

溝 尾根筋に直交する方向に長辺25.5m（≒85尺）、短辺15m（≒50尺）の長方形に区画するが東側に空白部をもつ。空白部の中心には建物7が、東北の溝終息部の延長には建物9が設けられ、溝の両端は二つの建物の約3mの手前で終息する。溝の西側には建物1～4が、北側には建物5・6が設けられ溝を囲みコ字状の建物配置となる。また、西側から北側にかけて外側の溝と並行しL字状に巡る内溝が認められる。内溝は幅0.2～0.5m、



第200図 中世の遺構配置図

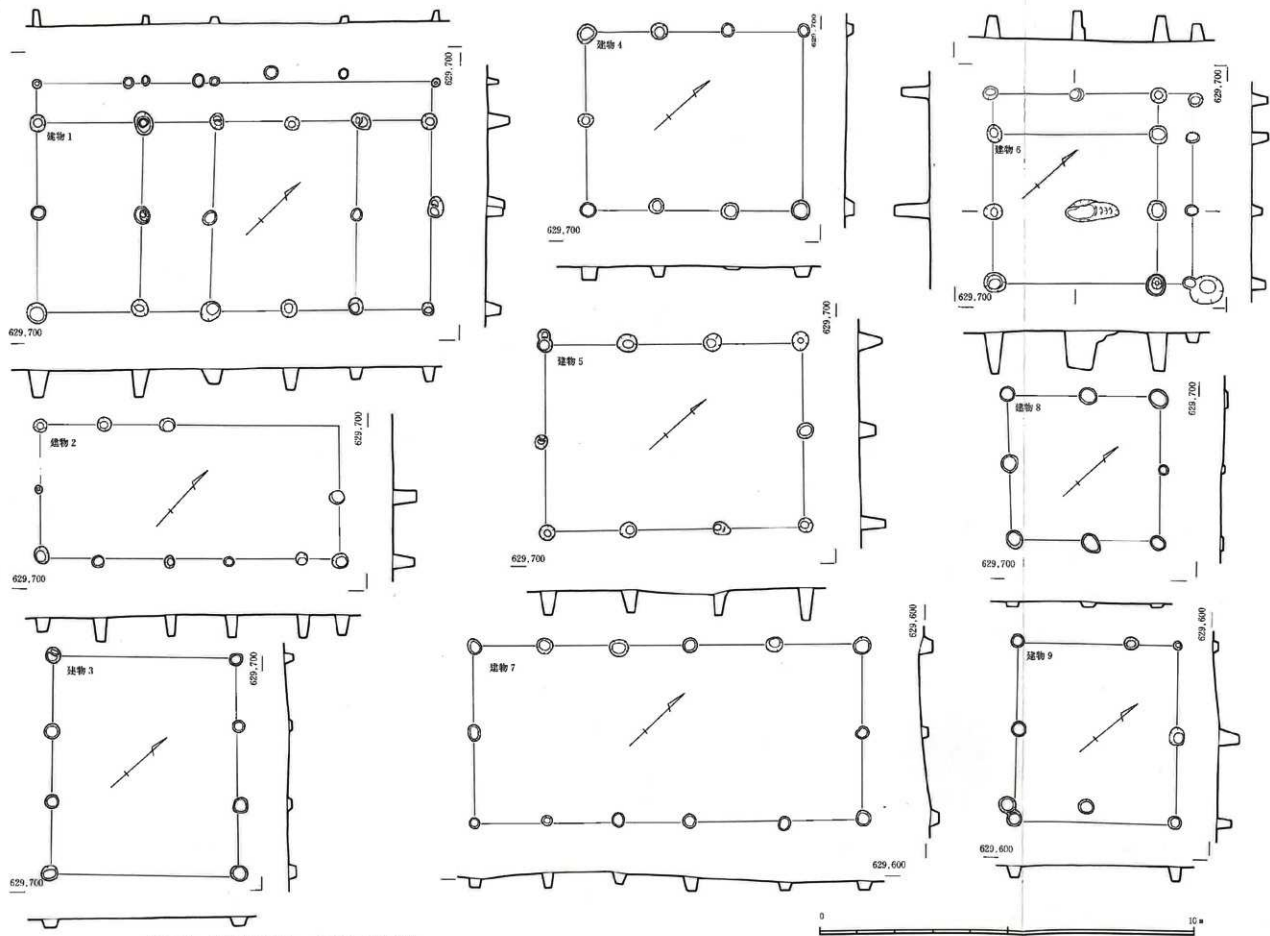


第201図 北部地区建物群配置図 (1/300)

深さ約0.05mを測り、建物9を避けるように西へ突出するが外溝とは重複せず外側に比べ幅・深さともやや規模が劣る。外溝は幅0.5~1.0m、深さ0.1~0.4mを測り西側の長辺は部分的に二段掘りを呈する。溝の長辺の方位は $N-41^{\circ}-E$ であり、南北両短辺はこれと直交する。溝床面には酸化鉄等の沈着が認められる部分もあり、調査区西外側から懸樋により取水し溝の内部に水を流していたものと思われ、溝に囲まれた部分は中庭として機能していた可能性が高い。外溝の内外からは別府河内岸産と考えられる石英等の玉砂利(計7kg)が採取されているが、土器などの時期を示す遺物は内溝も含め殆ど検出されなかった。

**建物1** 北部の中心的建物で、溝の北西部に位置し梁行2間×桁行5間で西側に庇をもつ。桁行中央列の柱穴の一つは検出されなかったが総柱の建物の可能性もある。身舎の柱穴は直径0.3~0.5mを測るが庇の柱穴は小さく、深さも浅く柱筋も一定しない。梁行は $2.3+2.6m$ の4.9m、桁行は東から $1.9+1.8+1.9+1.9+2.8m$ の10.3mを測り、身舎面積51.47㎡の最大建物である。方位は $N-42^{\circ}-E$ で溝とほぼ同一方向に建てられる。柱穴内部からの遺物はほぼ皆無であった。この左右にある建物2と建物3・4より1間ほどと溝に寄り、規模・構造・位置から主殿的性格をもつものと考えられる。

**建物2** 建物1と約1.2mと近接するがほぼ同一方向に建てられた梁行2間×桁行5間の建物である。建物1の梁中央の柱穴から西側庇の延長部分に建てられ、図示できなかった西側の桁行柱穴は調査区外に存在することは確実である。東側の桁行は $1.0+1.9+1.6+1.9+1.6m$ の8.0m、南側梁行は $1.7+1.7m$ の3.4mを測り、身舎面積は27.56㎡の中規模建物である。方位は $N-48^{\circ}-E$ で建物1より $5^{\circ}$ 前後東に振るが、これは北側の崖面に制約をうけたと理解される。柱穴からの遺物はないが建物1と同時期と思われる、その脇殿的性格が考えられよう。



第202图 北部地区建物1~9实测图(1/100)

建物3 建物1の南西約1.5mに位置し、これと直交方向に建てられた建物で建物4と重複する。1×3間の建物で桁行は5.0m、梁行は西側が1.9+1.9+1.9m、東側は1.8+1.9+1.8mを測り身舎面積は28.02㎡で建物2と同規模となる。方位はN-48°-Wで建物1の直交方位と1°余り西へ振ることなどから建物4の建替えと想定される。また、その性格は建物2と同様と思われる。

建物4 建物1の3.0m東南にありこれと並行する1×3間の建物であるが、南側の梁行は2間となる。主軸方位をN-41°-Eとし建物1と2°しか変わらないことから同時期の建物と考える。梁行は北側が4.7m、南側が2.3+2.4mの4.7m、桁行は東側が1.8+2.0+1.8m、西側が2.0+1.8+1.9mの5.7mを測り、身舎面積は建物2や3よりやや大きい26.71㎡。柱穴からの遺物は認められず、その性格は建物2と同じと思われる。

建物5 溝の北東約7.5mに位置する梁行2、桁行3間の建物である。方位をN-42°-Eとし、溝と並行する。梁行はいずれも2.4+2.5mの4.9m、桁行は北側が2.2+2.3+2.3mの6.8mを測り、身舎面積は33.02㎡。副と考えられる建物6と接することから付属施設の一つと推定されよう。

建物6 溝と建物5の間に設けられた1×2間の建物で、西・北側に庇を伴う。梁行は4.4・4.3m、桁行は東西とも2.0+1.9mの3.9mを測り柱穴の直径は0.4m前後、庇の出は1.0mで柱穴の直径は身舎よりやや小さい。身舎の中央部に長軸1.4m、短軸0.6mの長楕円状をなし、深さ約1.0mの上坑が設けられる。上坑は急角度で掘込まれその下部には黒褐色の粘質土層が堆積しており、自然遺物や薪木等は検出されなかったが便槽と考えられ本建物は厩に比定されよう。方位はN-40°-E、身舎面積は16.92㎡。

建物7 溝の一端は南東コーナーから約5.5mの所で終息するが、約3mの間隔を取り溝の延長線上に西側桁行が位置する2×5間の建物である。この建物と溝により長方形の区画がほぼ定結することになる。柱穴の規模にやや差があるが、梁行は東側が2.3+2.3mの4.6m、桁行は南側が1.9+2.0+1.9+2.5+2.1mの計10.4m、北側も総長は変わらないが1.9+2.0+2.0+2.3+2.3mとなり柱間寸法は一定しない。身舎面積は47.74㎡と建物1に準ぐ規模を有し、溝内の庭園に近い場所を占めることから客殿的性格が想定されよう。方位はN-42°-E。

建物8 溝に囲まれた空間の東北隅、建物1の前面に位置する2×2間の建物である。柱穴の掘方は直径50cm余りの円形をなすものが多いが深さは10cm前後と他の建物と比べかなり浅く、若下の傾平を受けたとしても恒常的な建物ではない可能性もある。梁行は東側が1.9+1.9mの3.8m、桁行は南側が1.8+2.0mの3.9m、面積は14.59㎡で最も小さい。主軸方位はN-41°-E。また、本建物の南西部分には浅い柱穴状のピットが纏まって認められ、建物としては把握できなかったが、小規模な施設が存在する可能性も完全に否定し得ない。

建物9 建物7の3m北側に平行する1×2間の建物である。建物7の梁間中央の延長線上に西側梁筋が位置し、梁行は4.3m、東側桁行2.4+2.2mの4.6mを測る。身舎面積は20.22㎡、方位はN-51°-W。溝の北東終息部の延長上にも当たることや規模等から付属施設的性格が考えられよう。

欄1 溝の南側短辺に面する位置に4本の柱穴が直線的に並ぶ。心中心距離は1.9m等間であるが、掘方の規模は中央の2つが大きく、欄ではなく門となる可能性も充分にある。

欄2 溝で区画された中庭の中央に5つの柱穴が並ぶ。1.7+2.3+1.7+1.7mの総長7.4mを測り、その方位はN-42°-E。溝や周辺の建物とほぼ同一方位を示し、庭を区切る欄と考えられる。

欄3 建物2の4.5m北側に平行して設けられた欄列で、9つの柱穴が1カ所を除きほぼ1.2m等間に並ぶ。その全長は10mで、方位はN-50°-W。

北部地区の溝や各建物の柱穴から遺物は殆ど検出されなかったが、第212図1は建物2の周辺から同図2は東側の建物を形成しない柱穴から出土したものである。1は小路遺跡E類に近く16世紀前半代に2の瓦質土器は15～16世紀前半に置かれよう。また、溝の西側約20mに位置する上器淵遺構からは第211図に示した土器質土器片が検出され、これらは口径12cm・器高3cmを中心とすることなどから15世紀前半代と考えられる。この上器淵遺構が館の廃絶と関係する可能性も否定できず、北部地区の遺構は15世紀前半代の一時期の所産か。



第203图 南部地区建筑群配置图 (1/300)

南部地区遺構（第203回） 建物10～18の9棟、堅穴遺構1基、埋燼1基を中心とする。

建物10 北西部にあり建物11と重複する2×5間の建物である。方位を $N-36^{\circ}-E$ とし北部地区の建物群とほぼ平行する。梁行は $3.2+3.0m$ の計 $6.2m$ 、桁行は北側で $2.0+3.3+1.8+1.9+2.6m$ の計 $11.6m$ を測り、身舎面積は $72.59m^2$ と本遺跡最大である。柱穴の重複も多く2回前後の建替えが行われた可能性もある。その連続性からも南部地区の中心的施設と考えられよう。

建物11 建物10の北東部で重複し両者の前後関係は明確ではないが、方位を $N-42^{\circ}-E$ とやや東に振ることから後出するものと考えられる。梁行3間、桁行5間の建物で柱間寸法にやや差があり、柱穴の重複も認められることから建替えも想定される。東側梁行は $1.8+2.7+2.1m$ の計 $6.6m$ 、北側桁行は $2.0+2.4+2.5+1.9+1.9m$ で計 $10.7m$ となる。身舎面積は $68.40m^2$ と建物10とほぼ同規模で、その性格・機能もこれに類すると思われる。

建物12 建物11の南東約1mにありこれとほぼ平行する。方位は $N-39^{\circ}-E$ で $3^{\circ}$ の差があり、軒の出も考慮すれば両者には時期差があるものと考えられる。梁行3間、桁行5間で身舎面積は $51.02m^2$ と建物10・11よりやや小形の建物となる。東側梁行は $1.8+1.8+1.8m$ の計 $5.6m$ 、東側桁行は $1.8+1.8+1.8+2.0+1.8m$ の計 $9.2m$ 。

建物13 建物12の西側約8mに位置する2×5間の建物で、主軸方位もほぼ同一の $N-40^{\circ}-E$ 。西北隅の柱穴は確認されなかったが面積は $31m^2$ の中規模の建物である。東側梁行は $1.8+1.6m$ 、南側桁行は $1.8+1.3+1.9+1.8+2.1m$ の計 $8.9m$ 。

建物14 建物13の南東約3mに位置する2×3間の建物である。方位を $N-30^{\circ}-E$ とし、身舎面積は $37.58m^2$ の中規模建物。東側梁行は $2.6+2.5m$ の計 $5.1m$ 、南側桁行は $2.1+2.6+2.6m$ の計 $7.3m$ を測るが、北側は $2.4+2.5+2.6m$ となる。

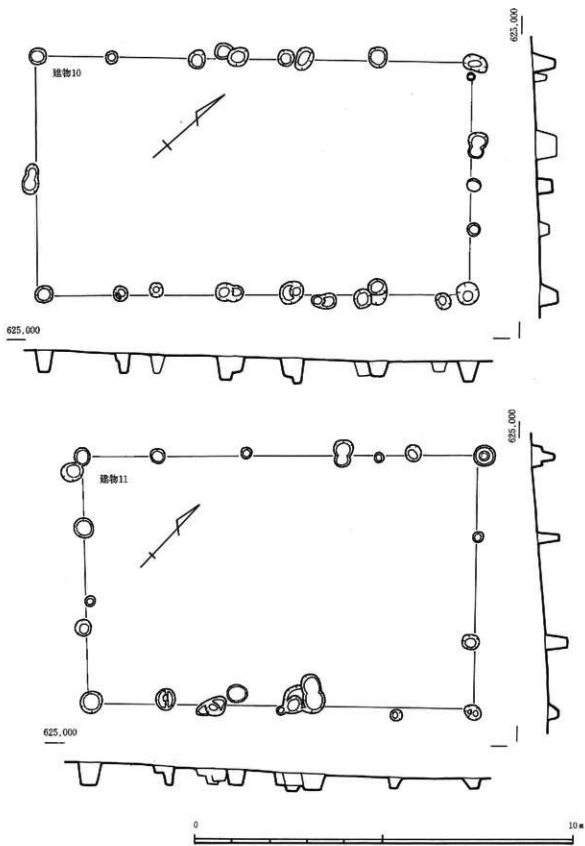
建物15 建物12の東側にありこれとほぼ直交する2×3間の南北棟の建物である。その方位は $N-49^{\circ}-W$ と建物12の直交方位と $2^{\circ}$ しか変わらない。南側梁行は $1.8+1.9m$ 、東側桁行は $1.7+2.0+1.8m$ の計 $5.5m$ を測り、面積は $20.24m^2$ の小形建物。

建物16 建物15の東側に位置しこれと平行する2×4間の建物。南側梁行は $2.7+2.4m$ 、北側は $2.7+2.6m$ を測り、桁行は東側が $2.6+2.4+2.3+2.3m$ で面積は $48.47m^2$ の中規模建物である。方位は $N-48^{\circ}-W$ で建物15とほぼ同一である。

建物17 建物16の東側約5mにある南北棟の建物である。1×4間の建物と思われるが北側梁間は2間の可能性もある。方位は $N-49^{\circ}-W$ で前2棟と平行し、面積は $25.84m^2$ 。南側梁間は $3.4m$ 、桁行東側は $1.6+2.2+1.7+2.1m$ の計 $7.6m$ 。

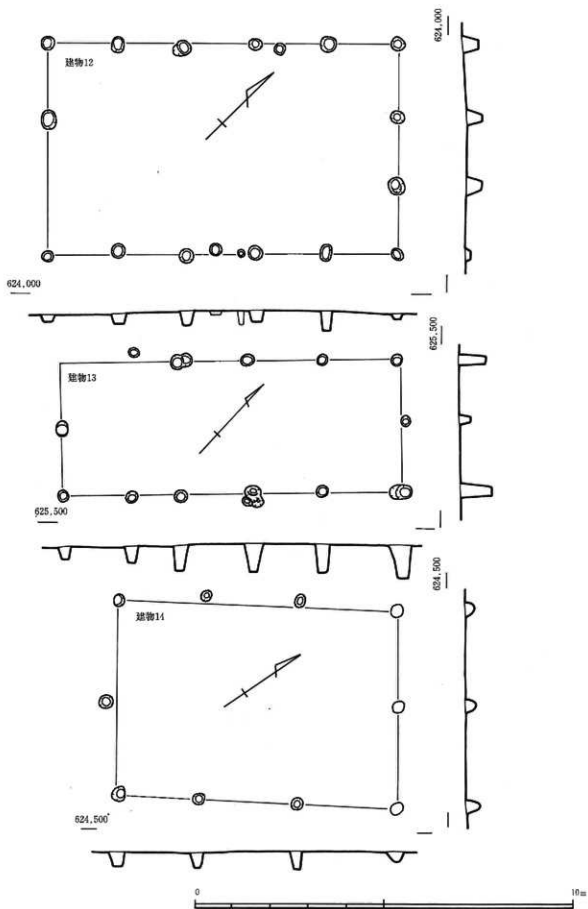
建物18 建物16の南東約4mにある1×2間の小形建物。梁間は $3.4m$ 、桁行は $1.5+1.4m$ を測り、面積 $9.74m^2$ の最小建物で、方位は $N-40^{\circ}-E$ 。倉庫等の付属施設と思われる。

南部地区の柱穴や建物の周辺からは第209回の埋燼、第212回3～10、第213回に示した土師質土器・須恵質土器・備前焼指鉢・同壺・同壺・青磁等が検出された。これらは16世紀代を中心とするが一部は15世紀に遡り、建物の重複も含め約1～2世紀に及ぶ長期間の存続が窺われる。

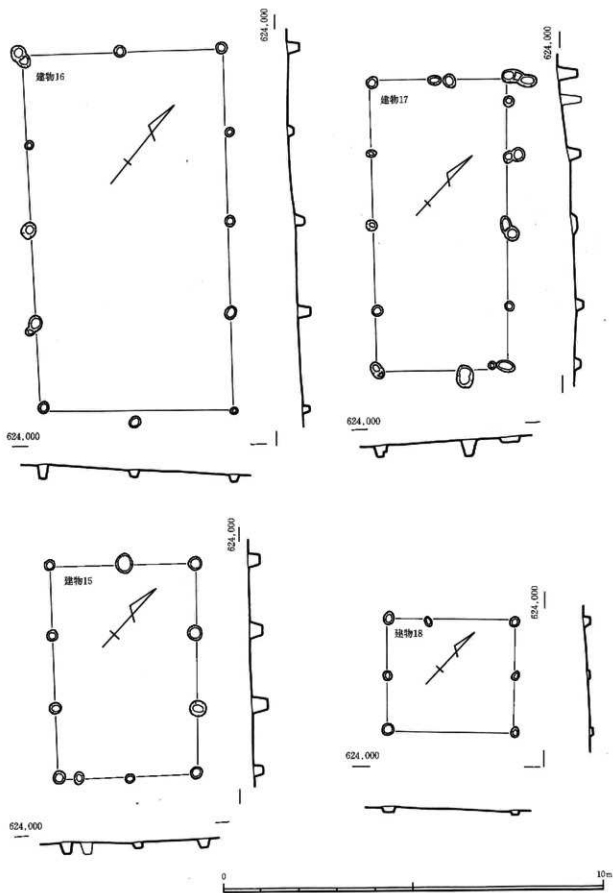


第204图 南部地区建物10-11实测图 (1/100)





第205图 南部地区建物12~14实测图 (1/100)

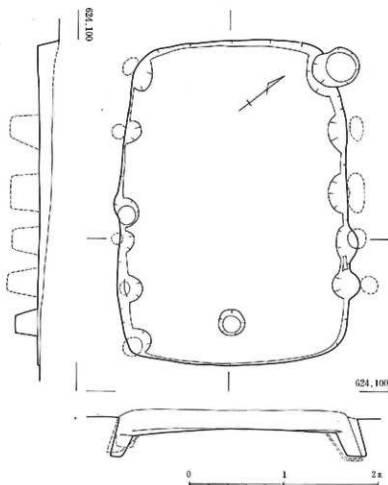


第206图 南部地区建物16~18实测图 (1/100)

竪穴 (第207図)

建物14の東側約5m、弥生後期後葉の48号竪穴の西側に近接する位置にある。全体に削平を受けているが長辺約3.4m、短辺約2.4mの隅丸長方形プランをなす。検出面から床面までは0.2~0.05mで東側は床面近くまで削平が及び、東北隅部分は後世の柱穴により失う。床面は平坦面をなし、両長辺の壁際と南側中央部の短辺に寄りに柱穴が設けられる以外に内部施設は認められなかった。

南側中央の柱穴は床面にはほぼ垂直に掘り込まれるが、両長辺の柱穴はいずれも内側から外側へと斜めに掘られており、合掌造りに類似する小形の建物が想定される。床面積は7.59㎡と小規模で遺構の性格を示す遺物はほぼ皆無の状態であるが、住居跡とは異なる施設であると言えよう。その横断面から推定される屋根の高さは約2.4mとなり、規模・構造などからすれば半地下の倉庫である可能性が高いものと考えられよう。なお、本竪穴と同様の遺構は都野原田遺跡、上屋敷遺跡、中原遺跡などにおいて確認され、いずれも16~17世紀代に比定されている。南部地区出土の上器類などから、本遺構は16世紀代のある時期の所産か。

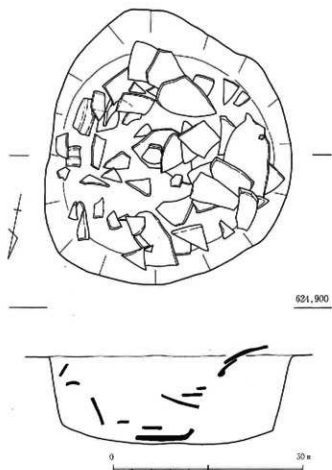


第207図 中世竪穴実測図 (1/40)

#### 埋甕遺構 (第208図)

建物10の北西隅付近から検出された遺構である。直径約0.65mの不整形円形のプランをなす土坑の内部に備前焼甕1個体が破砕された状態で出土した。検出面から土坑床面までの深さは0.23mを測り、土坑断面は逆台形に近い形態をなす。床面は直径0.55mほぼ円形をなし、中央部は平坦面を形成する。甕の口縁部～胴部の大半は中小の破片に割られた状況で検出されたが、中央部からは床面に接し底部片が正置された状態で出土しており甕の埋設遺構と考えられる。また、その埋設は若干の削平を考慮しても甕全体を埋め置いたものではなく胴部下半程度が地中に埋められたものと思われる。

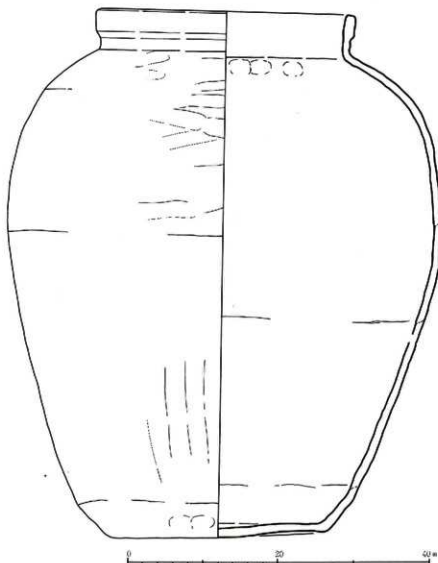
本遺構の周辺に類似する土坑は認められず複数の甕が列状に並ぶものではない。これが建物10に伴うものか異なる時期の建物に帰属するかについては明確にし難い。また、土坑内からは甕以外の遺物は検出されず、甕の内面にも付着物等は観察されなかった。従って、甕の内容物については特定はできないが水・酒・油等が考えられると共に、南部地区の建物群が日常生活に直結する施設であることが窺えよう。



第208図 埋甕遺構実測図 (1/10)

備前焼甕（第209図）は口径34.5cm、器高69.6cm、胴部最大径55.6cmを測る大形の甕である。口縁部から頸部はほぼ直立しやや肩の張る胴部に続き、底部は平底をなす。成形は幅5cm余りの粘土紐を輪積し、内面には部分的に輪積痕跡を残す。器壁は厚さ1cm前後で一定し、口縁部は玉縁が垂れて帯状に肥厚するが外面に凹線は施されない。胴部外面の下半はヘラ状工具による幅2.5cm前後の縦方向のケズリ、上半部分は横方向のケズリ、内面はナデによる調整である。頸部から口縁部はロクロナデによる。胎土に石英などの砂粒を多く含み外面は灰～赤褐色、内面は灰褐色を呈し、焼成は堅緻であるがやや焼き歪みが認められる。

この甕は間壁忠彦による備前焼編年の第Ⅳ期に相当するものと考えられる。紀年銘のあるものでは「福（文）安元年（1444）」銘の千光寺蔵の甕に近いが、本資料は口径が大きくなると共に玉縁が帯状を呈することなどからこれに後出するものと理解され、15世紀後半から16世紀前半に比定されよう。

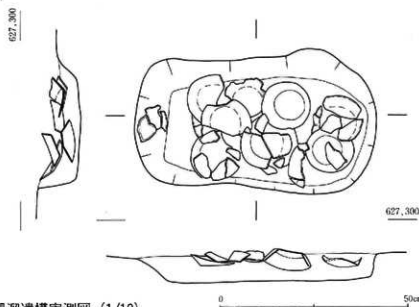


第209図 埋甕遺構出土甕（1/5）

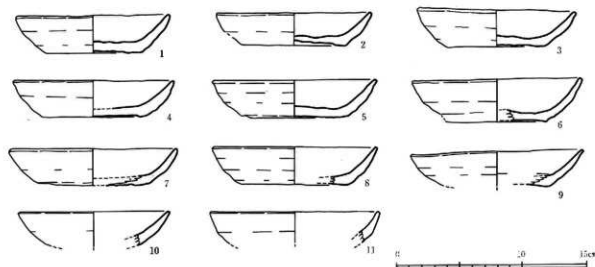
### 土器溜遺構 (第210図)

北部地区建物群の南西約30mの谷部で単独で検出された遺構である。小形の土坑で上面は削平を受けるが長軸0.64m、短軸0.33mの隅丸長方形に近いプランをなし、検出面から床面までは約0.1mと浅い。土坑の内部からは土師質土器環10個体が纏まって出土したが床面に投するものは無い。環の多くは内面を上にするが正置するものは少なく、1個体は伏せた状態で検出された。この中で完形品は2点に留まり、他は口縁部や底部などを部分的に欠くが一括投棄したものであることは疑いないと言えよう。また、第211図に示すように器形や胎土・法量に大きな差はなく同時期の所産と考えられ、その法量から小路遺跡I期より古く15世紀前半代に置かれよう。

1は回転糸切り離しの底部からやや丸みをもつ体部と口縁部に至り、口径は12.2cmと最小で、器高3.0cmを測る。胎土に金雲母をやや多く含む橙褐色を呈する。2～9も同様の器形・調整・胎土を示し、2は口径12.4cm・器高2.5cmを測り器高のやや低いもの。3は口径12.6cm・器高2.9cm。4は口径12.9cm・器高2.9cm。5は口径13.0cm・器高3.0cm。6は口径13.4cm・器高3.3cmで器高が最も高い。7は口径13.4cm・器高2.9cm。8は口径13.0cm・器高2.9cm。9は口径13.6cm・器高2.8cmで口径が最大となる。10・11は同一個体の可能性があるもので、11の口径は13.4cmを測る。



第210図 土器溜遺構実測図 (1/10)

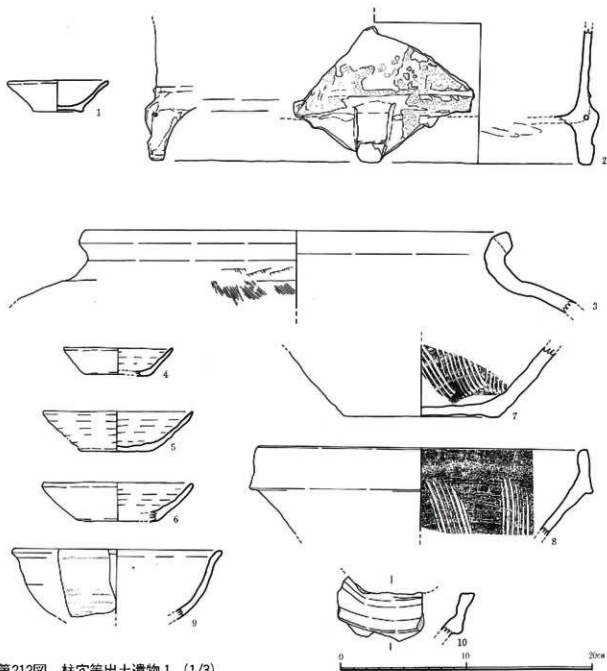


第211図 中世土器溜遺構出土土器 (1/3)

柱穴等出土土器 (第212・213図)

第212図 1は北部地区の建物2の柱穴周辺から採取された小皿で、2は建物5の東部約8mにある柱穴から出土した瓦質土器。1は口径8.0cm、器高2.5cm、底径4.0cmを測り、口縁部にスガが付着する。小路遺跡の土師質土器E類にあたり16世紀前半代に置かれるものか。2は火鉢の脚部で小路遺跡脚 $\alpha$ 類に近いもので、1と時間的には大きく変わらないものと考えられる。

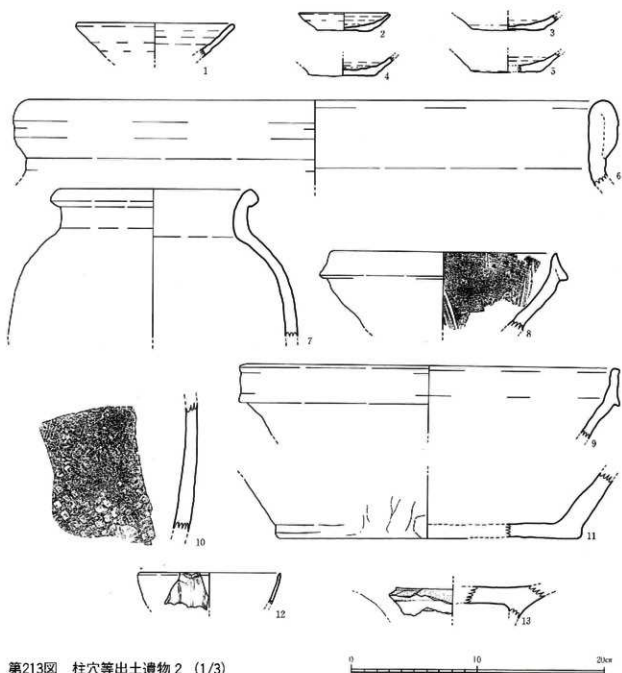
3~10は南部地区の建物10・11とその周辺の柱穴から出土したもの。3は築地や年代の不明な須恵器系甕で短く反転して開く口縁部から肩の張る胴部に続き、外面肩部はハケ調整である。4~6は土師質土器小皿と同環で4・6は小路遺跡A1類に5はA2類に相当し15世紀後半に置かれる。7・8・10は備前焼摺鉢で16世紀前半に置かれよう。9は青磁碗で龍泉窯系青磁IV類とされるものである。これらの中で、6は建物11の北西隅の柱穴から、4はこの柱穴を切る柱穴から、7は建物10の柱穴から出土。



第212図 柱穴等出土遺物 1 (1/3)

第213図1～13は南部地区の建物群周辺の整地層や柱穴などから出土した土器類。1～5は土師質土器環と小皿で小路遺跡AⅡ～AⅢ類に相当し、16世紀前半から中頃に置かれよう。6～9は備前焼の甕・壺・摺鉢。6は甕の口縁部でやや幅広い玉縁の外側に浅い凹線を加え16世紀中頃から後半に、7の蓋は16世紀前半に置かれるものであろう。8の摺鉢は15世紀後半から16世紀前半に、9は16世紀前半から中頃に各々比定されよう。10は外面に格子目タタキを施す瓦質の甕胴部片で亀山焼系か、11は瓦質系甕の底部で束播系と思われる。12は銅頭を施す青磁碗で16世紀前半から中頃に置かれ、13は青磁碗又は皿の底部。

南部地区からは先に述べた土器溜遺構出土の土師質土器環はほとんど認められなかった。伝世が考えられるものを除く各種の上器類は15世紀後半から16世紀中頃に置かれ、南部地区建物群は出城の中心的施設と想定されよう。



第213図 柱穴等出土遺物 2 (1/3)



### 第三章 中原遺跡

---

### 第三章 中原遺跡

#### 1、遺跡の位置と調査の概要

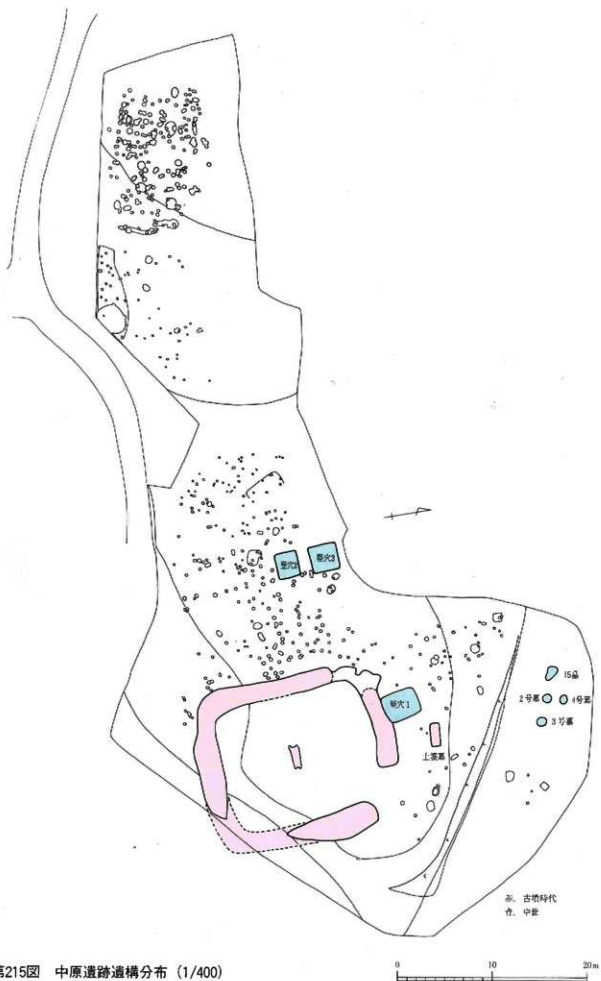
中原遺跡は小城原遺跡の端部南東約500m、比高差約50mの同一丘陵上の先端部に位置する。標高584m余りの丘陵端部上面は三方を谷により画された緩斜面をなし、調査区の南幅約40mには直径約30mの円墳と推定される湯ノ上古墳（5世紀前半代）が対峙するように営まれている（第214図）。また、谷を隔てた丘陵上には古墳時代前期の大規模拠点集落跡である都野原田遺跡が、その丘陵の先端部には同時期の前方後円墳と前方後方墳各1基を中心とする仏原千人塚古墳群が展開し、墳墓と集落がまさに一体として存在する。

調査は平成9年9月中旬に開始し、同年10月末に終了した。調査区の全長約100m、幅15～30m、調査面積は約2,500㎡。第215図に示すように調査区内部からは古墳時代前期の方形周溝墓1基・土壇墓1基を始め、中世の竪穴遺構3基と墓4基などが検出された。方形周溝墓は石棺を主体部とし長方形に巡る溝は約21×18mを測りその規模は大きい。水田化による前半や中世の擾乱を受け遺存状態はやや不良である。その造器は古墳時代前期前半でもやや新しく考えられ、湯ノ上古墳に先立つ有力層の存在を示すものとしてもその重要性は高い。また、中世墓からは16世紀後半の土師質土器・京都系土師器・染付など土器編年上の好資料を得たと共にガラス製数珠玉や小刀などの出土も注目される。

以下、時期毎に遺構・遺物の概要を述べる。



第214図 中原遺跡位置図 (1/1000)



第215図 中原遺跡遺構分布 (1/400)

## 2、古墳時代の遺構と遺物

### a、方形周溝墓（第216図）

**周溝** 後世の掘削と削平により墳丘盛上と周溝の南東コーナー部分とその周辺は消失し、現存するのは溝の床面付近に過ぎないが北側の東西両側に陸橋部が設けられることはほぼ確定である。東北の陸橋部は内側幅4m、外側幅約6mを測り周溝の終息部分では明確である。西北陸橋部は掘削のため溝の終息は不明瞭となるが、内側の幅3.5mで外側は約6mでその規模はほぼ変わらない。周溝外側の南北長は最大で21.2m、同じく東西長は18.1mを測り南北に長い長方形を呈する。溝内側の南北長は中心で16.5m、で東西長は13.3mとなり溝の上方面は1.8～3.0mである。遺物の殆どは削平と掘削の少ない北・東側の周溝から検出され、西・南側周溝の土器は少数で小破片に過ぎなかった。これらから、土器類の供献は、陸橋部の存在からも窺えるように周溝墓の北半部分を中心とするようである。

北側周溝は長さ8.5m、幅1.8～2.2mで中世の堅穴1に外側の一部を切られる。検出面から床面までは0.1～0.2mと削平を大きく受け残りは浅く断面は逆台形に近い。遺土は茶褐色土の1層からなり、第218図4は溝床面から同図1・3・8は床面から約0.1m上位から出土した。これらは墳丘上に置かれたものと考えられるが、比較的早い段階で溝内へ転落したものか。

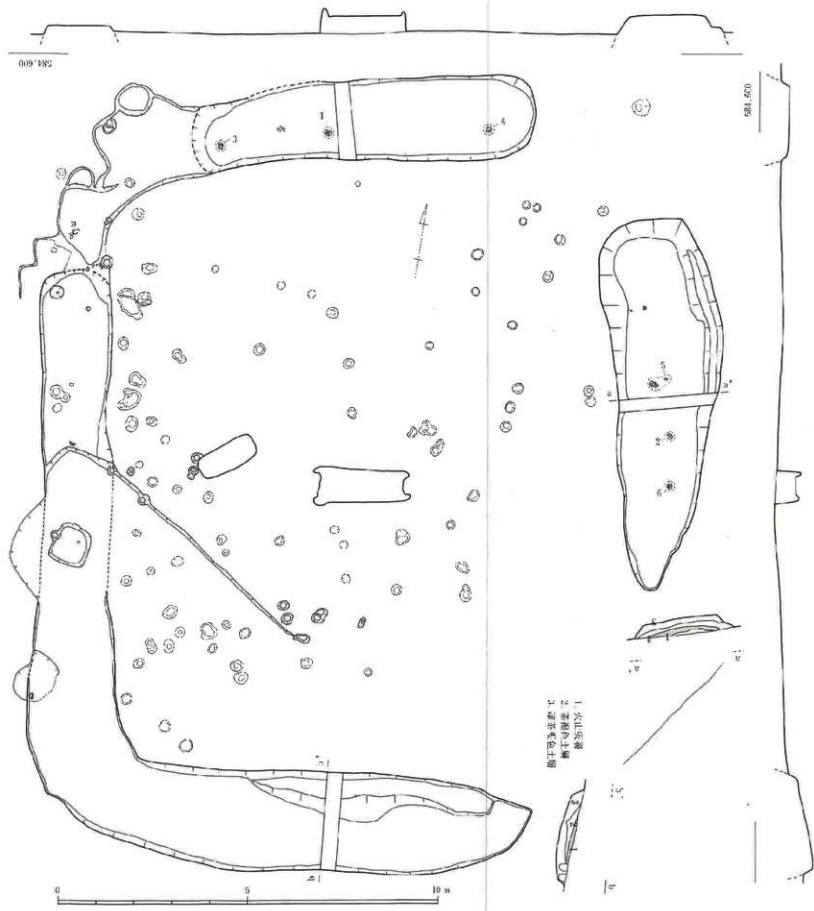
東側周溝の南半は完全に消失するが北側の検出面から床面までの深さは約0.5mと比較的残りは良く、その上部には厚さ0.1mほどの黄灰色火山灰層の堆積が認められた。溝内部の層位は3層に大別されるが、第218図2・5・6などの土器は全て火山灰層より下位からの出土である。

西側周溝は削平がやや大きく溝の中程は完全に失われ、終息部も掘削を受ける。南側周溝も残りは浅く溝の東部を失うが、中央部上面には部分的に火山灰の堆積が観察された。

**主体部**（第217図） 周溝に囲まれた内部の中央やや南寄りに位置する石棺であるが、掘削により蓋板や内棺石は破壊・除去を受ける。主軸を東西方向にとり内側部の掘込みが東西に短く突出する。扉幅中軸の長さは2.18m、東側小口幅0.78m、西側小口幅1.02mを測り、検出面から床面までは0.45m。棺材は安山岩の板石を利用し内小口に各1枚、扉板に各々3枚を使用し、内側板が小口板を扶む箱式石棺である。床面は地山地形であり板材は敷かれていないが、全長1.86m・東側幅0.31m・西側幅0.53mを測り、0.2mほど西側が広く西頭位と考えられる（N-100°-E）。残存する小口と側板には赤色顔料が認められ、石材の厚さは1～2cm前後と比較的薄いものを使用している。両側板設置の掘込みの深さは大差はないが、小口では東側が約0.1mと浅いのに対し頭位である西側は0.3mと深く掘込まれ頭部周辺の石棺の強化を図ったものと思われる。

石棺内部からは第219図に示した鉄銅片2点で検出された。本来211が頭部周辺の西側に埋納されていたと理解されるが掘削時に破壊され、2は床面から1は検出面の直下から出土したもので2点とも布の磨着が認められる。人骨は残存しないが被葬者は成人男性か。

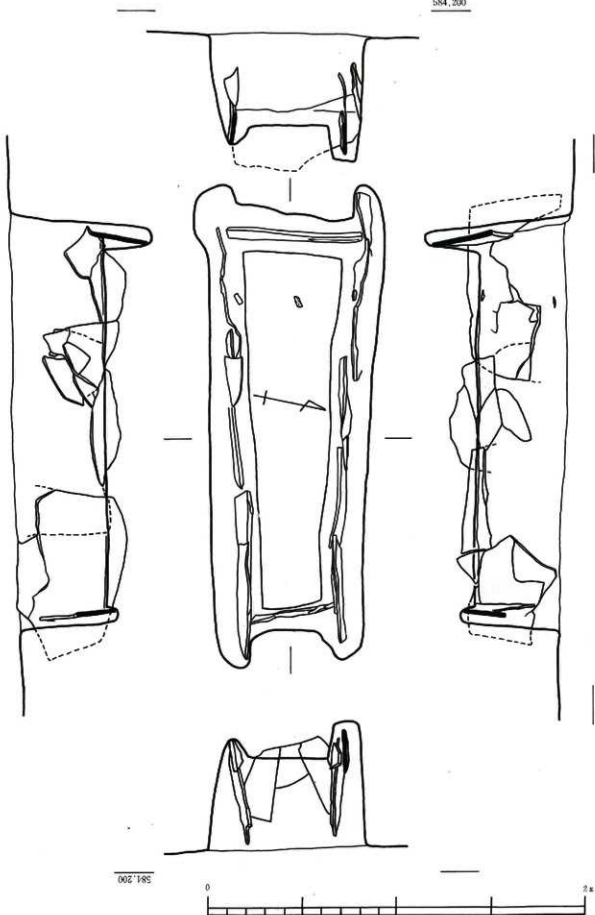
**周溝出土土器**（第218図） 1は畿内系二重口縁壺で口縁部の一部と胴部下半を欠く。外反してやや大きく開く口縁部から総まりの強い頸部に続き、胴部は球形に張り出すが口徑よりは張らない。胴部内面はヘラケズリのちナアにより、外面はハケののちミガキをやや雑に加える移入土器。2は底部を打突き穿孔する小形丸底甕。外面はハケののち口縁部は縦方向の、胴部は横方向のミガキをやや丁寧に加えた移入品で口径14cm・器高8.8cm。



第216図 方形周溝墓実測図 (1/100)

584.200

584.200

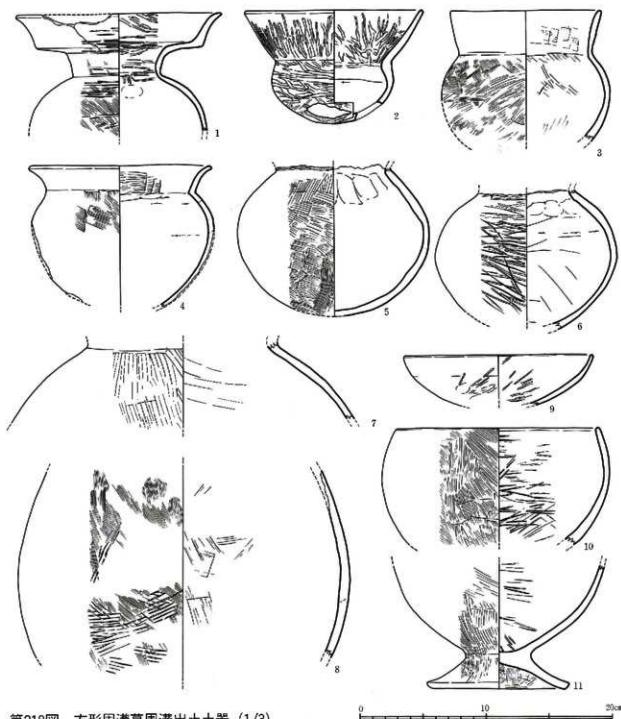


584.200

第217图 方形周溝墓主体部实测图 (1/20)

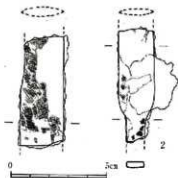
3は小形の直口壺、直線的にやや外に開く口縁部から球形の胴部に続くが底部付近を欠く。内外面ともハケを主調整とする在地系土器。4は小形の在地系鉢で口縁部はやや強く反転して開く。胴部外面にススが附着し煮炊きに使われたことを示す。5・6は頸部から口縁部を失うが胴部がやや偏球形を呈することから小形の長頸壺と考えられるもの。5は縦方向のハケに横ハケを加え在地系か、6は内面ケズリのちナデで外面は横方向のミガキを丁寧に施す移入土器か。7は大形の壺の肩部で、8は外面タタキののちハケを加える堯の胴部片でいずれも在地系。9は口径15cmを測る丸底の碗で石英を多く含む移入品。10・11は同一個体と思われる脚付鉢、外面は縦方向のハケを主とし内面はナデののちやや粗いミガキを施す。

以上の周溝出土の土器は古墳時代前期前葉でも中頃に近い時期に比定され、方形周溝墓の造営もここに考えられよう。



第218図 方形周溝墓周溝出土土器 (1/3)

**主体部出土遺物 (第219図)** 1は鉄剣の剣身部分で現存長5.9cm、身幅は2.0~2.3cmを測り下側が幅広となる。錆は観察されず中央部の厚さは0.4cmで、両面に布の錆着が認められ抜き身の剣身布巻きして副葬したと想定される。2は鉄剣の剣身から胴部と茎部にかけて現存し、身幅は1.9cm・同厚さ0.3cm。胴部は緩い曲線を描き茎部に続き、茎部幅は1.0cm・厚さ0.3cmで断面は長方形となる。1に比べやや小形で剣身から茎部にかけて布の錆着痕跡が認められる。



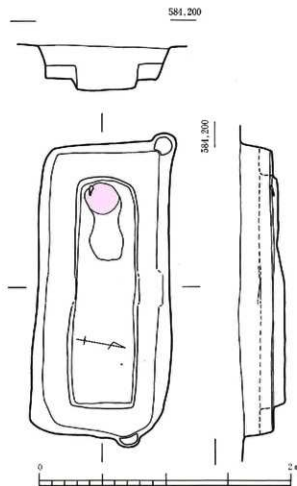
第219図 主体部出土鉄剣 (1/2)

**b. 土墳墓 (第220図)**

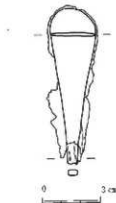
北側周溝の北約3.6mにあり、主体部と並行するように形成される。削平を受けるが墓壙上面は長さ2.32m、中央部幅1.03mの長方形をなし、深さ約15cmの所で平坦な段が設けられ二段掘りとなる。平坦面の幅は約15~20cmで目張り痕跡等は検出されなかったがここに木蓋を設置したと考えられる。二段目の全長1.71m、幅約0.5mで西側はやや丸みをもつ。これより床面までは15~20cmを測り、その西側には赤色顔料の散布が認められた。西端部の直径30cmの円形部分は赤色の濃度が強く頭部の位置を示すものと判断され、その南側から鉄鏃1点が検出された。床面長は1.71m、中央部幅0.48mを測り、内部から鉄鏃以外の遺物は見られなかった。

人骨は完全に消滅しているためその性別・年齢等は不明であるが、規模と副葬品から推定すれば方形周溝墓の被葬者と関係する成人男性が葬られたものと思われる。

鉄鏃 (第221図) は主頭斧術式で鏃身部幅2.6cm、同厚さ0.25cm、全長8.3cmを測る。鏃身から茎部にかけては緩くすばまり茎尻には矢柄の痕跡が残る。



第220図 土墳墓実測図 (1/30)



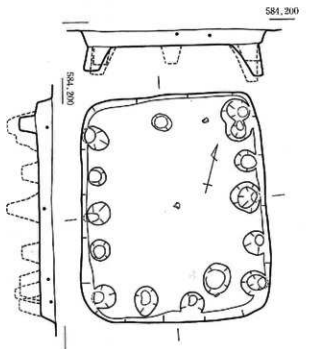
第221図 同出土鉄鏃 (1/2)

### 3、中世の遺構と遺物

#### 竪穴 1 (第222図)

方形周溝溝の北側周溝を併かに切り溝の外側に形成される。長辺3.5m、短辺2.7~3.0mを測り南北に長い長方形プランを呈し、検出面から床面までは約0.2mと残りはやや浅い。床面は平坦となり東西の両長辺の壁面に接し柱穴が各々5つが対をなす形で設けられ、柱穴はいずれも外側に傾斜する。柱穴は北側壁寄りに1つ、南側壁際にも3つが認められるが、これらの掘方はほぼ垂直であり長辺の柱穴と違いを見せる。長辺の柱穴の傾斜角度は $20^\circ$ 前後であり、合計14の柱穴から想定される上層構造は切妻造と思われる。床面積は8.9㎡を測り、その方位は $N-18^\circ-W$ 。

柱穴以外の施設は検出されず、中央部は空間を形成するとなどから住居跡の可能性はほぼ皆無であり半地下式の倉庫か。内部からの第225図1に示した備前焼摺鉢と若干の鉄滓が検出され、摺鉢は11世紀部と底部を欠くが概ね16世紀後半代に置かれよう。

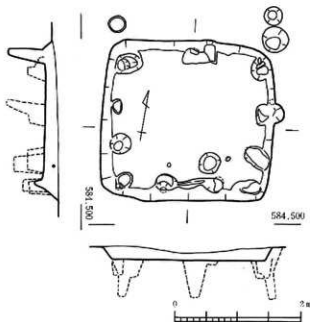


第222図 竪穴 1 実測図 (1/60)

#### 竪穴 2 (第223図)

竪穴 1 の西側約17m、竪穴 3 と近接して設けられる。東西辺2.6~2.75m、南北辺2.4~2.5mで東西にやや長い方形に近いプランをなす。検出面から床面までは0.1~0.2mと削平を受ける。四隅と東西両壁際に各々2つの柱穴が対をなしながら掘込まれる。柱穴は北壁側の中程に1つ、南側壁に接し2つとやや内側に1つの計12から構成される。これら壁際の柱穴は抜取りによる変形が大きいと思われるものを除くと、各辺とも柱跡は外側に傾斜しており竪穴 1 とやや異なる。しかし、東西両側の8つ柱穴の配置や掘方からすれば上層構造に大きな変化はないものと考えられ、その性格・機能も同様と思われる。床面積4.4㎡、方位は $N-8^\circ-W$ 。

第225図 2~4 が内部から出土した遺物である。2・3は備前焼摺鉢で同一個体と見做されるもの。口縁部下端がやや垂れ、内面の摺目は10条施される。4は龍泉窯系青磁碗の底部で高台を欠く。摺鉢は16世紀代に、青磁は15~16世紀前半に置かれ、竪穴 1 とほぼ同時期の所産である。



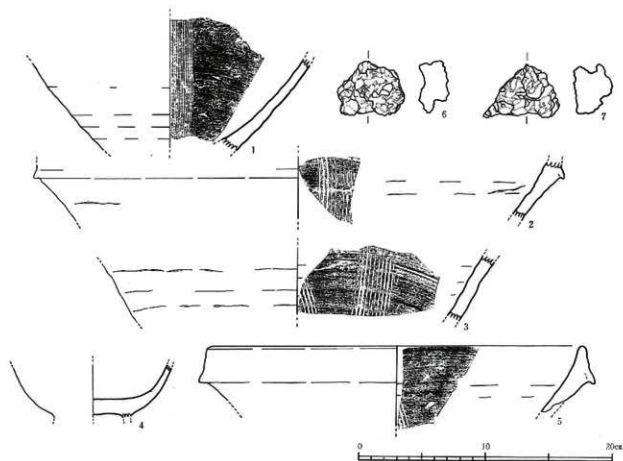
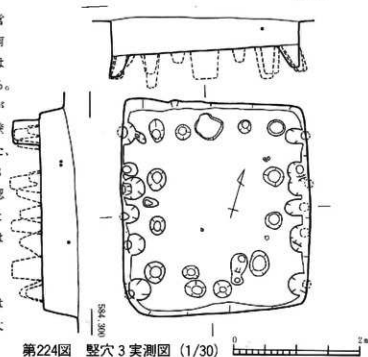
第223図 竪穴 2 実測図 (1/30)



### 竪穴3 (第224回)

竪穴2の北側1.5mにありこれと並行して営まれる。長辺3.1~3.4m、短辺2.8~3.0mの南北に長い長方形をなし、検出面から床面までは0.4~0.6mと遺存状態は比較的良孝良好である。東西両壁際に各々6つの外側に傾斜する柱穴が対をなしながら設けられ、南北両側の柱穴は塼と接することなくほぼ垂直に掘込まれる。また、東西の壁際の柱穴の内側にも垂直に掘られた8~9の柱穴が巡る。内側の柱穴は南辺側にも認められ、建替えとこれに伴う拡張に因るものと考えられる。方位はN-20°-W、床面積は8.68㎡。

本遺構からは第225図5の備前焼摺鉢と6・7の流動滓と思われる鉄滓が検出された。5は16世紀代に比定され他の竪穴と時期や性格に大きな違いはないものと考えられる。



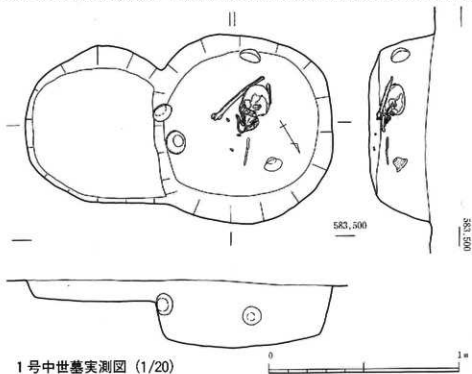
第225図 竪穴1(1)・2(2~4)・3(5~7)出土陶磁器 (1/3)

### 1号中世墓 (第226回)

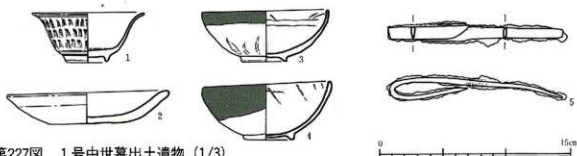
調査区の東北部、丘陵の先端に4基の墓が営まれていた。1・2・4号は1.5~2m程の間隔を置き東西の直線上に並び3号は2号の北側に設けられる。その配置にはまともと計画性が認められることから、各墓は比較的短期間の連続した造墓と考えられる。1号墓は4基の中で最も西にあり、墓壇は直径1m余りの円形を呈するが東側は直径0.8m・深さ0.1mの不整形の土坑と重複しこれを切って営まれる。墓壇床面は浅く窪み検出面からの深さ約0.3m、床面から5~20cm上位に頭骨・大腿骨等が検出され、比較的残りの良い頭骨は転落により顔面を下にしていること等から熟年の女性が座葬の状態で葬られたものか。副葬品として青花碗1、土師質土器碗2、刀子1、念珠119点が認められた。念珠は頭骨の周辺に散らばった状態で検出され被葬者の手に着装された可能性が高いが、土器類は斜めに転落した状況で墓壇中心から出土し棺外副葬品であることを示す。刀子は刃先を折り曲げ青花碗の東側から出土していることも含め、桶状の木棺に葬られ念珠以外の副葬品は棺外に供えられたと理解されよう。

第227回1は口径9.0cm、器高3.9cmを測る完形の青花碗。端反りの口縁部と腰部に團縁を巡らせその間に松葉状の文様を三段に施す。2は平底の底部からやや丸みをもつ体部に続き、口縁部がわずかに屈曲する京師承土師質土器。口径12.6cm、器高2.5cmで器壁はやや厚く淡橙褐色を呈し砂粒を余り含まない移入品。3は口径10cm・器高4.0cm、4は口径10.3cm・器高4.4cmを測る小形の瓦質土器碗で体部は丸みをもつ。口縁部外側に重焼の痕跡を残し、調整はケズリのちなデで4にはミガキが加わり内面にヘラ状工具痕が認められる。5は刃先の半分を折り曲げる刀子で全長約20cm、茎部には桜皮巻かと思われる柄が若干残る。

第228回は鉛ガラス製念珠。1~117の直径は3~4mm、厚さ1.2~3.5mmと全体に小さく薄い。その製作は断面に突出部をもつ13・14や2個連結する118・119から、直径1mm前後の棒状工具にガラスを巻き付け、これに刻



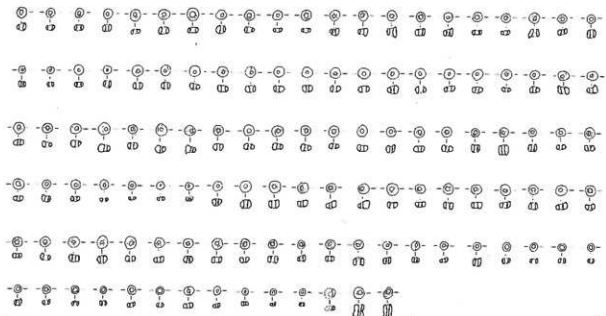
第226回 1号中世墓実測図 (1/20)



第227回 1号中世墓出土遺物 (1/3)

目を加えて切り離したと考えられる。また、白色をなすものが多いが1~23は色の薄いブルーを、24~42はグリーンを呈する。全てを連結すると約24cmとなり、遺物の検出時に紛失したものを考慮すると全長は35cm前後か。

出土土器類の中で青花碗は16世紀後半から17世紀初に、京都系土師器は中世大友府内城下町跡の福年では16世紀後半から末頃に、瓦質土器は16世紀後半に各々比定されるものである。さらに細かい年代決定には今後さらなる検討を要する部分もあるが、本遺構の時期は16世紀後半と考えられよう。



第228図 1号中世墓出土念珠 (1/1)

番号	色	測定径(mm)	厚径(mm)	孔径(mm)	重量(g)
1	27#174-	0.4	0.3	0.15	70
2	+	0.3	0.2	0.15	70
3	+	0.35	0.25	0.15	50
4	+	0.35	0.28	0.15	80
5	+	0.4	0.15	0.15	60
6	+	0.4	0.35	0.15	100
7	+	0.45	0.2	0.2	70
8	+	0.35	0.3	0.1	80
9	+	0.35	0.2	0.15	70
10	+	0.3	0.15	0.1	50
11	+	0.4	0.15	0.18	60
12	+	0.4	0.25	0.1	80
13	+	0.35	0.2	0.1	70
14	ブルー	0.35	0.25	0.15	70
15	+	0.3	0.2	0.15	60
16	7#174-	0.3	0.2	0.1	80
17	+	0.35	0.12	0.2	50
18	+	0.3	0.12	0.12	55
19	+	0.35	0.28	0.11	70
20	+	0.3	0.15	0.1	50
21	+	0.3	0.3	0.15	60
22	ブルー	0.25	0.18	0.05	35
23	+	0.25	0.15	0.1	20
24	グリーン	0.35	0.2	0.1	50
25	+	0.3	0.25	0.08	45
26	+	0.4	0.2	0.15	60
27	+	0.4	0.25	0.1	60
28	+	0.4	0.2	0.1	60
29	+	0.4	0.2	0.1	60
30	+	0.35	0.25	0.1	60
31	+	0.1	0.2	0.1	55
32	+	0.1	0.2	0.1	60
33	+	0.38	0.3	0.1	65
34	+	0.4	0.2	0.1	70
35	+	0.4	0.25	0.1	70
36	+	0.4	0.25	0.1	50
37	+	0.4	0.2	0.1	60
38	+	0.4	0.2	0.1	50
39	+	0.4	0.1	0.1	40
40	+	0.35	0.2	0.1	50

番号	色	測定径(mm)	厚径(mm)	孔径(mm)	重量(g)
41	+	0.4	0.25	0.1	50
42	+	0.4	0.2	0.1	40
43	7#174-	0.1	0.2	0.1	20
44	+	0.4	0.15	0.15	60
45	+	0.4	0.2	0.15	70
46	+	0.32	0.25	0.12	40
47	+	0.35	0.2	0.1	25
48	+	0.45	0.25	0.1	65
49	+	0.1	0.3	0.1	60
50	+	0.1	0.2	0.12	30
51	+	0.4	0.15	0.15	50
52	+	0.4	0.2	0.15	50
53	+	0.35	0.25	0.1	35
54	+	0.4	0.25	0.15	50
55	+	0.4	0.2	0.1	40
56	+	0.35	0.2	0.12	40
57	+	0.38	0.15	0.1	60
58	+	0.3	0.2	0.1	25
59	+	0.3	0.25	0.15	25
60	+	0.35	0.35	0.1	40
61	+	0.3	0.25	0.12	20
62	+	0.3	0.15	0.12	5
63	7#174-	0.4	0.2	0.15	85
64	ブルー	0.4	0.15	0.1	40
65	+	0.3	0.2	0.15	50
66	+	0.3	0.15	0.1	10
67	7#174-	0.35	0.1	0.15	35
68	+	0.29	0.1	0.1	15
69	+	0.3	0.12	0.09	10
70	+	0.29	0.1	0.05	15
71	ブルー	0.35	0.25	0.1	70
72	ブルー	0.4	0.3	0.11	70
73	+	0.45	0.3	0.2	85
74	+	0.4	0.2	0.1	75
75	+	0.38	0.2	0.1	65
76	+	0.4	0.2	0.1	60
77	+	0.4	0.2	0.12	60
78	+	0.35	0.15	0.1	50
79	+	0.4	0.2	0.18	70
80	+	0.38	0.2	0.1	75

番号	色	測定径(mm)	厚径(mm)	孔径(mm)	重量(g)
81	+	0.4	0.15	0.15	80
82	+	0.35	0.2	0.15	70
83	+	0.4	0.15	0.15	90
84	+	0.1	0.2	0.13	70
85	+	0.25	0.18	0.16	30
86	+	0.4	0.15	0.2	75
87	+	0.1	0.25	0.1	30
88	ブルー	0.4	0.25	0.1	75
89	+	0.4	0.2	0.15	90
90	+	0.35	0.2	0.1	60
91	+	0.35	0.25	0.1	25
92	7#174-	0.3	0.2	0.16	60
93	+	0.35	0.15	0.13	20
94	+	0.3	0.2	0.12	60
95	+	0.3	0.2	0.15	40
96	+	0.35	0.18	0.1	40
97	+	0.35	0.3	0.1	55
98	7#174-	0.3	0.2	0.1	65
99	+	0.3	0.15	0.1	35
100	+	0.3	0.15	0.1	20
101	7#174-	0.3	0.3	0.2	15
102	+	0.3	0.2	0.2	25
103	+	0.3	0.2	0.2	30
104	+	0.3	0.2	0.2	20
105	+	0.25	0.15	0.18	20
106	+	0.25	0.2	0.15	25
107	+	0.3	0.15	0.18	20
108	+	0.28	0.1	0.4	30
109	+	0.25	0.15	0.2	15
110	+	0.3	0.15	0.1	20
111	+	0.3	0.15	0.2	10
112	7#174-	0.4	0.2	0.1	20
113	+	0.33	0.15	0.1	40
114	+	0.25	0.1	0.6	24
115	+	0.25	0.1	0.1	20
116	7#174-	0.26	0.1	0.1	20
117	+	0.4			1
118	+	0.4	0.45	0.15	170
119	+	0.4	0.6	0.2	155

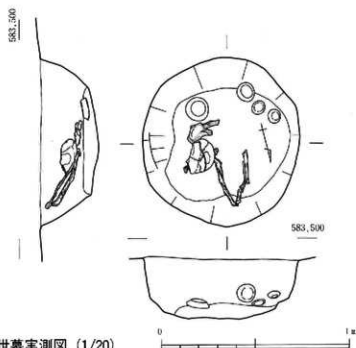
念珠計測表

## 2号中世墓 (第229図)

1号の東約1.5mにあり、墓壙上面は直径約0.85mの円形をなす。床面中央までの深さは0.3mを測り、断面はJ字状に近い。床面より約0.1m上に頭骨の一部と寛骨・大腿骨などの部分骨が検出され、南側の床面と壁面近くから土師質土器4点が内部に落ち込んだ状態で出土している。土師質土器環(第230図3)1点は底部を上、その他は内面を斜めに検出されたことから土器は棺外副葬と思われる。また、人骨(男性)は棺桶状木棺に座葬の状態で見られていたと推定される。

第230図1は口径7.9cm、器高1.7cm、底径7.8cmの土師質土器小皿で底部は回転糸切離し。金雲母をやや多く含み、透明皿としての使用痕跡を口縁部内側に残す。2も透明皿として使われていた京都系土師器の小皿で口径8.1cm・器高1.9cm測り、底部はわずかに窪む丸底をなす。胎土に砂粒をほとんど含まず、淡灰茶褐色を呈する。3・4は京都系土師器を模倣した赤ロクロ成形の土師質土器杯で、器壁がやや厚く外底部には板状片痕を残す。3は口径12.2cm・器高2.3cm・底径8.9cm、4は口径12.2cm・器高2.5cm・底径7.0cm。いずれも胎土に石英などを少量含む移入器で淡黄褐色を呈する。

これらの土器中で1は16世紀後半に考えられる朝地町・万田船跡出土土師質土器小皿c類に近く、2は大友府内城下町跡土師器福年では16世紀後葉に置かれるものに相当する。3・4は類例に乏しいが京都系土師器の模倣であり法量や器壁の厚さ等から前記土器と時期を同じくするものと考えられる。従って、本遺構も16世紀後葉頃に属するものであろう。



第229図 2号中世墓実測図 (1/20)

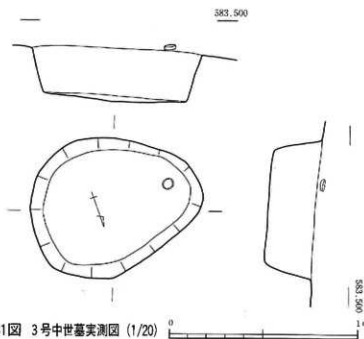


第230図 2号中世墓出土土師質土器 (1/3)

### 3号中世墓 (第232図)

2号墓の東側1.5mに位置する。墓塚の平面形は長軸0.92m、短軸0.73mの不整楕円形を呈し、検出面から床面までは0.25mを測る。墓塚断面は逆台形に近く床面は平坦面をなす。内部から人骨片が検出されたものの遺存状態が非常に不良であったため取り上げを断念した。

陶器品等は確認されなかったが、墓塚上面から第231図に示した土師質土器小皿1点が検出された。小皿は手づくねによるもので口径6.0cm、器高1.9cmを測り、金雲母等を少量含む。造墓後の供献とも考えられるが不確定であり類例も少なく時期比定にやや苦慮するが、3号墓自体は1・2号墓と大きな時期差はないものと推定され、16世紀後半から17世紀前半の中に置かれよう。



第231図 3号中世墓実測図 (1/20)

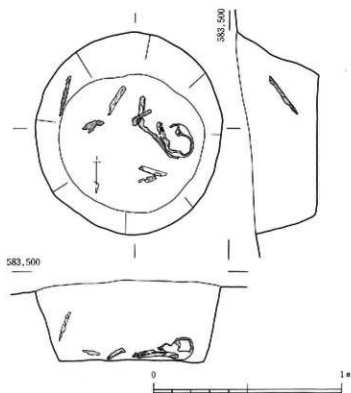


第232図 3号中世墓出土小皿 (1/3)

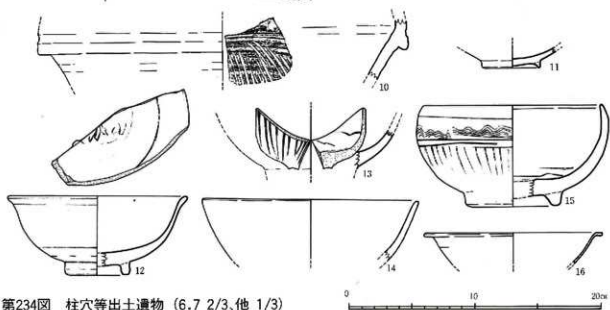
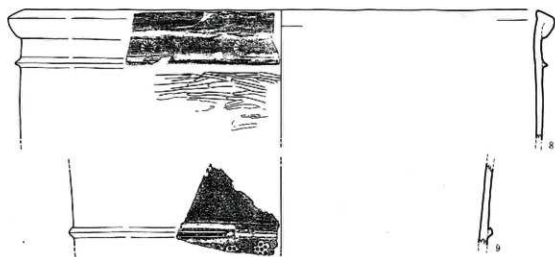
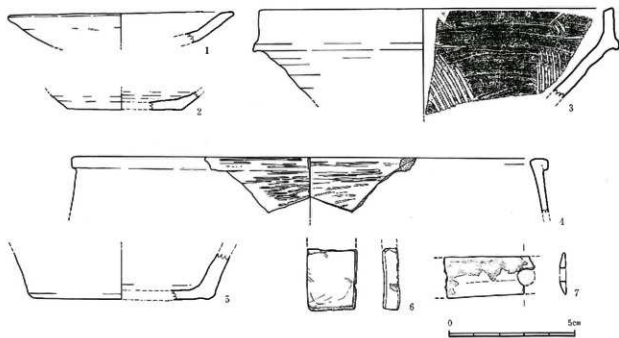
### 4号中世墓 (第233図)

2号墓の北側約1mに位置する。墓塚は直径1m前後の円形プランをなし検出面から床面までは約0.4m、床面の直径0.7m余りで墓塚の断面は逆台形を呈する。ほぼ床面に接し頭骨や人腿骨・骨盤などの部分骨が検出され、1号墓と同様の木棺墓である可能性が高い。南東部の墓塚中位からは小刀が出土しているが、これも刃先を上斜めに検出されたことから棺外副葬と判断される。全長25cm、身幅1.6cm余りの小刀は整理中に紛失し図示できなかった。人骨の所見から被葬者は熟年男性か。

土器類の副葬はないが覆土の状況や墓塚の構造は前述の中世墓と類似し、これらとほぼ同じ16世紀後半から17世紀前半の造墓と思われる。



第233図 4号中世墓実測図 (1/20)



第234图 柱穴等出土遺物 (6.7 2/3、他 1/3)

#### 柱穴等出土遺物（第234図）

1～7は調査区西南部の土坑状の落込みから出土。1は京都系上師器で口縁部が短く外に屈折し、復元口径18cm。2は内外面にロクロ痕跡を残す土師質土器杯の底部片。3は備前焼摺鉢で口縁部はほぼ直立し、口縁端部は斜面をなすもので口径27.8cm。4は瓦質土器の火鉢の口縁部片で、口縁部が外に肥厚し器面はミガキによる調整。5は備前焼摺鉢の底部。6は幅2.0cm、長さ2.4cm、厚さ0.5cmを測る小形の砥石片で珪質泥岩製。7は幅1.6cm、現存長3.6cmで径0.5cmの孔を穿つ銅製金具。

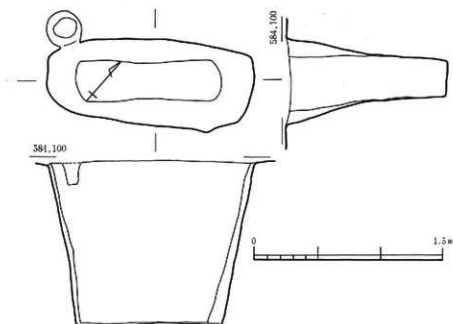
8～16は柱穴や方形周溝墓の周溝などから出土したもの。8・9は円筒状を呈する瓦質土器火鉢の口縁部と胴部でスタンプ文を施す。10は内面のほぼ全面に摺目を加えると思われる備前焼摺鉢片。11は瓦質土器碗の底部で、12～14は龍泉窯系青磁碗、15・16は白磁碗と皿。

これらの土器類は概ね15～16世紀の中に収まるものであるが、その大半は遺跡の廃絶時期に当たる16世紀後半代に置かれよう。

#### 4. その他の遺構と遺物

##### 陥穴（第235図）

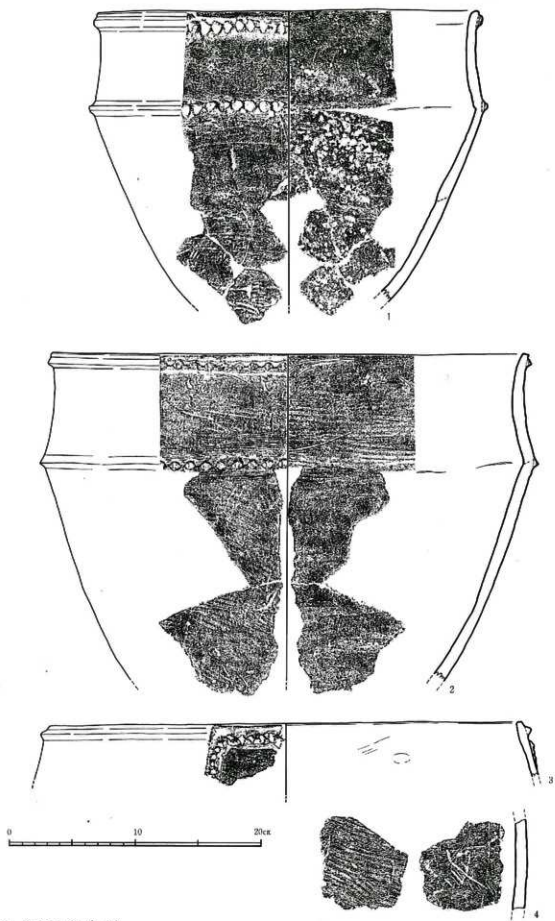
方形周溝墓主体部の西側約2mから単独で検出された。平面形は長軸1.65m、短軸0.68mの長楕円状をなし、検出面から床面までは約1.3mを測る。床面長は1.15m、中央部幅0.28mで床面は平坦面を形成し、遺槽の断面は逆台形を呈する。床面に柱穴等の掘込みは認められなかったが、壁面は急角度で掘込まれていることや覆土の状況から縄文時代の陥穴と判断される。土器の出土もないが、周溝墓の北西陸橋部からは第236図に示した晩期土器が採取されておりその形成時期もここに置かれる可能性がある。



第235図 陥穴実測図（1/30）

##### 縄文土器（第236図）

第236図1はほぼ直立する口縁部から屈曲してやや張る肩部に続き、屈曲部から下位の胴部はそのまますばまる深鉢。内外面とも横方向の条痕ののちナデによる調整で、口縁部と屈曲部に刻目突帯文を施す。2も同様の器形と調整による深鉢で口径38cmを測る。3は口縁部の刻目突帯が下垂させるもので、4は深鉢の胴部片。これらの土器は晩期終末の下黒野式に相当するが、3は類例に乏しい。



第236図 縄文土器 (1/3)



## 5、中原遺跡出土の人骨について

田中真之・舟橋京子・石川健

九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座

### 1. はじめに

大分県久住町中原遺跡から人骨が出土し、調査を担当した大分県教育委員会および久住町教育委員会より比較社会文化研究院基層構造講座へと人骨調査の依頼あり、金宮賢（現東亜中学校）が現地におもむき、調査および取り上げを行った。人骨はその後、九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座へと搬送され、同講座において、整理分析を行った。以下にその結果を報告する。

なお、人骨は現在九州大学大学院比較社会文化研究院構造講座考古人類資料室に保管されている。

### 2. 出土状況

#### 【1号墓（1号人骨）】

人骨は円形の墓壇内のほぼ中央から出土している。頭蓋骨が墓壇中央やや南側から、顔面を下、頭頂部を南東に向け、落ち込んだ状態で出土している。下顎骨は前面を下にし上顎と近接した位置から出土している。上下顎は咬合した状態ではないが、上下顎の咬合面が向かい合った状態である。頭蓋骨の北東側からは前腕骨片が出土している。また、頭蓋の下およびその付近から、手の骨・左右大腿骨が出土している。手の骨は顔面下からまとまった状態で出土している。左大腿骨は頭蓋骨の東南側から、遠位を東側にし、骨体が反転した状態で出土している。右大腿骨は頭蓋骨下西側から出土している。

以上のことから本人骨は顔を南西に向けた坐葬である。頭部は顔面を下にして落下しているが、上下顎の位置関係から、頭蓋骨の崩落・落下は埋葬後それほど長い時間の経過していない時期と思われる。

また、本人骨には数珠玉・鉄器・土師器の副葬が見られる。

数珠玉に関しては、上下顎及び頭蓋骨下の手の骨周辺から多数出土している。したがって、埋葬時に、手に数珠を装着した状態であったと考えられる。

鉄器に関しては、頭蓋骨北側、墓壇底から約10cmに位置しており、棺内に副葬されていた可能性もあるが、棺上に置かれていたものが棺蓋の腐朽とともに棺内へと転落した可能性もある。

本人骨に副葬された土師皿は、いずれも墓壇底から約10cmに位置し、墓壇壁付近に立てかけた状態、及び頭蓋骨の北側20cmの位置から出土している。頭蓋骨北側から出土した土師皿に関しては、棺上に置かれたものが棺蓋の腐朽とともに内部へと転落した可能性もある。

#### 【2号墓（2号人骨）】

人骨は円形の墓壇内の東側から出土している。頭蓋骨は、墓壇東側から、頭頂部を下にした状態で出土している。頭蓋骨下から、左右の桡骨及び右尺骨が出土している。頭蓋骨南側からは左寛骨・左大腿骨が、北側からは、右大腿骨・左脛骨が出土している。左股関節は関節した状態であり、左大腿骨は遠位を西側にした状態で出土している。頭蓋骨西側から右寛骨片が出土しており、これに近接し右大腿骨が遠位を北側にし、右脛骨が遠位を南側にした状態で出土している。右膝関節は関節状態であり、膝関節を強化し右側に倒した姿勢である。左脛骨は右脛骨真上から、右脛骨と長軸をそろえた状態で出土している。

以上のことから、本人骨は、顔を西に向けた坐葬であり、左右の下肢は、埋葬後に左右の膝が北側に倒れたと考えられる。頭部は軟部組織の腐朽にともない、腰付近に落下したと考えられる。

また、本人骨に副葬された土師器は、人骨南西側の墓壇底付近から墓壇壁に立てかけた状態で出土しており、人骨北側の墓壇底からも伏せた状態で出土している。人骨北側から出土した土師器に関しては、棺内に置かれて

いた可能性とともに、棺上に置かれていたものが、棺蓋の腐朽とともに棺内部へと転落した可能性も考えられる。

#### 【4号墓（4号人骨）】

人骨は円形の墓室内より頭蓋骨・上腕骨・下肢骨が出土している。墓室内西側から頭蓋骨が、前面を南東、頭頂部を下にした状態で出土している。頭蓋骨北側からは上腕骨・右大腿骨が、長軸を東西にした状態で出土している。頭蓋骨南東側からは、左脛骨が長軸を南東・北西にした状態で出土している。さらにその南東側からは部位同定不可能な長管骨片および左大腿骨が、長軸を南北にした状態で出土している。

以上のことから、本人骨は顔を西～北西に向けた坐葬であり、軟部組織の腐朽に伴い、頭部が下腿部付近へ崩落したと考えられる。

### 3. 人骨所見

#### 1号人骨

##### 【保存状態】

本人骨の保存状態は不良である。頭蓋骨・大腿骨・前腕骨および部位同定不可能な長管骨片が遺存している。頭蓋骨はラムダ縫合付近を除く左右頭頂骨、前頭骨・左右上顎骨・左右頬骨片が遺存している。眼窩上隆起は未発達である。頭蓋主縫合の癒合状態は、冠状縫合が内外板ともに開放しており、矢状縫合は内外板ともに一部閉鎖している。下顎骨は右筋突起付近から左右下顎体にかけての部分が発見している。残存歯牙の歯式は以下のとおりである。

$\diagup$ M <sup>1</sup> M <sup>1</sup> P <sup>1</sup> P <sup>1</sup> C I <sup>1</sup> I	I <sup>1</sup> I <sup>1</sup> C P <sup>1</sup> P <sup>1</sup> M <sup>1</sup> M <sup>1</sup> M <sup>1</sup>
$\diagdown$ × M <sub>1</sub> P <sub>1</sub> P <sub>1</sub> C I <sub>1</sub> I	I <sub>1</sub> I <sub>1</sub> C P <sub>1</sub> P <sub>1</sub> M <sub>1</sub> M <sub>1</sub> M <sub>1</sub>

○歯槽開放    ×歯槽閉鎖     $\diagdown$ 欠損    △歯根のみ  
 ・遊離歯    (未萌出    C齶歯    (以下同様)

歯牙の咬耗度は橋原（1957）の2°aである。

上肢は、左右不明上腕骨骨体部片、部位同定不可能な手の骨が複数本遺存している。下肢は左右大腿骨骨体部が遺存している。大腿骨粗線は未発達である。

他にも部位同定が不可能な長管骨片が遺存している。

##### 【年齢・性別】

年齢は、頭蓋主縫合の癒合状態及び歯牙咬耗度から、熟年と推定される。性別は、眼窩上隆起が未発達であること、大腿骨粗線も発達が弱いことから、女性と判定される。

##### 【形質】

頭蓋骨の保存状態が不良であることから、計測値に基づく他集団との比較はできないが、他の中世集団と同様に歯槽性突顎が認められる。

#### 2号人骨

##### 【保存状態】

人骨の保存状態は不良である。頭蓋骨と左右前腕骨・左右下肢骨が遺存している。

頭蓋骨は、左右頭頂骨の矢状縫合付近および、前頭骨の冠状縫合から前頭結節付近にかけてが遺存している。頭蓋主縫合の癒合状態は外板は一部開放、内板はほぼ閉鎖している。

上肢は、右尺骨近位付近の骨体部片、左右の腕骨骨体部が遺存する。

下肢は、左右の寛骨片及び大腿骨骨体部片が遺存する。大腿骨粗線は発達している。また、右脛骨骨体部片も遺存する。

#### 【年齢・性別】

年齢は、頭蓋主縫合の癒合状態から、成年後半以降と推定される。性別は、大腿骨粗線が発達していることから、男性と判定される。

#### 4号人骨

##### 【保存状態】

人骨の保存状態は不良である。頭蓋骨の一部・上腕骨・下肢骨が遺存している。

頭蓋骨は、左右頭頂骨のラムダ縫合を除いた部分、右アステリオン付近の頭頂骨・後頭骨片、前頭骨の冠状縫合付近片と眉間付近の小片、右側頭骨外耳孔付近、左側頭骨錐体付近が遺存する。眼窩上隆起は発達している。頭蓋主縫合の癒合状態は、矢状縫合が内外板ともに一部閉鎖しており、冠状縫合は外板が開放、内板が閉鎖している。また、歯牙も一部遺存している。残存歯牙の歯式は以下のとおりである。



歯牙咬耗度は橋原 (1957) の 2° a である。

上肢は、左右不明の上腕骨骨体部片が遺存するのみである。

下肢は、左右大腿骨骨体部片及び左脛骨骨体部が遺存する。大腿骨粗線及び脛骨ヒラメ筋線はともに発達している。

他にも部位同定不可能な長管骨片が数点遺存している。

#### 【年齢・性別】

年齢は歯牙の咬耗度及び、頭蓋主縫合の癒合状態から、熟年と推定される。性別は、眼窩上隆起が発達しており、また大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線が発達していることから、男性と判定される。

#### 4. まとめ

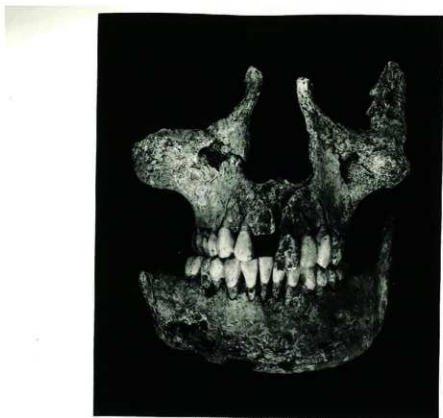
以上出土人骨についての記載・報告を行ってきた。本遺跡出土人骨は保存状態が不良なため、計測に耐えうる人骨はほとんどなく、形質的比較を行える個体は得られなかった。埋葬姿勢に関しては、坐葬で、狭隘な墓塚に葬られており、近接地域の八分県緒方町中世墓 (舟橋他1999) と同じ葬法であった。

また、1号人骨には歯槽性突頭が認められた。中世人の特徴とされるこの形質が、千人塚遺跡に続いて本遺跡においても認められたことは、この形質的特徴が関東だけでなく全国的に広がっていたという池田氏の説 (池田1982) を支持するものである。

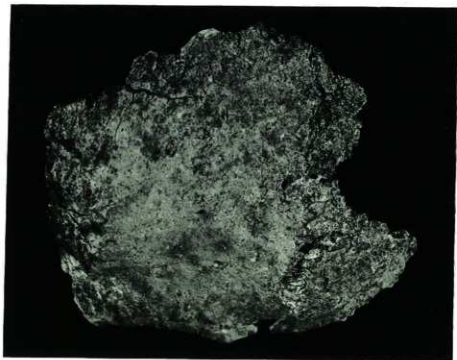
最後に、本報告にあたり、久住町教育委員会各位、および八分県教育委員会宮内克己氏にはご便宜を賜り、かつご迷惑をおかけした。深謝したい。

#### 参考文献

- 舟橋京子・井村公洋・金堂賢・田中良之, 1999: 第5章 千人塚遺跡出土人骨について, 緒方町教育委員会  
池田次郎, 1982: 日本人の起源, 講談社, 東京  
橋原博, 1957: 日本人歯牙の咬耗に関する研究, 熊本医学会雑誌, 31, 捕冊 4



1号人骨頭蓋骨 (正面觀)



4号人骨頭蓋骨 (上面觀)

## 第Ⅳ章 総 括

---

## 第IV章 総括

### 1、小城原遺跡

小城原遺跡は、久住山系から派生した標高620～630mの西から東へ傾斜して延びる丘陵上に立地する。南北を谷により画された丘陵の上面は緩やかな起伏を成し、そのほぼ全面に弥生時代中期から古墳時代前期に及ぶ住居跡等の竪穴103基・方形周溝墓1基・円付属墓5基・集団墓12基などが営まれていた。竪穴は南側に続く調査区(約1.4ha)にも展開することは確実であり、その総数は150～200基に及ぶものと考えられる。この竪穴数は古墳時代前期の当地域における大規模拠点集落跡である都野原田遺跡に次ぎ、弥生中期後半から後期にかけては都野原田遺跡より規模の大きい中心的集落であったと言える。住居跡と判断される竪穴は弥生中期後半に出現し、弥生後期後葉にピークを迎え古墳時代前期中頃に終わりを遂げる。方形周溝墓とその付属墓は古墳時代前期前半でも中頃に近い時期の所産と考えられるが、集団墓とは距離を置くと共に集落の中でも高い場所に形成され立地の違いは明瞭である。集団墓については造墓時期を示す資料が乏しいため断定できないが、構造等からその多くは古墳時代前期前半と考えられる。従って、一つの集落内にその集落の首長層の墓と有力構成員の集団墓が異なる場所に営まれたことを示すものと言える。また、小児墓館と思われるものを除き弥生中期後半から後期中頃の墓と墓池については他の集落遺跡と同様にその存在や構造は不明である。

古墳時代中期から中世前半にかけての遺構は皆無であり、15～16世紀になり再び丘陵上にその姿を見せる。この時期の遺構として計18棟の掘立柱建物が調査区の北部と南部に別れて検出された。北部地区の建物群は溝を中心に計画的に配置されており、ここに地方領主であった朽網氏又は一族の有力者の館が一時期置かれていた可能性が高いことを示す。そして、烏津氏の豊後侵入まではここに朽網氏の出城の一つが設けられていたと考えられ、「朽網記」に記されている「仏ノ塔ノ切寄」である可能性が高い。

弥生中期から古墳前期の各竪穴は時期によりその形態・規模・構造及び集落の構成に違いが認められる。以下、時期不明の竪穴15基を除き時期毎の変遷を述べる。

#### 竪穴の分布と変遷

弥生中期後半 弥生前期や中期前半に位置づけられる円形等の竪穴は確認されず存在するとしてもごく少数に止まるものと思われ、集落としての開始は中期後半に始まる(第237図)。この時期の竪穴は調査区中央の空間を挟み東側に10基(2・5・12b・14・33・36a・40a・40b・42・43号)が相互に比較的近接しながら分布し、西側にはやや広範囲にわたり9基(59・64b・68・71・82・83・88・90b・91号)が分布する。東側の竪穴群は中規模に属するものが多く、床面積が明らかに小形の竪穴は43号の1基に止まる。また、近接する場合でも1m前後の距離をおき重複は10a・b号の1回に過ぎないことや、主柱の方位がN-60°-70°-Eと近いことなどから一時期2・3棟を単位とする二群が連続して営まれた可能性と、建て替えを含む6～8棟が一時期に形成されていた可能性の両方が考えられる。西側の竪穴群は割平等により原形を失うが、68・90a号や全体プランの不明な91号を除き小形の竪穴が6基と中心を占める。重複するものは無く82・83号が近接する他は相互に距離をおくが中央部の6基にはまともまりが認められ、東側の竪穴群と対をなす形で分布する。弥生中期後半の集落は2棟を単位とした場合、4～5単位が広場と思われる空間を挟み東西に別れ連続して営まれていたことが想定される。

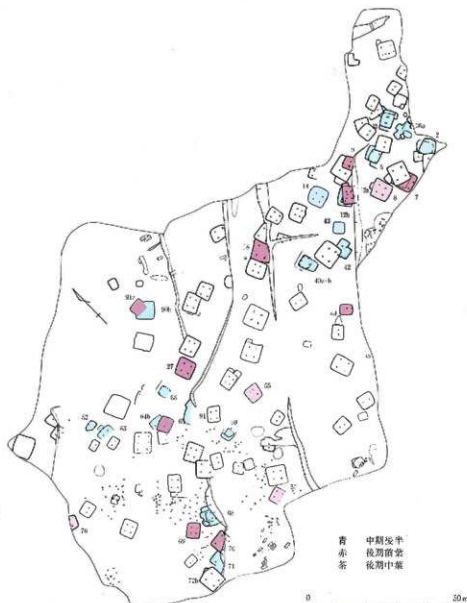
各竪穴はいずれも割半や重複のため全体プランや内部構造がほぼ完全に把握できたものは5・14号の2基に過ぎないが、その平面形は方形(43号)、一辺がカーブして張り出す変則長方形(14号)、一辺が部分的に張り出す変則方形(42号)、各辺の全体又は一部が張り出す二段掘りの突出形(5・36a・68号)などの各種が認められ統一性を欠くがバリエーションに富むとも言える。床面積は20～40㎡の中規模の竪穴が多いが、小形の竪穴は10㎡以下となるものも少なくない。突出形とした竪穴は南九州で見られる花弁形に類似する要素をもつが、一部が突出する場合は一辺の中央やコーナー部分に限られるようである。また、小形で方形プランを呈するものは住居跡ではな

く倉庫や作業小屋などの付属施設と考えられるものが多い。平面形が円形をなすものは全く認められないが、カーブを描く堅穴はその痕跡とも理解され、円形から方形への過渡期的様相を示す。しかし、主柱穴の配置・構成からは履根が円形に昇降ろされたとするには無理があり、住居の外観は方形住居跡と変わらないと思われる。

主柱は2又は4本から構成されるものが多く、40a・42・82号のように6本以上となるものも存在する。炉跡の多くは中央やや南寄りに設けられ不整形円形・半円状で断面は皿状に近いが、68・83号のように炉外側に一对のやや深い柱穴を伴うA類、5・40a・b・42・82・90b号などのように炉掘込み内の左右にやや小形の柱穴一对を伴うB類、33号のように炉の内外に二対の柱穴を伴うC類、14号に見られるように柱穴を伴わないD類の4種の炉跡が認められる。A類炉跡は中期前半の円形住居跡に設けられるがこの時期には少数となり、中期後半から後期前半の炉はB類が主流となる。上坑の存在は明確ではないものが多いが14・33号では炉跡の南側に付設されている。壁溝が巡らされる堅穴も少なくないが全周せず途中で途切れ、突出形には二段掘りの外側に溝が設けられる。

土器は須玖式や同式系の壺・甕・高坏・鉢に黒髮式甕を主体とし、下城式など在地系土器は非常に少なくなることが特徴である。黒髮式を除く壺や甕の底部は比較的安定した平底を早するものが多く、底部も厚みをもつ。外来系土器は胎土に石英や金雲母を含み搬入されたことを示すものも多く、在地系胎土によるものは須玖式を模倣した壺や甕等が少数認められるに過ぎない。

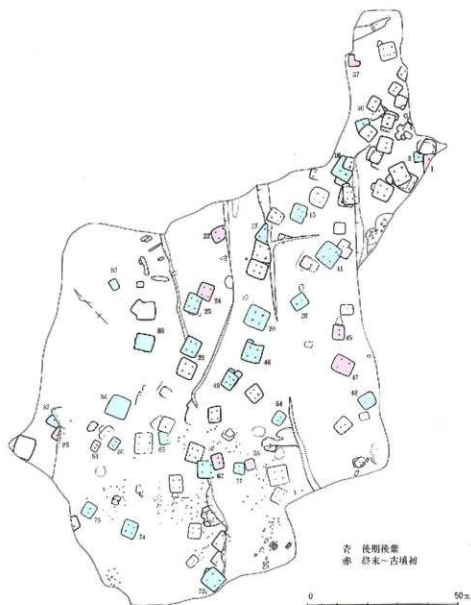
後期前半～中葉 後期前葉に比定した堅穴は4基と少ない。8・53・55・76号堅穴をこの時期に比定したが、全体プランが判明したのは8号と部分焼却が行われた55号の2基のみである。8号は一辺の中央に小形長方形の突出部(出入り口)が付された長方形、55号は隅丸長方形、76号はやや扁の張った長方形を早し他の堅穴も長方形に近いプランをなすものと思われる。主柱は2又は4本であるが他遺跡では8本主柱も認められ、炉跡は中央から主に南側に片寄った位置に設けられる。8号堅穴には壁柱6本が設けられるが、炉跡と南側壁の間にも一对の小形柱穴が認められる。このタイプをC2



第237図 弥生中期後半へ後期中葉の堅穴分布

類伊跡とする。55号の伊跡はA類の変形と思われ、76号はD類か跡である。出土土器の良好なセットに恵まれないが、壺や甕の底部はやや小型化した平底（上げ底）をなし厚みも減少する。甕割部の張り出しは1径と同じかこれより若干張り出すものが出現すること等が新しい特徴と言える。しかし、各壺穴の出土遺物は全体に少なく、累下の土器編年上でも中期と後期の判別は不確定要素や未だ明確な根拠に欠ける部分があり、ここに置いた各壺穴の時期についても今後更に検証を加える必要があろう。

後期中葉の壺穴は弥生中期と同様に中央の空間を挟み東西の二つに大きく別れ分布する。7・10・12b・18・44号の5基が東側に、27・65・69・70・72b・91a号の6基が西側に分布し全体にやや散漫な印象を受ける。壺穴の平面形は長方形を基調とし、四隅の一角に出入口の突出部を付すもの（12b号）も認められる。床面積は中規模に属するものが主体を占め、小規模は少数で大規模に含まれる壺穴は見られない。主柱は2又は4本でその位置は全段階とほぼ変わらないが、A・B類伊跡は見られなくなりC2類が多くなるようである。土器において良好な一括資料に恵まれないが楕円波状文を描く複合1線壺がこの時期より出現し、甕の長脚化と底部の小型化も進む。また、12a号からは瀬戸内系内線文土器が出土している。壺穴の基本的分布は中期後半を踏襲したもので、人口



第238図 弥生後期中葉～弥生終末古墳初の壺穴分布

の移動・減少に伴い集落の構成単位が2単位前後少なくなったものと理解されよう。後期前葉から中葉の壺穴数の減少は郡野原出遺跡においても見られ、当地域のみならず広範囲に及ぶ現象と考えられる。これは中期後半に増加した人口と開発の進展とが一致しなかったことに起因するとも言えるが、その諸要因については広範囲にわたり検討する必要があろう。

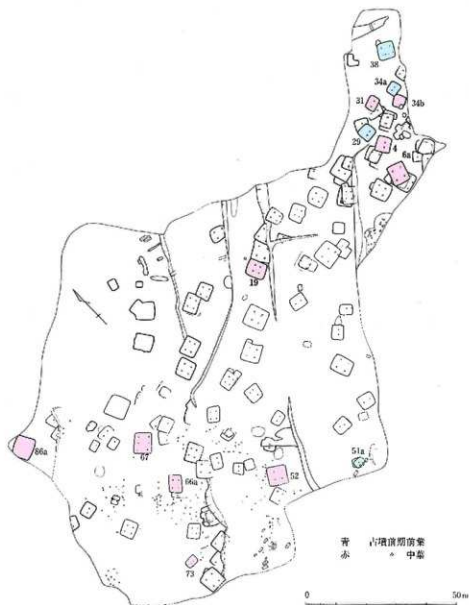
後期後葉 壺穴は、2単位前後を単位とし集中することなく一定の間隔を置きながらほぼ全面に25基（第238図）が分布する。全体では15単位を越える集団から構成された拠点集落へと発展しそのピークを迎える。広



場としての空間は41・28・20・46・54・48号竪穴により囲まれた部分が狭くとなり得るが、以前に比べ明かに縮小する。竪穴数の増加は単に前段階からの自然増ではなく、他集落からの移入に主因があると考えられる。そして集団墓が分布する一面もこの時期より準備された可能性が強く、竪穴配置や主軸方位の類似等も合わせ高い計画性と規制を受けた集落としてスタートし、ここに大きな二期が認められる。大規模竪穴として87号が1基、中規模竪穴が16基、小規模に属する竪穴は7基の構成となる。小規模竪穴の増加は集落内部における各種の生産・加工等の活動が活発化したことを示唆する。平面形は長方形・方形にはほぼ統一されるが、中規模には突出した出入り門が設けられるもの4基（15・46・49・84号）がある。支柱は20㎡以下の小規模竪穴では2本、中規模以上では4本となるものが多いが床面積20～30㎡の比較的小さい竪穴では2本となるものも存在する。また、この時期の竪穴には壁柱が付設されるもの4基が認められ、20・25・62号では1～2辺に5本以上の壁柱が設けられ、49号では四方の壁面に10数本が巡らされる。同様の壁柱は竹田市石井入口遺跡や下蔵村鹿遺原遺跡でも認められ、中には本遺跡では確認できなかった出入の梯子の設置に伴うと見なされる一対のみの柱穴もある。炉跡はその有無も含め判別不明な竪穴を除きC1類が20号の1基、C2類が6基、D類が7基となり小形の竪穴ではその周辺に構造物

が付設されないD類が半数を占める。

土器は在地系を主体とするが注目される資料としては48号竪穴の一括資料があげられる。ほぼ完形の壺・甕・高坏計15個体は、竪穴の廃絶祭祀の後に一部を破壊又は打欠いて一括投棄されたと考えられる。複合口縁壺を除く壺や甕には煮炊きの痕跡が認められ飲食儀礼を伴う祭祀と推定されるが、これほど多量の土器を使用した例は少なく、本竪穴の祭祀に関わった人の数が土器量に比例すると仮定すれば数人ではなく十数人に及ぶものと思われる。一方、この時期の土器に認められる特徴をあげると、甕の底部はやや不安定な小形平底やレンズ状をなすも



第239図 古墳前期の竪穴分布

の、小さく突起した平底の各種が存在し、胴部の張り出しは口徑をやや上回るものが多いが口徑を下回るものも認められる。器面調整にタタキが認められるものが少数出現するが、器壁はやや厚く内面の調整にヘラケズリは認められない。壺の底部はレンズ状・丸底に近い平底・丸底の3タイプが認められ、小形では尖底に近いものもある。複合1線壺の1線部の立ち上がりは内傾するものと直立気味があるが並びは大きくならない。

弥生終末～古墳前期 壑穴数は減少し前段階の半数以下の11基が調査区中央の空間（広場）を取り巻くように散発的に分布する。壑穴は2基前後が単位となり30m前後の距離を置きながら集中せず広範囲に点在し、中には24・56・58・85号のように前時期の壑穴を意識し切り合いを最小限にとどめ前後関係が窺われる壑穴がある。その分布から22号と24号、45号と47号、56号と58号、81号と85号などは各々単位をなすものと思われ、調査区内の集落構成の単位は5～6前後と推定され10単位余りの減少となる。前後関係の不明な壑穴（単位）の多くは本集落を離れ移動したものと想定されよう。壑穴ではない可能性の強い37号の他は長方形プランをなし、出入口の突出部を保有する壑穴は確認されなかった。大規模に含まれるものもなく小規模壑穴5基（22・45・56・58・81号）と中規模壑穴4基（1・24・47・85）の構成である。主柱は2又は4本からなり、跡跡は47号の1基のみがC2類でD類が4基となりこの他は不明であるが、前段階と大きく変わらないものと考えられる。この時期で充分ではないが比較的良好な資料を出土している壑穴に24・47号がある。壺は長胴の胴部を早し底部の丸底化が完了するが器壁が厚く不安定なものも多い。器面調整はタタキに加え内面ヘラケズリが出現するものの器壁は前期前葉ほど薄くない。土器は在地系を中心とし器種構成に顕著な変化は認められないが、石英等を含む大分川下流域産と判断されるものや雲母を多く含む肥後系と思われるものも少数認められる。また、17号からは瀬戸内系白線土器も検出されている。

古墳時代前期前葉 中央の広い空間を挟み東西に二分された分布状況を示し、集落が発生した弥生中期後半の分布と類似する。東端付近に1基が比較的接近し、西側の5基は相互にやや離れて各々営まれるが、両者の間には100m余りの距離がありこの空間が広場としての機能を保っていたかは疑わしい。東側の6a号を除く壑穴の主軸はほぼ並行し、西側の67号と66a号も同一方向を向く。中規模6基（4・6a・52・66a・67・86a号）、小規模3基（31・34b・73号）からなり、中規模のなかで最大の86a号が集落の最高所に単独で営まれていることが注目されよう。調査区内における集落の構成単位は4前後と推定され、前段階で認められた中央部の壑穴が姿を消していることから1単位前後の減少が考えられる。小規模壑穴の主柱は2本、中・大規模壑穴では2・4・6本が認められ、跡跡はD類にはほぼ統一されるが、小規模では34b号に縁に炬をもたないものも各時期を通し認められる。中・小形の壑穴は平面形の統一のみならず炬や土坑の位置と構造等も含め全体に共通性が高い。方形罫溝壺とその付属器及び集団壺の遺棄は時期を示す明確な資料に欠けるが、この時期から前期中葉にかけて行われたと考えられよう。また、E号墓については方形罫溝壺に先行する可能性がある。

土器については4・67・86a号壑穴出土の土器が代表例となる。壺や壺の内面ヘラケズリ調整が進み器壁もやや薄くなるが、在地系壺は膨らみを持つもの長胴をなし、内面調整はヘラケズリの後にハケ・ミガキ等に加えケズリを消すものが多い。複合1線壺の胴部も前段階より球形に近いものが現れ、小形の壺や壺には外來系が少数認められるようである。

古墳時代前期中葉 壑穴の減少は更に進み計5基が確認されるに留まる。調査区の南端に51a号が、中央西側に19号が、西端部に29・34a・38号の3基が営まれている。西側部分では集落の出現から消滅に至るまで壑穴が断絶することなく連続して営まれ、この一帯が居住の場所として適していたものと思われる。最終時の壑穴は中規模2基（19・38号）と小規模3基からなり、2～3単位から構成される分村的集落へと低下したものと考えられる。この時期の土器の特徴は、弥生時代の系譜を引く在来系土器の急激な減少と外來系土器の器種全般に亘る増加であり、壺・甕では胴部球形化と内面ヘラケズリ調整の盛行等があげられ、ここに大きな画期がある。

弥生終末から古墳前期中葉にかけての壑穴の減少に対し、都野原田遺跡ではこの間に壑穴数の急増に示されるように集住化現象が確認されている。本遺跡を離れた人々の多くも都野原田遺跡へと移住した可能性が強いと言えよう。そして、古墳前期後葉以降は中世に至るまでここに集落が営まれることは無かった。

## 九重山南麓における弥生～古墳時代集落の動態

九重山南麓を流れる市川・七里田川・冷川等の岸川支流流域では、これまでの圃場整備に伴う調査により弥生時代中期から古墳時代の集落跡として17遺跡余りが確認されている。これらの遺跡は比較的平坦な丘陵上部とその縁部等に立地するものがほとんどであり、河岸段丘部や沖積地に形成されるものは非常に少ないことも特徴と言える。しかし、現在でも畑地である大野川中・上流地域の台地上の遺跡と大きく異なる所は、これらの丘陵上が水田化されている様に豊富な水量にある。そして、山間部における水稲農耕の比較的早い定着とその後の発展に大きな波乱が無かったことは、多数の集落遺跡の存在とその出土資料から想定される。

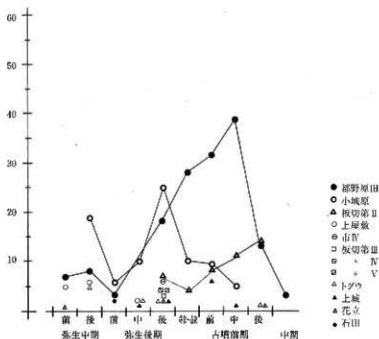
第240図は各遺跡の時期毎の変化を表したものである。本地域における集落跡が確實に認められるのは弥生中期からである。弥生中期以前の堅穴住居跡は確認されていないが、縄文晩期終末から弥生前期の土器は一定量出土しており今後小規模な集落跡が検出される可能性は高い。弥生中期前半の集落跡としては都野原田遺跡(7基)と上原敷遺跡(5基)、花立遺跡(1基)がある。全体に残りが悪いが一時期2～3棟の円形プランの堅穴から構成される小規模散村型集落と言えるもので、墓地や広場の存在は確認されない。都野原田遺跡では主柱穴も円形に配置され、炉跡はA類が中心と思われる。中期後半の小規模集落としては、引き続き都野原田遺跡(8基)と上原敷遺跡(6基)があり、新にトグウ遺跡(5基)が加わる。そして中核的集落として小城原遺跡(19基)と脇遺跡(16基)が新たに出現する。小城原遺跡では墓地は不明であるが広場の空間が認められると共に堅穴群が東西に二分された分布を示し、集落として計画的な配置が読み取れる。ここに最初の前期が存在するが、その背景には在来のド式土器の消滅とこれに替わる須玖式土器や黒雲式土器などの外来系土器の主体化がある。また、堅穴のプランも円形から変出型や花弁型などに変化するだけでなく、付属施設としての小形の堅穴には方形プランも出現し、これらの変化は人の移住に起因することが窺われる。

後期前葉になると中核的集落は姿を消し再び小規模集落のみとなり、ここに第二の変動が認められる。小城原遺跡(6基)、都野原田遺跡(3基)、石田遺跡(2基)の3遺跡となり、堅穴と遺跡数の減少が他地域への移動に因るものか人口の減少に基づくものか現状でははっきりしない。続く後期中葉では上原敷遺跡(2基)、トグウ遺跡(2基)、小城原遺跡(10基)が認められる。小城原遺跡における堅穴数の増加は中核的集落への成長を示すものとも考えられるが、全体では前葉の堅穴総数との差は小さく微増に留まると言えよう。

後期後葉に至り小城原遺跡は25基以上の堅穴からなる拠点集落へと発展する。また、都野原田遺跡は18基余りの中核的集落としてこれに続き、小規模集落には板切第Ⅱ遺跡(7基)、市第Ⅳ遺跡(6基)、板切第Ⅳ遺跡(4基)、板切第Ⅴ遺跡(4基)、板切第Ⅲ遺跡(3基)、上城遺跡(2基)、トグウ遺跡(2基)の7遺跡が認められる。ここに第3番目の前期が認められ、拠点集落と中核的集落の出現と7つの小規模集落に示される集住現象と分村的集落の増加は人口の急増にも一因があると考えられるが、同様の現象は大野川中・上流地域から大分平野、更には阿蘇などの熊本地方や北部九州の福岡平野などにおいても認められ、非常に広範囲に及ぶ現象である。ここに社会の大きな変動が看取されるが、本地域における集落跡からは地域の支配権力の成長がまず認められ、一方でこれに対する自立化指向も小集落に反映されていると言えよう。

後期終末から古墳時代前期初頭になると都野原田遺跡の集住化はさらに進み同遺跡は拠点集落(28基以上)となるが、小城原遺跡では10基と堅穴の急激な減少が起り分村化したものと思われる。そして、小集落も減少し板切第Ⅱ遺跡で4基が確認されるに過ぎない。これは集住の強化が行われ、これを強制する支配権力の発達が見えよう。都野原田遺跡への集住化は前期前葉にも引き続き認められ、32基以上の堅穴が展開する。小城原遺跡では9基と若干減少するが、板切第Ⅱ遺跡では8基と増加し、上城遺跡においては6基が出現する。そして、前期中葉になり都野原田遺跡ではピークを迎え39基以上の堅穴からなる大規模拠点集落へと成長し、ここに第4の前期があると言えよう。板切第Ⅱ遺跡では11基とやや増加するが、小城原遺跡では5基に減少し分村の小集落となる。また、本地域に隣接する直入町三反田遺跡では新たに8基が出現し、上城遺跡でも1基認められる。

古墳時代前期後葉になると都野原田遺跡の堅穴数は13基に激減し、板切第Ⅱ遺跡では14基と微増する。この他はトグウ遺跡と花立遺跡で各1基が確認されるのみであり、続く古墳中期になると都野原田遺跡で3基が検出



第240図 各遺跡の竪穴数の変遷

されたのみとなる。ここに最後の両期が認められるが、急激な減少は人口の減少と完全に一致するものではなく、前期中後半以降の竪穴の立地が丘陵上から河岸へと替わることに起因する。

古墳時代前期前葉から中葉にかけての都野原田遺跡への集住は、広範囲に及ぶ社会的緊張状態とこれに対応した在地首長層の地域支配体制の確立への過程と見ることも可能である。そして、首長権の確立した前期中後半以降は集住化の必要性も失われ再び大規模集落が出現する必然性も消滅したと理解されよう。

## 2、中原遺跡

中原遺跡は、小城原遺跡の南東約500mの同一丘陵端部に位置する。古墳時代前期の方形周溝墓1基とその付属墓1、中世の竪穴3基と墓4基を主要遺構とする遺跡である。谷を隔てた東側約150mの丘陵上には古墳前期の大規模拠点集落跡である都野原田遺跡が、その先端部には仏原千人塚古墳群が、方形周溝墓の南側50mには古墳時代中期前半の首長墳（円墳）と思われる湯ノ上古墳が存在する。

方形周溝墓は全体に1m前後の削平を受けたと思われるが、溝の外側に南北長21m、東西長18mの南北に長い長方形を呈し、東側の両コーナーに陸橋部が設けられる。現状の溝幅は約2mを測りその内側を端部とした場合、墳丘の規模は約16.5×13.5mとなる。組合せ式の石棺（内法長1.86m）を主体部とし、内部は攪乱を受けているが鉄剣片2点が検出されたことから、被葬者は成人男性と推定される。また、付属墓と判断される土槨墓からも鉄鍬が副葬されこれも成人男性が葬られたと想定される。周溝からは畿内系二重口縁帯や小型丸底蓋等の土器が出土し、古墳時代前期前葉の新しい段階の所産と考えられる。この時期には仏原千人塚1号墳（前方後円墳）も造営されており、首長層による地域支配体制が完成しつつある段階であった。

中原方形周溝墓の規模は、ほぼ同時期又はこれに近い時期の所産である小城原方形周溝墓や直入町敦ノ原方形周溝墓群（1～8号）、竹田市輪野方形周溝墓群（1～7号）等のほぼ2倍に近く旧直入部では最大であり、単独で存在することからも仏原千人塚1・2号墳に代表される首長層に次ぐクラスの造墓であると言える。

一方、小城原岡溝墓とは主体部構造だけでなく鉄剣2口の両扉に示されるように、被葬者は成人男性であるところにも共通点が認められる。そして、両者の付属墓と見做される土釧墓や木棺墓も鉄剣や鉄剣を保有することから、本地域における方形岡溝墓と付属墓の造墓は父系の原理に基づくものと推定されよう。その後、これに続く湯ノ上古墳の被葬者とも密接に関係していたことが考えられるが、親族関係の解明は考古資料からは限界があり人骨の出土とその人類学的調査と並行する必要があることは言うまでもない。

註1 後藤一重編「菅生台地と周辺の遺跡 石井入口遺跡 石井入口北遺跡」竹田市教育委員会 1992

石井入口遺跡では26・38・65・89・93号堅穴などに認められる。

2 栗田勝弘編「鹿道原遺跡 千歳村教育委員会 2001。ここでは6・120・123・171号堅穴において認められる。また、同遺跡の堅穴主柱は長辺に並行し3本づつの計6本柱となるものが中心であり、ここに地域性が現れている。

3 弥生後期後葉の堅穴は次の終末から古墳初頭には激減し都野原田遺跡への移住が考えられるが、本型穴の廃絶祭祀はこれに関わる可能性がある。

4 この時期には堅穴の減少が続くが、集落全体では10数棟からなり都野原田遺跡に次ぐ中核的位置は維持していたものと理解される。

5 大野川上流地域の大規模集落跡である石井入口遺跡では弥生中期後半に2基、後期前葉に7基、後期中葉に24基、後期後葉に30基、弥生終末から古墳初頭に26基、古墳前期前半に8基が各々認められ、そのピークは後期後葉にあり古墳前期後半には集落は消滅する。後期前葉から古墳時代前期にいたる堅穴数の変化は、小城原遺跡と良く類似するが、中期後半の堅穴数には大きな開きがある。小城原遺跡の堅穴の増減は、福岡平野の遺跡とも共通する。

大野川中流の鹿道原遺跡では弥生中期後半に6基、後期前半に13基、後期後葉に58基、終末から古墳初頭に51基、古墳前期前葉に49基が存在したとされる。ここでも弥生後期後葉にピークがあるが、そのあまりに急激な増加と古墳前期後半の無人化は本地域と異なる様相を示すと云えよう。また、並倉とも見られる竪立柱建物群も含めた大規模集落の突然の出現には内的要因より外的要因の方が強く働いたことが想定される。

6 阿蘇地方では狩尾遺跡群や下山遺跡などで同様の現象が認められる。

木崎康弘編「狩尾遺跡群」熊本県教育委員会 1993

高谷和生編「下山西遺跡」熊本県教育委員会 1987

7 福岡平野における弥生時代集落の変遷については以下の論考がある。

橋口達也「聚落立地の変遷と土地開発」『岡崎敬先生退官記念論集 東アジアの考古と歴史 中』1987

井沢洋一「早良平野における集落の立地と変遷」『早良王墓とその時代』福岡市立歴史資料館図録第11集 1986

小沢佳憲「弥生集落の動態と両期」『古文化談叢』第44集 2000

8 本遺跡を含めた各遺跡の文献については、第1章の註文献と同じ。

9 渋谷忠章「直入地方の夜明け」『直入町誌』 1084

10 玉永光洋「楠野」大分県教育委員会 1983

小城原遺跡 竪穴一覽表 1

坑	経度	緯度	深さ	平面積	形状	土層方位	砂	土	灰	陶	ベニト	時期	備考
1	3.2	3.4	0.7	--	40	--	不明	不明	--	心土・灰層	--	古・新編	狭路
2	本塔礎	--	33.20	2	h. 30' - E	砂層	300700, 大中小の土子, 瓦片, 土	土質	--	--	--	古・新編	本塔
3	2.5, 2.5, 2.5	2.1	0.22	--	--	--	--	--	--	--	--	--	古・新編
4	5.1	6.5-8.0	12-14	10.2	2	N-40°-E	中央, 平野内, 丘陵	赤土, 赤土, 赤土	赤土	赤土	--	古・新編	中央
5	本塔	--	--	--	--	--	中心, 中心, 中心, 中心	不明	--	陶質	--	古・新編	本塔
6	6.5	5.5	31.20	4	N-10°-E	中心, 中心, 中心	平野内, 丘陵	赤土, 赤土, 赤土	赤土	赤土	--	古・新編	中央
6	2.5, 2.5, 2.5	--	--	--	--	--	不明	不明	--	--	--	古・新編	本塔
7	1.0, 0.5, 0.5, 0.5	--	--	--	--	--	北野, 赤土, 赤土	赤土	赤土	赤土	--	古・新編	本塔
8	1.5, 1.5, 1.5	--	--	--	--	--	不明	不明	--	--	--	古・新編	本塔
9	1.5, 1.5, 1.5	--	--	--	--	--	北野, 赤土, 赤土	赤土	赤土	赤土	--	古・新編	本塔
10	7.2	6.2	--	39.44	4	N-10°-E	--	--	--	赤土	--	古・新編	中央
11	本塔	13.2	--	--	--	--	--	--	--	--	--	古・新編	本塔
12	10.5, 10.4	--	24.00	2	N-40°-E	中央	小堀	--	--	赤土	--	古・新編	中央
13	5.0	3.0, 4.5	0.4	24.00	4	N-40°-E	中央, 赤土, 赤土	赤土	--	--	--	古・新編	中央
14	3.7	10.2	--	7.30	2	N-30°-E	中央, 赤土, 赤土	赤土	--	--	--	古・新編	中央
14	1.5, 1.5, 1.5	2.0	35.1	4	N-10°-E	中央, 赤土, 赤土	赤土, 赤土, 赤土	赤土	--	--	--	古・新編	中央
15	5.5-5.4	4.3	15.82	4	N-30°-E	中央, 赤土, 赤土	赤土, 赤土, 赤土	赤土	--	--	--	古・新編	中央
16	10.0	3.0	11.00	4	N-30°-E	中央, 赤土, 赤土	赤土, 赤土, 赤土	赤土	--	--	--	古・新編	中央
17	6.0	5.2	106.00	4	N-40°-E	中央, 赤土, 赤土	赤土, 赤土, 赤土	赤土	--	--	--	古・新編	中央
18	本塔, 10.0, 10.0	3.1	23.00	4	N-40°-E	中央, 赤土, 赤土	赤土, 赤土, 赤土	赤土	--	--	--	古・新編	中央
19	3.0	5.0	--	25.40	4	N-40°-E	中央, 赤土, 赤土	赤土	--	--	--	古・新編	中央
20	5.0-7.0	赤土, 赤土	0.1	32.4	4	N-40°-E	中央, 赤土, 赤土	赤土	--	--	--	古・新編	中央
21	1.5, 1.5, 1.5	赤土, 赤土	--	2	N-30°-E	中央	赤土	--	--	--	--	古・新編	中央
22	1.5, 1.5, 1.5	赤土, 赤土	0.20	2.3	N-10°-W	中央	赤土	--	--	--	--	古・新編	中央
23	1.5, 1.5, 1.5	赤土, 赤土	21-23	22.0	4	N-40°-E	中央, 赤土, 赤土	赤土	--	--	--	古・新編	中央
24	1.5, 1.5, 1.5	赤土, 赤土	10.00	4	N-40°-E	中央, 赤土, 赤土	赤土	--	--	--	--	古・新編	中央
25	3.7	5.0-5.2	--	28.00	4	N-10°-E	中央, 赤土, 赤土	赤土	--	--	--	古・新編	中央
26	5.0-5.5	5.0-5.5	1.5	24.48	4	N-40°-E	中央, 赤土, 赤土	赤土	--	--	--	古・新編	中央
28	5.0	14.0	1.1-1.3	18.40	2	N-40°-E	中央, 赤土, 赤土	赤土	--	--	--	古・新編	中央
29	10.2-11.4	10.0	--	18.40	2	N-40°-E	中央, 赤土, 赤土	赤土	--	--	--	古・新編	中央
30	5.0, 5.0	4.2	--	22.00	2	N-10°-E	中央	赤土	--	--	--	古・新編	中央
31	4.4	3.2	0.2	13.22	2	N-10°-E	中央	赤土	--	--	--	古・新編	中央
32	5.2	3.6	--	2	N-10°-W	中央	赤土	--	--	--	--	古・新編	中央
33	3.2	2.5	--	--	--	--	不明	不明	--	赤土	--	古・新編	中央
33	1.5, 1.5, 1.5	赤土, 赤土	0.21	20.2	4	N-30°-E	中央, 赤土, 赤土	赤土	--	--	--	古・新編	中央
34	3.9-4.2	3.2-3.4	3-4.0	10.02	2	N-30°-E	中央	赤土	--	--	--	古・新編	中央
35	3.0	2.6	--	13.32	2	N-30°-E	中央	赤土	--	--	--	古・新編	中央
36	本塔	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	古・新編	本塔
36	1.5, 1.5, 1.5	赤土, 赤土	5.5	--	--	--	不明	不明	--	--	--	古・新編	中央
37	1.5, 1.5, 1.5	赤土, 赤土	5.5	--	--	--	不明	不明	--	--	--	古・新編	中央
38	3.1	5.2	0.5-1.0	25.40	4	N-40°-W	--	--	--	赤土	--	古・新編	中央
39	1.5-1.0	1.5-1.0	--	2	N-20°-W	--	--	--	--	--	--	古・新編	中央
40	1.0	15.0	30.0	0	N-10°-E	中央	赤土	--	--	--	--	古・新編	中央
41	5.0	15.0	--	6.0	N-40°-E	中央	赤土	--	--	--	--	古・新編	中央
41	10.0	1.0-1.3	0.5	37.00	4	N-10°-E	中央	赤土	--	--	--	古・新編	中央
42	1.5, 1.5, 1.5	赤土, 赤土	22.0	0	N-10°-E	中央	赤土	--	--	--	--	古・新編	中央
43	3.5, 3.5	1.0	1.50	2	N-40°-E	--	--	--	--	--	--	古・新編	中央
44	10	15.0	--	12.00	1	--	--	--	--	赤土	--	古・新編	中央
45	4.0	3.0	12-14	10.00	2	N-10°-E	中央	赤土	--	--	--	古・新編	中央
46	10.0, 10.0	--	25.20	2	N-40°-E	中央	赤土	--	--	--	--	古・新編	中央



小城原遺跡掘立柱建物計測表

建物	主軸方位	1 <sup>12</sup> 梁 2 <sup>13</sup> 行(m)	1 <sup>12</sup> 桁 2 <sup>13</sup> 行(m)	身舎面積
1	N-43°-E	東側 2.60+2.34(南から) 底部1.00 西側 2.62+2.34(南から) 底部1.04	南側 1.96+1.76+2.04+1.94+2.72(東から) 北側 1.94+1.80+1.94+1.94+2.82(東から) 底部 2.48+1.90+1.50+1.70+2.40(東から)	51.47㎡ (4.94×10.42)
2	N-58°-E	東側 1.70+…(南から) 西側 1.72+1.70(南から)	南側 1.04+1.94+1.58+1.90+1.60(東から) 北側 …+1.68+1.70(東から)	27.56㎡ (3.42×8.06)
3	N-46°-W	西側 1.74+2.10+1.72(南から) 東側 1.90+1.90+1.96(南から)	南側 5.04 北側 4.84	28.02㎡ (5.56×5.04)
4	N-41°-E	東側 4.72 西側 2.34+2.38(南から)	南側 1.84+1.98+1.84(東から) 北側 2.02+1.82+1.94(東から)	26.71㎡ (4.72×5.66)
5	N-37°-E	東側 2.46+2.34(南から) 西側 2.54+2.42(南から)	南側 2.34+2.34+2.20(東から) 北側 2.40+2.20+2.28(東から)	33.02㎡ (4.8×6.88)
6	N-40°-E	南側 4.34 北側 4.44 底部 1.00+2.20+2.24(東から、北側)	東側 1.90+2.00(南から) 西側 1.86+2.06(南から) 底部 1.92+1.96+1.00(南から、東側)	16.92㎡ (4.34×3.90)
7	N-42°-E	東側 2.30+2.30(南から) 西側 2.40+2.28(南から)	南側 2.10+2.50+1.90+1.98+1.90(東から) 北側 2.34+2.28+1.96+2.00+1.90(東から)	47.74㎡ (4.6×10.38)
8	N-41°-E	東側 1.90+1.90(南から) 西側 2.00+1.80(南から)	南側 1.78+2.06(東から) 北側 1.90+2.16(東から)	14.59㎡ (3.8×3.84)
9	N-50°-W	南側 4.34 北側 4.32	東側 2.26+2.40(南から) 西側 2.34+2.60(南から)	20.22㎡ (4.66×4.34)
10	N-36°-E	東側 2.92+3.18(南から) 西側 2.94+3.34(南から)	南側 2.38+2.12+1.94+2.70+2.06(東から) 北側 2.58+1.94+1.78+3.32+1.94(東から)	67.87㎡ (6.06×11.2)
11	N-42°-E	東側 1.82+2.74+2.12(南から) 西側 2.66+1.92+1.90(南から)	南側 2.12+2.22+2.46+1.44+2.00(東から) 北側 1.88+1.88+2.50+2.38+2.00(東から)	68.40㎡ (6.68×10.24)
12	N-39°-E	東側 1.78+1.82+1.84(南から) 西側 3.54+2.00(南から)	南側 1.90+1.88+1.88+1.82+1.90(東から) 北側 1.84+2.00+1.82+1.76+1.80(東から)	51.02㎡ (5.44×9.38)
13	N-40°-E	東側 1.84+1.62(南から) 西側 1.70+…(南から)	南側 2.12+1.84+1.92+1.26+1.82(東から) 北側 1.94+2.00+1.80+1.20+…(東から)	31.00㎡ (3.46×8.96)
14	N-30°-E	東側 2.62+2.50(南から) 西側 2.40+2.70(南から)	南側 2.62+2.62+2.10(東から) 北側 2.60+2.48+2.38(東から)	37.58㎡ (5.12×7.34)
15	N-49°-W	南側 1.78+1.90(東から) 北側 1.90+2.00(東から)	東側 1.70+1.96+1.84(南から) 西側 1.84+1.90+1.86(南から)	20.24㎡ (5.5×3.68)
16	N-48°-W	南側 2.66+2.40(東から) 北側 2.70+2.64(東から)	東側 2.58+2.40+2.34+2.26(南から) 西側 2.20+2.50+2.18+2.44(南から)	48.47㎡ (9.58×5.06)
17	N-49°-W	南側 3.40 北側 3.62	東側 1.58+2.18+1.74+2.10(南から) 西側 1.50+2.24+1.90+1.90(南から)	25.84㎡ (7.60×3.4)
18	N-40°-E	南側 3.36 北側 3.36	東側 1.48+1.42(南から) 西側 1.42+1.52(南から)	9.74㎡ (2.9×3.36)



## 図 版(PL)



小城原遺跡と周辺の地形

PL.1



小城原遺跡全景



方形周溝墓と付属墓



集団墓



小城原遺跡全景



1~3号整穴



2号整穴



3号整穴



4・5号遺物



同完掘



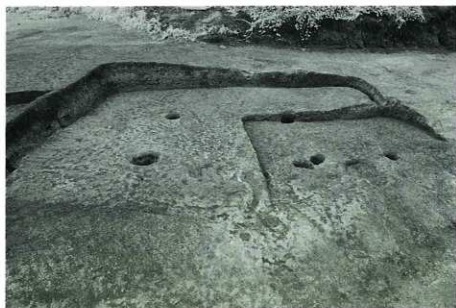
6 a・b号、7号壁穴



6 a · b号、7号完掘



8号完掘



9 · 10号完掘



11~13号完掘



14号完掘



同柱穴内土器





15号完掘



16号完掘



17・18号遺物



17・18号穴窟



19号遺物



同炭化材



19号遺物 (壺)



同完掘



20号遺物



20号完掘



21号完掘



22号完掘



24号完掘



25号完掘



26号完掘



27号完掘



26号遺物



29・30号遺物



31~33号遺物



同完掘



33号完掘



34a 号完掘



34b 号



35号完掘





36号完掘



38号完掘



39号遺物



39号鉄鱗



40号遺物



41号完掘



42号完掘



43号遺物



44号完掘



45号完掘



46号遺物



同出入口



46号完掘



47号遺物



同手鎌



47号完掘



48号遺物



同



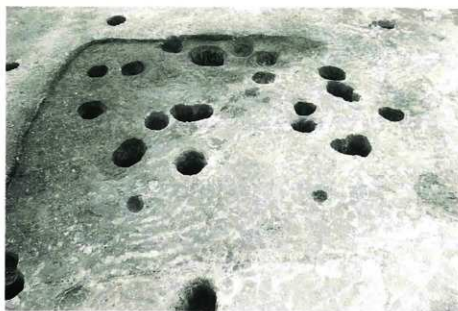
48号完掘



49号遺物



同完掘



50号完掘



51 a・b号遺物



同遺物





51号完掘



52号完掘



53号完掘



55号完掘



56号遺物



57号遺物



57号遺物



同



同完掘



58号完掘



59号完掘



60号完掘



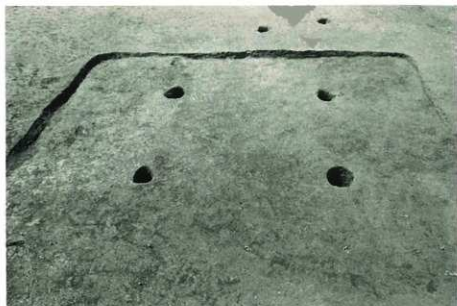
61号完掘



62号遺物



同完掘



63号完掘



64号完掘



65号完掘



66号完掘



67号完掘



同遺物



67号完掘



68号完掘



69号完掘





70号完掘



71号完掘



72号遺物



73号完掘



74号遺物



75号完掘



76号遺物



同完掘



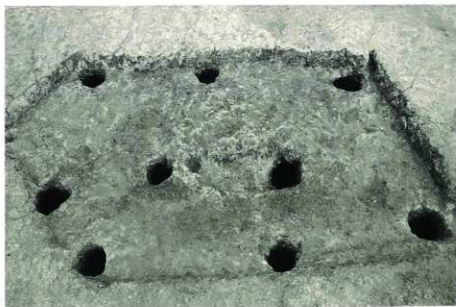
78号完掘



80号完掘



81号完掘



82号完掘



83号完掘



84号遺物



85号完掘



86号遺物



同遺物



同完掘



67号完掘



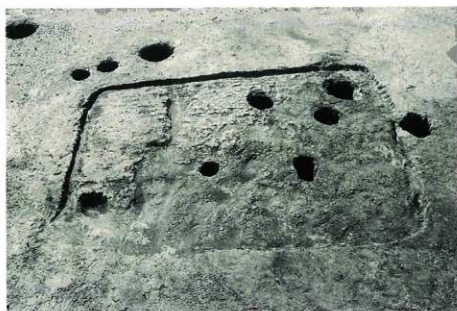
89号完掘



90 a · b号完掘



92号完掘



93号完掘

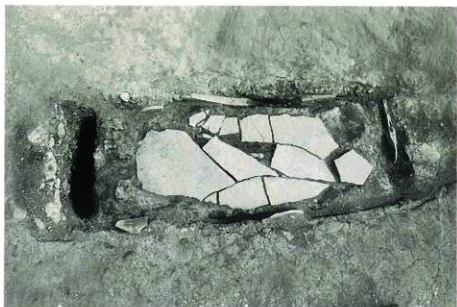




方形石盆基全景



同主体部



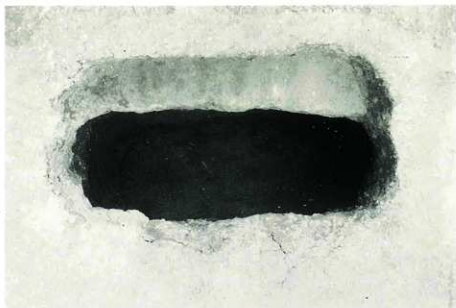
同主体部



付属A・B号墓



B号墓鉄剣



同C号墓



同D号墓



同E号墓



同



同铁刻



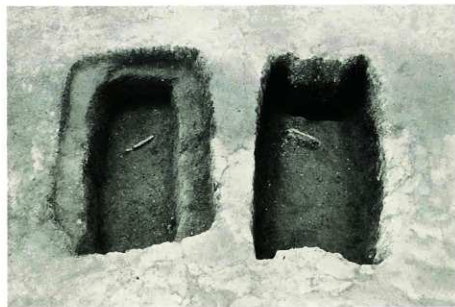
1 a 号墓



1 b 号墓



2 号墓



3 · 4 号墓



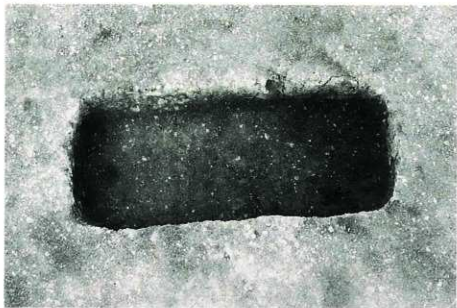
3号墓铁剑



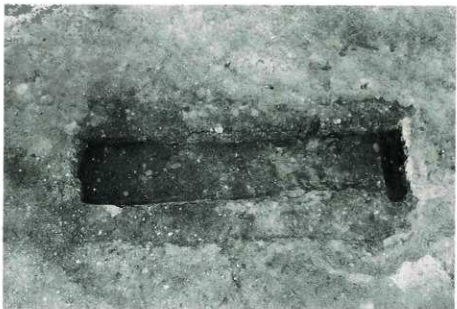
4号墓铁剑



5号墓



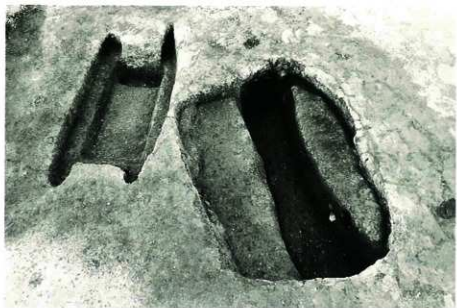
6号基



7号基



8号基



9·10号基



10号基



11号基





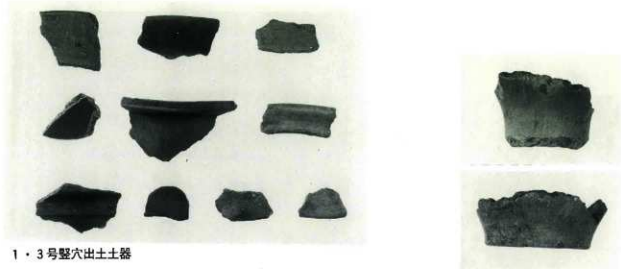
中世遺構全景



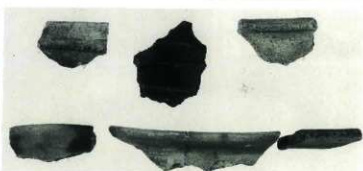
北部地区建物



南部地区建物



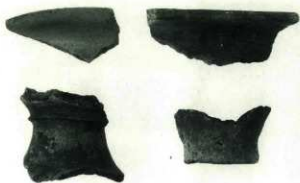
1・3号竪穴出土土器



2号竪穴出土土器



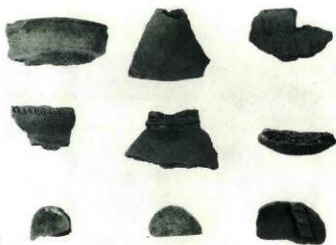
4号竪穴出土土器



5号竖穴出土土器



6 a · b号竖穴出土土器



6 a号



6 b号

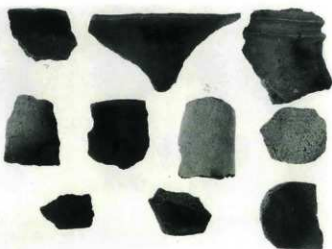


7号竖穴出土土器





8号竖穴出土土器



10号竖穴出土土器

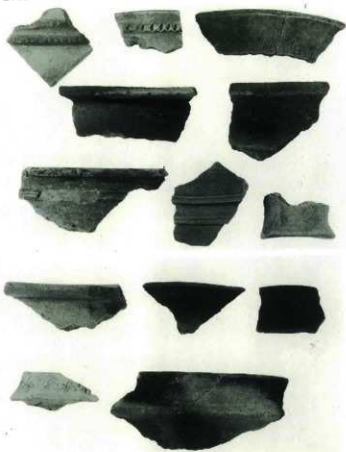
9号竖穴出土土器



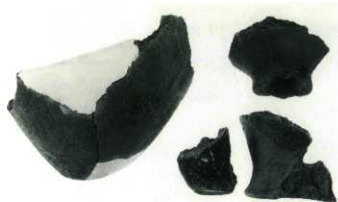
11号竖穴出土土器



12 a · b 号竖穴出土土器



14号整穴出土土器



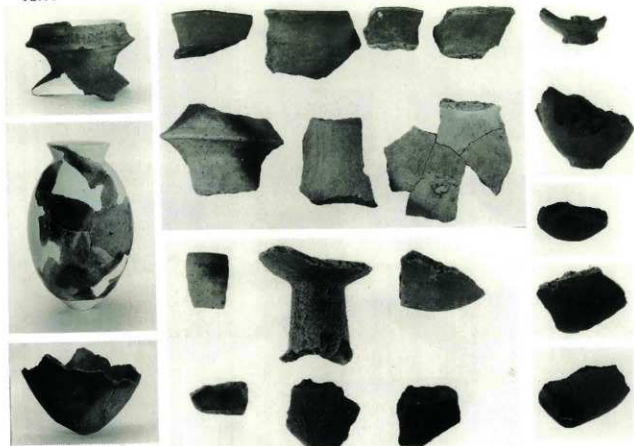
15号整穴出土土器



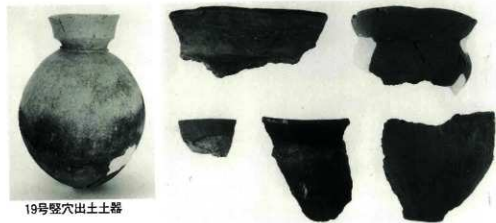
17号整穴出土土器



PL.54



18号竖穴出土土器



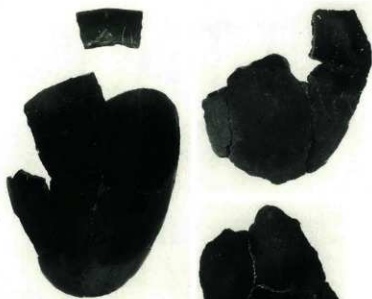
19号竖穴出土土器



20号竖穴出土土器



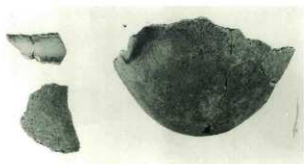
21号豎穴出土土器



22号豎穴出土土器



24号豎穴出土土器

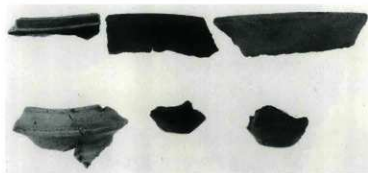


25号豎穴出土土器

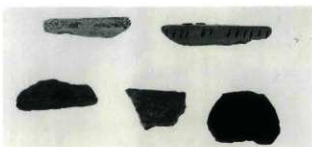




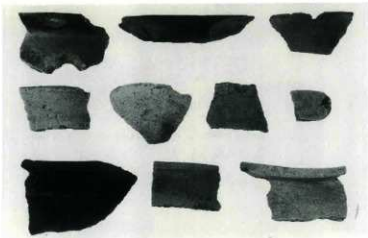
26号竖穴出土土器



27号竖穴出土土器



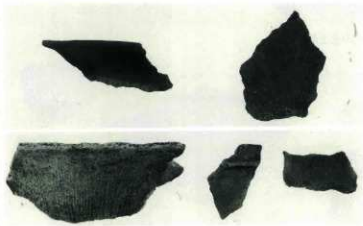
28号竖穴出土土器

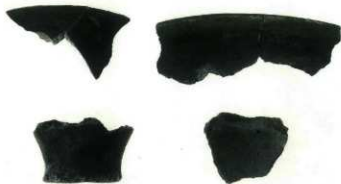


29・30号竖穴出土土器



31・32 a・b号  
竖穴出土土器

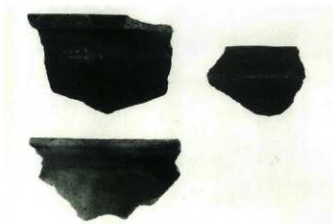




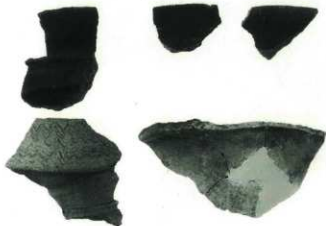
33号竖穴出土土器



34号竖穴出土土器



36号竖穴出土土器



37号竖穴出土土器

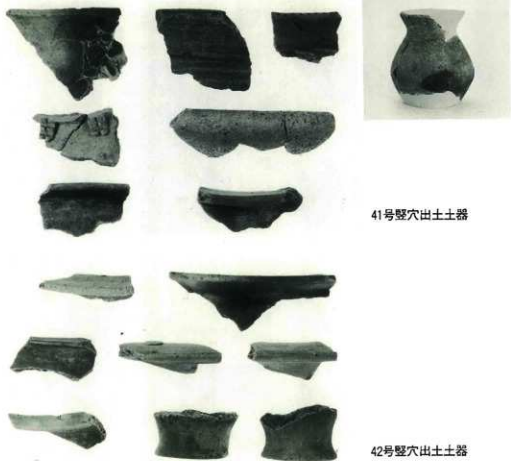


38号竖穴出土土器





40 a · b 号竖穴出土土器

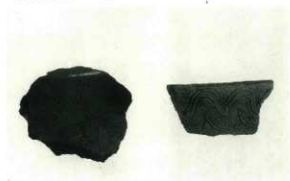


41号竖穴出土土器

42号竖穴出土土器



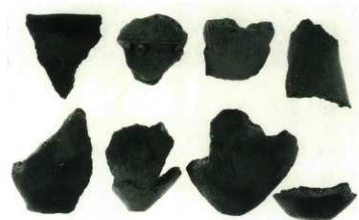
43号竖穴出土土器



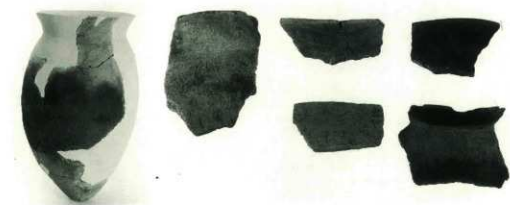
44号竖穴出土土器



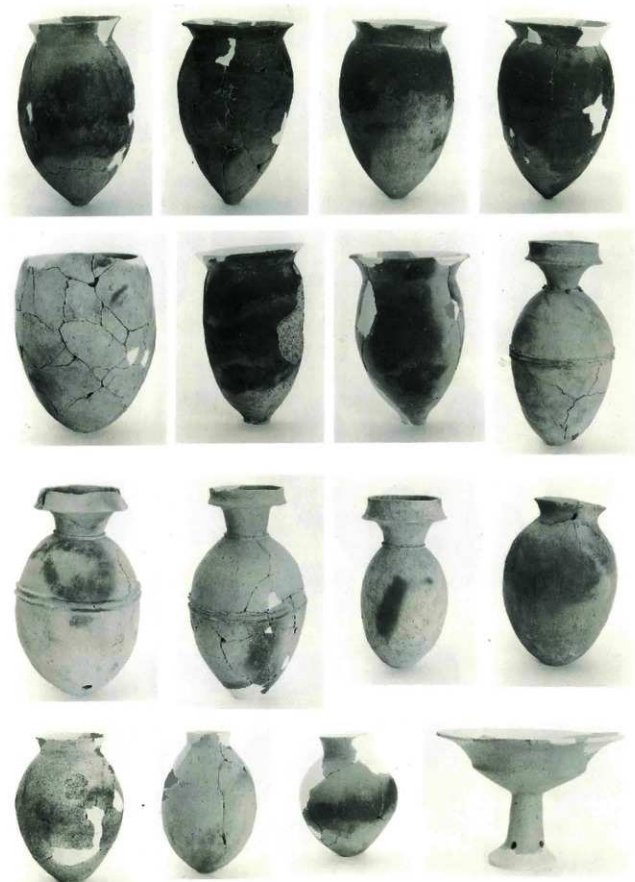
45号竖穴出土土器



46号竖穴出土土器



47号竖穴出土土器



46号整穴出土土器



49号竖穴出土土器



51号竖穴出土土器



52号竖穴出土土器

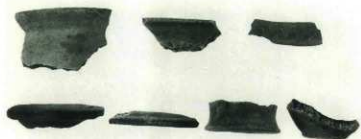


53号竖穴出土土器

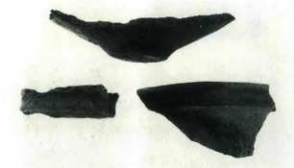


54号竖穴出土土器





55号竖穴出土土器



56号竖穴出土土器



58号竖穴出土土器



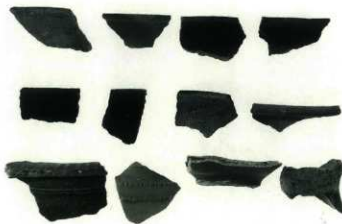
57号竖穴出土土器



60号竖穴出土土器



62号竖穴出土土器



64号竖穴出土土器

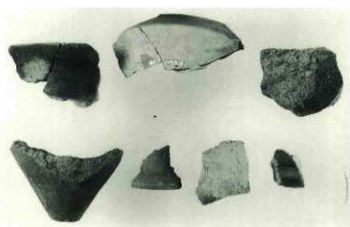


65号竖穴出土土器

66号竖穴出土土器



67号竖穴出土土器

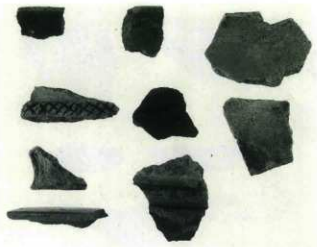


68号竖穴出土土器



69号竖穴出土土器





70号竖穴出土土器



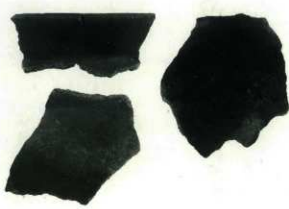
72号竖穴出土土器



74号竖穴出土土器



75号竖穴出土土器





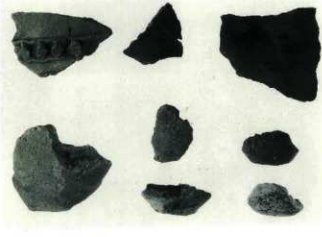
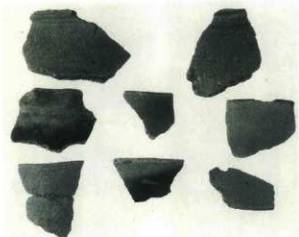
76号竖穴出土土器



82号竖穴出土土器



84号竖穴出土土器



86号竖穴出土土器



87号竖穴出土土器

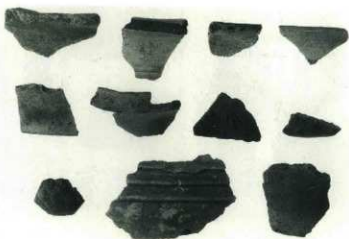
88号竖穴出土土器



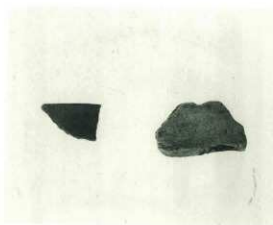
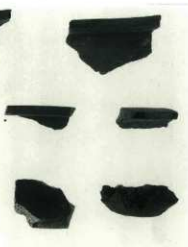
89号竖穴出土土器



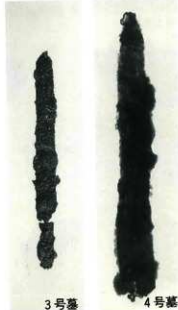
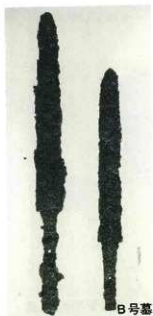
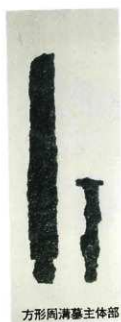
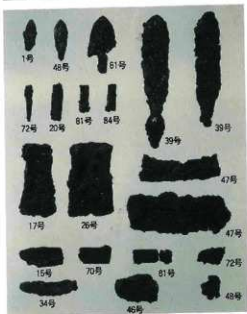
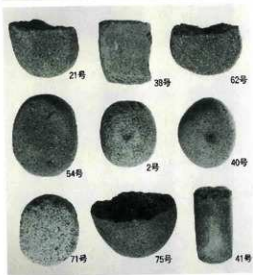
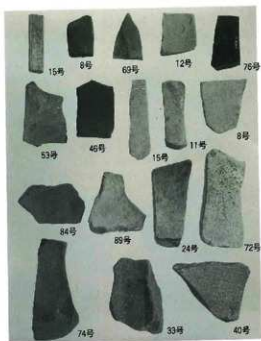
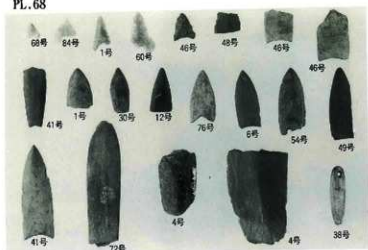
90号竖穴出土土器



91号竖穴出土土器

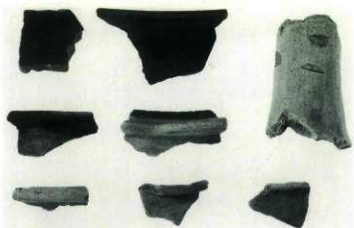


93号竖穴出土土器





小児甕棺



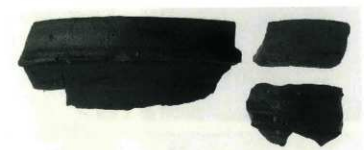
土坑(1~3)  
出土土器



土器溜出土土器



埋甕



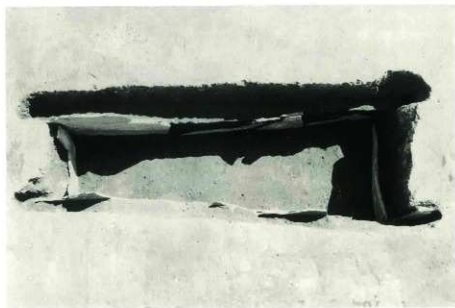
中世の遺物



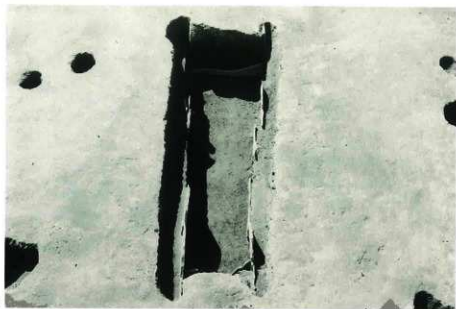
中原方形冢清墓全景



同



同主体部



同主体部



同周溝土層



同周溝内遺物





同周溝内遺物



同



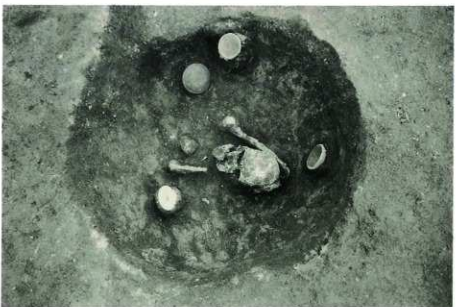
同付属土墳墓



同鉄鉢



同土層



1号中世墓



2号中世墓

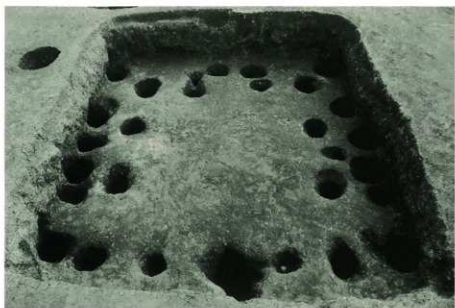


3号中世墓



4号中世墓

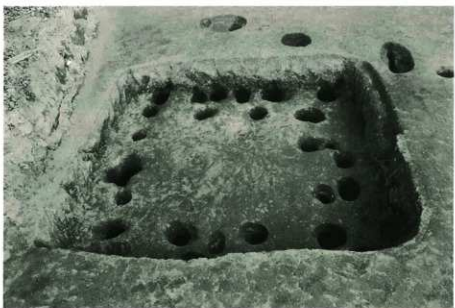
中世整穴 1

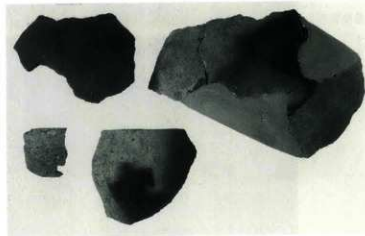


同 2



同 3



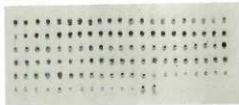


主体部出土鉄剣

中原方形周溝墓  
周溝出土土器



土塚墓出土鉄剣



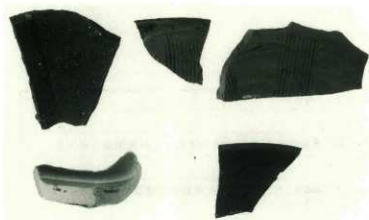
1号中世墓出土遺物



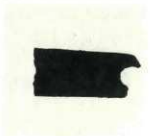
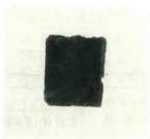
2号中世墓出土土器



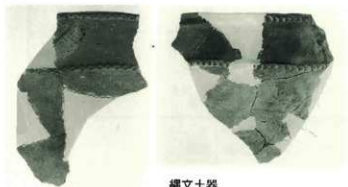
4号中世墓出土土器



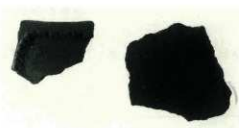
中世整穴1～3出土遺物



柱穴等出土遺物



縄文土器



## 報 告 書 抄 録

ふりがな	こじょうぼるいせき・なかほらいせき		
書名	小城原遺跡・中原遺跡		
副書名	経営担い手育成基盤整備事業都野東部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		
巻次	VI		
シリーズ名	大分県文化財調査報告書第425集、久住町文化財調査報告書第9集		
シリーズ番号	139		
編著者名	宮内 克己		
編集機関	大分県教育委員会	久住町教育委員会	
所在地	大分市府内町3-10-1	大分県直人郡久住町大字久住6154	
発行年月日	2002年3月10日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こじょうぼるいせき 小城原遺跡	くすまいたまごうち 久住町大字仏原	4442山	549001	33°4'25"	131°18'44"	1997.01.16 } 1997.09.12	15,000	圃場整備
なかほらいせき 中原遺跡	くすまいたまごうち 久住町大字石氏	*	新発見	33°4'22"	131°18'45"	1997.09.15 } 1997.10.30	2,500	*

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小城原遺跡	集落跡	弥生～古墳  中世	竪穴住居跡 集団墓 方形周溝墓 ほか 掘立柱建物	土器、鉄器、石器、 鉄剣  ほか	中核の集落跡   居館・城跡
中原遺跡	墳墓	古墳  中世	方形周溝墓  竪穴・墓	鉄剣、鉄鏃  土器、念珠 ほか	

---

県営担い手育成基盤整備事業  
都野東部地区に伴う発掘調査報告書Ⅵ

**小城原遺跡・中原遺跡**

2002.3

発行 久住町教育委員会 Tel 0974-76-0717  
大分県教育委員会 Tel 097-597-5675

印刷 株式会社 インタープリント Tel 097-567-1025

---



